

人と自然

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター紀要

第2号 2011年度



MOMOFUKU
ANDO
CENTER

安藤百福記念

自然体験活動指導者養成センター

目次

巻頭対談「センター設立後2年を過ぎて」

ベンチャー・ビジネスとしての自然学校の可能性	安藤宏基 × 岡島成行	4
------------------------	-------------	---

特別インタビュー【第1回】

人、自然、そしてスキーに魅せられて	スキーヤー 木村公宣	10
-------------------	------------	----

特集A

I 浅間学生セミナー		20
はじめに	酒井佑輔	20
教員による講義テーマ		23
学生による研究発表概要		25
参加学生の感想		37
浅間学生セミナー アメリカ交換留学生からの報告	松村聡子	43
II アウトドアフォーラム「変貌するアウトドアマーケットと自然体験活動を考える」		48
主催者挨拶	中村 達	48
基調講演「日本の自然体験とアウトドアズの状況」	岡島成行	49
記念講演「スキー100年後の変貌」	丸山庄司	53
講演(1)「自然体験活動を再考する」	藤原一成	59
講演(2)「国立公園（環境保全）とアウトドアアクティビティ」	安田直人	63
講演(3)「長野県の教育と山について」	原 一樹	67
講演(4)「山小屋からみた、登山ブームの真実」	赤沼健至	70
特別講演「トムラウシ山遭難の教訓とツアー登山」	節田重節	75
パネルディスカッション「日本の自然体験活動とアウトドアマーケットを考える」		84
パネリスト：磯野剛太、高橋和之、山田俊行	コーディネーター：中村 達	
III 第2回環境思想シンポジウム「ネイチャーライティングと環境思想」		93
挨拶	岡島成行	93
講演(1)「アメリカのネイチャーライティングを語る」	野田研一	94
講演(2)「現代の環境倫理」	鬼頭秀一	105
パネルディスカッション		114
パネリスト：鬼頭秀一、野田研一、安藤昭一	コーディネーター：岡島成行	

特集B

I 第1回ロングトレイルフォーラム		123
記念公園「ロングトレイルにかける私の夢」	加藤則芳	123
講演(1)ロングトレイルと地域観光の活性化について	坪田知広	127
講演(2)青少年教育とロングトレイル	藤原一成	130
講演(3)国際森林年と森を歩く	岩佐正行	132
特別寄稿「広がるロングトレイルの可能性」	中村 達	136
II 新しい自然体験活動の指導者養成制度について	久保田康雄	143
III 防災教育の観点に立った青少年の体験活動プログラムの調査研究	関 智子	148
IV 中国での自然体験活動指導者国際交流に関する基礎調査	楊 帆	150
コラム 小鳥とあなたのための、小さなツリーハウス	佐藤オオキ	161

事業報告

第12期自然学校指導者養成講座		164
第2回環境公開講座その①「自然と遊ぶ」		181
環境公開講座その②「森林セラピー論」		182
CONE トレーナー養成会・認定会		183
JEEF ディレクター養成研修会（自然学校プロ養成中級ディレクター研修会）		184
山岳ガイド協会自然ガイドⅠ認定研修会		188
第4回自然体験入門講座 安全に楽しく山歩きするために		192
第5回自然体験入門講座 夏の自然体験入門		194
第6回自然体験入門講座 秋の登山入門		196
第7回自然体験入門講座 雪と友達になろう		198
“あやしいオヤジを、正しいオヤジに変える！”プロジェクト研修会		200

巻末資料

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター 運営組織		202
2011年度主催等事業・講座		203
2011年度利用状況		204
CONE 利用者内訳		207
CONE 以外の利用者内訳（上級）		207
投稿論文募集について		208
あとがき		210

巻頭対談「センター設立後2年を過ぎて」

安藤 宏基 × 岡島 成行

ベンチャー・ビジネスとしての自然学校の可能性



右：安藤宏基（安藤スポーツ・食文化振興財団 理事長、日清食品ホールディングス株式会社代表取締役社長・CEO）

左：岡島成行（安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター センター長、大妻女子大学教授）

広がる期待

岡島 安藤百福記念自然体験活動指導者養成センター（以下、本書では安藤百福センターと略）は設立後2年が過ぎました。センターの運営もようやく軌道に乗ってきたのですが、この2年間の特徴は、運営の内容の幅が予想以上に広がったことです。当初はCONE（特定非営利活動法人・自然体験活動推進協議会）の指導者の養成、なかでも上級指導者に焦点を絞っておりましたが、そのほかにも、将来研究者や環境・自然体験活動のプロとしてやっていきたいという大学院生のセミナーや山岳ガイド、スキー指導者のトレーニングも行われるようになりました。

安藤 大学院生のセミナーとはどういった内容ですか。

岡島 全国から環境を専門とする大学院の先生と学生が集まりまして、2泊3日で集中的に講義とディスカッションを繰り返しました。おそらく日本で初めての試みで、とても盛り上がりました（20ページ参照）。

安藤 スキーや山岳ガイドといった分野からも指導者養成の話があったのですか。

岡島 山岳ガイドは全国で1万人必要だと言われているのですが、まだ850人しか養成できていません。その850人も多くは登山技術中心で、教養や基礎科学的な講義を受けていません。そのため、安藤百福センターで行っているプロ養成の座学部門を聴講してもらったら、という話から始まりました。また、山岳ガイド協会の中に「自然ガイド」という資格を新たに作ってもらいまして、センターで講習を始めました。スキーも同じようなことで協力し合って指導者養成をしていきましょう、ということになりましたが、こちらは3年目からのスタートです。

安藤 これまで言われていた自然体験活動の範囲が広まったということですね。

岡島 我々が行ってきた自然体験活動の指導者養成講座がベースとなって、その上でさまざまな活動が展開されるようになった、と解釈してもいいかと思います。

安藤 ずいぶん広まりました。予想以上の広がりだったんですね。

岡島 はい、そうです。

安藤 ところで、本来のCONEの上級指導者の受講内容ですが、どのくらいの時間数なのでしょうか。

岡島 トレーナーの場合、2泊3日のトレーニングで「認定」という方式です。実質的なトレーニングは、すでに所属団体に済ませています。所属団体が「この人はトレーナーの資格がある」と認めた人だけが派遣されてきてまして、ここで全講習を受け、その結果、資格に見合った実力があると判定された場合、トレーナーの資格を得るという方式なのです。

安藤 上級指導者にはもうひとつありましたね。JEEF（公益社団法人・日本環境教育フォーラム）と安藤百福センターが共同で行っている、いわゆる「プロ養成」ですが、こちらの方は、かなりの時間数を座学に充てていますね。

岡島 そうです。

安藤 座学が2か月あって、トータルで270時間ですか。

岡島 大学院の修士課程で学ぶ時間数に合わせてあります。

安藤 270時間の内訳はどうなっていますか。

岡島 25科目ほどあります。1科目がだいたい1日8時間になります。もちろん、議論・討論の時間や外での授業もあります。科目によって時間は異なります。

安藤 その前にOJT（on the job training、実習）があるんですね。これはどのくらいの期間ですか。

岡島 6カ月です。受講生が希望する自然学校に行き、実習します。

安藤 座学でこれだけの講師を集めるのは大変でしょう。

岡島 講師陣は、皆さんその道では一流の方々です。このセンターのミッションに賛同していただいているので、皆さん小諸まで来てくれます。受講者が少ないと勿体ないので、講座は一般にも無料公開していますが、小諸市民や東京からもたくさん集まります。

新たな指導者制度

安藤 CONE の指導者制度もこれから改革されると聞いていますが、実際はどうなっているのですか。

岡島 CONE の指導者制度と独立行政法人国立青少年教育振興機構（以下、機構と略）が合同で新たな指導者制度を作っています。CONE がこれまで実践してきた指導者制度をベースに、機構が運営する 27 カ所の国立青少年交流の家や自然の家で使えるように改善していますが、同時に全国 500 以上の公立施設や 3,000 以上の民間施設でも使えるようにアレンジしています。資格の名称も変わります。これまでは「CONE リーダー」と言ってきたものも「自然体験リーダー」となりますし、トレーナーは「主任講師」という名称になります。

安藤 これまで民間の CONE だけが実践してきたことを国公立の組織も使えるということですか。そうすると、文字どおり全国統一の指導者養成システムということになりますね（143 ページ参照）。

岡島 今年、2012 年度に試行して、2013 年度で改善を図り、2014 年度から本格運用ということになります。すでに各界から委員を派遣いただき、認定委員会が発足しておりまして、6 月 5 日に元文部科学大臣の鈴木恒夫さんが委員長となり、第 1 回委員会が開かれています。

安藤 そのなかで、安藤百福センターの役割はどういうことになりますか。

岡島 安藤百福センターは、主任講師（これまでのトレーナー）以上の養成が主となります。また、プロ指導者養成の方では、現在プロ養成しています初級のプロ指導者に加え、プロ上級指導者と、施設の運営管理ができるレベルの指導者について養成を行っていく予定です。こちらはすでに試行段階が過ぎて、今年度から順次実施していきます。

安藤 新しい指導者制度とプロ養成制度についての整合性はどうなっていますか。

岡島 これまで安藤百福センターでの研究で、すでに両者の互換性についての基礎研究はできていますが、将来統一していくように準備しています。位置関係としては、主任講師とプロの上級指導者が似たレベルです。また、施設の管理運営ができるレベルは CONE、JEEF 共通の形で新設することになります。

安藤 上級指導者を整理しますと、CONE の制度が母体となった新たな制度と JEEF のプロ養成がある。JEEF の制度は現在行われているプロ初級と、その上にプロ上級、さらに運営管理ができるという 3 つの資格があるわけですね。

岡島 はい、そうです。自然体験活動指導者の上級という範疇には、そのほかにスキー指導者、山岳ガイド、大学院の学生などが入るわけです。当初よりかなり広がっています。

安藤 ところで、現在の資格の名称がややこしいですね。これは英語表記を基準にしておき、日本語に翻訳して使うといいと思う。そうしないと将来、国際的な互換性を試

みるようになるとき、いわゆる日本的な英語で表記を決めてしまうと、英語表記が国際的に合わなくなる危険がある。初めから国際的に通用する名称を考えておいた方がいいでしょう。



ベンチャー・ビジネスとしての自然学校の可能性

岡島 こうした制度が整備されていくのはいいんですが、この制度で養成された指導者の活用といいますか、指導者たちの活躍の場を作る必要があるんです。指導者をいくら輩出しても、活躍する場所がなければ意味をなさない。

安藤 社会にアピールする力が弱い。

岡島 そうです。そこが下手なんです。指導者の就職先が確保できない。

安藤 マーケットが整備されていないんですよ。要するにビジネスです。ビジネスとしての運営がなされていないし、マーケットが構築されていない。

岡島 まさにそうです。

安藤 養成された指導者たちが就職できるようにしなければならない。就職した先の自然学校に生徒が集まるようにしなければならないでしょう。自然学校の経営が大事で、そこに雇用が発生しないといけない。いっぽう東京や大阪といった大都会では、自然学校のようなものはかなりの需要が見込めますよ。

岡島 これまでの自然学校の経営者たちのなかで、ビジネスとしてクールにこの世界を見て、どうしたら普及できるか、あるいは儲かるかということをきちんと実践している人が少ないんです。ビジネスとして新たなマーケットを開拓するという意思が弱い。展望がないんです。

安藤 ビジネス・ベースで考えるのであれば、これはベンチャー・ビジネスです。それなりのマネジメントが必要ですね。自然体験というサービス事業をどう社会に根づかせるか、そこが課題です。

岡島 自然学校の顧客のほかに、各種指導者にも需要があります。全国の幼稚園、保育園の先生方や女子大の幼児教育の学生など、たくさんの人たちが利用できるんです。

しかし、お互いが結ばれていない。指導者制度の活用がうまくできていないのが問題です。

安藤 需要はあるんです。新たなビジネス・モデルが必要かな。ネット・ビジネスのような世界を作るとか、まあいろいろな方法があるんです。通販にも店舗が必要です。ネットだけでは浮き草だというんです。自然体験の場合、どこに本拠地を置くのがいいんですかね？

岡島 「山ガール」は原宿が出発点でした。

安藤 原宿でもいいんです。どこかメッカのような所が必要でしょう。どこかにセンターのようなものを設置する。同時にネットと結びつける。

岡島 自然体験をベンチャーだと位置づける、その発想が私たちにはなかった。アメリカやヨーロッパには膨大なマーケットがあるのに、日本のマーケットはまだ小さい。ベンチャーとして大きく成長する余地はあると思います。

安藤 どういった顧客層があるのか。どういった人がどういった場面で愉しむのか、分析したらいいい。春夏秋冬の自然体験を子どもにさせたいという親は多いはずです。学校単位の体験活動よりもっと深いものをして欲しいという親もいる。その場合、親は安心、安全を求める。そうした信用力が必要ですね。

岡島 安藤百福センターで、ベンチャー・ビジネスとしての自然学校という狙いでひとつ研究会を立ち上げましょうか。

安藤 うん、それはいい。

岡島 民間の自然学校を対象にグループを作ったりするのもいい。

安藤 スーパー・マーケットやコンビニなどと組んで販売するという方法もある。スーパーやコンビニを動かす方法はまた別にあるんです。

岡島 我々自然学校を考えてきた人間はビジネス感覚に乏しく、実際のマーケット創出にまで頭が回っていなかった。

安藤 それと、自然学校をグレード別に分けるといい。個人経営に任せておくと、だんだん質が落ちてくる。グレードを付けて品質、この場合、安全やプログラムの質、レベルの高い指導者が何人いるか、といったことが常に検討されれば、信用が保たれる。

岡島 はい。

安藤 ビジネス・ストラクチャーを作る。それはできる。その上で、両親が子どもを預けたいと言ってきた場合、それに対する満足度を確保し続けられるか。最初は、ある程度収入のあるご家庭をターゲットにする方がやりやすいかもしれない。

岡島 アメリカでは、自然学校の先生のステータスが高い。収入も安定しています。

安藤 日本の自然のいい所はどこですか。フィールドとしていい所。

岡島 首都圏ではやはり富士箱根、軽井沢、日光などでしょうか。浅間もいいですね。

安藤 そういった美しい所を基地として、自然体験を展開していくといいでしょう。せっかく作った指導者養成制度を活かすためにも、新たなビジネス・モデルを仕上げる

ことが重要でしょう。それが自然体験を広める上において必要ですね。

岡島 本日は、自然体験というベンチャー・ビジネスを立ち上げるという、これまでになかった新しい可能性を指摘していただきました。新たな展開が期待されるお話です。ぜひ実現していきたいと思います。どうもありがとうございました。

(2012年6月29日、京都にて)



安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

人、自然、そしてスキーに魅せられて

スキーとの出会いはオフピステ

ー幼少期の頃は、どんな遊びをしていましたか？

山岳部だった父親が山好きで、よく山に登っていました。また、僕が小児ぜんそくを持っていたので少しでも改善させるために、空気のいいところで運動させようと、3歳くらいからスキーを始めたと聞いています。

その頃の記憶はあまりないのですが、おじいちゃんと、父親と3世代で、毎年1回は岩木山に登っていたのは覚えています。

ー自然遊びのきっかけは山ですね。

そうですね、自分の家が岩木山からそんなに遠くない場所にあったので、岩木山に登った山歩きが、自然と触れ合うきっかけだったと思います。

山に上がってスキーをすることで、小児ぜんそくも少しずつ回復していったので、自然の力は偉大だし、体力作りにスキーを選んできた両親にも感謝しています。この時、よくスキーをしに行っていた山は八甲田でしたが、樹氷の中を滑ったり、オフピステを滑ったことが、僕がスキーの虜になったきっかけです。

楽しみの延長線上の目標

ー小学校時代はどのようなお子さんでしたか？

小学校2年生の時に、弘前市にあるスキーのジュニアチームに所属しました。そのチームが毎週末ごとにレースに参戦していたので、私も自然とレースに目覚め始めました。ただ、色んなスポーツをやっていました。朝は陸上部の練習をして、それから学校の授業があり、午後は野球部の練習もして、休み時間は縄跳びを必死にやっていました。その頃の特技は、「縄跳び」と書いたくらいです。



プロフィール

富良野 木村公宣スキースクール代表、ASAMA2000パーク総合アドバイザー。

1970年青森県弘前市生まれ。アルペンスキー・回転の選手(1985-2003)として活躍し、ワールドカップ1997/98シーズンにペイソナツ大会にて3位入賞。約10年に渡り、4回の冬期オリンピック[アルペールビル(1992)・リレハンメル(1994)・長野(1998)・ソルトレイクシティ(2002)]に出場した。現在は後進の指導等に携わる。

ースキーマのレース大会に出てみて、どのように感じましたか？

僕の中では友達といっしょにいる感覚でした。最初のスキーマの大会に出たときは、一番になりたいという感覚はなかったように思います。学年があがるにつれて段々と勝敗にこだわるようになっていきました。中学生になると、全国中学大会に出場できるようになり、そこでは決勝に出場することが一つの目標にもなっていました。最終的には、優勝したい！とも思うようにもなりました。

ー初タイトルは何歳の時でしたか？

小学校の時に、県大会で優勝していると思います。基本的には小学校のうちは大回転といてジャイアントスラロームがメインです。スラローム（回転）の大会は年間 1～2 試合程度でした。中学 1 年生の時、全国大会が地元の大鰐で行われることになったんです。予選を通過して全国大会に行けることになり、この時はタイトルこそ無縁でしたが、結果を残していきたい！と強く思いました。中学 2 年生で 7 位に入賞して、中学 3 年生で優勝しました。ただ、スキーだけが楽しいとはまったく思っていませんでした。陸上も好きでしたし。小学生の時と同じで、友達という時間がすごく楽しかったんです。

スキー指導を通じて教わったこと

ーコーチの思い出は、どのように残っていますか？

小学校の時のスキークラブのコーチがとても厳しかったです。日常生活の時はすごく和やかで優しいのですが、自分を諦めたり、甘い部分を見せた時など、ものすごい怖い方でした。スキーの上ではとても厳しくてスパルタ的でしたが、この時期にそのような指導をしていただけて、とてもよかったと思っています。コーチが教えたことに対して、私が「できた」「できなかった」ではなく、「そのことを全力でやりなさい」という教え方でした。例えば、練習をしている時、ちょっとしたことですぐにポールを抜けてしまったり、失敗であきらめてしまったり、そうすると近くにある竹ポールなどでお尻をたたかれました。それが全力か？すぐに諦めてないか？と。

今自分がスキーに携わるようになって、コーチと同じ立場になってみると、ものすごい熱意をもって指導してくれていたんだなということがわかりました。冬にこの仕事をしたいからという理由で夏の仕事を選んでくださっていたのです。小学校の時には何にもわからないので、コーチはここにいるものだと思っていたんですね。けれど、実際に自分も社会人になり同じ立場になってみると、我々のためにやってくれていたんだな、自分の生活を犠牲にしてまでも、この子たちをうまくしてあげたい、とか、この子たちにスキーの楽しさを伝えたい、そういう思いでそのコーチはやってくださっていたんだなということがわかってきました。

ーそのコーチの方は、今の木村さんにとって大きな存在となったのですね。

そうですね。時に厳しく時に優しくというのは、私も指導する時に必要だと思っています。叩いたりすることは良くないとは思いますが、学校では教えられないことっていう

のがあると思うんです。例えば、スキー技術だけではなく、壊れかけたポールをなおすこと、そのポールを撤収した時に出来る穴をちゃんと埋めることもスキーには大切で、自分の使った環境を最後にきちんとなおしてから終わるんだ、という見落としがちなことを教えてくれた存在です。

また、高校の時の恩師も自分にとっては大きな影響を与えてくれた人です。高校3年間は、スキーを本格的に学ぶ時間でした。そこでは、中学時代にはあまりなかった、目上の方への話し方など、社会生活も学びました。高校1年生でインターハイ7番になるんですが、その時、安比の大会で監督に怒られたのです。7番になったことではなく、大会が終わって地元に戻ってきてから、「おまえ何様のつもりよ！」と言われ、新聞を顔に投げつけられたんです。小さな記事だったのですが、その時に自分が出したコメントが「滑りはまあまあだったけど、スキーが滑らなかった」だったのです。実際にその会場にはインターハイに出られない同じ高校の先輩も同級生たちもいて、僕のサポートをしてくれるわけじゃないですか。自分たちが練習している時にずっとワックステストをしているんです。「お前は、そのことを言っているのか」。私はそういうつもりはなかったのですが、「お前、あいつらの思いを感じてないだろう。あいつらのサポートがあって、お前は滑れてるんだぞ!」と怒鳴られ、そこで自分の愚かさに気付きました。スキーは個人スポーツではあるけれども、たくさんの人の協力と助けがあってこそ、自分の思うように滑ることが出来るのです。それを監督が教えてくれました。今でも、スキーをするうえで一番大事なことだと思っています。

監督はスキーにはもちろん厳しい人ですが、私生活にもものすごく厳しい人でした。僕は高校2年生から寮生活を始めたのですが、高校3年生の担当は、トイレ掃除でした。みんながやりたがらないところを先輩がすることによって、後輩たちも綺麗に使おうと思うじゃないですか。逆に3年生は自分たちが掃除をするので、日ごろから綺麗に使おうと自然に思うようになるんです。いちばん身近な存在が身をもって示すことが、一番のお手本だということが、監督の狙いだったと思います。

レースに集中していく中での多様な経験

一技術のことですが、ある時期、グッと伸びたと感じた時がありましたか。

中学2年生の時ですね。シーズン始めの12月にニセコで高校生と合同の合宿をした時に、すごいアイスパーンの時があったんです。練習の後、みんなで一斉に片づけに行くんですけども、集まった時にコーチがひと言、「木村だけだぞ、切ってきてんのは」って言うてくれたんです、高校生もいる前で。切ってくるというのは、硬いアイスパーンを上手に滑ってきているという意味だったので、「俺、上手くなったかな」って思いました。(笑)

高校2年生の時にワールドジュニアチャンピオンシップスに出場でき、そこでスラロームの種目で5位に入賞したことで、スラロームが自分の得意種目になりました。その頃世界では、岡部哲也さんが全日本のトップとして活躍されていた時代だったので、岡部さん

を目標に滑っていました。高校3年生で全日本選手権3番に入る事が出来て、ふと自分の日本のランキングを見ると、7、8番にいたんです。「あれ、もしかして世界に行けるぞ!」「オリンピック目指せるんじゃないか?」と、はっきりとした目標を持ったのがこの時でした。

初めての全日本チームとしての海外遠征は高校2年生でした。我々の中では「どさ回り」というのですが、野球のメジャーリーグでいうとそのメジャーの下のクラスの、またはその下の下のクラスの大会を回っていくんですよ。期間も長く、10月末から練習し、12月から2月頭くらいまで、ヨーロッパの各地で50レースほどの転戦生活です。スキーなどのメンテナンスも、時には自分でやらなければなりません。移動は、時に車で800キロです。過酷ではありますが、1回でも多くレースに参加し、色んな斜面、雪質、条件などの経験を積ませることがコーチの意図だったんだと思います。今だと、コースマネジメントをして、勝てる試合に効率良く出場して、ポイントを取って、よりよいスタート順をとる、という考えもあるかもしれませんが、その当時は、どちらかというと、身体で覚えろ!という時代でしたからね。でも、自分には合っていたと思います。

—そこで経験の幅がかなり広がったということですね。

そうですね。たくさんの経験をしたことで、色んな状況に対応できるようになりましたし、海外の選手の友達も多くなりました。そのどさ回りというのは、ヨーロッパや北米の若手選手が同じようにやっていることで、同じ年代の選手、ワールドランキングで同じくらいの選手たちが集まります。「次どこへ行く?」という会話が飛び交ってました。情報収集もできましたね。語学もまったくと言っていいほど出来ませんでした。友達が出来ることによって、挨拶からはじまり、コミュニケーションが自然にとれるようになりました。同じ目標を持った仲間が切磋琢磨してワールドカップに上がっていくんです。FIS大会(どさ回り)があって、その上にヨーロッパカップ、その上にワールドカップがあるんですけども、FIS大会からヨーロッパカップの大会に行った時には、いつも集まっている仲間とは違うレベルの選手と戦うので、最初はどうしてもお客さまなんです。だけど、どさ回りの仲間がヨーロッパカップで活躍したり、自分も何度かヨーロッパカップに挑戦して顔を覚えてもらえるようになってくると、だんだんと自信もわいてきて、自分の滑りを表現できるようになったんです。そういう風に感じられるようになったときに、成績も出てきたと思います。

—大学時代、あるいは社会人になられてからは?

大学生になってからは、少しずつプロとしての意識が生まれてきました。1992年のアルベールビルオリンピックの時、大学3年生で初めてオリンピックの世界の舞台を経験させていただくんですけども、オリンピックの本当の意味をあまり意識出来ずに終わってしまいました。その次のオリンピックが1996年のリレハンメルオリンピックです。その頃は、少しずつ自分の成績も上がってきて、スラロームの世界ランキングは25、26番になって



photo GO FUJIMAKI

たんです。日本のトップとして戦わなければならない位置なのですが、残念ながらリレハンメルオリンピックでは失敗してしまうんです。その1回の失敗で「辞めよう」と本気で思いました。だけど、「そうじゃないでしょう」って、日本に帰ってから、思わせてくれたことがありました。それは、いつも暖かく応援してくださる方々がいるということ。情けない試合をしたにもかかわらず、自分に熱くあたったかいねぎらいの言葉をかけてくれるのです。こういう方たちが応援して支えてくれてるんだから自分も戦える、もう1回やろう！と。

その1年後に、内臓疾患で入院することになり、78kg あった体重が 65kg まで落ちちゃったんです。2 ヶ月間、寝たきりです。トイレにも起きるなといわれました。このままでは、選手に復帰できるか？まで筋力も落ちてしまっ。でも、ある先生と出会い、「俺が保証するから、練習しなさい」と許可を出してくださったんです。逆転ホームランのような気持ちでした。それまでは、世界の 24 番手ぐらいにいたんですけど、シーズンに出遅れてしまい、スタート順が下がってしてしまう、と心配は尽きない中、12 月の練習開始はなんと歩くことからだったのです。歩くことも、走ることも、筋トレすることも当たり前に出ていたことが一度はできなくなり、絶望の寸前までいきましたが、でも、どうしようとの不安より、身体を動かせることの幸せ、嬉しさ、楽しさでいっぱいでした。スキーを滑れた時は、この上なく幸せで、スキーの面白さを再確認出来たんだと思います。

ースキーを始めた頃の気持ちを再び味わったということですね。

そうです、そうです。今まで、確かに自分は一生懸命トレーニングしてきたけど、やらされてたんだ、もっと自分からやろう！と思いました。これが 24 か 25 歳の時です。入院

している時はすごく辛かったけど、12月の後半位からヨーロッパに行き、スキーをした時はものすごく楽しかったですからね。体力が無いので、かなりきつかったですけど。「スキーって、こんなに楽しいんだ！」と心の底から感じた瞬間でした。1月からワールドカップに戻れたんですが、戻った時に周りの選手たちに「お帰り！」って言われたことが、本当に嬉しかったです。「お帰り」と言われたことで、ここが自分の場所なんだと思えまして、ワールドカップファミリーといわれているように、私がまだ家族の一員なんだと認められたような気がして、不安な気持ちを一扫してくれました。ここに帰ってこれて良かったと心から思いました。

外国の自然と文化に触れて

ー外国の自然に触れて、何か思い出されることはありますか。

夏場は外国の氷河で練習をするのですが、泊まったホテルにその氷河の50年前、100年前の同じ場所の写真が飾られていたことがあって、あきらかに私達がトレーニングしている氷河の量がその写真より減っていることがわかるんです。しかも、自分がトレーニングさせて頂いていた17年くらいの間だけでも、氷河の減少は目に見えるものでした。「地球温暖化」という言葉は、よく耳にしますが、氷河の減少は、海外に出て肌で感じることでできた経験の1つです。氷河がなくなると練習もできなくなるので、少しでも自分で出来る出来ないかと考えるようにもなりました。

アメリカでは、大きな地層を目の前にみることができ、その大きさと歴史を感じました。日本ではあまりみることが出来ない大きさで、地球の大きさを改めて思い知らされました。

僕自身、現役時代、トレーニングの一環で一つだけ山登りをしたことがあるんです。それはモンブランなんですが、登頂に成功し、自慢できる経験の一つですね。大学3年生の時のコーチがフランス人で、趣味が登山だったんですよ。彼が住んでいた場所はシャモニーで、モンブランからほど近いところだったので、じゃあ登ってみようかとなったんです。

ー4000m以上ですね！

そうですね。登るルートにもよると思うのですが、我々が登ったルートがたぶん一番易しかったですと思います。2,500mのところまで電車で行き、1日目は3,300mまで徒歩で上がっていくんです。その道のりは崖みたいなところを登っていくんですよ。崖ってとっても危ないところには手すりがついていて、なんとかたどり着き、その山小屋で一泊。トレーニングでいつも使っている脈拍計があるんですけど、小屋で横になってしばらくしてるのに脈拍が下がらず（100ぐらいあるんですよ）、「どうしよう、明日の最終アタックはやめようかな」と迷っていたんです。そしたら、ちょうど自分が寝てる真上の天井のところに日本語で書いたシールが貼ってあったんです。「癌克服登山」って。癌患者の方々がモンブランを克服して癌を克服しましょうっていうチームだったんだと思うんですけど、「体力に不安のない自分がここで妥協しててどうすんのよ」って自分に喝をいれました。「挑戦する前から諦めてどうするんだ！！！」妥協しようとした気持ちが情けなくなり、

頑張って上を目指そう！と気持ちを切り替えることが出来ました。

雪がゆるんでしまうと雪崩の危険があって登れなくなる可能性があるので、朝の2時に起こされて出発、7時半か8時くらいですかね、山頂到着。ちょうど太陽があがって明るかったのも、遠くのツェルマットなども見え、なんとも言い表すことが出来ない忘れられない景色を味わえました。精神的にも強くなれたような気がします。

ー海外生活の中で、スキー界をめぐる事情については何か思い出されることは？

日本の国技というと、相撲、柔道、などが代表的ですね。例えば、外国の方が相撲を一生懸命にやっていたら、応援するじゃないですか。私は、現役時代にリハビリも兼ねてオーストリアに住んでいたことがあるのですが、オーストリアの国技はスキーなんです。現役時代、オーストリアでのワールドカップで入賞したこともあったので、日本人なのにあたたかく応援してくれたり、声をかけてくれたりして、田舎の小さい町でしたが、とても住みやすく、人の温かさを感じましたね。

そして、私は岡部哲也さんにとっても影響を受けました。彼は私にプロ意識を植えつけてくれた存在です。オンとオフの使い方、(スキーをする時は集中し、オフになったらスキーのことをちょっと忘れてリラックスしてもいいんだよ) など、そばで行動で教えてくれました。海外で教わった貴重な体験です。

外国の選手は、そういったオンとオフの切替え方、使い方が上手だと思います。オーストリアでトレーニングしている時の仲間に、ワールドチャンピオンにもなった、ヘルマン・マイヤーという選手がいるのですが、彼は、オフにはしっかりヴァケーションを取り、レーシングカーも大好きなので、F1を見に行ったりしてオフの時期に楽しみながらリフレッシュしてたんだと思います。練習量ではヘルマンには負けてない！という自負がありましたから「なんで俺は勝てないの？」と葛藤したこともありました。でも、私は、練習を1日休むと、元に戻すのに3日以上はかかると思いこんでいたので、練習せずに休むということをほとんどしなかったと思います。今思うと、せっかくヨーロッパに住んでいたんだから、もう少しヨーロッパを知る時間を持てばよかったな・・・と思います。そうすれば、違った面からスキーを感じ、試合にも生かされたのではないかな？

長野オリンピックをふり返って

ー一番思い出深い大会はありますか？

長野オリンピックです。自分が入院生活から復活して、間に合うのか？という次のシーズンが長野オリンピックだったのですが、そこで、ゼッケン2番でスタート出来たことが、一番の思い出です。また、札幌オリンピック以来の日本開催ということで、自分の選手としてのピークが、日本でのオリンピックだったことに、すごく運命を感じてます。この年に自分を生んでくれた両親にも、自分をピークに育ててくれた幼少期から全日本までのコーチ陣にも、そしてスキーやブーツ、ウェアなどのサポートしてくださったメーカー各位にも、本当に感謝感謝の思いがこもった大会です。

ー滑っている時はどういう心境なのですか？

何も考えないで滑るということはないです。もちろん考えながら滑ります。技術の一つひとつを確認しながら必ず滑っていきます。ただオリンピックっていう魔物が住む世界ですから「失敗しちゃいけない」とも思います。プレッシャーはものすごくかかりますね。

ーそれまで手伝ってくれた方々がいらっしゃるからですか？

それもありますし、一つ言えるのは成績をとりたいという気持ちに駆られてしまうと失敗する。僕はそういう気持ちになってしまいましたけど、これからオリンピックに出場する選手たちには「失敗してもいいからやってみろよ」ということを伝えたいなと思います。せっかくメダルをとれる位置にいる選手たちであれば、それこそ思い切ってやってほしい。後悔しないスタートを切って、一番いいのは成績をおさめることだと思いますけど、「失敗しても後悔しないスタートを切る」。この考えは自分が長野オリンピックの経験から得たものです。たぶん自分の心の底では後悔があるんです。長野オリンピックのスタート間際に、「失敗したくない」という迷いがあった。これは自分が身をもって経験したことです。オリンピック選手またはワールドカップ選手たちには、後悔しないような滑り、またはパフォーマンスをしてほしいなと思います。

四季と山の楽しみを伝えるスキーを大事にしたい

ー最後に、子どもたちへの指導やスキーの普及についてうかがいたいのですが。

富良野スキー場には、全国各地から 家族旅行や、部活、修学旅行と色んな子どもたちが来てくれてスキー実習をしています。富良野で味わえるメリットなのですが、皆さんが苦手とすることは、「極寒」ではないでしょうか。ただ、子どもたちに感じてほしいこととして、「四季を感じられる国っていうのはそんなに多くはないよ、日本で素晴らしいんだよ」ということがあります。世界を探してもそんなに多くあるわけではない。四季を感じられる国にいたのであれば、冬は寒くてあたりまえじゃないか、寒さを楽しんでみようよ、夏には暑さを楽しんでみようと教えたいと思っています。四季を感じながら生活できることを幸せに思い、四季を通して日本の素晴らしさを誇りに思っしてほしいです。私は、吹雪も楽しんでゲレンデを駆け回る子供たちをみると嬉しくなります。誰でも寒いのは苦手なはずですが、そこから楽しさを生み出す子供たちは天才です！スキーは雪があるところにいかなければ出来ないスポーツですが、自然を相手にする奥の深い楽しみ方が出来るスポーツです。ぜひ、冬を感じてスキーを楽しんでほしいです。同時にスキー普及のためには、子どもだけではなく大人の方にもスキーの楽しさを伝えていきたいと思います。例えばレーシングもあり、基礎もあり、バックカントリーもあり、クロスカントリーもあり、色んなジャンルのスキーを山の中で味わうことができます。山っていうフィールドの中で楽しむことができるスキーを伝えていきたいのです。

ー子どもの指導やスキーの普及を考える時に、自然とどう関わっていくかということを考えてアプローチしていくということですね。

僕はそれが大事だと思うんですね。例えば修学旅行の子どもたちを例えにあげさせていただくと、子どもたちの3日間の目標ってというのは、「楽しくスキーが滑れるようになる」ということと、「普段見ることが出来ない山の上からみる景色を味わう」だと思うんですね。富良野スキー場は、富良野の町がすぐふもとにある地形なので、高速リフトやロープウェイを上がれば、そこからの景色は本当に雄大できれいです。

遠くには十勝岳が連なり、下には街並みが広がり、雲海まで見えることもあります。

この景色は、スキーの醍醐味ともいえるでしょう。スキーを滑る楽しさ+αが、この山と自然が生み出すスキーの新たな楽しみだとも思ってます。

ー今日は本当にありがとうございました。

(2012年6月12日、東京にて)

特 集

第1回浅間学生セミナー

はじめに

第1回浅間学生セミナーは、環境教育を学ぶ学生の交流と、さまざまな大学の先生方による講義内容の交換を通じた相互発展を目的として、安藤百福センターにより開かれました。2011年7月1日～3日にかけて催され、全国10大学から教員・学生合わせて29名が参加し、教員による講義、学生による研究発表会、討論会、野外活動体験などのプログラムが実施されました。限られた時間ではありましたが、参加者は濃密な時間を過ごし、大学間を超えた交流を持つことができました。

非常に有意義だったセミナーの内容を報告書にまとめようと、学生らで編集委員会を設立しました。しかしながら、設立当初は私の力不足もあり、スムーズに編集作業を進めることができませんでした。それでも編集委員が動き始めてからは、東京や京都、長野などで編集会議を繰り返し、紆余曲折を経てなんとか報告書の発刊にまでたどり着くことができました。これもひとえに、現編集委員や理解あるセミナー・メンバーと先生方、安藤百福センターのスタッフ皆さんのご協力があったからだと思っています。特に、未熟な編集委員の私たちを支え、鼓舞して下さった安藤百福センターの皆さんには心より感謝しております。

吉野源三郎（1982）が著書『君たちはどう生きるか』で「ある時、ある所で、君がある感動を受けたという、繰り返す事のない、ただ一度の体験の中に、その時だけではない意味がある。それが本当の君の思想だ。いつも自分の体験から出発して、正直に考えてゆきなさい。」と語る印象的な場面があります。本浅間学生セミナーと報告書を編集する過程そのものが、こうした各々の思想を生成し、問い直す場であり続けることを願ってやみません。

（酒井佑輔 第1回浅間学生セミナー実行委員会委員長）



スケジュール

◆7月1日

13:30	受付開始	
14:00	開始	挨拶、オリエンテーション、アイス・ブレイク
14:30	講義①	岡島 成行(大妻女子大学)
15:00	講義②	西村 仁志(同志社大学)
15:30	休憩	
15:40	講義③	中野 友博(びわこ成蹊スポーツ大学)
16:10	講義④	中村 達(株式会社ネーチャーインテリジェンス代表取締役／ アウトドアジャーナリスト、プロデューサー)
16:40	フリータイム	チェック・イン
17:55	夕食	
19:00	学生研究発表①	
21:00	交流会	

◆7月2日

7:00	朝食	
8:30	講義⑤	阿部 治(立教大学)
9:00	講義⑥	朝岡 幸彦(東京農工大学)
9:40	講義⑦	安藤 昭一(千葉大学)
10:10	講義⑧	高橋 一秋(長野大学)
10:50	講義⑨	小林 毅(帝京科学大学)
11:20	昼食	
13:00	講義⑩	星野 敏男(明治大学)
13:30	学生研究発表②	
15:30	グループ討論	1. このセミナーのここまでの感想 2. 私なら、私たちならこんなことができる！ したい！ 3. 私はグランド・ティートンに行きたい、行けない、行きたくない 4. これからの浅間学生セミナーに期待すること
18:00	夕食	
19:30	総合討論	
21:30	交流会	

◆7月3日

7:00	朝食	
8:00	宿泊室掃除	チェック・アウト
8:30	講義⑪	降旗 信一(東京農工大学)
9:00	課題レポート作成	テーマ「私の将来設計」
10:20	休憩	
10:30	野外体験活動	
12:00	昼食	
13:00	講評	米国派遣者発表※ ¹
14:00	研修室掃除	
14:30	終了・解散	

※1 教員による選考の結果、学生発表者のうち2名について、米国ワイオミング州・Teton Science School (<http://www.tetonscience.org/>) への派遣者について発表が行われた。選考基準は、セミナーへの参加意欲、発言力、協力的態度、研究発表の内容、英会話の基礎的能力など、総合評価によるものであった。



教員による講義テーマ（実施順）

氏 名：岡島 成行	
所 属：大妻女子大学家政学部ライフデザイン学科 教授	
テーマ：自然体験活動の今後の展望	

氏 名：西村 仁志	
所 属：同志社大学大学院 総合政策科学研究科 准教授 (ソーシャル・イノベーション研究コース)	
テーマ：日本における「自然学校」の成立に関する研究 ーソーシャル・イノベーションの観点からー	

氏 名：中野 友博	
所 属：びわこ成蹊スポーツ大学 生涯スポーツ学部 教授	
テーマ：びわこ・ちびっこキャンプ(幼児キャンプ)の取り組みと その効果	

氏 名：中村 達	
所 属：株式会社ネーチャーインテリジェンス 代表取締役 アウトドアジャーナリスト・プロデューサー	
テーマ：アウトドアマーケティング ー日本のアウトドア市場を考査するー	

氏 名：阿部 治	
所 属：立教大学 社会学部 教授	
テーマ：環境教育／ESD の現状と課題について	

氏 名：朝岡 幸彦	
所 属：東京農工大学大学院 農学研究院 教授	
テーマ：EFSA (Education for Sustainable Agriculture)への模索	

氏 名：安藤 昭一	
所 属：千葉大学 融合科学研究科 教授	
テーマ：微生物を用いた環境浄化	

氏 名：高橋 一秋	
所 属：長野大学 環境ツーリズム学部 准教授	
テーマ：森林の生態系サービスを地域社会の持続的発展に 活かすための研究 — ^{アウン} AUN長野大学恵の森における里山再生ツールキットの開発—	

氏 名：小林 毅	
所 属：帝京科学大学 アニマルサイエンス学科 教授	
テーマ：より効果的なインタープリテーションを行う方法	

氏 名：星野 敏男	
所 属：明治大学 経営学部 教授	
テーマ：キャンプを通して見た日本の野外教育 —これまでとこれから—	

氏 名：降旗 信一	
所 属：東京農工大学 農学研究院共生持続社会学部門 准教授	
テーマ：現代自然学習の成立と発展	

学生による研究発表概要

酒井 佑輔（東京農工大学大学院 環境教育学研究室） 【参加動機】 ・ 特賞の「アメリカ留学」に魅せられたから ・ 環境教育を学ぶ学生がどのような興味・関心を抱き、どういった研究をしているのか興味があったから ・ 環境教育学会大会の発表練習も兼ねて	
発表テーマ：生物多様性に向けたアグロフォレストリー農法発展に関する研究 ーブラジル、トメアスーを事例にー	
内容：ヴァンダナ・シヴァ（1997）¹⁾は、生物多様性の復権には生物多様性が「生産」の論理となり、自然生態系と農業生態系を包括した視点を持つ必要があると述べている。そこで、生物多様性の保全に向けた「生産の論理」としてのブラジル・トメアスーにおけるアグロフォレストリー農法発展を「環境学習」として分析した。 アグロフォレストリー農法発展における学習段階を5つ<①「近代科学知」の伝達(学習)②「形」を模倣し繰り返す学習 ③模倣してきた対象（形）や近代科学（構造）を客観的・批判的に捉え直す学習 ④「風土（地域・歴史・そこで暮らす人々の暮らしなど）」を「個性性」のある「科学」として捉え直す学習 ⑤非「近代科学知」と「近代科学知」の二分法を乗り越える学習とその主体>に分類した。そして、この学習を動的に行い続けることが、農民による主体形成を可能にするとした。また、本環境学習としての「知」の変化も明らかにし、「ローカルな知」と「Unlearn」が内在することを指摘した。 1)ヴァンダナ・シヴァ『生物多様性の危機 ― 精神のモノカルチャー ―』、三一書房、1997 年	
足立 修一（同志社大学大学院総合政策科学研究科 ソーシャル・イノベーション研究コース） 【参加動機】 ・ 全国の環境教育を先行する学生と交流を持ちたかったから ・ 他大学の大学院生がどのような研究をしているのか知りたかったから	
発表テーマ：児童先導型地域再生モデル構築とその発展的展開 ー福井県美浜町新庄区をフィールドとしてー	
内容：日本の農山村は若者の流出、農林業の衰退など、数多くの問題が悪循環し、危機的状況にある。そんななか、福井県美浜町新庄区の新庄小学校では、5,6年生児童が総合的な学習の時間を使って「山の子ふれあい振興社」という子どもの村おこし会社	

を立ち上げ、住民アンケートや、休耕田再生プロジェクトなどのユニークな活動を行っている。2010年5月にその子どもたちと出会った筆者は「児童が先導する地域再生」に可能性を感じ、新庄に関わり始めた。夏には京都の学生が新庄を訪れ、子どもたちが地域を案内する「新庄グッドツアー」を、秋には逆に子どもたちが京都で物産展を開く「遠むすびプロジェクト」を企画実行した。また、2011年4月からは新庄の空き家に移住し、地域の日常に自ら入り込みながら研究活動を進め、「米 STARS(マイスターズ) in 新庄」という、美浜町内の小学生向けの米作りプログラムを企画実施した。これらの企画を研究者である自身が当事者となって実行していくことで、児童先導型の地域再生モデルを構築し、さらに県外の学生や地域の若者が参画していく発展的な展開のプロセスを明らかにした。

木村 義彦（福島大学大学院 地域政策科学研究科 社会計画専攻）

【参加動機】

- ・朝岡教授からのご紹介
- ・「環境教育」の著名な先生方の講義



テーマ：事例紹介 地域住民による学びとグリーンツーリズムの展開
—福島県飯舘村を事例に—

内容：日本の中山間地は古くから農林業を中心とした生活文化が営まれている農村地域が多いが、その厳しい自然条件などから農業生産性が低く、また農産物価格の下落による農家所得の減少などの農産業問題が深刻化している。また、農業や地域の文化を引き継ぐ若者が都市近郊へ流失するなど少子高齢化や過疎化が進み、耕作放棄地の発生や限界集落など地域の存続の危機とまで言われるようになった。近年では、ソフトで持続可能な中山間地域の活性化に向け、農山村地域の都市農村交流事業であるグリーン・ツーリズムが着目され、行政主導によるツアー型事業が展開されている。ここでは、住民を主体としたユニークな政策を展開する福島県飯舘村のグリーン・ツーリズムを事例とする。具体的には、発表者が2年間、参与観察を通してきたS地区を紹介する。個人ではなく、地区住民自らが地域学を通して地域課題に取り組み始めたという点が特徴である。ここでは、地域での暮らしそのものが環境教育であり、それを活かしたグリーン・ツーリズムを展開している。また、参加者との交流からも「農と食」「伝統文化」などといった地域資源、すなわち自然や文化という人々の生活の原点を、住民自らが見つけ直す学びになっていることが分かる。さらに参加者との連携も生まれ、多様な実践が行われようとしている。

五十嵐 翼（長野大学環境ツーリズム学部環境ツーリズム学科）

【参加動機】

- ・ 自然体験や環境教育に興味があった。
- ・ 学部生ということもあり、大学院生と触れ合う事で何かを得たかった。



テーマ：マレーシアエコツアーインターンシップ ―エコツアー評価体験―

内容：2010年9月13日から10月4日の3週間、マレーシア国政府・サバ州政府観光局の支援を受け、インターンシップが実現した。目的は、環境と観光に関する知識を幅広く持つ学生（専門家ではない）がサバ州で展開されているエコツアーについて、幅広い視点で評価するというものであった。今回のインターンシップでは、サバ州で展開されている10のエコツアーに参加し、日本語ガイドの能力やツアーの内容などがエコツーリズムの考え方に従ったツアーとなっているか評価し、分析を行った。評価に関して、日本エコツーリズム協会の3原則を参考に、7つの大項目と全39項目から構成されるチェックリストを独自で作成し、評価に活用した。評価方法は、評価項目すべてに5段階の評価ポイントを付け、平均点を用いた。評価分析については、2点以下を「優れている点」3点以上を「改善すべき点」と大まかに振り分け、その点数についての理由付けを明確に行った。理由付けから見てきた分析結果を元に、ツアーごとに優れている点・改善すべき点をまとめ「より魅力的になるため」の提言を行った。ツアー全体の提言については、チェックリストの7つの大項目に沿って、1項目ごとに提言をまとめた。

水野 里美（早稲田大学大学院 公共経営研究科 公共経営専攻）

【参加動機】

- ・ 環境について学んでいる他の大学院生との交流を通して、様々な価値観に触れ、今後の研究や学生生活に活かしたいと思ったので。
- ・ プログラムが面白そうだったから。



テーマ：地球温暖化問題の科学コミュニケーション ―環境問題の分析を通して―

内容：地球温暖化問題は「トランス・サイエンス」に該当する。「トランス・サイエンス」とは、アメリカの有名な物理学者である A・Weinberg が論文「Science and Trans Science」（1972）の中で提唱した概念であり、科学的なことであるが、科学だけでは答えることができない領域のことで、特に政治と科学の重なり合った領域を指す。BSE 問題や原発の問題などに当てはまり、温暖化問題にも該当すると言える。

温暖化問題に関しては、IPCC が科学的知見を評価する国際機関として存在し、政治

と科学が重なり合う場としての IPCC は地球温暖化に関する科学的知見を評価する国際機関であり、政策に中立であることがルールとして求められている。そのような性質を持った IPCC の評価体制や政策への中立性に対して疑惑が持ち上がったのが、「クライメート・ゲート事件」である。

スキャンダルとも言えるこの事件について、欧米では議会やインターネット上で議論が活発になり、イギリスの新聞 The Guardian では論説の特集が組まれるほど報道も多くなされた。いっぽう日本ではほとんど報じられず、事件について知らない人も多い。ノーベル平和賞の報道は多くなされているが、この事件についてあまり報じられないことによって、人々の IPCC、そして温暖化問題に関する認識を偏った方向に導いているのではないか。そのような問題意識を持って、新聞報道の分析を行った。

稲木 瑞来（大妻女子大学大学院人間文化研究科
人間生活科学専攻 生活環境学専修）

【参加動機】

・学会等の発表練習、他大学院生との意見交換・交流、・岡島先生からのお誘い

テーマ：食糧廃棄物から考える環境教育 ―食育を中心として―



内容：日本は食糧自給率が低く、多くの食料を輸入しているにもかかわらず、多くの食糧廃棄物を排出している。食糧廃棄物が原因により引き起こされる環境負荷には、フード・マイレージや仮想水などがあり、食糧廃棄物の問題は単に日本の食品産業、消費者だけの問題ではなく、環境問題にも大きく関わる問題である。今後、地球に優しい環境を築くためにも、廃棄物の抑制・減量・再生化率を高めるべく、国民全体で日々食品の無駄をなくしていく必要がある。

そこで、食品に目を向け、食のありがたみを知る教育を行えば、食糧廃棄物削減につながるのではないかと考える。その際に有効であろう、食の教育、つまり「食育」について取り上げた。食育とは、「生涯を通じた健全な食生活の実現、食文化の伝承、健康を確保するため、自らの食について考える習慣や、食に関するさまざまな知識を学習する取り組み」を指す。食育基本法では、親に「食育」を求め、保育園や学校で教育者が行う教育ではなく、家庭で行う食育が重要視されている。そこで、保護者と子どもがともに家庭で行うことのできる食育として、食前食後の挨拶習慣（いただきます、ごちそうさま）、地産地消、食材の適量購入、調理の実践（お弁当づくり、お手伝い）、食に関する体験活動（家庭菜園）が考えられる。これらを通して自然への感謝や環境との調和を学び、食に関する理解を深めることが食糧廃棄物削減につながるのではないかと発表した。

柳 貴洋（長野大学 環境ツーリズム学部 環境ツーリズム学科）

【参加動機】

ゼミ活動で、里山の再生活動を行っている。地域子ども達と自然との関係作りのプログラムを考案・評価・考察を行っている。環境教育の効果をより一層、入れるために、幅広い知識を得たいと考えたからである。



テーマ：アイスブレイキング型環境教育プログラム ―楽しみながら森の生態系を学ぶ―

内容：活動で初めて出会う参加者同士が楽しみながら学び、活動に参加できる事前準備・学習としてのアイス・ブレイキング型環境教育プログラムの考案・評価・考察を行った。プログラムはカードを使ったグループ作りである。グループを作ることが再生活動の事前準備になり、その後の再生活動を有意義にできると考えた。プログラムは“植樹祭”“堆肥作り”“樹皮剥ぎ”の3回行った。活動後に参加者からアンケートを取り、プログラムの評価をした。結果は全体的に評価が高く、アイス・ブレイキング（柔軟・協力・関係）と環境教育（関心・知識・態度・参加）の2つの効果があることが示唆された。

さらに、地域の小学生を対象に森博士認定制度を設けた。子どもに人気のカブトムシを題材にカブトムシの住める森作り講座を開き、“堆肥作り”“樹皮剥ぎ”“昆虫採集”の3つを連動させ、参加意欲を増すことができると考えた。限段階では、“堆肥作り”“樹皮剥ぎ”の3回しか行っていないが、“堆肥作り”の小学生の参加が7名だったのに対し、“樹皮剥ぎ”では55名の小学生が集まった。

江見 可菜恵（同志社大学大学院 総合政策科学研究科
ソーシャル・イノベーション研究コース）

【参加動機】

子ども向けの地域の自然を教材にしたいけばなワークショップの開催を控えていたので、環境インタープリターの技術を磨きたかったから



テーマ：若者の「関係性の中の自己」の醸成を目的とした実践的研究
―「景色いけ」を用いた地域密着型イベントを通じて―

内容：いけばなを用いたイベントを通じて、京都の美しい景色を守る取り組みを大学生と企画実施した。美しい景色には「空間の履歴」が内在していることをイベントを通じてメンバーの大学生が社会に伝えていく過程や、大学生が学外へ出て社会との関係を築

いていく過程を通して、大学生自身も「関係性の中の自己」を醸成していく過程を実践研究としてまとめた。

実施したイベントの内容は以下の2つである。1つは地域子どもたちと地域を流れる桂川河川敷で採取した植物を、「川博士」とともにその場で桂川の景色にいけてみる、いけばなワークショップ「カツラガワノケシキ」。2つ目は、今度は大学生自身が京都の美しい景色を7つ、丹念なフィールド・リサーチの下、京都の景色にいけ表す「キョウトノケシキ」。

このようにしていけられた作品はいずれも展示して、作品を通して景色の美しさやそこに内在する空間の履歴を観覧者にも伝える機会を設けた。

工藤 圭（青森大学大学院 環境科学研究科）

【参加動機】

- ・環境教育を学ぶ学生がどのような研究をしているのか興味があった。
- ・自分の修士論文を客観的に見つめ直すため。



テーマ：バサーを対象としたブラックバスに関する研究

内容：ブラック・バスが日本に導入されたのち急速に分布を拡大し、在来生物群集および生態系への影響が指摘されている。それとともに近年、釣り人のマナー問題が大きく取り沙汰されており、駐車違反、ゴミのポイ捨てなどのモラルの低下が見て取れるような現状である。そこで、問題解決の一つの糸口として、バサーに対して環境教育の重要性を促すとともに、自然に対しての人間の在り方について考察を発表した。

発表者は、主にブラック・バス問題を取り巻く相関図として、漁業資源の維持を唱える漁業者、生物多様性に努める各種団体、バスの有効利用を目的とする釣り業界、個人の趣味として釣りを楽しむバサー、この4つの視点から、個人レベル・社会レベル・自然レベルの3つに細分化し、現状の問題点を指摘した。

垂水恵美子（大妻女子大学大学院 人間文化研究科
人間生活科学専攻）

【参加動機】

- ・自分以外の環境教育に関心のある学生が、どのような研究をしているのか知りたかった。
- ・環境教育の学生同士のネットワークを広げたかった。



テーマ：幼児・児童の自然体験に対する母親の関心に合わせた検索システムの考察

内容：自然体験活動は、学齢前1～2年の幼児および小学校低学年の児童が最も効果的と言われている。その時期の子どもにとって最も大きく影響を与えるのは親、なかでも母親の存在であるとされている。効果的な時期に自然を体験してもらうには、母親が活動に参加したい、または子どもを参加させたいと思ってもらう必要がある。

いっぽう自然体験活動を事業として行っている自然学校の主な広報の手法としては、1) リピーターを含む、主催事業に参加したことのある参加者への広報、2) 近隣の小学校へのチラシ配布、3) プログラムを行う自然学校のホームページでの募集、4) 日本環境教育フォーラムや環境 goo など環境教育に関わるネットワークを仲介しての募集、以上4つである。予算面に課題を持つ自然学校では、広報の中心はインターネットであると考えられる。

現存の自然体験プログラムの検索データベースとして、宮城教育大学、日本環境教育フォーラム、環境 goo イベント・カレンダーを参考にあげ、新規の参加者が入りやすいようチャート表示の検索法を提案した。

丸谷 聡子（同志社大学大学院 総合政策科学研究科
ソーシャル・イノベーション）

【参加動機】

- ・日本の環境教育を牽引される先生方にお会いし、直接ご指導いただける
またとない機会だと思ったから
- ・環境教育を学ぶ院生と交流したいから



テーマ：学校と地域をつなぐ環境教育のコーディネートに関する実践的研究
—兵庫県環境体験事業の連携と協働を通じて—

内容：①兵庫県は、2009年度から全805公立小学校の3年生を対象に「環境体験事業」を実施している。自身が代表を務める「明石 のはら くらぶ」の活動の一つとして多くの学校から相談を受け、環境教育のコーディネーターとして、地域や専門家、行政などをつないできた。それらの実践からは、教員が身近な自然の価値に気づく、地域において行政、地縁組織、NPOなどのワーキング・ネットが広がる、など多くの成果が生まれてきた。教員をはじめ地域の大人の意識が変わることで、子どもも変わる。その実践事例からの成果と課題を報告する。

②実践事例

- (1) 教員が「環境体験学習」の知識がなく、活動をともにするなかで意識が変わっていった事例
- (2) 学校の前に広がる海岸に教員だけで下見に行ったが、何もないと相談があった。再度、海の自然生態系の専門家と行くと、多くの魚貝類の生育する豊かな海だった。身近なフィールドの価値に気づいた事例

- (3)校区内に体験できる場所がないと困っていたが、校庭に小さな森を発見し活用した事例
- (4)地域の協力により、行政、NPO、地縁団体など 10 団体を巻き込んだワーキング・ネットワーク形成の事例
- (5)自然系公共施設へ体験や見学を実施する学校が多いが、ほとんど既存プログラムで対応しているのが現状である。そこで 2 つの公共施設に学校に合わせたオリジナル・プログラムの対応をお願いした事例
- (6)他市 NPO と協働で、新たな地域の価値に気づくなど、相乗効果が見られた事例
- ③これらの実践から ESD の視点を持った環境教育コーディネーターが介在することが重要であると結論づけ、「学校」と「地域」をつなぐ環境教育のコーディネート・モデルを導き出し、提示した。

中嶋 信（東京農工大学 連合大学院
環境教育学研究室）

【参加動機】

- ・環境をキーワードに集まると、朝岡教授から伺い「ぜひ、行きたい！」と思って出席した。



テーマ：「農と体験を通して子どもの主体性を育てる活動に関する研究」—農山村地域の生活と文化活動等に含まれている「農」が持つ教育力を明らかにする—

内容：自然の力を活用せずには実現しない「農」の営みを体験の題材として、地域（日常生活の範囲や体験学習場所での活動範囲）の生活文化と日常生活、遊びなどを、今後の生活や遊びも含め、体験として学び、「人と農の営み」から、日常生活の興味関心を高め、積極的に自らが深めるプロセスと、そこで育まれる（もたらされる）感覚や意識も含めた広がりを整理していこうと考えている。

また、その農の営みと人間生活の関わりを中心に据えて、農を中心とした営みの根底にある経験の上に成り立っている、自然を教科書として生活すること、学ぶことで、今日の学校教育をはじめとした体験学習を含む「プラグマティックな教育とその一層の市場化がもたらす、より一層のプラグマティズムと学力至上主義への警鐘」も含め、非合理的な自然界の流れとしての「風土」、その中の「伝説」そして「おそれ」から、「自然＝生命観」として、「持続可能な営みからの学び」の可能性を明らかにしていくことを目指している。

藤井 千亜紀（同志社大学大学院 総合政策科学研究科
ソーシャル・イノベーション研究コース）

【参加動機】

- ・「環境教育」というキーワード
- ・同じキーワードで研究している先生方や学生との交流が魅力的に感じた



テーマ：持続可能な食のために

—親子農業体験プログラムを通じたソーシャル・イノベーション—

内容：現代の食生活において、人々の興味や関心は目の前にある「食べ物」の「何」を、「どう」食べるかということであることが多い。その食べ物がどう作られ、それが命をいただくことであるという感謝の意識が薄れているという現状は、日本の食卓における食品廃棄量の多さにも表れている（家庭の食廃棄率年間約 1100 万トン；全農水産物の 10%強^{*1}）。本研究は、発表者自身が食の専門家を目指す立場にありながら、食の営みの原点である「農」への理解が皆無であるという反省点も含め、食の生産から消費までを体験する親子を対象とした食農体験プログラムを実施し、家庭の食生活への影響を測定することを目的としている。また、本体験プログラムを通じて農業者・料理人・栄養士・大学生などさまざまな立場からの関わりにおける意識・行動の変容も検証していく。

具体的には、秋冬野菜の作付時期（9月～12月）の3か月間、月1回・計4回の食農体験プログラムを実施し、参加者である親子の意識がどのように変化するかを検証するものであ

る。種まき・草引き・収穫など、野菜の栽培過程を五感で体験し、実際に収穫した野菜をその場でいただく。また、単なる農作業だけでなく、本来一体である食と農の営みの関連性を持つ要素として、季節ごとの行事食を取り入れる。

*1 農林水産省 平成 21 年度 食品ロス統計

松村 聡子（千葉大学 融合科学研究科 分子生体機能学研究室
園芸学研究科に来春転科予定）

【参加動機】

- ・「環境」、「教育」という二つのテーマに興味があったから。
- ・浅間セミナーの参加前に行っていた研究から新しいテーマに変更したいと考えていたので、自分の進路選択の参考にしたかったから。



テーマ：微生物が救う環境問題

内容：環境問題は食糧問題と密接に関係している。本発表ではこのままでは人口を維持できないと考えた場合、食糧生産を増産するためにどのような方法が採れるかを検討し、新しい方法として農業に「微生物を利用する」方法を紹介した。従来からある品種改良や遺伝子組み換え、植物工場の利用などではそれぞれデメリットがある。そのため本発表では、特殊な環境下より採取された菌を、作物と一緒に育てることにより、その特殊な環境に作物が適応するというものである。

具体的には、耐熱、耐塩、耐乾燥の能力を持つ微生物と植物を共生させたときに、その植物がそれらの耐性を獲得する。例えば耐乾燥の場合、14日間水をやらない状態で放置すると、共生させないものは枯れてしまうが、微生物を共生させると、水をやり続けていたものと変わらない状態になる、など、微生物によってさまざまな能力を発揮する。また、興味深いのはこの共生が植物と微生物が特異的である必要はなく、ほとんどの植物と共生するらしいのである。一方でこのような能力を持つ微生物は環境中にほとんどいない。なぜか特殊な環境にのみ存在するのである。このように自然化には、数少ない有用微生物を利用できれば急激な環境変化に対応して作物生産を安定して行えるのではないだろうか。

村上 紗央里（同志社大学大学院 総合政策科学研究科
ソーシャル・イノベーション研究コース）

【参加動機】

- ・環境教育を多角的な視点で学ぶことのできる機会だと思ったこと
- ・日本の環境教育を牽引される先生方に直接お会いできる機会であったこと
- ・長野県小諸市の自然に触れたかったこと



テーマ：環境未来世代を育む創造空間の実践研究

—レイチェル・カーソン思想を手がかりとして—

内容：①概要：本研究の目的は、持続可能な社会の実現のため、レイチェル・カーソンの思想を手がかりとして、「環境」をテーマにした創造空間を創出する試みから、自然と人、人と人、人と社会の「つながり、関係性の再構築」の可能性を示すことである。具体的には、実践主体として、自ら「ハレうさぎ自然美術社-art space for community-」を立ち上げ、みること、つくること、感じることなどの表現活動を通じた異なる世代が交流できる空間と機会の創出を試み、企画展示や創作ワークショップを展開した。

②実践事例

(1)「思いを寄せて机と椅子を作るワークショップ」：専門家の下、環境への配慮を考え「古材」を使用し、参加者とともに創造空間の机と椅子を制作した事例

(2)企画展「ハレうさぎ—うさぎでつながるご縁—」：活動のコンセプトに共感して下さった、自然の素材を使った 8 名の作家の協力の下行われた企画展

(3)企画展「センス・オブ・ワンダーのちいさな世界展—こどもたちの描くいのちのつながり—」：世界の子どもたちから寄せられた「国連子供環境ポスター」の展示、レイチェル・カーソン日本協会会長で『センス・オブ・ワンダー』の訳者の上遠恵子氏の講演会、「草木あそび教室」を行った事例

山地 正悟（帝京科学大学大学院 アニマルサイエンス学科）

【参加動機】

- ・環境教育への知見を深めるため
- ・同世代の環境教育者との交流のため



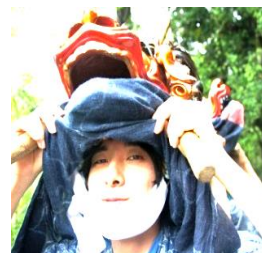
テーマ：田んぼをフィールドとした自然・経済・農業・文化のつながりについて

内容：日本の自然を守るためにはどうすればいいか？ その答えの一つとして、「里山化」することは最適な保全方法であると私は考える。ここで言う“保全”とは、「古き良き日本」を取り戻すのではなく、自然環境の中で、野生動物の暮らしと人の暮らし（経済的な）のバランスを取ることである。田んぼは農業を行うだけでなく、農産物生産による経済的な側面や、カエルやトンボなどの野生動物の生息地といった環境的側面、棚田や水路管理などの地域の景観・文化的な側面など、多くの表情を持っている。それぞれの側面を、自然体験型環境教育を主とした体験活動を行うことで、地域の自然と地域の住民とつなぎ、自然との関わりが目に見える場となるのではないかと考えた。修士研究では上記の考えを体系的にまとめるとともに、実際に田んぼをフィールドにした環境教育を行うことで、地域住民や自然環境に与える影響を探っていく。また今後は、そうした考えを持つ環境教育者が地域に入ることによって、キャンプやボーイスカウトのような“ハレの環境教育”ではなく、自分の生活と地域の自然の関わりについて意識しなくても理解しているような“身近な環境教育”を目指していきたい。

石山 雄貴（東京農工大学大学院 環境教育学研究室）

【参加動機】

- ・ 指導教官からの鶴の一声
- ・ 環境教育学会大会の発表練習



テーマ：ESD の主体としての労働者協同組合の可能性

内容：現在の日本においては貧困に関する社会的公正を是正するため、地域に雇用を創出することが求められている。関連して、須賀は「持続可能なまちづくり」において「世代の持続や人々が土地に根ざして生きていくこと」が必要であり、そのためには地域に必要とされる労働の創造や確保が必要だと述べている(1)。したがって、社会的公正を実現する視点を領域に含む ESD 研究においては、地域に必要な仕事を雇用として生み出す活動を積極的に位置づける必要がある、と考えられる。まず、そのような取り組みを行い得る主体として NPO があげられる。指定管理者制度を利用することで、NPO が持つ地域活動が地域に公の施設の管理運営に必要な雇用として創出される。しかし、指定管理者となった NPO の中には「行政の下請け化」(2) してしまうケースが指摘されており、それぞれの NPO が持つ地域課題に即した活動が行われなくなる可能性があると考えられる。次に、労働者協同組合（以下労協）が考えられる。東京都福生市における児童館は労協が指定管理者となって運営されている。この児童館では、単に運営を行うだけでなく、職員たちが地域課題を発見する手法を学び、市民との関わりのなかで課題を発見し、その課題を解決する仕事の創出に向けた研修を市民とともにやっている。この活動は、指定管理者としての枠組みだけでなく、持続可能な社会の創造における市民エンパワーメントにつながる活動であり、労協が ESD の新たな主体となる可能性を持つ、と考えられる。

1) 須賀貴子「『持続可能なまちづくり』における労働者協同組合の役割」ESD・環境史研究 2009 年、p56～58.

2) 田中弥生「NPO が自立する日 行政の下請け化に未来はない」日本評論社、2006 年

参加学生の感想

■”Não há cores que não misturam”「混ざらない色はない」。ブラジルでは多様な人種や文化が混ざり合っていることから、この表現がよく用いられる。浅間学生セミナーを通じ自分の色は異なった色と混ざり合って、また新しい色に仕上がったと思う。それは初めて催された「浅間学生セミナー」という無地過ぎたキャンパスの上で、ほぼ「自由」しかないなか参加者の研究・実践に向き合い、議論を交わすことができたからであろう。浅間学生セミナーの今後の運営に関して明け方まで話し合えたことも、初めて顔を突き合わせた人間による合意形成がいかに難しいか・どうすれば上手くいくのか考える良い機会にもなった。「環境教育」としての自分の研究意義や、「環境教育」そのものを問い直す契機になったのは言うまでもない。

長野県小諸市の雄大な自然の中で、さまざまな研究分野の学生が集まって議論できる、こうした環境はほかにはない。今後は、この「無地のキャンパス」を準備する側に立つことで、参加者の色や自分の色がほかの色と混ざり合い、変化するのを楽しんでいきたい。

(酒井 佑輔)

■環境教育という共通のテーマに集まったセミナーだったが、そのジャンル、アプローチの仕方は人それぞれで、研究内容はどれも新鮮で学びの多い2泊3日だった。日ごろの研究活動ではなかなか遠方の人たちとつながる機会がなかった分、さまざまな地域で似た意識を持ちながら活動する仲間の存在を確認できる貴重な場であった。また、来年から早速、学生主体でこのセミナーを続けて欲しいという投げかけに対し、誰が実行委員長をやるのか、来年やるとしたらどんな内容にしたいかなど、揉め合いもありながら全員が円になって夜遅くまで話し合ったことは印象深い。

せっかく浅間という自然溢れるフィールドにやって来たので、もう少し研修施設周辺の自然に触れるプログラムがあっても良かったと感じる。

(足立 修一)

■環境教育の勉強を始めるのにとってもいいセミナーがあると紹介されたのが、「浅間学生セミナー」だった。私にとって新しい分野の第一歩で不安もあったが、とてもいい機会だった。

このセミナーのポイントは2つある。まず、「環境教育」の著名な先生方の講義を受けられることだ。合宿とはいえ短い時間であったが、概論講義をはじめ多様な実践報告と内容が充実していた。日々の研究生活において、こんなに多くの先生とお話ができることはないだろう。そして何より、環境教育を学ぶ全国の学生たちと出会い、学会とはまた違う密な関係を築けたことが言える。全国の学生がどのような研究をしているのか、どのような視点を持っているのか、何に強く関心を抱いているのか、じっくりと話をすることで、自身の研究や視点を深めるきっかけになったのは間違いない。研究に捉われず、進路や学

生生活での悩みや相談も普段ではなかなかできないものかと思う。

これにとどまらず、そこで知り合った仲間たちのフィールド・ワークに参加させていただくなど、今でも研究と交流が続いている。自分の研究を整理する場、環境教育の学習の場、研究の幅を超えた仲間との出会いの場など、自分自身の研究生活を有意義にしてくれるきっかけが「浅間学生セミナー」なのではないか。この機会を下さったすべての皆様に感謝を申し上げたい。

(木村 義彦)

■この3日間で多くのことを学び、自分自身のスキルアップにつながったと思う。これは、単に先生方・大学院生の発表を聴いて知識を得ただけではなく、研究に関する物事の考え方やアプローチの仕方などを共有できたことで、今後の研究を進めていく上での大きな糧となっていた。フリータイムでのコミュニケーションは、とても重要な「学びの場」であったと言える。

また、私自身「自然体験」や「環境教育」への関心を持ったばかりであり、研究に関して一歩を踏み出したばかりである。このセミナーで学べたことを大切にして、より興味・関心を深めたい。今後は、セミナーで築くことのできた関係性を大切にし、同じ分野で研究を進めている者同士で刺激し合えるような「つながり」を強めていきたいと思う。それは自分自身の「成長」を実感できる環境が、「つながり」には溢れていると考えるからだ。私が浅間学生セミナーを通してどう成長していけるのか……とても楽しみである。

(五十嵐 翼)

■何よりもまず、3日間お世話になった安藤百福センターの皆様、講義などしていただいた先生方、一緒にディスカッションなどをした他大学院の皆様に感謝したい。

浅間学生セミナーに参加することによって、視野が広がり、似たような分野の学生同士のつながりの大切さを実感した。研究発表では、普段のゼミとは違った分野の研究について知ることができ、かつさまざまな観点からアドバイスをいただき、ありがたい時間だったと思う。交流する時間やディスカッションする時間を通して、研究や研究以外の環境に関する話を多くの人とでき、刺激があった。

また、安藤百福センターという場が、環境教育について考えさせてくれる良い場であったと思う。環境教育のボランティアをしていたとき、写真を使って説明することばかりしていたが、より自然に近い場で学ぶ意義の大きさを感じた。環境教育について、さまざまな人々や小諸の自然環境から多くのことを学び取れた浅間学生セミナーに参加できたことに、重ねて御礼申し上げるとともに、この経験を研究のブラッシュアップ、環境教育の実践などに活かしていきたい。

(水野 里美)

■まず、「環境教育」という一つのキーワードから、多種多様な発表内容があったことに驚いた。そして、参加者それぞれが修士論文と真剣に向き合っている姿勢を感じることがで

き、刺激を受けた。私はセミナー参加時、修士論文のテーマが確定していない時期であったため、他学生の発表を聞くことで道が開けたように感じた。研究のためにさまざまな地に足を運ぶ学生が多くいたことから、自ら学ぼうとする姿勢の大切さを改めて感じる事ができた。

ディスカッションにおいて、このセミナーを今後続けていきたいという意見が出たことは、参加者全員が真剣にセミナーに参加した結果であると思う。初めて顔を合わせた者同士が、たった3日間という短い期間の中で、今後このセミナーをより良くしていくために明け方まで話し合いをしたことも、貴重な経験になった。このセミナーに参加して、自ら行動することの大切さや、それぞれの意見をまとめるため、全員が納得するまで話し合うことの難しさを学ぶ良い機会となった。(稲木 瑞来)

■多くの大学院の先生方の講演や院生の研究発表など、環境教育についていろいろな視点から研究がなされていて、環境教育を幅広い視点で見ることができた。ここで得た多くの知識を基に、より一層魅力的なアイス・ブレイキング型環境教育プログラムを作っていきたいと考える。

また、私の環境教育についての知識の狭さを知ることができ、もっと幅広く深く知識を身につけたいと考え、環境教育が学べる大学院に進みたいと強く考えるようになった。

多くの方々とつながりを持つことができ、とても有意義な時間を過ごすことができた。(柳 貴洋)

■浅間学生セミナーには日本各地からさまざまな研究内容や背景を持った学生が集まり、夜になると遅くまで互いの研究や活動、将来の夢などについて大いに話が弾んだ。他大学の学生や先生方との交流は楽しく、また、異なった視点から投げかける社会への眼差しは私にとって刺激となった。

また、今回は何もかも初めてのセミナーだったのでいろいろと課題はあったが、だからこそ、学生皆で深夜までこれからの浅間学生セミナーについて話し合ったあの夜は特に忘れがたい。なかなか次のセミナーの担い手が決まらず、どうしたら皆が一番納得できる形になるか、今までほとんど知らなかった者同士が話し合うことは難しいことだった。

人と交わり、合意形成を行い、互いが気持ち良く過ごす関係性を築くことの難しさ。それでもともにその道を探ることの創造性と面白さ、尊さ。今回のセミナーではそれが一番鮮やかに、印象に残っている。まさに浅間の山の上にある、景色のきれいなあの場と、ともに環境教育について学ぶ仲間の存在が、今回のセミナーの一番の教材であったと言えるだろう。(江見 可菜恵)

■私自身、今まで環境教育という分野の研究をしてきたが、他校との交流の機会がなかったため、自分の論文を客観的に見てもらうという場に参加できたことが、大変貴重な経験

となった。

環境教育を研究する一研究者として、ほかの学生がどのような研究をしているのか、どのような経緯でその研究をするに至ったか、発表を通して聴けたことはとても意義深いものであった。

また、諸先生方の講義を聴講できたことにより環境教育の新たな可能性、そして重要性をより一層認識させられた。

今回のように、学生同士で一つの分野に対して議論をぶつけ合える場合は、なかなか経験できることではない。今後もさまざまな学生が、浅間学生セミナーを通して環境教育という分野を深めていって欲しい。
(工藤 圭)

■普段なかなかお話を聞くことのできない他大学の先生方や、さまざまな分野や立場の学生の研究発表を聞くことができて、とても良い機会になった。

自然体験活動をしている学生の友人は多くいるが、自然体験に限らない分野での環境教育的視点の学生の話を聞くことは、私にとって大いに刺激となり、環境教育という分野の幅広さを実感した3日間にもなった。

また、浅間学生セミナーの記念すべき第1回に参加できたということは、非常に良い機会だった。良い意味で枠組みのない今回のセミナーを通して、今後のセミナーの運営や意見について学生自身が話し合う時間もあったことで、ただ受身で講義を聴くだけのものよりも、充実した時間を過ごすことができたように思う。
(垂水 恵美子)

■ひと言で表現するなら「環境教育の未来は明るい！」だ。平常の大学院生活では、社会人も多く同じ感覚で参加したが、とにかく皆さん若い!! 私は、大学院生としては最年長だとひと目で分かる状況で、初めは正直戸惑った。でも、誰もが気さくに話しかけてくれるので、戸惑いは一瞬で消え去り、楽しく有意義な時間を過ごすことができた。特に印象に残っているのは、最終日に全員で登ったウォールだ。私にはとても登れそうにない垂直の高い壁だったが、「まるちゃんを必ず登らせる！」ために参加者全員が真剣になってくれた。こんなに熱くて素敵な若者たちが環境教育を研究しているのだと思うと、頼もしく嬉しい気持ちで胸がいっぱいになった。また、日本の環境教育を牽引する素晴らしい先生方とお話できたことは、一生の宝となった。今後の自身の使命として「浅間学生セミナーの母的役割」を担えるよう努力精進していきたい。
(丸谷 聡子)

■たくさんの仲間に出会った、貴重な体験をもらえる場所になった。別の視点で集まってはいるが、1つ共通だといえるものを持っている。「環境」に関心があり、悪化させることが目的ではないこと、「教育」としてなんらかの活動を「伝えていく」こと、重ならなそうでも重なっていく時間がとても有意義だった。今回の試みで、自らの学びを「人に伝える」プ

ロセスで再度深めていくことができるチャンスがもらえてうれしい。将来、コラボして活動を広げられる「人脈」としても、可能性に溢れていた。

いろいろな可能性を持った楽しいグループであり、関わり続けていきたい。(中嶋 信)

■このセミナーで得た多くの出会いがとても貴重であり、財産となっている。それぞれの研究内容への興味・関心もそうだが、半年経った現在でも交流が続いていることがその証拠だろう。

学外の大学院生との交流は今回が初めてであったが、このように充実した時間であったのは、それぞれの専門性が全く異なるにもかかわらず、「環境教育」という共通キーワードを持つことで一種の「結束感」を持つことができたからではないだろうか。そして、それを応援して下さる先生方が、同じ空間におられるという心強さもとても強く感じた。

自身はまだ研究構想段階での参加・発表であったが、先生方の講義や他学生の研究実践を聞くことは大変貴重であり、非常に参考になった。「環境教育」に対する理解の浅さを感じながら、今後の学習・研究への意欲が掻き立てられた。ぜひ、自分の研究内容が構想段階である場合や自信がない場合でも、前向きに参加してみたい。(藤井 千亜紀)

■今まで関わることのなかったさまざまな分野の方々と話をする機会を得ることができ、自分の視野を広げることができた。環境という一つのテーマを考える上で、問題が多岐にわたっているということを実感できた。

特に大学では環境問題を取り扱う上で、技術を向上させることが解決策だと思っていたが、さまざまな価値観のなかで「環境問題を解決する」とは誰のための解決策なのか、何をもって解決と言うことができるのか、を特に考えさせられた。自分の専門分野以外の学生とディスカッションできたことが、このセミナーに参加して得ることができた貴重な機会であった。特に全体でのグループ・ディスカッションは初めての体験で、非常に有意義であった。

このセミナーに参加したからこそ、環境問題を「環境問題」という安易な表し方で話すのではなく、なんのための、どのような目的のために問題となってしまう環境の現状なのか、をよく踏まえてからディスカッションしていきたい。学生らしい感想ですが「いろいろな人と話せて楽しかったです。久しぶりに夕焼けを見て、きれいで感動してしまいました」。(松村 聡子)

■この浅間学生セミナーを通じて、「環境教育」を学ぶ各地の学生の皆さんと学び、交流できたことが何よりもかけがえのない体験だった。ひとりひとり目的意識を持ち、自身の研究に取り組まれている姿がとても印象的で、自分自身も前向きに取り組む活力となった。また、日本の環境教育を牽引する先生方の講義と交流会を通じて直接お話しできる機会は、

とても貴重な体験で感激だった。特に先生方の現在の活動や、これまで体験されてきた環境や自然に関するお話がとても興味深かった。

緑豊かな長野県小諸市で、共通の志を持った学生が集い、学び合うという体験は、とてもかけがえのないものであった、と数ヶ月経った今感じている。

このセミナーを通じて、「つながりの種」が生まれたこと、そして、ここからまた「新たなつながり」が生まれ、育まれることを願っている。ありがとうございました。

(村上 紗央里)

■同年代の環境教育に携わっている人たちと関わったことで、さまざまな価値観やつながりを得ることができた。特にソーシャル・イノベーションという考え方は、自分の行おうとしている環境教育と共通点が多く、なかでも足立さんや丸谷さんの研究内容はとても参考になり、自分の環境教育について再認識することができた。

大学院を辞めようかと考えていた苦しい時期であったため、ひとりだけパワー・ポイントも使わず図々しい発表を行ってしまったが、浅間学生セミナーの1期生として参加でき、たくさんの価値観に触れられたことをとてもうれしく思う。今後も、将来環境教育に携わっていく学生の交流の場として、十分に活用されて欲しい。

(山地 正悟)

■私の研究は、研究フィールドが都市であったり、発表の中に自然の「自」の字も出でこないような研究であったため、浅間学生セミナーにはなじまないのではないかと不安だったのだから、参加した学生の方々、先生方が真剣に私の発表を聞いてくれて、本当に参加して良かったと思っている。メンバーの発表も非常に多岐にわたり、だからこそ普段、自分が所属する研究室の中では指摘されないような事柄が指摘され、非常に白熱した議論が行えた。この経験は、その後の自身の研究発表の場でも確実に役立ったし、今後の自身の研究の助けにもなるに違いない。また同時に、環境教育学の研究領域の広さを実感でき、自身が考えてきた環境教育学の研究手法や研究そのものを捉え直すきっかけにもなった。今後の抱負としては、まず英語の勉強を行うことから始めようと思う。最終日に行われた英語スキル・チェックの際に、英語での自己紹介も満足にできない自分には、いささか戦慄した。浅間学生セミナーは、自身の英語力のなさを痛感するとともに、大学受験以来遠ざけていた英語と改めて向き合う良いきっかけになったと思う。

(石山 雄貴)

浅間学生セミナー・アメリカ交換留学生からの報告

松村 聡子 (ティートン・サイエンス・スクール第1期交換留学生、
千葉大学大学院 園芸学研究科 修士課程2年)

1. ティートン・サイエンス・スクールとその大学院生コースについて

アメリカ合衆国のワイオミング州西部に Grand Teton National Park (グランド・ティートン国立公園) という雄大な山並みと、さまざまな野生動物を有する国立公園がある。この国立公園内に Teton Science School (ティートン・サイエンス・スクール) という野外教育や環境教育を中心とした学校があり、小学生から大学院生、さらに教員や一般の観光客向けに多様なプログラムを提供している。本交換留学では、この学校が有する1年間の大学院生コースに1ヶ月だけ在籍させていただき、ほかの大学院生とともに学んだ。この大学院生コースは Teton Science School が所有する3つのキャンパスの内の一つである Kelly Campus に滞在し、講義や実習、調査、研究などを行っている。また、この学校は国立公園内にあるためその立地を生かし、授業や実習を通じて多くの野生動物を観察することができる。



キャンパス内から見えるティートン山脈



滞在していたキャビン。大学院生1人につき基本1棟。



アメリカアカシカ・ワピチ・キジリジカまたはエルク、ヘラジカとも呼ばれる



ハイイログマ、英名はグリズリーグマ

今回の1ヶ月のプログラムを要約すると以下のようになる。

1週目：座学の授業やほかのキャンパスでの自然保護活動への参加

2週目：州立大学での講義、プレゼンテーション（※本留学のための特別プログラム）

3週目、4週目：実習（実習対象：小学生）

今回の交換留学で見えてきたものは、前半で「環境教育」の分野としての確立と、義務教育課程での教科として確立させる、または、それに準ずる形でほかの教科教育にいかに関わり込んでいくかであった。後半は具体的な指導法を見ることで、授業の展開の方法やそのエッセンスを学んだ。実際に環境教育を行う上で何が必要かを、アメリカの環境教育を知識として学んだのちに、その授業展開を具体的に見られたことが今回の一番の成果である。

1週目、2週目で知識としての学びとして、アメリカの環境教育には Environmental education, Field education, Place-based education, Informal science education, の4つがあることを学んだ。

そのあと3週目から実習が始まり、今回の成果である授業の現場を具体的に見ることができたのである。

2. 留学の成果「実際に大学院生が小学生に向けて教える現場を見学」

この実習が始まった当初、私は時期を間違えてきてしまったと思った。毎日行われる実習には、大学院生ではなく小学生と同じ「参加」しかできず、大学院生としてはほかの学生とは違い、何もできないことが悔しくて恥ずかしかった。ミーティングのディスカッションは会話の速さについていけず、毎日の実習は朝7時半から夜の9時までの充実したプログラムであり、毎日、小学生の用のプログラムをこなすだけで手いっぱいであった。

3週目が終わり、4週目が始まった。今振り返るとこの4週目の学びが一番多かった。実習内容は3週目と全く同じではないのだが、多くの内容が類似していた。当初は、並行して行われているほかのプログラムにも参加する予定であったが、予定を変更してもらい、もう一度同じ流れで実習を受けてみた。その結果、3週目では見えなかったプログラムの、内容ではなく「教え方」や「プログラム自体の構成」などが見えてきて、今回の成果につながった。

教育は方法論や目的、思想も大事であるが、一番大切なのは実際の「教え方」ではないだろうか。そのため、それらをどのようにプログラムの中に組み込み、教えていくかを4週目では学ぶことができた。どんなに良い目的や方法論があっても、それを実際に教えられる人がいなければ、子どもたちにはうまく伝わらない。加えて「教え方」は文書や資料では情報を上手く得にくい。今回の実習ではその内容の組み込み方や教え方だけではなく、サイエンス・スクールの立地条件を生かしたプログラム内容になっており、実際に日本で同じことを行う際の参考になった。

大学院生のメリットもある。実際に授業枠を任され、その内容や教え方は個人の自由で

ある。担当者は小学生の小グループを1人ないしは2人で担当する。同じ内容を教える際の正解や確立された方法論はない。どのように教えるかは個人の自由であり、その授業の目的もさまざまである。しかし、Environmental education, Field education, Place-based education, Informal science education,のそれぞれのエッセンスはすべて網羅しており、大学院生が作成した短期のカリキュラムの質の高さを学んだ。

具体的な内容は以下のようである。

- ・ 野外動物の観察：キャンパス周辺やティトン山脈付近へのハイキングを行い、実際の動物やその糞、骨、足跡などを観察
- ・ 植物群落の調査：針葉樹林帯やセージブラッシュ群落の調査、観察
- ・ 自然保護活動：小川付近への柳の植樹
- ・ 川辺の水生生物の観察
- ・ 野鳥の観察
- ・ 猛禽類センターでの講義：実際に捕食の瞬間を見る

このほかにも、実際の剥製のスケッチや、地域の歴史を学ぶために歴史資料館でのワークショップ、プレゼンテーション（劇を取り入れるなどの工夫）、ポスター発表などがプログラムに含まれていた。

さらにさまざまな場面で「ゲーム」が取り入れられており、日本と共通して子どもたちには楽しむ内容が必要だと感じた。

3. まとめ

これを踏まえた今後の環境教育に関する提言は以下の2点である。

1. 環境教育の分野としての確立：日本の環境教育の目的を明確にし、必要があれば新しい分野を確立させる。
2. 大学生・大学院生のための実習型授業の場を作る：野外教育だけに偏らない実習の場を作り、網羅的に環境教育を教えられる人材を育成する。



左端の黄色い帽の男性は大学院生、この実習では6名の小学生・2名の保護者を引率。骨を発見し、観察を行っているところ



赤い服の女性が大学院生。谷を氷河が造ったことに関する説明を、本物の氷河を背にして行う。あえて机上でできる教育を野外で行う

体験学習は記憶に残ると言われている。実際に、私も小学生のころを振り返ってみるとそうであった。それを踏まえて、ティートン・サイエンス・スクールの実習内容は、あえて机上でできることを野外で行っていると感じた。参加者の意欲を引き出し、記憶に定着させるには有効だと感じた。

最後に、豊かな自然に囲まれ充実した1ヶ月間となった。交換留学前には予期していなかったさまざまな学びや出会いがあった。多くの学びの場がそうであるように、決して楽しいことだけではない。知識量や言語の壁は高く、上手くいかないことも多々あった。しかし、学べることはそれ以上に多い。また、たくさんの方々がサポートして下さる恵まれた環境であった。同じ1ヶ月を日本で過ごしていたとしても、これだけの学びの質と量には決してならなかったと確信している。渡米前、私は環境教育が主専攻でないことに不安があったが、実際にアメリカに行ってみた今は、アメリカと日本では「環境教育」が違うことに気づかされた。環境教育には多様な観点があり、それは自分の専門分野が違うことがマイナスではなく、むしろプラスに作用させることも可能であることを気づかせてくれた。今後この経験から、自分の専門分野である「農業・園芸」分野を生かし、さらに環境教育に関われる人材になりたい。



さまざまな場面で大学院生と交流する機会がある。
日本食パーティで



アース・デーのイベントに参加し、
大学院生のブースを手伝った



キャンパスから見た夕焼け空



ティトン山脈と夕暮れ。夕方の野生動物観察会の際に行ったスネーク・リバーの川岸で

4. 謝辞

大妻女子大学家政学部ライフデザイン学科教授、安藤百福センター センター長・岡島成行様、安藤百福センター事務局長・山田俊行様、小島真一様、公益財団法人 安藤スポーツ 食文化振興財団事務局・荒金善一様、千葉大学大学院園芸学研究科・安藤昭和教授、千葉大学大学院人文社会科学研究科・松野弘教授、Teton Science School の皆様、特に職員 Jarod Waite 氏、Josh Kleyman 氏

この交換留学をするにあたりさまざまな形でサポートしていただきましたことに、この場を借りて深く感謝申し上げます。至らない点が多い私でしたが、皆様に支えていただいたことで、この留学を充実したものとすることができました。本当にありがとうございました。

特集 AII

アウトドアフォーラム 2011

「変貌するアウトドアマーケットと自然体験活動を考える」

2011 年 11 月 12、13 日

平成 23 年度子どもゆめ基金助成活動

主催 NPO 法人アウトドアライフデザイン機構

共催 安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

11 月 12 日（土）

主催者挨拶

中村 達（アウトドアライフデザイン開発機構代表理事）



このアウトドア・フォーラム 2011 は、10 年くらい前からやっております。基調講演の岡島先生とアウトドアライフデザイン開発機構の節田会長、そして私も山屋でございます。文部省の藤原さんにおだてられまして、このような研究会を作りまして、今日に至るまで約 15 回、2,500 人の参加があったものをしてきました。今日は講師に多彩な方々をお呼びしております。去年はスキー 100 年でございましたので、日本のスキー界の大御所と言いますか、全国のスキー連合を引っ張ってこられた丸山庄司先生を八方尾根からお呼びしました。さらに、環境省から長野の所長に来ていただいております。

長野県教育委員会からもおいでいただきました。また、北アルプスの著名な山小屋のひとつ、燕山荘の経営者である赤沼さんにもおいでいただきました。

明日は、北海道のトムラウシ山遭難事故の調査特別委員会座長の節田さんに事故調査の報告をいただき、最後にパネル・ディスカッションです。日本山岳ガイド協会専務理事の磯野剛太さん、カモシカスポーツ社長で登山家の高橋和之さん、安藤百福センター事務局長で、トヨタ白川郷自然学校から出向している山田俊行さん、それに私とでいろいろとお話をさせていただきます。非常に内容の濃い、いろいろなテーマが含まれたフォーラムになるかと思います。

基調講演 「日本の自然体験とアウトドアズの状況」

岡島 成行(大妻女子大学教授 安藤百福センター センター長)



みなさん、こんにちは。ご紹介いただきました岡島と申します。ここのセンター長とアウトドアライフデザイン開発機構の副会長もしておりますので、その関係からお話させていただくことになったかと思います。私は本日、全体のお話のなかの一番ベースになるようなところ、子供たちの自然体験などについてどうしたらいいか、ということをお話します。私はこの 20 年以上、子供たちをどうしたら自然のなかに連れて行けるだろうか、ということで活動を続けてきましたけれども、そのなかから今回のトピックスのようなものを、ちょっと拾ってお話させていただこうかと思っております。3

つの点です。まず新たな指導者制度の始動ということと、全国で 27 カ所ある青少年自然の家と青少年交流の家を統括している国立青少年教育振興機構が今大きく動き出そうとしているということ、そして、自然体験活動全体がいろいろな形で組み立てられていき、社会的なシステムの創設などが行われてくるでしょう、ということについてお話ししたいと思います。

野山で遊ぶことは大切ですが、昔は子供たちだけで山に行ったり、海に行ったり、川に行ったりして遊べたんですけども、この 30 年ぐらいの間にガキ大将というようなものがなくなり、子供から子供に伝わる伝承もなくなってきた。結局、今の子どもは大人が少し面倒をみないと、山や海に行けないような状況になっているのです。そのために自然学校ができてきた。皆さんの身の周りにも自然学校が幾つかあろうかと思います。その自然学校では、先生が必要になる。その先生は、ひと昔前までは見よう見まねでやっていたんですけども、事故をはじめさまざまな問題も含めて、やはりある程度系統立てたカリキュラムで指導者を育てなくてはならないだろうということで、徐々に指導制度ができてきた。

左の方がプロ制度で山岳ガイド協会などと同じような形です。こちらは公益社団法人日本環境教育フォーラム (JEEF) と安藤百福センターが共催しています。プロ指導者初級は、1 年間ほどかけます。このセンターで 2 か月の座学をし、6 か月の on the job training (OJT) をします。授業料は 30 万円です。座学は 2 カ月で大体 270 時間、これは大学院のマスター・コースと同じ時間数になっております。大学院で 2 年かけてするところを、2 カ月で詰め込む形です。その上にディレクターがあり、マネージャーがある。ディレクターはシニア指導者ですね。プロになって 10 年程度の経験を積んだ方が受講できます。また、マネージャーは組織を経営する人、自然学校の学校長や団体の長になる人のための資格です。まだ実験中のものもありますが、稼働して今年で 12 年目になりまして、かな

りのところでいろいろ活躍している人がいます。

右の方は青少年団体が主体となっており、いわゆるアマチュア、ボランティアの方々のための資格制度です。こちらは NPO 法人・自然体験活動推進協議会（CONE）が主催しています。CONE はボーイスカウト、ガールスカウト、野鳥の会、キャンプ協会など 280 ほどの団体が構成されています。リーダー、インストラクター、コーディネーターの 3 段階の資格があります。リーダーはガキ大将レベルで、日帰りで 10 人以内の人を連れていける資格で、インストラクターは宿泊を伴う指導ができる。コーディネーターはインストラクターやリーダーをまとめて、チームを組んで指導できる資格です。そしてトレーナーがあります。これはリーダー、インストラクター、コーディネーターを育てる人です。こういうシステムで、これも 10 年ほど稼働しておりまして、大体 2 万人ぐらいの人が指導者となって活躍しております。

これが実は今、独立行政法人・国立青少年教育推進機構と提携することになりまして、新しい形の指導者制度を作っています。機構と一緒にすることにより、大きなメリットが生まれます。機構は全国に 27 カ所の青少年体験施設、青少年交流の家と青少年自然の家を運営しています。年間 450 万人以上が利用していますので、国民に大きな影響を与えるでしょう。さらに、公立の体験施設にも声をかけていくつもりです。そうすると、今まで民間の指導者制度だったものがオールジャパンの指導者制度になっていく可能性があります。と同時に、プロ資格とアマ資格との間にカリキュラムの互換性を持たせる作業が進んでいます。例えば、トレーナーがプロ指導者になりたいとき、プロ養成のカリキュラムのうちすでにトレーナーとして取得している科目等については省略でき、正規の半分か 1/3 程度受講すれば良いということになります。実際にこの指導者とトレーナーの両方の資格を持っている人もおります。このような形で、15 年以上かかりましたけれども、ようやくここにきて、オールジャパンの自然体験活動の指導者制度というものができてきた、という状況になってきています。

次に、国立青少年機構の変化。一昨年秋の「仕分け」で「要らない」と言われたわけです。国がやる必要はない、民間か自治体に移管しなさい、と言われたのです。私ども自然体験をやっていく上では、国立は是が非でも残ってもらいたいんです。公立施設もどんどん減っているし、国立がなくなったら、子どもたちはどこ行くんですか。それで文部科学省の方でいろいろ考えて委員会を作って、私がワーキング・グループの委員長となってまとめた案があります。そのなかに指導者養成や研究センターを設置するという提案があり、それを受けて機構が動き出しています。研究センターは青少年の体験活動に関する調査および学術的な研究を行う目的で、昨年 4 月に機構内に設置されました。実はまだできたばかりの小さい組織で、研究員が 3 人、私がセンター長ということで 4 人ほどの小さなものですが、これが機構のなかにできました。いずれ大きくして、日本を代表するアウトドアおよび自然体験の研究所にしたいという目標があります。もう一点は施設の数の問題です。今 27 あるが、全部必要かどうかということですね。恐らく 10 年ぐらいかけて、国

が主体となって運営する所と民間や自治体に任せようという所が混在する形態になるかもしれない。そして、将来的にはブロック別に 10 校ぐらい規模の大きな国立を残して、それが周辺の公立の少年自然の家や民間のセンターとなって国公立や民間をまとめ、地域のリーダーとしての役割を果たしていくという案も先の文部科学省の改革案に掲載されています。

次に、自然体験活動を巡るものがかなり大きく動いているということなのですが、法律を作ってもらおうと思って今、努力しております。これは「自然体験活動推進法」という名称で、国家が国民の自然体験を支援するっていうことを、きちんと法律で位置付けて欲しいんです。法律のあるなしではいろんなところで変わってくる。これは今、文部科学省と一緒に頑張ってなんとか議員立法をしていただこうと頑張っています。幸いなことに、官房長官の藤村修さんが前の自然体験活動議員連盟の会長なんです。今、総務大臣の川端さんがそのあとの会長さんです。そのほか閣僚のなかからも議員連盟の方がいらっしゃるので、なんとかこれを早めに作っていただいて、弾みをつけるようにしたいという活動を今、一生懸命しております。

アメリカなどでもさまざまな法律がありまして、間接的に民間の自然体験活動を支援する仕組みが整っているわけです。我が国には、自然体験活動なんてそんなものは遊びだろうし、税金の方が大事だというような雰囲気はまだ残っているし、親は塾には金を出すけれども、なかなか外遊びには理解がないというような状況があるかと思いますが、そういう問題も、いろんな意味で法律の助けが必要だろうと思っております。

それからもうひとつ、公立自然体験施設の民営化の流れ。これは先ほど申し上げましたけど、今、県立など地方自治体で運営している少年自然の家、青年の家がどんどん指定管理に入っています。ところが、給食の会社やビルのメンテナンスの会社が指定管理を受けて、自然体験施設の運営を始めている。しかし、運営内容が悪い。指導者の確保や安全管理がしっかりしていない。去年、静岡県浜松市の三ヶ日で、ボートが転覆して子どもさんが亡くなった事件がありましたけど、そういった事件が幾つか出てくると、自然体験活動自体をもうしない方がいいんだ、ということになりかねないんです。現在は、国公立の体験施設は学校の先生方が出向して運営しています。これが民営化になると、今度は給食会社が指導者を用意しなくてはいけないんですね。ですから、今は先生が主体ですので一定のレベルが維持されているんですが、民営化のときにレベルがかなり下がる危険性がある。国公立が民営化していくとなると、その指導者をどうやって用意するのだ、という課題が出てくる。このままでは指導者不足になり、資格や指導力がない若者が臨時で入って、子ども相手に遊ばせている場合も出てくるでしょう。非常に危険なわけです。ですから、自然体験施設の指導者の養成が急務なのです。今まで、自然体験組織などに就職しても金にならない、食っていけない、と言われてきましたが、これからは国公立の民営化だけで 2,000 人ぐらいの指導者が必要となる可能性があります。今、とてもそんなオーダーでは用意できないですね。逆に言いますと、そういうことを目指す若者は、これからは就職

口もきちんとできる可能性があるわけなんです。

そして、最後に社会的システムの構築ということですね。これは例えば、旅行を、観光をもっと増やそうというような場合でも、休みの日が重なっては駄目だろうから、休みをずらそうとか、いろいろ社会のシステムを変えていかないといけない部分がある。自然体験活動を推進するためには、指導者をきちんと育てるシステムがあり、その受け入れ先の施設も一定のレベルで整っていることが求められます。それから国民が誰もが「安く、安全に、楽しめる」というような社会的なシステムが動き出さない限り、なかなか進んでいきません。例えばフランスの場合などは、子どもたちは夏休みの前に3週間ほど、学校単位で田舎に行きますね。田舎に行くのに指導者も要るし、費用もかかる。でも、全員行くんです。それが終わったあと、今度は家族でバカンスに出かけるわけですから、フランスの子どもたちは2カ月近く、夏はゆっくりと過ごす。塾なんか行きませんね。学校単位の3週間程度の田舎暮らしは、年度末に確定申告で親に返ってくる仕組みになっております。それは所得のある人は返ってこないけど、所得のない人はちゃんと返ってくるわけですから、皆子どもたちを田舎に行かせてあげられる。それも社会的システムですね。そういったものをある程度整えないと、今のままでいきますと、皆テレビゲームをするだけになってしまう。

最後にひと言。本当を言えば、昔のように子どもたちだけで自然に野山で遊べるのが一番いいわけです。大人が手出ししなくても、それがちゃんとできていればいいんですけど、残念ながら高度成長期以降の我が国ではそれができなくなっている。今、我々もこういう作業をしているが、理想を言えばこれが20年、30年経って、子どもたちだけで野山で遊べるようになれば、こうした制度はなくてもいいんだ、というような考えを持っております。日本の将来のことを考えると、ただただ机にかじりついている子どもだけでは、国はもたない。今度の大震災でも明らかです。偉い人ほど頼りなかったですね。そういうものは明確なわけですので、小さいころから危機管理の意識を持ち、自分のことは自分でする、いざとなったら体を張ってなんとでもする、というような子どもたちを育てないといけないだろうと思っておりますので、ぜひとも皆さん、我々の流れと一緒に、応援していただければと思います。

どうも長い時間、ありがとうございました。

記念講演 「スキー100年の変貌」

丸山 庄司（日本スキー発祥 100 周年委員会会長）



ご紹介いただきました丸山と申します。約 40 分という時間をいただいておりますので、そのなかで少し日本のスキーの変遷ってということをお話させていただきたいと思います。それに引き続きまして、それに対する私の思い入れなども少し話せれば、と思っております。

ちょっとお伺いしますけれども、スキーをしたことのある人、ちょっと手をあげていただければありがたい。はい、ありがとうございます。ほとんどの皆さんがスキーをやったので、うれしいと同時に少し話しやすくなりました。

今、ご紹介いただきましたけれども、スキー100周年委員会というのはどんな組織かということでございますけれども、スキー場には皆さんご存じのようにスキー場とリフト会社があり、それから全日本スキー連盟と日本職業スキー教師協会というのがあります。それとスキーとかウェアとかいろいろな用品、用具を扱っている日本スキー振興協会があります。その場所、サービス、物、この3つの人たちの全国組織と、長野、新潟、北海道、山形、群馬、富山など8県が入っています。そのほかには、スキー発祥の地である新潟県上越市をはじめ市町村も入りまして、日本スキー100周年委員会というのを作ったんです。去年、東京都のお台場でいろいろなイベントをしたり、各地区でいろんな100年のお祝いをしています。このマークがその100周年委員会のシンボルマークでございます。

さて、スキーの発祥ということですが、皆さんのお手元にある、ちょっと小さな冊子「日本のスキー100年」を基に話を進めていきたいと思っております。世界のスキーが生まれたのはノルウェーです。ノルウェーは皆さんご存じのように、森と湖に囲まれた丘陵地帯の緩やかな所でございますけれども、中央ヨーロッパに行きますと、スイス、ドイツ、イタリア、オーストリア、フランスなど、皆山岳地帯で急峻な斜面です。そこで、ノルウェーのようなスキーだと山岳地帯は滑れないということで、オーストリアのツダルスキーという人が、山岳地帯でも滑れる短いスキーと、グラグラしないしっかりした金具を発明しました。山岳でも回れるようにスキーの滑り方と道具も発明し、発表したわけです。そういうことが日本にも伝わってきた。レルヒ少佐が日本の軍事視察を兼ねて高田の連隊に来るということを聞いて、手ぐすねを引いて待っていたのが長岡中将以下幹部たちでした。日本にもそれまでにスキーは入っていましたが、どうしても宝の持ち腐れみたいだった。まっすぐ滑ることができるんですが、回り方がどうも分からない。レルヒさんが来て回り方を一本杖で教えてくれ、ああ、こうやってやれば回れるんだなっていうことが分かった。リリエンフェルト・スキーだったですね。それが今から100年前の1月12

日、なんと 1910（明治 43）年の暮れに日本に来て、1 月 12 日にはもうレルヒさんがスキーの講習会を始めたわけです。レルヒさんも日本に行くのならスキーも教えようと、そういう意欲が大分あったようで、本来の仕事よりはスキー講習に没頭したという記録が残っておりまして、1 月 12 日から 2 カ月間になんと 37 日間、スキーの講習をやった。そして軍隊だけでなく、民間にも女性にも学校の先生、生徒にも皆に教えることによって、一気に日本にスキーが広まったわけです。翌年は旭川に赴任しまして、旭川でもまた同じような活動をした。ですから、北海道は今年がスキー発祥 100 周年だと言っているわけですね。そんなふうにレルヒさんの影響が大きくて、私どもはレルヒさんの「そのスキーを履きなさい」と言った、その 1 月 12 日を記念して「スキーの日」を決めたわけです。

そんな経緯がありまして、レルヒさんからスキーを教わって 12 年、1923（大正 12）年に初めて全日本スキー選手権大会が開かれたわけですね。2 年後にようやく全日本スキー連盟が設立される。北海道の小樽で全日本選手権が開かれて 2 年後ですから、事務所は北海道にするか東京にするかで大もめにもめて、1 日目は会議で結論出なくて、翌日によりやく東京に決まったという記録が残っております。

そして、1928（昭和 3）年には初めて日本がサンモリッツのオリンピックに出場いたしました。そんななかで 1930（昭和 5）年、玉川学園の小原学長がハンネス・シュナイダーを招待しました。小原学長さんっていう人は非常に素晴らしい教育者で、子どもたちに習わせるなら、ただスキーを習うだけではなく「どういう人から習いたいか」って子どもたちに聞いたら、「世界一上手な人に習いたい」という答えだった。世界一上手な人っていうとハンネス・シュナイダーしかいないと思って電話したら、それが来るってことになって、大変な金額を学校で出しながら、子どもに教えるだけではなく、全国のスキー連盟などへ来て特別講師をやった。この人の影響が非常に大きいわけでございます。

山岳スキーはどうなったんだろうということですが、例えば、私の住んでいる白馬村は、白馬岳の麓ですからガイドが非常に多く、当時は山へ登るときには、特に大学の山岳部は皆、地元のガイドと一緒に連れて登山をした。ちょうどヒマラヤへ行って現地でシェルパやポーターを雇うような、そういう時代でありました。ですから、ガイドも優秀なガイドがだんだん揃っていったんです。しかし、スキーが高田に入って 13 年目になったときでも、スキーは使ってなかったですね。3 月、4 月の雪山のときでも、最初は輪かんで行って、アイスバーンになったらアイゼンやピッケルに替える。帰りもアイゼンから途中で輪かんに履き替えて麓まで来る。そういう登山をしていたんですが、連れていってもらった学生たちが、スキーを持ってくるようになったんですね。それで、アイゼンから輪かんに履き替えたら、学生たちはサーッと滑って、ガイドを置いて先に帰ってきちゃったという、そういう笑話がありまして、これではいけないと、スキーを教わった。スキーができては冬場のガイドはできないぞ、ということで、最初に正式に講習を開いたのが、ガイド組合主催のガイドを対象にしたスキー講習です。

そんななかで、競技中心だった全日本スキー連盟でも、一般スキーの方ももう少ししっ

かりやんなくちゃいけないということで、初めて 1939（昭和 14）年、第 1 回の指導員の検定とバッジテストがなされたわけです。

そのあとといよいよ戦争が激化しまして、昭和 16 年から 20 年にかけては、スキーとか山というような言葉は慎まなくてはいけないようなムードになりまして、終戦を迎えたわけです。終戦の翌年には志賀高原と北海道の藻岩山で、進駐軍がリフトを造った。草津ではその次の年に、木柱ですけどリフトを架けて、上りはリフトで、下りは滑る。その繰り返しができるような、現在のスキー場の初歩的なもんですけれども、そういうふうになってきた。それで一般スキーヤーも増えてきたなかで、国民体育大会が終戦の翌年に開かれましたけれども、スキーはまだ国民体育大会のスキー競技会を開くだけの状況ではなかった。野沢温泉で開いたのが第 3 回国民体育大会、事実上スキーの第 1 回大会になる。その辺からだんだんとスキーが目に見えた形で普及してまいりました。

1955（昭和 30）年、インター・スキーがフランスで開かれまして、野沢温泉の片桐匡さんと北海道の橋本茂生さん、私たちの競技スキーの大先輩ですが、このふたりが参加しました。インター・スキーというのは、国際教育者連盟、スキー教育者連盟といいまして、一般スキーのことについて技術だとか教授法とか、いろんなことを各国の情報を出し合って研究するという、一般スキーのシンポジウムの主催者の団体でありまして、そこへふたりが初めて顔を出した。

そのころ、猪谷千春さんが銀メダルを取って日本は盛り上がったのです。また、そのあとトニー・ザイラーさんとかクルッケン・ハウザーさんが来日した。振り返ってみますと、日本はレルヒさんから始まってハンネス・シュナイダー、トニー・ザイラー、クルッケン・ハウザーと、オーストリアの影響を非常に受けて歩んできております。

1964（昭和 39）年には、第 1 回のデモンストレーター選考会が始まり、その翌年には第 7 回のインター・スキーがオーストリアで開かれました。そのあと蔵王とか野沢でも開かれておりますけど、そのときに私もデモということで参加をさせていただきました。当時、世界はスキーの技術論争が非常に激しいときで、オーストリアの外向・外傾のスキーか、フランスのスキーかで、大もめにもめている時期でした。いっぽう日本は、それほどの混乱もなく、オーストリア一本でした。現在、世界のスキーは、オーストリアのスキーの流れを汲んだ技術で統一されてきております。

1968（昭和 43）年、スキー復活の兆しのなかで日本職業スキー教師協会が誕生いたしました。そして、72（昭和 47）年には皆さんご存じの札幌オリンピックがあったわけですが、札幌オリンピックでは言わずと知れたジャンプで、金銀銅のメダルを独占して大いに日本中が盛り上がったときであります。また、そのころにはスキー場の方でも一般スキーが非常に盛んになってきまして、スキー場開発が盛んになってきました。スキー場開発では白馬なんか典型的ですけれども、そこに住んでいて草刈り場でスキーやったのを、今度は自分の家の近くにスキー場を造った。そして、そこへリフトを架けた、ゴンドラを架けた、そういうように自然発生的にどんどんと拡大された。それと同時に、僻地を選んでそ

こに資本を投下して、計画的にそこへスキー場を造った。典型的なのは苗場のスキー場です。そういうふうには、大きな2つの流れになってまいりました。そしてその後、人工雪の造雪機が非常に発達しまして、スキー場は都会から近い所に、例えば、長野県の野辺山とか山梨県の富士山麓だとか、スケールは小さいですけれどもスキー場が少しできてきた。そういうような流れが出てまいりました。

1987（昭和62）年、『私をスキーに連れてって』という映画ができましたけど、これもひとつの大きな弾みになりました。またリゾート法というのが施行されました。これも大きな弾みになって、いろんな企業投資がスキー場造りとゴルフ場造りに集中しました。一気に日本中にスキー場やゴルフ場がたふさぐ時代でもあります。

1989年にアメリカのベイルで世界選手権がありまして、女子で初めて、猪谷さんに次いで川端絵美さんがダウンヒルで5位になりました。それもメダルまでにコンマ3の差でした。この間のイタリアのオリンピックのときに、皆川賢太郎がコンマ3で負けたように、もう3、40cm早ければメダルに届いた。ちょうどそのとき、私は日本チームの監督で行っていましたので、ちょっと細かく話しますと、ベイルの女子滑降のゴールは最後の斜面が大きく、500m ぐらいの急斜面で、それからやっとゴールになるんです。その下には、ゴールする選手に一番近い所に各チームの監督やコーチが入る広場があって、私ももちろんそこで待っていたんですが、もう最後の急斜面に姿が見えたときには、これはトップになるかなと思ったぐらいに早く来たんですが、欲目なんですね。そのあとの500mの急斜面に来るのが遅くて、まっすぐ滑っているんだけど遅い感じを受けたんです。結果的にはコンマの差で5位。ですけれども、そのときの興奮は、会場全体が日本の女の子が5位に入賞したっていうので、「絵美、絵美」でもう大騒ぎでした。「良かったな」って握手して横を見たら、そこに加山雄三さんがいまして、「よくここに入れましたね」って言ったら「なんだか知らないけど、日本人だったからいいんじゃないの」って言うぐらい盛り上がりました。そんな思い出がございます。その後、荻原健司だとか岡部哲也とか木村公宣たちがよく活躍をしてくれました。

いっぽう、スキー場の方はどんどんスキーヤーが増えてきて非常に景気いいものですから、ちょっとそれに乗り過ぎたきらいがありました。私もそのひとりです。機能性重視になって、皆バイキング形式にしたり、部屋は相部屋でもいいじゃないかとか、スキーヤーのウェアも毎年新しくしないと時代遅れのような、そんな空気が生まれました。1991（平成3）年のときですけども、そのとき世界で売れているスキーの台数が300万台、そのうちなんと200万台が日本で売れちゃって、外国の人たちは「どうして日本でそんなに売れるんだ」ということまで言われた。しかし、世界の3分の2のスキーが日本だけで売れちゃって、「こんなことは普通じゃないから、いつかしっぺ返しがかかるよ」って、そんな話を私たちのなかではしていたんですが、まだ現実としては感じていなかったです。

平成5年がピークで、やがてスキー離れがだんだん始まるわけですから、そのような状況下でスノーボードが出現してきました。スキーが減る分だけスノーボードが伸びて、

ある程度そういう点では全体のバランスが取れたようなところもありました。もうひとつは 1998 年の長野オリンピック。これでおのずと盛り上がってきましたので、まだそれほど肌では感じなかったんですが、1999 年、オリンピックの翌年の年末年始はお客さんがいっぱい来ましたが、年始が終わったらぴたっとスキー場に来なくなった。そしたら、志賀高原にいる杉山進さんから電話がかかってきて、「丸さん、うちの方にはスキーヤーがいなくなったんだけど、そっちはどう？」「いや、こっちもそうなんだよ」「どうしたんだろうな」って。それが目の前で見た現実の私たちの姿でございました。

それからいよいよ今の状況にだんだん近づいてくるわけです。バブルの崩壊もありまして、それと相まってスキー離れが加速してきたわけです。そんななかでカービング・スキーがありました。メーカーの方でだんだん改良して、今は非常に滑りやすい回しやすいスキーに変わってきました。また、最近はオフピステが注目されて、パッドスキーもだんだん出てくるようになりました。そして、現在の状況はというと、ピーク時の 40% くらいの人口になってきている。それはある意味では「通常の形ではないだろうか」って言う人もいます。

そんな歴史をたどって 100 年きたんですが、今、100 周年委員会としては「100 年ありがとう、そしてこれからの 100 年」というテーマのなかで活動していこうと、現在も進めております。その活動のなかで、現在の私の考えや想いを少し話してみたいと思います。

スキー場はひと口で言いますと、昔の山岳スキーかゲレンデ・スキーかと言っていたころと違いまして、今はどこのスキー場も皆コンビニエンス化して、皆同じような形のものではないだろうか。もうちょっとスキー場ごとに特色があっていいんじゃないか、と感じております。それともうひとつは、違ったスキーを楽しんだり、スノーボードを楽しむこと。特にスキーで遊ぶ人たちの、趣味の多様化といいますか、楽しみ方がいろいろです。昔は「スキーやるよ」「テニスやるよ」でした。ところが、「いや、夏はテニス、冬はスキーだけど、今はもうスキーの方がいいから、テニスやめて体鍛えて貯金してスキー一本だ」って言う人もいます。

ゴルフを例にとりますと、練習場ではしっかり練習をします。そして、ある程度実績が出たら今度はゴルフ場へ行って 18 ホール回る。そのなかでハンディが付いたりするんですが、スキー場はリフト 2、3 分で、標高差 200 か 300m の規模のスキー場です。標高差 1,000m 前後の所も皆同じ。それをうまく使い分けてくれればいいんですけど、標高差の小さい所でスキーをやって、スキーってのはこんなもんかって満足して、そこで卒業したようなつもりになって、次にほかの所へ行っているんじゃないかと、そんな思いもしないわけではありません。その辺がどうも、いわゆるアウトドア・スポーツではなくなってくる。アウトドアには変わりないんですけど、スケールの大きなものになってきているような気がしています。日本のような形態のスキー場は、ヨーロッパにもアメリカにも、私の記憶ではありません。ただ、韓国にはあります。中国にもあります。中国は今 300 くらいのスキー場があって、300 万人のスキーヤーがいるというのを 5、6 年前に知りまし

た。今はもっと増えていると思います。少なくともアジア以外にはそういうスキー場はないという状況のなかで、今後どうすればいいのか。私は、やはりスキーはアウトドア・スポーツであり、大自然のなかで楽しむのがスキーであると思います。そういうことをもう一度皆で考えたり、教えたり、誘導したりしていかななくてはいけないのではないかな、と感じています。

いずれにしても、スキーの技術を習って上手になればなるほど、行動半径の広いスキーの楽しみ方、スノーボードの楽しみ方ができる。それは、ロングコースをスキー場のなかで滑ることもそうですし、オフピステへ出ることもそうですし、また、ツアーとか春スキーとか山岳スキーツアーとか、そういうことを盛んにしていく必要があるのではないかと考えます。スケールの大きいスキーを、大きな目標のなかで教えてあげたいと、そんなふうに思っております。

幸いなことに今年の6月14日に、観光庁がスポーツ・ツーリズムの推進連絡協議会というのを立ち上げまして、今年、いろんな意見集約をしました。私もその一員として出席させてもらったんですが、ひと言で言いますと観光地、いわゆる名所旧跡、神社仏閣とかあるんですけども、いろんな観光地とスポーツと結びつけた旅行をするべきだ、ということです。そんななかで休日の分散化という話も出てきたわけですけども、国も積極的になっている。スポーツ基本法が何十年ぶりかで改定されまして、そして、スポーツは行うのは国民の権利である、というふうに法律で定めたことは非常に良いことで、一歩前進だなと思います。国もそういうことなら、私たち民間も頑張っていかななくてはいけないな、と感じております。ところで、「見るスポーツ」と「するスポーツ」でスポーツ・ツーリズムを推進したいということでしたが、いろいろ研究したりアンケートを取りますと、「見るスポーツ」は相撲とかラグビーですけど、「するスポーツ」はやはり雪の上のスポーツがダントツだったですね。スキーやボードといった雪遊びが、60%から80%くらいです。ダントツに雪の上のスポーツというのは関心がある。それはインバウンドの海外の方でアンケートを取っても、同じ結果が出ております。そういう意味で、これからその辺のところを私たちは考えていかなくちやいけないなと、そんなふうに思っております。

私は去年、喜寿が終わりました。ですから、思うようにスピードアップしてどんどん滑ることはできませんけれども、こんな滑り方をすれば、80歳になっても90歳になってもゲレンデのなかでは滑れますよという、そのへんのところを書いたことがあります。その年齢にお似合いの方もいらっしゃると思いますので、ご利用いただければと思います。ちょうど時間になりましたので、これで私の話を終わります。

どうもありがとうございました。

講演(1) 「自然体験活動を再考する」

藤原 一成（文部科学省スポーツ・青少年局青少年教育官）



こんにちは。アウトドアの関係の方とお聞きしたんですけど、こんにちは。教育の初めは挨拶からです。これは冗談ですけども。ところで、本当にいい眺めですよ。皆さん、今日ここにいる場合じゃないですよ、本当に。さっきも 15 分ぐらいこのデッキで、ずっと何を話そうかなと考えていたんですが、山の綺麗さのあまり何も浮かばないで、ぼお一つとしてましたけども、とても幸せな時間でした。ぜひ子どもたちにもこんな気持ちのいい時間を過ごさせてあげたいものだなあと思いながら、特に福島の子供どもたちにこういう

風景を味わわせてあげたいなあ、と思いながら見ておりました。

いつもなんの資料もなく、ただ 30 分ぐらいだあっと話して終わるんですが、今日は資料を皆さんにお配りしてあります。このリフレッシュ・キャンプ参加者アンケート。これはなんのために持って来たかという、岡島さんの名誉のために持って来たんです、これ。一番下のクレジット、どこで出したかっていうのを見て下さい。独立行政法人・国立青少年教育振興機構です。でも、事業仕分けでちょっと有名になりましたですね。そこの理事をされているのが岡島さん。さらにその下に小さく書いてありますが、青少年教育研究センターです。その研究センターのセンター長も岡島さん。つまりこれは岡島さんが出したんです。これ何かって言うと、福島の子どもたちは夏休みに外遊びもできない、本当に自然体験なんかできないっていう子どもたちを、機構と文科省が招待した。4,000 人ぐらいですが、その結果のアンケートなんです。当たり前のことが出ています。要するに、このキャンプに参加する前は、福島の子どもたちはほとんど引きこもっていた。学校の先生からも「外で遊ぶな」と言われ、体育の授業以外では外遊びはできない。家に帰ればお母さんから「絶対外で遊ぶな」って言われてるなかで、誰が外で遊べるかということですが、それが数字になってちゃんと現れてきたっていうのがひとつ。

それと自然のなかの力、機構の指導していただいた職員の皆さんのおかげだと思いますが、子どもたちは非常に輝いていました。私も大臣も、それから政務官、幹部等々、何度か行って来たんですけども、子供の顔が違います。そして、そういうニーズはまだある。こういったことは今の時代、逆に非常に必要になってきている。

今日、「自然体験を再考する」っていうんですけども、再考しません。もう 1 回確認したいだけなんです。自然体験活動は教育ではありません。もう 1 回言います。自然体験活動は活動であって、教育ではありません。それを教育としてアレンジメントするならば、教育になります。ただの活動、アクティビティで終わるならそれで終わります。今、子ど

もたちに必要なのは両方です。活動に誘う人間もいない。昔であればPTAがあったり、子ども会があったりしましたが、今もう子ども会なんか、東京では瀕死の状態です。いったい誰が子どもたちにアウトドアへの道を誘うんでしょうか。学校？ できません。しかし、この自然体験ってというのは教育的に見ると、ちょっと前に開設された教育基本法や学校教育法のなかに、ちゃんと自然体験活動って言葉が法律の条文のなかに出てきているんです。出てきているけども、全体として「ゆとり教育」の見直しだなんだって言われるなかで、学校の方でやり切れているかっていったら、皆さんご案内のとおり、やってないんです。だから、その部分を社会教育で補おうとして、その青少年教育部分を国として担うのが国立青少年教育振興機構、国立青少年教育施設です。それを「潰せ」と言っている。私、皆さんにアジリに来たんじゃないんです。私、本当に心から怒っているんです。県立とか市立とか町立とかそういう青少年教育施設は、国が補助金出してどんどん作ったんですが、もうすごい老朽化が進んでいて、どんどんやめてます。さらに今までは県の職員や学校の先生方が派遣され、一生懸命指導されていました。今、指定管理者になっています。指定管理者が悪いとは言いませんが、きちんとした指導に裏付けられた管理者がいない限り、安かろう悪かろうになるに決まっています。

子どもの命守るんですよね。まずそこから始まって、そして、自然の素晴らしさを味わってもらわないじゃないですか。その活動に、今このご時世にあって、本当は金つぎ込んでいかにくちやいけない時期なのに、逆にそっちから切り始めるっていう国の良識っていうのは、いったいなんだっていうことです。一番大切な教育は、環境教育かもしれません。その一番のベースは何かというと、小さいうちから自然に誘うことじゃないですか。じゃあ、誰がやるんですか。皆さんがやるんです。子どもゆめ基金使ってください。国立青少年教育振興機構のこのホームページで、子どもゆめ基金って開いて下さい。今、募集中です。例えば、福島の子どもたちを山に登らせたいとか、何かしたいという活動の少しの手助けは、この機構の子どもゆめ基金を使えばできます。

今の日本、言葉で言わないと分からない人ばかりになりましたよ。だから言いたい。子どもたちを自然体験活動に誘い、さらに教育として彼らに何かを残していこうという、この一見地味に見えるこういう活動が、あるいは教育活動が一番大切なんじゃないですか、本当は。

「昔は良かったね」「ガキ大将がいて、そこら辺りで遊べて」-----そんな時代はもう懐古趣味以外の何物でもなくて、もうないんです。誰がつなぐんですか。子どもと自然を。我々しかないんですよ。その立場、立場でできることをきちんとやるということ以外、方法はないです。

で、ちょっと冷静に。学校教育のなかに自然体験活動で入っていくためには、やっぱり我々サイド、我々って社会的サイドなんですけども、学校外にいる者たちの、それから自然体験をやってる方々のある種努力不足とは言いませんが、学校という場を知らなさ過ぎるんじゃないかな、という気がします。ひとつは、昔から言われているんですけども学校

教育で、もし自然体験をやるとしたら当然、学校教育でやります。そうした場合に、ただ山を登ってくるという活動で終わらせるというのは困る。やっぱり教科の活動、例えば理科でも社会でもなんでもいいんですけども、教科と少しはリンクした形のなかでのプログラム展開を考えるってことが必要です。けれどもなかなか定着しない。

これがアメリカあたりだと、屋外で化石掘りなんかをして、社会の授業にするといったことは普通にしています。川が流れている所でベクトルの勉強みたいなことです。これはなかなか日本では、これだけ自然が豊かにあふれているのに、できない。やっぱり日本の学校教育側にもちょっと偏見があって、教室のなかで授業をしなければいけない。でも、私の出身地の秋田は一応、学力全国一なんです。秋田の場合、なぜ全国一かっていったら簡単で、学校の先生と子どもの数を比べると、学校の先生の方が多いんです。秋田県教育委員会が汗水垂らして連日連夜、文科省に日参し、そういう定員を確保した。彼らは一番簡単なことを分かっている。教育は人であり、そして頭数がいなければ攻めていけないんだってことです。自然体験活動も学校教育で攻めろとは言いませんけど、パートナーですから、お互いの場を知るべきだと思うんです。

そのなかで最近、残念だなあと思ったことが一点あって、それを話して終わりたいと思います。今、シニアの空前の登山ブームですが、皆さん山に戻り始めたわけですね。今まで一線ですっと働きづくめであった方が定年退職を迎えられて、少し時間に余裕ができたときに山に向かわれる方がかなりいる。で、この間です。大学の同級会ってというのがあったんですが、びっくりしました。一様に言うのは「これから山登りしたい」って言うんです。へえ一つと思って。僕、全然したくない。ところが、今の子どもたちはどうか。20代でもいい。彼らがシニアになったときに、山へ行けますか。ひょっとしたら、ニンテンドーなんかで遊んでいるかもしれないですね。それが残念です。

つまり、我々の世代までは学校で山登ったりさせてもらっていたんで、あそこが「ああ、気持ちのいい場所だ」とか、そういうことがインプットされてるんですけども、今はもう子どもたちが山に登っていない。なぜかと言うと、若い先生方が山に連れて行けない。登山の素晴らしさっていうものを、若い先生方ももう分からない。さらに、行くと当然リスクがありますから、「事故起こさないで、無事帰ってきてね」と言うだけです。それは今の保護者がそういう意識だからです。しかし、山登りっていうのは、登山っていうのは、私はただのスポーツではないと思っている。

まずひとつは、あの頂まで行くんだという目的意識。そして、ほぼ苦しいですよ。私がいたところは岩手山っていう 2,000m ちょっとの山なんですけども、それでも子どもたちは結構苦しい。でも、それを乗り越えていったときに喜びがあって、ぱっと視界が開けたときには、やっぱり彼らも何かを感じるものがちゃんとあるんですよ。さらに言えば、それが頂上まで行って下山したときに、やっとその達成感、成就感っていうのが、誰かが導き示してやった達成感を味わうことができるんです。今の子供たちには、一番大切なことです。それも自分のこの2本の足で、この体でやり通したっていう体験が一番大切です。

スキーになると、いや、僕はスキーをひいきにしてるわけでもなく、スキーは私が見ている指導者たちから言うと、どちらかというとスキルベースになってしまうので「はい、なんとかができました」「どっから降りてこれました」とかってことになるので、目標的に何がどうなのっていうのを常々、僕は聞きたかった。子どもたちに教育としてやる場合に、スキーっていうのはなんですか、っていうことです。スキーのプロになりたいわけじゃないですよ。ところが、登山っていう活動は、何回どんな子どもを連れてっても、変わんないのもいましたけども、降りてくるとまあ本当にいい顔になって

輝くんですよ。だから、僕はやっぱり登山が減ってきているっていうのは、すごく心配です。今までみたいにガンガン登ればいいのかではなくて、今の子どもに合わせた教育登山っていうのは、いったいどういう手法が必要で、今の子どもたちの目線に合わせたら何が留意点なのか、っていうことを明確にしているところはありません。辛うじて国立青少年教育施設は、登山をかなり重要なプログラムと思っていますから、学校に対しては、こういう注意が必要です、っていうことはやっています。そこをもっと皆様方みたいな人に応援して欲しいし、一緒にやっていただきたいんです。国立のあそこの専門職員たちは、ほぼ教員です。ですから、山のプロでもなんでもないんですね。まあ、その割にはよくやっているなって感じはするんですけども、そういったところがもっと手を結べば、きちっとした教育ができます。

教育は先生だけではできないっていうのは、もう分かってきました。地域と一緒にしなければできないっていうのも、分かってきました。教育こそ、実はパートナー・シップが大切な活動なんです。そして、子どもたちにその背中を見せたいんです。君たちを引っ張っていつてるのは大人だということを。きちっとスクラム組んでやってるんだっていうところを見せたいんです。

こういう活動を切るべきですか。もう1回言います。仕分けしちゃいけないんです。本当に効率だけでいいんですか。金勘定だけでいいんですか。そんな国じゃないはずですよ。大震災見て分かるじゃないですか。あれだけの国民性があるわけですよ。そういう良識をきちんと示せるようにしたい。そのためにも、やっぱり自然体験活動っていうのは心が広がるじゃないですか。

これで終わりますけど、金融教育を学校でされている。金融教育。「株の買い方を学校でやれ」って言った人がいたんです。皆さんがよくご存じの政治家の方ですよ。まともですか、その感覚。汗水垂らさないで金を儲けるなんていうことのやり方を、教育で教えようなんぞは、こちらはまっぴらごめんです。「自分の2本の足で山登ってこい」「そこで何か学んでこい」っていうんだったら、いくらでも教育でやります。そういう覚悟で我々は教育をやりたいと思っています。皆さんと一緒にやりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

講演(2) 「国立公園（環境保全）とアウトドア・アクティビティ」

安田 直人（環境省長野県自然環境事務所所長）



みなさん、こんにちは。長野県自然環境事務所の安田です。本日はお招きいただきましてありがとうございます。国立公園はどういう所なのかっていうこと、そして、そのなかで今、どんな活動が行われているのか、どんな課題があるのか、といったようなことをお話ししたいと思っています。

国立公園っていうと、いろいろな規制があったり、堅いイメージになってしまうと思うんですけども、国立公園は利用も目的になっています。ですから、一番規制が厳しい特別保護地区という所でも、利用することが前提になっています。

私はうまく使うことがうまく残すことだと思っていますので、ぜひ適正な形で利用していただければな、と思っています。

我が国の自然公園の面積は、国土面積に対して 14.3%、国立公園は 5.5%です。これは日本を代表するような風景地、あるいは自然環境が入っていますから、いろんな自然体験活動のフィールドとして活用されている、あるいは活用されるべき所がたくさんあるんです。現在 29 カ所ですが、国立公園の見直し作業をやっていて、さらに拡張が議論されているので、もう少し面積が増えるんじゃないかと思います。

最近では、キャニオニングとかラフティング、ドルフィン・スイミング、トレイル・ランニング、カヌー、カヤック、沢登り、スノーシューのトレッキングなどさまざまな活動が行われるようになってきています。しかし、今まで国立公園内で想定していたような利用展開や場所が使われるようになった。当地の冬山にいろんな人たちが入っていくとか、あるいはキャニオニングで今まで使っていなかったような河川が使われるとか、そういった利用者が増加してくる。利用する人たちも、多様な価値観を持った人たちが入ってきている。利用される場所が特定され、集中してしまう傾向がある。そうすると環境への負荷とか、あるいは尿尿の問題などが出てくるんです。また、海外からの利用者が増加してきている。日本の山を知らずに入ってきているような人たちも、結構見られたりする。そういうことを踏まえると、改めて国立公園の意味とか、その利用ルールというのを明確にしていくことが重要ではないかな、と思っています。

国立公園とは、日本の風景を代表する傑出した自然の風景であって、環境大臣が指定するものです。日本を代表する自然の風景地、日常では体験できない感動や喜び、安らぎを与える場であり、生物多様性の点の屋台骨であり、国民、地域社会にサービスを提供する存在です。風景地の保護であり、利用の増進を図る、生物の多様性の確保に寄与するという、この3つが大きな目的になっています。

日本の公園の特色は、国有地だけではなくて民有地もあり、いろんな土地が入ってきているということです。イギリスも一緒です。これに対し、アメリカとかカナダ、オーストラリアは公園の管理者が政府機関で、自分の財産として直轄管理しているんです。メリットを考えていくと、日本のような地域性の公園の場合は、土地の取得をする必要がないので、広大な地域が保全することができます。アメリカやカナダなど政府が持っている土地ですと、自分たちの思ったように規制ができる。また、日本の場合、里山といった二次的な自然環境、あるいは文化的な背景を持った所、宮島とか熊野大社といった所も国立公園になっています。文化的な側面を含めて、公園として指定していくことができるんですね。それに対してアメリカやカナダだと、自然が中心です。

デメリットとしては、日本は地域の同意を得て保護とか管理をしていく必要があるということです。アメリカ、カナダだとレンジャーがいて、直営管理をしている。

日本の自然公園制度では、管理者が利用のための計画と規制の計画というのを立てます。外面的に言うと、よく言われるように、核心的な部分を一番規制の強い特別保護地区に指定し、各種行為が否定されます。その周辺に1種から3種、これはだんだん1から3になるにつれて規制が緩やかになって、3種になると農林業なんかはほとんどのことができるようになります。さらにその周りに、バッファー・ゾーンみたいな概念として普通地域というのがあります。

特別保護地区ですと植生を傷つけたり、植えることも禁止されています。それから動物を捕まえること、動物を放すこと、焚き火、車や自転車の乗り入れとかいったことも規制されています。歩道や道は別です。そのほかの地域でも、工作物とか広告物といったものは規制対象になります。

いっぽう利用ですが、どのくらい人が利用しているかというと、国立公園全体で年間約3億5,000万人が利用しています。私が今いる長野県自然環境事務所は、長野県と富山県の自然環境を管轄しています。国立公園では中部山岳と上信越高原の2つ、日本を代表する山岳公園を管轄しています。利用者の数は上信越高原が3番目、中部山岳は15番目です。

自然公園法では、工作物などは規制対象になるんですけども、単に利用するという点については、法律的にはなかなか規制するのが困難な場合が多い。そこは利用する方々の意識に頼っているのが現状、というところもあります。例えば、上高地の梓川ですけれども、そこでカヌーをやったり、自転車に乗る、あるいはキャンプ場じゃない所にキャンプを張ったりする。こういう行為を規制するのは難しいですが、平成15年に利用調整地区という新しい枠組みができました。趣旨はオーバー・ユースを緩和することなんですけれども、特定の場所を指定して、そこに入る場合には認定証を受けなければならないことになり、総量規制、あるいは利用調整地区内での行為の規制というのを実施できるようになりました。一定の期間内については、立ち入りの認定を受けている場合を除いて、その区域内に入ってはいけないということです。ペットの持ち込みや野生動物に餌を与

えること、野生動物に影響を与えるような写真撮影とか、ゴミを捨てない、といったようなことが禁じられています。しかし、利用調整地区が指定されている地域はまだ2カ所です。奈良県の大台ヶ原と知床です。

もうひとつ、平成20年にエコ・ツーリズム推進法というのができました。エコ・ツーリズムを推進していくために市町村が中心になって協議会を作り、全体構想を作成します。それについて主務大臣の認定を受けてエコ・ツーリズムを推進し、ひいては地域の振興に役立てていこうというのが基本的な考え方です。

エコ・ツーリズムの本質というのは、ガイダンスとルールだと思っています。ガイダンスを磨くこと、これはその事業者の方々それぞれがスキルを磨いていただき、ツアーの価値を高める。また、関係者皆で共有できるルールを作って、資源を食い尽さないということです。そのためには、理論的なツアーの企画とかガイドの育成が重要ですし、これは各事業者がそれぞれの方々の努力でやっていただけるものです。専門家とか行政も、これについては協力していく必要があると思います。

エコ・ツーリズムを目指す社会というのは持続可能な社会で、環境と経済がうまく回るような状態です。事業者の立場からも資源を持続的に利用するために不可欠ですし、ふるさとの自然環境をいつまでも残していくのが望ましいということは、言うまでもありません。しっかりしたルールを作って、皆で合意しながらやっていくということが重要です。しかし、これがなかなか難しいんですけど。ルールがない今までの状況ですと、使った者勝ちという感じになってしまいます。

また国立公園に戻ります。行為自体を規制していくのはなかなか難しく、そのために新しい枠組みもできてきたという話をしました。ただその前に、地域の関係者の合意形成ができれば、地域で合意したルールを作っていくということが大事です。これについて2つほど紹介します。上高地と立山です。両方とも最近、冬の間に現場に入る人たちが増えてきています。そこで冬場のルールを作りました。

上高地は県道が冬の間、11月16日から通行止めになりますが、最近クラブ・ツーリズムのバスが釜トンネルの前に止まって、そこから集団で歩いて河童橋まで行ってくる、といったようなツアーが行われています。このため昨年、冬季利用のルールを関係者で作りました。入山届を確実に出す、自己責任の原則、トイレ、キャンプ場の指定、ゴミの持ち帰りといったのが大きな要素です。

立山の室堂は、秋でいうと10月いっぱいまで、春は4月10日から行けるようになるんですけども、これは本当に厳冬期と同じです。ホワイト・アウトや雪崩がいつ起こってもおかしくない状況です。昨年、残念なことに11月末にかなり大きな事故がありました。そんなこともあって、関係者、自治体だけではなく、山小屋とか交通関係者とか、警察にも入っていただいて地元の協議会を作って、ルールを作りました。冬山であることの自覚、雪崩等に関する注意、登山届の提出、火山ガスが出ている所への立ち入り禁止、ライチョウが冬を越しているような場所への立ち入り禁止、植生帯への踏み込み禁止などです。

最後にもうひとつ、ちょっと気になっているのがトレイル・ランニングです。これはもちろん全部が駄目だということではないんですが、やはり登山道というのは、少なくとも個人的に走るのはいいんですが、大会を開かれる場合にはやはり自然環境に影響もありますし、ほかの利用者への影響というのもありますので、そこはなんらかのルールを作っていきたいということで、長野の管内ですけれども、ルールを作っています。

上信越高原については国立公園の管理計画というのがあって、具体的に法律に定めているものよりももう少し細かくいろんなルールを作っていますが、そのなかには書き込んでいます。ただ、これも行政指導の範囲ですから、そこはどうしても限界があって、法律に基づいて罰則とかあるわけではないんですが、基本的な考え方は、植生、地形等への影響、地元の損傷、野生動物への影響がないよう、また利用上の問題が生じることがないように、ということです。特に大会などでは、利用前、利用後に現地を確認していただき、モニタリングしていただくことを条件にしています。

いろいろな自然体験活動があると思うんですけれども、やっぱり楽しくなければいけないですが、単なるエンターテインメントだけで終わらせて欲しくないな、とも思います。自然に関する新たな知識を得ていただいたり、最終的には自分と向き合うような場にしたいな、と思います。

日本の自然は本当に豊かです。国土の 60 数%が森林で、そのうち約半分が天然林です。これだけの森林、あるいは天然林があるっていうのは、先進国でダントツです。ヨーロッパは、一度は自然をほとんど破壊し尽している。そのあとに自然保護活動が生まれてきたと考えてもいいと思っています。欧米の価値観では自然は支配するもの、コントロールするものという概念ですけども、日本には元々「ネイチャー」という言葉に対する訳語はなかったんですね。それはそもそも、日本も昔からの考え方として、自然は自らのなかにあるものとして見ていた。言ってみれば、山とか湖とか岩とか木とか、あらゆる所、あらゆる物に神が宿るというような、そんな世界観ですね。自然っていうのは明治に入って、「ネイチャー」という言葉が入ってきて、仏教用語の「自然（じねん）」——自ずからそこにあるという、そういった言葉から持ってこられたというふうに聞いています。

現在のアウトドア活動というのは、海外からもたらされているものが結構多いと思うんですけども、日本の昔からの価値観というものを重要視していきたいですし、日本人が持っている自然への畏敬の念、一体感といった、そういったものを大事にしていきたいな、と思います。

以上です。今日はありがとうございました。

講演(3) 「長野県の教育と登山について」

原 一樹（長野県教育委員会スポーツ課長）



皆さん、こんにちは。今紹介をしていただきました、長野県教育委員会スポーツ課の課長の原一樹といいます。よろしくお願いいたします。

先ほど丸山庄司さんの雪の話がありましたが、私ももう少し加えたい話があります。私は伊那のあたりの出身で、雪が降らるので冬は氷です。子どものころから田んぼに張った氷の上で、下駄スケートの最後の世代でした。実はこのあたり、佐久も氷の文化なんです。冬になれば、アウトドアといえば氷の世界でした。諏訪もそうですし、小海町もそうです。あとずっと南の方もそうです。そんなことで、アウトドアと言ったときに、長野県は雪だけではなくて氷もある、ということ強調したかったんです。

今日、県庁からは私だけでなく、もうひとり来ています。観光振興課長の秋山さんです。観光振興課長ですので、また皆さんとつながりができれば、と思います。実は秋山さんと私も氷の上の付き合いがありまして、アイスホッケーという氷の世界で、県庁に入って以来、軽井沢とか小海町の松原湖で試合をしてきたんです。

さて、大町にあります山岳総合センターが調べたデータなんですけど、平成 22 年に、長野県の中学校の 90%が山に登っています。この率はすごい割合だと私は思っています。これは学校の数だけなんですけど、人数にすると 95.5%、これはこの辺の平均値ですので、長野県人というのは中学のときに必ず山に登っているんです。

ところが問題はその後で、標高がある程度あっても、アプローチの楽な山が増える傾向が続いています。例えば、乗鞍岳は高いんで 3,000mありますけども、ここは実際には標高差は 300mなんです。唐松岳周辺では、中身を調べてみると丸山ケルンまでで、頂上までは行ってないっていうような登山です。つまり苦しいんだけど、おいしいところを取り出すように登るという傾向が続いている、っていうことが言えます。このことを今日は集中的に考えてみます。

いっぽう逆の傾向も出ています。最近、山のレベルを上げた学校もあります。例えば、上高地に行っていただけの学校がそれをやめて、唐松岳に変えたという例があります。それからある中学校は八ヶ岳・硫黄岳でしたけども、もうちょっとレベルを上げて赤岳まで、といった例です。

また、県内の高校の登山活動クラブの状況です。高校は 111 ありますが、山岳部は今 29。これは平成 21 年ですね。約 26%しかないですね。短大、高専にはないです。大学には 3 つです。ちょっと少ない状況があります。高校のクラブは、実はかつてはあったという学

校が 24 校ありましたので、昔は合わせて 50 校以上の高校に登山部、登山班があったのです。しかしいっぽうで、高校、大学のクラブ員数が増加傾向にあります。それから大学の方も増える傾向にあります。

こういったことから、集団登山の教育的効果っていうことで少し考えてみました。ここに小冊子があります。平成 21 年の 8 月に大町市立の八坂中学校の子どもたち、全部入れて 28 名が 8 月に 2 日間、爺ヶ岳に登ってきたんです。この文集を隅から隅まで読みながら、なるほど登山って効果があるんだな、と私なりに実感できましたんで、そこを少し紹介したいなと思います。

結論から言いますと、この文集読みまして 3 つのことを強く感じたんですね。1 つは初めて体験する、本物の大自然への感動から生まれる畏敬の念。2 つ目に、未経験のこと、不安なことに挑戦し成し遂げることで実感する、達成感と自己肯定感です。それから 3 つ目は、非日常体験のなかで実感する、自分以外の一人一人の個性の確認と他者との連帯感、こういったようなものを私はこの文集で感じました。

生徒の実際の感想文を少し見ていただいたらよく分かるんで、それを紹介します。初めて体験する本物の大自然への感動から畏敬の念ってことなんですが、「初めて見る雲海がとてもきれいでした」、「とてもきれいで言葉を失ってしまいそうになりました。そのまま時間が止まって欲しいとも考えてしまいました」。こういう素直な気持ちが出てくる。すごいなと思いました。それから「外に出てみるととても月がきれいで、少し見とれた。流れ星が見られました」、「僕は初めて見たのでとても感動しましたが、それも少しの間だけで」、「ご来光が見られるまでの 30 分は、どん底に落とされたような寒さでした。ご来光が見られたときもあまり感動できず、初めてカップラーメンやみそ汁の温かさに気付く、早く山頂から下りたいとばかり思っていました。また機会があったなら、今度は何枚も着込んで、カップラーメン（カレー味）を食べながら、爺ヶ岳の山頂で空一面の星や、雲海やご来光をゆっくり、じっくり拝みたいです」。私はとても感動しました。また、女の子ですが、「この 2 日間で、空は自分が考えているよりもずっと広いということを感じました。その下に住んでいる私はすごく小さいけれど、空より大きく広い心を持ちたいなあと思いました。また、人生の中の 1 分 1 分を、今までよりももっと濃いものにして、大事にしていきたいです」。自然と接することによって、ここまでの感動が得られるんだと感じました。

次に未経験のこと、不安なことに挑戦し成し遂げることで実感する達成感と自己肯定感です。「高所恐怖症の自分にとって一番の難関でした。一步一步確かめながら行きました。皆に応援されたりして、なんとか行けたのが良かったです。山頂に着いたけど、高くて感動よりも怖かったということしか覚えていませんでした。今回の登山を振り返ってみて、自分で言うのもあれですが、成長したなと思えました。高所恐怖症が治ったわけではないですが、怖いものに立ち向かう勇気がついたので良かったです。肉体的にも精神的にも成長できた登山ができたのが良かったです」。こんなものもあります。「ガイドさんが言っていたとおり、気持ちはまだ大丈夫なのにもう足が限界になってきたらしく、ブルブルして大変で

した。入り口に到着したときは、なんとも言えない疲労感と安心感でいっぱいでした。ガイドさんとお別れのとき、ガイドさんは、山が好きになるかもしれないよ、と話して下さいました。いつもならあり得ないと思うところですが、なんだか今日はそうかもな、なんて思ってしまった。すごく大変ですごくきつかったけど、それ以上に楽しくていい経験、いい体験をしたなと思いました。登山ができて良かったです」。

3 つ目は自分以外の人間に対する感じ方ですね。非日常体験のなかで実感する、一人一人の個性の確認と他者との連帯感ということでした。「だんだんと歩くのがきつくなってきました。そのなかでA君は道幅の狭い所や高い所が苦手だったけれど、よく頑張って歩いていったと思いました。周りの皆も励まし合いながら戻っていて、スローガンの、全員で助け合いながら登るということができているなあと思いました。小屋を出るとき、小屋の人たち全員で見送りをしてくれたのが、とてもうれしかった。元気も出た。バスのなかでは皆すごく疲れている様子だった。眉間にしわを寄せて寝ている人や、満足した顔で寝ている人もいた。見渡すと皆寝ていたので、そこで初めて登ったんだという実感が湧いた。これからも大変なことがあるかもしれないけど、雲の先を目指して頑張っていきたいと思った」。中学校の2年生の感想です。「体を起こすと結構皆疲れてきたらしく、気持ちが悪かったり調子の悪い人が出てきました。あまり励ませなかったのが残念です。途中ですれ違う人たちも、あともう少しだよ、と声をかけたりしてくれて、すごく元気をもらいました。すごく急な坂になり、先生たちが、もう少しだ、と言うことを信じて登りました。山頂に着いたときは最高でした。あまり晴れてなくて残念でしたが歌を歌いました。あのときB君はよく頑張ったと思います」。

まとめですが、生徒の実態に合わせて目標を楽な山に変更することや、山頂を目的としないという登山計画もありましたけれども、もしかすると一生で最初で最後の登山かもしれない学校登山が、より教育的な効果があるものになるというのは、山のレベルを上げるということも必要なのではないかなと感じました。私自身も小学校1年か2年か忘れましたが、西駒（木曾駒ヶ岳）に登りました。大変きつかったです。そのときは学校の先生しかいなかったと記憶しています。でもその時、この子どもたちみたいに感動がありました。

長野県の学校制度というのは、校歌に必ず山の名前出てくるんです。皆さん方もそうかもしれませんが、私は南信の方の学校なので、小学校の校歌にも、中学校の校歌にも、高校の校歌にも一番に、しかも先頭のところに赤石岳が出てくるんです。「赤石岳」って歌ってたんですけども、行ったことがなかったんです。でも、14歳のときに西駒に登って山というものを知って、いつか登りたいなあってずっと思っていました。それで、5年ぐらい前に南アルプスを登り始めて、昨年、40何年ぶりに赤石岳に登りました。とても感動しました。

長野県の子どもたちはそういった財産を持っているので、その財産がもっともっと生かされるようにしたらいいんじゃないかな、って思います。

講演(4) 「山小屋から見た登山ブームの真実」

赤沼 健至（燕山荘グループ代表）



こんにちは。ただ今ご紹介いただきました燕山荘の赤沼と申します。本当に皆さんのおかげで、大勢のお客様をお連れいただいて本当に感謝しております。山口章さんから頼まれて山ガールの話をしにきました。山ガールってスカート履いて登ってまして、見るからに寒そうな格好をして登ってくるんですよ。10月、11月にあんな寒い格好をして登ってきて、いいんですかね。

実は私、今までこんなことなかったんですけど、60歳近くになって急に体が冷えてきまして、寒いんですよ。ところが、今年の1月1日はもうすごかったんですよ。素晴らしい山になったんです。1日前の12月31日が大雪でして、その前の日もすごい大雪でした。しかし1月1日は、あろうことか晴れたんです。燕岳のてっぺんから燕山荘の間だけ晴れたんです。そこにお日様が出た。ご来光です。それで頂上へ行っただけだからと思って、薄着で行ったんですよ。これがいけなかった。お昼御飯が食べられない。夜になったもご飯食べられないんです。一晩寝て朝になっても、朝食を食べたくないんですね。高山症状なんですよ。冷えちゃったんですね、体が。そこで、従業員連中が心配しちゃって、冬山で風呂に入れたんですよ。それで持ち直したんです。ですから、私は冬山は山と温泉が一番だと思ってますよ。

山ガールもあの格好で9月、10月でも登ってきてるんですけど、冷えた僕みたいにおかしくなる。体冷やすってことは、あんまりいいことじゃないんです。これを私は身をもって体験させていただきました。山に登るっていうことは、どんなことなのかっていうことなんですね。プラス発想をしなきゃ、山登れないんですよ。「嫌だな」って言ったら、具合悪くなっちゃうんですね。

でも、最近の中学生も登りたいという子が非常に増えてきた。これ珍しいですね。なぜか。ガイドさんがつくようになったからですね。私はいつも、プラス発想の素晴らしさっていうのを学校に行ってお伝えします。体が疲れれば疲れるほど、心を引っ張るんですよ。マイナスの方に引っ張るんです。嫌だな、きついな、辛いな、やめたい、終わりたい、下りようよって。で、心が「うん」っていうと下りちゃうんです。具合悪くなっちゃう。ところが、心のなかでどこか行ってみたい、見てみたい、登頂するぞ、しょうがないから行ってやるかって、不安からプラスになっただけでも登れるんですね。

燕岳は急に稜線に出ますから、ものすごい景色がバンと広がって、魂が感動した瞬間に何が起こるかっていうと、あれだけ「重い」って言ってた荷物下ろして見ればいいものを、

皆さん背負ったまま「うわー、すごい」ってやってるの。「もう 2 度と登りたくない」って言った方が、槍ヶ岳を見た瞬間に「今度はあの山に登ろう」ですからね。変わるんです。感動、魂の感動ってのは、体も心も即座に蘇生する、ものすごい影響力があるんですね。

おかげさまで燕山荘は今年で 90 年になりました。そこで私は、燕山荘を 30 年ずつに区切って見ることにしてるんです。開業は 1921 年、大正 10 年。その 30 年後は 1951 年、昭和 26 年、僕の生まれた年なんです。それから 30 年後は 1981 年、これが昭和 56 年になりますね。それから今年が 2011 年、平成 23 年。これが 30 年ごとの歴史ですからすごいんですよ。最初の 20 年は戦争前ですから、お金のない人の方が圧倒的に多かったですね。ところが、とんでもないお金持ちもいたんです。財閥だとかそれから公爵だとか貴族社会の人たち。この人たちが、イギリスの貴族がアルプスを登っていたのを真似してこの辺りにどんと来たんですね。しかし、第 2 次世界大戦後どんどんいなくなっちゃうんです。しかし、1956 年だったですかね、日本人がヒマラヤのマナスルに初登頂すると、ものすごい勢いで大衆登山ブームが起こるんです。そのあとの新しい時代に入ると、今までなかった物が小屋に入ってくる。ひとつはパソコンなんですよ。ひとつは女性なんですね。これが山ガールなんですね。こういう時代が来てるんです。あともうひとつ、外国人ですね。この外国人、何しに来るかっていうと、韓国の方は岩がないんで、岩山に登りたい。それから台湾の方は特になんで来るかっていうと、雪が見たいんですよ。だから、岩と雪というのが本来の姿です。これで何かツアーが作れませんか。ただ雪見るだけでいいんですよ。そうすると、ものすごく喜んで帰られるんだそうです。

新しい時代というのは何かっていうと、私はファッションと情報が新しい時代のキーワードだと思っています。ガイドされる方も格好いいのが求められる。格好悪いと駄目ですよ、絶対に。山小屋もぜひ格好良くしなきゃいけないと思ってるんですね。

この若い人たちは、いつごろから増えたかっていう話ですね。平成 21 年です。平成 18 年が 2,391 人、平成 19 年が 2,271 人、平成 20 年が 2,272 人、ほとんど変わらないんですね。大体 2,300 人が平均なんです。ところが、平成 21 年から 2,837 人、20%アップですね。それから 22 年、3,391 人、45%アップですね。さらに 23 年度はなんと 70%アップしたんですよ。ものすごく数が増えてるんです。テント泊まりの方ですね。

そのテント泊の方の楽しみ方というのは、居心地の良いってことですね。これがキーワードだと私は思っています。テントを持ってきて、山小屋も利用するんですね。山小屋に行ってもその雰囲気を楽しむ。燕山荘で今年、爆発的に売れてるのがケーキなんですよ。ひとりで朝からケーキなんですよ。朝からワイン飲んだり、生ビール飲んでるんですよ。そういう登山の方が増えたんです。

それからもうひとつ、もっと増えたのは、それよりもはるかに増えたのはどういう方かっていうと、日帰りなんです。燕岳登山をして下りてしまう。そういった方がものすごく増えたんですね。今までは土曜日、日曜日が増えてたんです。高速道路が 1,000 円でどこ

までも行けるようになった、その効果なんですね。それで今は、とにかく登ってそのまま下りてしまう。

しかし、皆さん早く下りて具合悪くなるんですね。登るときに使う筋肉というのは、普段歩いている筋肉で対応できるんですけど、下りは体を止める筋肉が対応するんです。止める筋肉というのは普段使わない筋肉ですから、下へ下りたときに足が笑ったり動けなくなって、体中痛くなっちゃうんですね。下りはローギアなんです。歩幅を短くするのがブレーキです。そうしないと飛び込んじゃう。下りる最中におかしくなるんです。

ところで、日本という国は世界トップレベルの大自然を持っています。特に北アルプスはすごい所で、世界で例のないほど冬は風が強い。20m、30mの風が常時吹いてます。それから世界に類のないほど雪の積もるのも、日本の北アルプス。

そして、日本の自然の素晴らしさっていうのは何かというと、四季があるってことですね。ところが、この四季のあり方が、皆さん全然認識がないんです。北アルプスで一番雪の多いときはいつだと思いますか。4月の下旬が一番雪が多いんですね。ミネザクラが咲くのは7月の10日なんです。燕岳って2,700mですから、春になるのは7月の10日なんです。そして、ライチョウの雛が生まれるんです。ライチョウは餌を雛に持っていく鳥じゃなくて、餌場に雛を連れて行く鳥なんですね。そのときに雛は新芽じゃないと食べられない。ですから、7月の10日前後に生まれるんです。じゃあ、夏はいつでしょう。夏の花はコマクサなんです。これが咲くのは7月の20日なんです。たった10日で夏になっちゃうんですよ。じゃあ、秋になるのはいつかっていうと、秋の花はリンドウ、キキョウですよ。これが咲くのがなんと8月の1日なんです。8月に入ってもう秋になっちゃうんですね。8月の15日ごろから、もう黄葉っていつて植物の葉が黄色くなり始めちゃう。それで9月の20日ぐらいから紅葉が始まる。燕岳の紅葉は9月の25日ごろ。じゃあ、冬はいつ来ると思いますか。冬っていったら雪ですよ。霜柱だとか氷が張るとか雪っていうのが冬だとしたら、10月なんです。10月から6月まで冬なんです。

これ皆さん、いろんな方にぜひ伝えていただきたい、特に山ガールの方に。山ガールの方々はファッションと情報で入ってきますから、本当のところ大変経験は浅いんですね。10月って遭難が多いんですよ。

燕山荘は年末年始、12月の23日のクリスマス前から1月8日まで営業しています。もうこれは、昭和36年からずっと営業しているんです。クリスマスから年末年始にかけて、ものすごくきれいなんですね、大気が。ですから、私たちがご案内してます。ところが、絶対中止というときがあるんです。それは雨が降ってるときなんです。山で一番怖いのは何かっていったら、特に冬山ですけど、風による気温低下とそれから濡れることなんですね。雨が降ってると蒸れて、濡れちゃうんですね。気温がプラスの状態から吹雪くことによってマイナスに、一気にマイナス20度の世界に突っ込んじゃいますから、体がもたない。松本の測候所は大体700mぐらいの所にありまして、燕岳は2,712mですから2,000mの高低差です。最低でも12度以上低いと思って下さい。

次に登山者の年齢構成についてお話ししましょう。お客様を20代、30代、40代、50代、60代って分けていきますと、燕岳は見事に20%ずつなんです。10代、20代の方がちょっと少ないんですね。大体10%か9%。あとは皆20%ぐらいで推移しているんです。でも9月、10月、ここでちょっと面白いことが起こりました。今年の9月は前年度と比べると30代のお客様が集中しまして、なんと倍になったんです。その分50代のお客様が半分になりました。あとは変わりません。それから10月は30代の方がやや増。40代もやや増えました。ところが10代、20代は半分になりました。ということは、山ガールっていうのは30代だということなんですね。山小屋に泊まる山ガールは30代。ターゲットは30代だということなんです。それと日帰り客増加で新しく出てきた傾向は、お昼御飯がものすごく増えたんです。ここ3年間でなんと3倍になったんですね

最後に、これから考えなければいけないことのポイントです。キーワードは、私は健康と環境と教育だと思っています。このどれかで攻めるということが大切ではないか、と思っています。特に環境ということになりますと、マナーとルールです。これはぜひ登山者の皆さんに訴えて下さい。人が歩くとコマクサがなくなっちゃうんです。私は緑のロープを張りました。張って10年でもものすごく増えたんです。信じられないくらい増えました。ですから、登山道にロープがあってもなくても登山道から外れないってマナーが、大切なことだと私は思っています。

ルールとしましては、持ち込んだ物は持ち帰るということですね。自宅で処理すること。誰かがゴミを捨てるとあっという間にゴミの山になって、誰も拾う人がいないんです。そうするとネズミが爆発的に増えて、そのネズミを追って狐が登ってくる。狐はこのあたりのライチョウを全部狙って、一匹もいなくなっちゃいました。

入山規制とかって言われるんですけど、入山規制をやっていただくのはぜひ鹿と猪にやっていただきたい。人間は私たち山小屋の者が、丁寧に教育していけば本当に直るんです。ですから、姿勢というのがとっても大切です。親の姿勢、ガイドさんたちの姿勢、僕らの姿勢、それらがものすごく大切です。

健康っていうのは、先ほど私が言いましたように、感動すると心身ともに蘇生できるということ。腰痛がひどいっていうのに、山に登ったら治ったという方がいっぱいいます。でも、走り下りたために膝がおかしくなったという方もいっぱいいます。私たち燕山荘では今、何に一番力を入れているかというと、子どもですね。山好きな方に「どうして山登るようになったんですか」と聞くと、ほとんどの方がご両親に連れてってもらったからと言います。今、私たちは「親子ファミリー登山スクール」をやっています。7、8年ほど前に3人から始めた企画だったんですけど、今はもう100人超えちゃいます。その半分以上が子どもさんで、半分がご両親、または親子三代で来ています。この親子三代というのは、すごく大切です。そうすると、思い出がいっぱいできるんです。

結びになりますが、山からもらったもの、それは死ぬまで、また最後まで息づいていくものだと私は思っています。感動するという体験を、少しでも多くする。それが今後の日

本の活力になっていくのではないかと思うんです。ベートーベンもレオナルド・ダ・ビンチも、皆素晴らしい人たちは、自然から学んだと言われています。感性を磨くこと、それは小さいときからやらないと磨かれないものです。山に登って感動するという体験は、大きくなったらもう無理ですので、ぜひ小さいときから連れていっていただければと思います。そのときに、美しいっていうことがまたポイントになります。美しいと人が集まります。燕山荘を磨いたら、お客様がたくさん泊まっていただけるようになりましたし、それから評判も上がりました。そこで働いている人たちの気持ちも良くなって、人当たりも変わりました。皆さん燕岳は美しい山ですので、ぜひお登りいただければと思います。

どうもありがとうございました。

11月13日（日）

特別講演 「トムラウシ山遭難の教訓とツアー登山」

節田 重節（安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター専門委員長、
日本山岳ガイド協会トムラウシ山遭難事故調査特別委員会座長）



皆さん、おはようございます。朝から遭難の話で恐縮なんですけど、今回は山を中心としたフォーラムということで、その一環としてトムラウシ山の大量遭難の検証をお話をさせていただきます。

先ほどご紹介がありましたように、第三者として事故調査委員会の座長を務めました。現役時代、出版社にいましたものですから、生存者や関係者の聞き取りと報告書のまとめ作業などを担当し、昨年の2月にこの最終報告書にまとめております。これはガイド協会のホームページでも見られますので、詳しく知りたい方はぜひご覧になっていただきたい

と思います。

それでは話の進め方なんですけど、調査委員会としての公式報告はこの本に発表しておりますので、今日は若干私の視点を交えながらお話させていただきたいと思っております。内容としては、報告書を発表するまでの経過、次にツアー登山というものがなぜ生まれたのか、その背景ですね。さらに実際のコース概要、これは映像とともにお話させていただきます。そして、事故パーティの行動概要ですね。さらに、8名の方々が亡くなったのはアミューズトラベルというツアー会社の企画ですが、同じ日にほぼ同じような行動をとっていた伊豆ハイキングクラブという静岡県の登山クラブがありまして、彼らの動向も非常に参考になるかと思っておりますので、報告させていただきます。それらを受けて、最終的なまとめとして事故要因を抽出し、そこに考察を加えて、ツアー登山の今後のあり方に言及する、というような話の展開で進めたいと思います。

さて、この遭難は一昨年の7月16日に起こったものです。ちょっと時間が経っておりますが、これだけの大量遭難ですので、新聞やテレビで皆さんご記憶にあるかと思っております。7月16日に大雪山系・トムラウシ山でアミューズトラベルが8名とプラス単独行者1名、あと同山系の美瑛岳でガイド登山のパーティで1名、1つの山域で同日に計10名が亡くなっております。

最悪の場合、夏山でも凍死することがあるという話は、皆さんもご存じかと思うんです

が、実際にこれだけの大量遭難が起こることは非常に珍しいケースではないかと思います。古くは大正時代、1913年に起こったもので、これは新田次郎の『聖職の碑』という小説になっておりますが、中央アルプスで学校登山のパーティが、校長先生以下 11 名亡くなっております。あとこれは不慮の事故に近いんですが、1967 年、西穂高岳で松本深志高校パーティが落雷により、やはり 11 名亡くなっています。今回は、これらに匹敵する大量遭難といえるかと思います。

今回の遭難パーティは、先ほど言いましたように、アミューズトラベルというツアー会社が募集して、61 歳のリーダー（日本山岳ガイド協会の資格保持）の下、2 人のアシスタント・ガイドがついて実施されたツアーです。事故後、その当事者であるアミューズトラベルからガイド協会に、いわゆる第三者委員会設置の要請があり、ガイド協会として遭難事故調査特別委員会を発足させました。委嘱を受けた我々 6 人のメンバーは、まず 8 月下旬に現地調査を実施。実際にアミューズトラベルのツアーと同じような行程で歩き、あと地元の警察、自衛隊、病院などの聞き取りもやっております。

次いで、リーダーは亡くなっておりますので、2 名の生存ガイドと、各地に足を運んで生存参加者全員の聞き取り調査に移りました。そのほかツアー会社の責任者やツアー会社周辺のガイド、その他のツアー会社など、いわゆる関係方面すべての聞き取り調査を終え、その年の 12 月 7 日に中間報告を発表、さらに調査・検証を加えて昨年の 2 月 24 日に、先ほどの最終報告を発表して委員会を解散しております。

本論に入っていきますが、なぜこういうふうなツアー登山が隆盛し、ツアー登山における大量遭難が発生したのか、その背景について考えてみます。昨日、燕山荘の赤沼さんの講演にもありましたけれども、1975 年から 80 年ぐらいにかけて、いわゆる中高年登山ブームが起きました。このころは日本の高齢者人口が増え始めた時代でして、リタイア後の趣味のひとつとして、一番入りやすかったのが山歩きではなかったかと考えられます。そういう流れのなかで、「ツアー登山」という新しい山登りの形がはっきり目立ち始めてきたのは、90 年ぐらいからではないかと思います。

リタイア後初めて山に入ってくる、いわゆる「ビギナー組」はの人たちは、正直言って山行計画は立てられない、ガイドブックや地図を読むのが面倒臭い、山の仲間がいない、あるいは独り歩きでは不安だ、というようなことで、このツアー登山を選択するわけです。個人装備以外すべて準備してくれますので、旅行でいうと、日本独特のパッケージ・ツアーの登山版といえます。非常にコンビニエンスな形の登山で、私は通称「コンビニ登山」と言っています。その結果、ツアー登山というカテゴリーが生まれ、ツアー登山客という客層が生まれ、さらにツアー登山ガイドという職業も生まれてきた、と言われております。

では、どのぐらいのお客さんがいるのかといいますと、旅行会社には日本旅行業協会（JATA）に加盟している会社で、さらに登山部会に所属しているのが大体 60 社ぐらいです。それともうひとつ、新聞社の旅行部門なども含めた全国旅行業協会（ANTA）があります。こちらの登山部会がやはり 130 社ぐらいあります。それで、JATA の扱い人数

が年間延べ 40 万から 50 万人ぐらいではないかといわれており、ANTA も含めると 100 万人ぐらいになるのではないかと思います。近年、いろいろな山岳組織が衰退したり、指導者が高齢化しており、そのような現状に対して、こういう形で未組織登山者を山に誘ってくれたり、あるいは山との出会いの場を提供してくれているという意味では、ツアー登山のプラス面もあるかと思います。また、実はツアー登山における事故率というのは、それほど高くありません。ほとんどが転落、滑落。いわゆる個人レベルの事故が大半です。したがって、今回の 8 人死亡というのは、非常にレアなケースと言えらると思います。

それでは、実際に遭難事故が起こった大雪山とトムラウシ山がどういう山かということ、皆さん良くご存じのことと思いますので省略し、遭難パーティの行動を追ってみたいと思います。このツアーは、アミューズトラベルが広島および名古屋周辺のお客様を中心に募集したもので（おひとり仙台からおいでになった方もいますが）、旭岳～トムラウシ山縦走 4 泊 5 日という行程です。山中の避難小屋に 2 泊して、日本百名山を 2 つ登ろうという、代表的な大雪山系縦走プランです。お客様が 15 人、ガイドが 4 人で挙行されておりますが、ガイド 4 人のうちひとり是最終日、行動をともにしておりません。リーダーであり旅程管理者は、添乗員資格を持っている広島から来たガイド（61 歳）です。そのアシスタントとして 32 歳のガイド。彼は札幌営業所から参加しており、トムラウシ山のこの縦走を 5 回経験しています。もうひとり名古屋営業所専属のアシスタント・ガイドで 38 歳。ところが、この 3 人のガイドは広島、札幌、名古屋と、それぞればらばらに参加しており、全くの初対面でした。トムラウシ山の登山経験があるのは、札幌のガイドだけです。

13 日は千歳空港に集合して旭岳温泉泊まり。14 日は北海道最高峰の旭岳に登頂してから白雲岳を経て白雲岳避難小屋宿泊。15 日は白雲岳避難小屋から雄大な高根ヶ原を縦断してどんどん南下、化雲岳を経てヒサゴ沼避難小屋に入っています。そして、いよいよ運命の 7 月 16 日となります。

昨日は風はなかったが、一日中小雨が降り続き、すっかり濡れたようです。避難小屋のなかでは、濡れ物を乾燥させることはできません。また、濡れによりよく眠れなかった人もいたようです。夜来の雨がまだ降り続いており、当初 5 時の出発予定だったんですが、リーダーは恐らく大分迷ったんでしょう。30 分天気待ちして、5 時 30 分に出発しております。ガイドたち、あるいはお客さんの話を総合しますと、本音は出発に対して不安もあったんでしょうが、明確に出発に際して反対するとか、疑問視するような声は出ておりません。

ヒサゴ沼から出発して稜線へ上がりますと当然、西風が強くなります。ヒサゴ沼分岐で左折、一路トムラウシ山に向かって南下します。途中で綺麗な日本庭園という場所がありますが、その間、雨風が非常に強い状態でして、小柄な女性客は木道の縁をつかんで歩いたとか。明らかにかなり厳しい状況だったと推察できます。恐らく風は 20m から 30m 近く吹いていたのではないかと思います。

午前中は雨がまだまだ続いていたそうです。ポイントのひとつ、ロックガーデンという

岩のゴロゴロした場所に来ました。このロックガーデンまでに、すでに一般的なコースタイムの2倍かかっております(8時30分)。「たら」「れば」になりますが、もし引き返すのならこのロックガーデンの手前ですね。ロックガーデンに登っちゃいますと、逆に引き返すのが非常に難しくなります。この登りでふらついたり座り込んだり、いわゆる低体温症の前兆と考えられるお客さんが一部出始めています。

ロックガーデンを登り切り、しばらく行くと北沼の渡渉点です。普段は平凡な北沼ですが、当日は白く波立ち、恐ろしいぐらいだったそうです。沼尻が増水しており、膝下ぐらいの渡渉でしたが、人数も多いので30分から1時間ぐらいかかって、非常に苦労して渡っております。38歳のアシスタント・ガイドが、ここでお客様をサポートしながら転倒しています。全身を濡らして、低体温症の大きな要因となっております。

北沼のそばで、トムラウシ山の頂上へ行く道と巻き道とに分かれますが、この手前で68歳の女性客がまず行動不能になり、リーダーの61歳のガイドが付き添ってビバークします。我々通称「第1のビバーク地点」と言っております。雨は大分小やみになっていたそうですが、風はまだ強く、この渡渉点の前後での長時間の停滞が体温を奪い、低体温症の伏線となっています。

10時半ごろ、北沼分岐でさらに女性客2名が行動不能になり、32歳のアシスタント・ガイドと女性客3名、男性客1名が付き添ってビバークします(第2のビバーク地点)。ふたりは盛んに嘔吐したり奇声を発したりと、典型的な低体温症の症状がもう出始めています。なお、第1のビバーク地点と第2のビバーク地点は、晴れた翌日戻ってみると、わずか5分の距離だったそうです。

そして11時半から12時ごろ、ちょうどこのころには風も大分弱まって、雨もやんでいたそうです。38歳のまだ元気なアシスタント・ガイドが本隊10名を率いて、トムラウシ温泉へと下降すべく、さらにここでパーティを分けています。ガイドは元気に見える10人を連れて、南沼から前トム平を通ってトムラウシ温泉へ向かって進みますが、南沼キャンプ場手前で66歳の男性がまず行動不能に。さらに続いてトムラウシ山の南側、トムラウシ公園で女性2名が行動不能に陥り、その近くでさらに女性2名が、これはもう自主的にビバークしています(第3のビバーク地点)。

64歳の元気な女性客、この方は最後まで元気に歩かれたんですが、その女性客とガイドが前トム平に到着したところ、15時54分、彼女の携帯電話にご主人から電話が入ったそうです。それで、ガイドは低体温症の影響で大分朦朧としていたんですが、その電話を借りて警察に連絡、初めて遭難という事実が警察に伝わったということになります。なお、最終的にそのガイドは完全に行動不能となり、ハイマツの上に倒れてしまったということです。

結局、比較的元気なお客さんはそれぞれ自主的に行動されて、まずそれぞれ64歳の男性客、女性客各1名が最初にトムラウシ温泉に到着、時刻は23時55分です。さらにもう2人、68歳の女性客と61歳の男性客で、0時55分。そして、最後の男性客が下山します

が、彼は途中で1回、独りで2時間ぐらいビバークしたそうで、翌朝の4時45分、温泉に下りています。したがって、このパーティ全体で自力でトムラウシ温泉まで下りたのは、5名だけということになります。

かくして、このツアー登山隊は統率を欠いて四分五裂、悲惨な結末を迎えたのです。北沼渡渉点で2名、北沼分岐で2名、南沼キャンプ場手前で1名、トムラウシ公園上部で2名、その下で1名、計8名が還らぬ人となったわけです。最終下山できた5人以外は、それぞればらばらにコース上に取り残されたような形で、翌7月17日を迎えます。4時38分に道警の航空隊と自衛隊のヘリが初めて捜索を開始しており、この日は非常に良い天気だったそうです。8人の遺体がそれぞれ収容されまして、最終的にはハイマツのなかに倒れていたアシスタント・ガイドを10時44分に収容し、全体の収容作業を終わっています。

なお、冒頭にお話しましたが、伊豆ハイキングクラブというパーティが、ほぼ同じような行動をとっております。こちらは女性4名、男性2名。平均年齢が65.8歳。いわゆる典型的な中高年パーティですね。リーダーはトムラウシ山の経験があったそうです。ただ彼らは、アミューズが山中2泊3日のところを山中3泊4日と、1日余裕を持たせているんですね。彼らも運命の16日に出発するかどうかについて大激論を交したそうです。しかし、アミューズのパーティも行ったことだし、あのガイドがこういうふうに判断したのなら、我々も行こうということで、30分遅れの6時に出発しています。

アミューズ・パーティは15人もいるので、やはりどうしても行動が遅いものですから、先ほどのロックガーデンのあたりで、この伊豆ハイキングクラブが追い越しています。報道では何かこのパーティはしっかりしていて、全員無事に下山したというような記事があったそうですが、内情は彼らも結構厳しい状態で、特に67歳の女性メンバーが低体温症でかなり危険な状況になっており、途中で対策としてお湯を5回飲ませたとか。あと雨のなかダウン・ジャケットを着させたそうです。そして、女性4人と男性2人のパーティをここで2つに分け、弱っている女性を男性メンバー2人がサンドイッチにするような形で下山したということです。彼女はフラフラになっていたそうですが、夜の19時にトムラウシ温泉に辛うじて下山しています。6人の比較的まとまったパーティでも、やはり13時間かかっておりますね。普通ならコースタイムは10時間ぐらいといわれています。

アミューズと伊豆ハイキングの運命を分けたものは何か。もちろん直接彼らにもいろいろインタビューできたんですが、伊豆パーティは4月から非常に周到な準備をしています。ボッカ訓練を3回以上それぞれメンバーに課し、あと雨のなかでの歩行訓練をやったりとか、食糧計画も見せてもらいましたが、細かくしっかり作っておりました。それとひとつの山岳会ということで仲間意識も高かったと思いますし、前日の行動が短かったものですから、比較的体力を温存できたのではないかと思います。それと小人数ですから、行動中、アミューズ・パーティのように風雨のなか、長時間にわたって行動が停滞することがなかったと思います。そのあたりで結果に大きな差がついたのではないかと考えられます。

それでは、なぜこういう遭難が起こったのかという肝心の話になりますけども、残り時間が厳しいんですが、かいつまんでお話させていただきます。

山の事故というのは、どうしても結果論になってしまうんですけども、こういう大きな事故ですし、社会的にも大変責任のあることですので、しっかりと調査・検証しなければいけないということで、第三者委員会としてまとめたわけですね。事故要因というのは、起こってみるといろいろ多岐にわたっており、たぶんそれらが複合的に絡んで起こったものと思います。しかし整理しますと、第一義的にはリーダーの判断ミスによる、いわゆる「気象遭難」ということで結論付けられるかと思います。

先ほどの行動概要をご覧になっていただくと、山をやってる方でしたらだいたい分かると思いますが、まず幾つかのポイントがあります。あそこでああしていたら、ここでこうしていたらという、山でもゴルフでも「たら」「れば」は通用しないんですけども、それをあえて言いますと、まずはヒサゴ沼の避難小屋をどういう判断で彼らは出発したのか、と。いわば成算があって出発したのかどうか、というのがポイントだと思います。

気象状況は前々日、白雲岳避難小屋で携帯のメールで見た予報しか持っておりませんでした。ラジオも持っておりません、あと細かい雨のなかしっかり 10 時間も歩かされた前日の行動です。疲れていたと思いますし、濡れ物も多かったと聞いております。そういう参加者の体調とか体力とか、いわゆるパーティ・コンディションをどの程度ガイドとして把握していたのか、このあたりは疑問が残ると思います。

あとはコースのコンディションですね。雨、風はもちろんですけども、晴れていても 10 時間かかるのが分かっているわけですから、気象条件を加味してどれぐらいの行動時間が予測されるのか、それらについて 3 人のガイドが細かく協議したという痕跡は残ってないですね。言ってみれば、取りあえず出てみようか、というような形で出発したのではないかと思います。もし本当に迷っているのであれば、ヒサゴ沼から 2、30 分で稜線に上がれますので、若いガイドに風の強さや雨の厳しさを偵察させるというのも、ひとつのやり方ではないかと思うんですが、そういうことはやっておりません。そういった意味で本当にスタッフ 3 人が、いわばプロのガイドとしてどれほどの危機意識を持っていたのか、ということです。また、ひとりのガイドはトムラウシ山に詳しいわけですから、情報を共有して、いろんな場面を想定しながら討議すべきではなかったかと思います。それぞれの役割分担も含めて確認すべきではなかったかということです。

前線が早めに通過するだろうと想定していたようですが、残念ながら通過後に実は風が結構強くなったということです。行動途中で悪天候になってパーティが悲惨な状況に陥っているのはよくあるケースですけども、今回の場合、出発前から明らかに悪天候のなかを出発するという判断をしたわけですから、本当にそれなりの成算があって出たのかどうか、問われます。リーダーはひと言、「今日は皆さんを山へ登らせるのではなくて、無事、トムラウシ温泉まで下ろすのが我々の仕事です」と、それだけお客さんに向かって発言しているんですけども、本当にそこまでの覚悟があって出たのかどうか、ちょっと疑問が

残るところです。

一番のポイントである小屋を出るか出ないか、これは結果論ですけども、出なければ翌日は見事な晴天でした。あるいは、当日午後から風雨はやんでいるわけですから、その半日の差が大きかったと思います。極端な話、30分の時間待ちなんていうのはほとんど意味がありませんので、思い切って半日天気待ちするぐらいの大胆な発想をすれば、あくまでも結果論ですが、大分状況が変わったのではないかと思います。

あとこのコースで特徴的なのがエスケープ・ルートがないんです。逃げ道がないのが非常に厳しいところです。もし逃げるとしたら、化雲岳から天人峡温泉というコースがありますが、これもやはり非常に長大なコースでして、エスケープ・ルートというほど生易しいものではないんですね。したがって、悪天候のなか10時間以上の行動を覚悟して出るか出ないのか、そこがまず一番のポイントだったかと思っています。

さらに第2のポイントとしては、ヒサゴ沼から稜線に上がりましたが、それこそ木道の縁につかまって歩くというような強風でしたから、かなりの恐怖だったと思います。それほど悪天候であったなら、早いうちにヒサゴ沼避難小屋に引き返すという判断もできたのではないかと思います。そんな状態でも強行しましたが、ロックガーデンの登り口、このあたりがまさにターニング・ポイントだったと思います。すでに通常の2倍の時間がかかっているのです、そのままのペースで行ったら、トムラウシ温泉に着くのが何時になるか、予測できたはずですが。パーティの平均年齢を考えたら、とても行き着かない可能性もあったかと思っています。

さらに進んで、ロックガーデンの登りあたりから一部の人に低体温症の症状が出ています。そういう低体温症の兆候に対して、具体的には対応策を施していないように思われます。例えば、雨のなかですけどなんとかダウン・ジャケットとかフリースを重ね着させるとか、エネルギー補給のため食べ物を無理やりでも食べさせるような指示は、していません。このロックガーデンを上った先で、いわば遭難状態と認識すべきだったのではないかと思います。いずれにしろ、救助要請をするなり、どうやってパーティを生き延びさせるのか、そのためにスタッフで協議をして、対策を立てるとか、あるいは的確な指示を出すというような、具体的なものはなかったように聞いております。

北沼渡渉点では、一番風の強い所で長時間、パーティを滞留させています。それが最終的には死命を制したのではないかと考えております。やはりしっかりしたリーダー・シップを発揮して、2人のスタッフに具体的に指示を出すこと。あるいは、ツアー登山ですけども、当然、参加者にもパーティの構成員として自覚を持たせるよう指導して、安全確保のために協力を仰ぐということ。そのあたりまで含めて、強いリーダー・シップを発揮すべきであったと考えております。

なお、これは確認できないんですが、61歳のリーダー自身が、たぶん低体温症になっていたのではないかと思います。低体温症は当然、判断力も低下してきますので、最初に行動不能となった女性客にチーフ・リーダーが寄り添ってビバークするというのは、ちょっ

とパーティ登山の常識としては考えにくいことかな、と思われます。さらに第2のビバーク地点とかそのあたりになると、パーティとしていわば機能不全状態に陥っていると思います。はっきり言いまして、1人や2人は犠牲になったかも知れませんが、あそこまで大量に亡くなることは、避けられたのではないかと考えます。すべての対応が後手後手に回っており、その遅れが最終的に大きなダメージとして残ったのではないかと思います。

そういった意味で、気象遭難というのはお客さんには判断できません。ましてやコンビニ登山では当然ですから、現場におけるガイドの判断がすべてだと思います。転・滑落などは参加者の個人的なミスに起因するものですが、これだけの大量遭難になると、明らかにガイドの責任を追及されても仕方ないかなと思います。こういう緊急時における対応経験がどれだけあったのか、あるいはどれだけ学習していたのか。いわゆる危険予知能力ですね。天候変化の予知能力とか、地図からの地形を判断する能力とか、特に参加者の状況をどれだけ細かくウォッチしていたか、それによってどう予知判断したのか。あるいは、時間経過なども含めたいろいろな管理能力ですね。そのあたりがパーティとして、あるいはガイド・スタッフとしてまとまりに欠けていたし、劣っていたのではないかと考えております。

あとポイントである低体温症ですが、これは単純に言いますと体温、すなわち直腸温度が35℃以下になった場合を低体温症と言うんですが、それに対する認識も、ガイド、ツアー会社ともに甘かったと思います。低体温症に対するレクチャーとかそういう対策を、具体的に立てたという事実はなかったと聞いております。

実は2002年に、今回とほぼ同様な事故が起こっているんです。しかもトムラウシ山で。そのときは愛知県と福岡県の2つのパーティが遭難したんですけど、これは台風のなか無理にトムラウシ山に登頂して、2つのパーティでそれぞれ1名ずつ死亡しているんですね。これは典型的な気象遭難でして、実は山と溪谷社からも『気象遭難』というタイトルで刊行されており、そのなかにこの2002年の事故が書いてあるんです。しかし残念ながら、ガイドたちやツアー会社がその本を読んだり、あるいはそれを参考にしたという形跡はなかったです。

あと行動中は参加者に対するケアが大切です。これはガイドとして当然果たすべき義務だと思いますが、そのあたりをお客さんサイドから聞き取りしたんですが、ガイドにそういう具体的な指示を出されたことはあまりなかった、といいます。「ガイドさんがダウン・ジャケットを着なさい、と言ってくれたら着たんですけど」というような、極端なお客さんのコメントもあったくらいですから。

いずれにしろ、ガイド・スタッフがこういう悪天候下の、あるいはかなり厳しい状況下での山行経験が不足していた、と。あるいは、そういうことに対する学習が足りなかったのではないかと、思っております。加えてガイド自身の体力の低下もどこまで認識していたのか、ちょっと疑問が残ります。もちろん参加者ひとりひとりが自分の体力とか体調を認識していたとは思えないので、それらはガイドが細かくウォッチしてあげないと、パー

ティとしてまとまって行動できないと考えております。

もっとも、危機対応とか危険予知能力の養成はなかなか難しいもので、これは実践で養うか、あるいはいろいろなケース・スタディーから学んで、そういうなかでガイドとしての知識や知恵をつけていく、それ以外にないと思います。それにしても、ガイドの責任というものが大変重いということを、改めて痛感したのがこの大量遭難だったと言えるのではないかと、思っております。もちろんその背景として、ツアー会社のこの山行計画の脆弱性と、危機対応に関する認識の甘さも指摘できるところですが----

最後ちょっとひと言。今回の調査では大変貴重な経験をさせてもらいました。そのなかで最も私の印象に残っているのは、女性の強さですね。生々しいインタビューの連続でしたが、皆さん実によく話して下さいました。そのなかで、女性2人が同じようなことをおっしゃっているんですね。一番ピンチの状況のなかで、難病の妹さんを抱えている人と、寝たきりのお母さんを面倒見ている2人の方がおられたんですが、「こんな所で死んでられない。妹や母親の面倒は誰が看るんだ。亭主じゃあてにならない。私がしっかりしなくちゃ、ということで頑張って生き延びたの」というコメントをしてくれまして、さすがに女性は強いな、と。これは実話であり、実感です。

これで終わります。どうも失礼しました。

パネル・ディスカッション

「日本の自然体験活動とアウトドア・マーケットを考える」



パネリスト：磯野剛太、高橋和之、山田俊行

コーディネーター：中村 達

山口 それでは、これより本日のセッションの2つ目、パネル・ディスカッションで「日本の自然体験活動とアウトドア・マーケットを考察する」に移ります。パネラーの方を司会の私からご紹介させていただきます。まず磯野剛太さん。磯野さんは日本山岳ガイド協会の専務理事で、このセンターの専門委員もされています。続きまして高橋和之さん。高橋さんは登山用具の専門店、カモシカスポーツの社長さんです。もちろん登山家でもあり、チョー・オユーという8,000mの山からパラグライダーで飛んだりする、大変な冒険家でもあります。最後は山田俊行さん。現在、安藤百福センターの事務局長をしておりますが、実は白川郷にあるトヨタ自然学校から出向中です。

そして、今日のコーディネーターを務めていただく、皆さんよくご存じの中村達さんです。アウトドアライフデザイン開発機構の代表理事で、ここ安藤百福センターの副センター長です。では、マイクを中村さんの方にお渡しいたします。

中村 中村でございます。どうぞよろしくお願いいたします。節田さんのトムラウシ山遭難の話聞いたあと、続いてアウトドア・マーケットのお話です。本日の磯野さんや高橋さんは、それぞれおひとりでもお客さんを呼べる方です。昨日の丸山先生もそうです。これは豪華メンバーですね。昨日、今日で100名以上の方が聞いていた

だき、「良かったなあ」と言ってくれました。

さて、自然体験活動やアウトドアのマーケットですが、レジャー白書によると、昨年までは600数十万人の登山人口が、今年になりましたら1,200万人に倍増しております。なぜかなと思いましたが、多くはミシュランのガイドブックで三つ星になった東京の高尾山とか、あるいは富士登山が40万人を超えるというような、そういった人たちも統計に入れているんだろうと分析をしております。しかし、それにしても数字がどんどん増えてきている。山ガール・ブームを含めてなんとなく増えてきているけれども、それを私ども、あるいは皆様も含めて、どういうふうこれから分析をしていくのか。そして、それがアウトドアのマーケットにどうつながっていくのか、あるいは貢献していくのか、ということを、今日、これから議論したいと思っております。

ガイド協会のガイドたちも、トレーニングされたガイドの人たちがどのくらい必要かということですが、最低5,000人は必要であろうとされています。現在、ガイド協会の会員は約850名ですので、もっともっと盛んにして、対応していかなければいけない状況です。

高橋 我々の業界は、山とスキーの専門店です。同業者の集まりの団体があったのですが、40年続いたその団体も2年前に解散しました。ふと気がついてみますと、専門店と言われているお店が非常に少なくなりました。名前だけ残っている大きなお店もあるんですけど、ほとんどが買収されています。私自身、山とスキーのお店を47年間ずっとやってきたんですけども、すごく問題意識を持っています。

ところが4、5年ぐらい前から、いろいろもっと山を知りたくなって、北アルプスの涸沢にある山小屋の売店で、無給で働かせてもらいました。1年間にだいたい60日から70日ぐらい入って、そこで登山者の流れというものを肌で感じようと思ったんです。3年ほど前から若い人、特に30をちょっと超すかその前後の女性が非常に増えてきたんです。今は皆さんご存じのとおりものすごいねりで、私自身、52年間山登りをしてきたんですけど、今までの登山ブームとは全く違うパターンですね。皆さん、非常に購買力があるんですね。山も華やかになりました。ここ2、3年の傾向ですが、テントが毎年もう50%以上伸び、生産がアップしても間に合わない状況です。涸沢は今まで多いときでも500~600張のテントの数だったんですが、今年の9月の3連休、そのときの初日は1,200張で、朝、トイレが2時間以上行列待ちだったとか。ものすごいエネルギーで、今までとはちょっと違う。涸沢だけじゃなくて、北アルプス、尾瀬、あらゆる所でテントがものすごく増えてきたのがひとつの特徴です。何か今までの対応とは違う形でその人たちを交通整理しながら、安全登山を考える必要がある。受け皿、ガイド、リーダーの資質の問題、そういうことを真剣に考えていかなくちゃいけないんじゃないか、と思っています。

山田 私は白川郷からこの7月1日付でこの事務局長を仰せつかりました。白川村は人

口 1,800 人の村に、だいたい年間 180 万人ぐらいの観光客が来る所です。そのほとんどが、間違いなく世界遺産の合掌造り集落を見る。ところが、この世界遺産集落の背後にある白山のこと、あるいはその周りの自然について目を向けていただける方は、ほとんどいないというのが現状です。私はその白山と世界遺産集落の間にあるトヨタ白川郷自然学校という所で働いてきましたが、どういう方がこの自然学校を利用してくれるのかということと、実際に提供しようという企画とのギャップに悩みながら今まできているという状況です。ここ 5 年ぐらいの様子を見ていて、やっぱり登山に対するニーズは非常に高まっていると現場では感じておりました。先日、白川村の観光協会がウォーキングをちょっと試験的にやりました。告知期間が短かったんですが、かなりの方が来まして、10 km ぐらいの短いコースなんですけど、山の中を歩いて世界遺産集落も歩くという企画で、非常に喜んでいただけたんです。今までの観光とは違う動きに反応する方も増えてきているんじゃないかな、ということ私は感じています。

中村 やっぱり女性が増えてきている。日本のアウトドア・レジャー人口の流れが変わってきている。これはあとで聞きます。その前に、これから事故の問題が起こるかもしれないと心配です。昔はカモシカスポーツさんのような専門店や街の山岳会に教育システムがあったんです。さらに学校にも山岳部があってワンゲルがあって、そこでいろんな山の技術やマナーを教えていた。

磯野 さっき高橋さんがおっしゃった山とスキーの専門店のご主人というのが、山登り専門の人であったり、アウトドアズマンであったり、そういう方たちが経営をしていて、店員の方もそのお眼鏡にかなった方がいらっしゃったものですから、そこで道具にしても装備にしても、あるいはウェアにしても仕入れられていたんですね。ところが、現在はそれがかなり薄れてきて、ただのスーパー・マーケットの店員さんと同じようなタイプの方がお店に配置されておりますものですから、それを専門的に聞こうと思っても、必ずしもお客さんのニーズに合致していない、という場面も多々出てきてしまっているというのが現状です。

それともうひとつ、教育システムで言えば、まさに今崩壊しております。私どもこの 2 年間、ガイド協会一般ユーザーのための公開講座というのをやっております。毎年 3,000 人から 3,500 人ぐらいの方たちを、全国 8、9 カ所でお相手するんですけども、その方たちのお話を聞いていると、「誰も教えてくれない」、あるいは「教えるを乞うと、無理やり組織に入れられる」と言うんです。組織には入りたくないけども、学びたいんだと言う。徒弟社会から合理的な教育システムへと移行していく、端境期のような気がいたします。

高橋 ちょっと前の世代の時代には、職場のなかにも山岳会があり、ワンダーフォーゲル部があった。私は高田馬場にも店を持っていますが、早稲田だけで 10 幾つものグループがあった。探検部もどんどん山登りしていましたし、山岳部でも新人が 15

人とか 20 人ぐらい入る。同好会、ワンダーフォーゲル部っていうと、だいたいいつも 30 人から 50 人ぐらいの組織でした。職場でもどこでも「3 人寄れば山岳会」なんて言葉があったぐらいで、受け皿があったんですね。今そういうクラブもほとんどないし、あったとしても旧態然としていますから、受け皿になっていない。それからガイドの人たちと一般の人たちとの接点がまだまだ狭すぎる。雑誌も受け皿になってないですね。うちでも今は女性のための気象講座っていうのを始めたけれど、100 人ぐらいの女性の方からアンケートをとると、だいたい 1、2 年ぐらいの人が圧倒的でした。それからだいたい 40 歳前の人が一番多い。70% ぐらいです。あんまりオーバーに宣伝しないでも、いつもほぼ満員になってしまうぐらい。そういう人たちのアンケートを見ると、やっぱり手を差し伸べる人がいない、どこへ行っていいかわからない、と訴えている。これからそういう方たちにどのように手を差し伸べていくかということが、やっぱり利益を上げていくことにもつながる。僕自身は 47 年間商売してきましたが、今は全く違う新しい波だと捉えています。安全とサービスは違いますから、妥協はできないんですけど、今のニーズに合った接客、口の利き方っていうのもありましたね。ファッションもそんなにめっちゃくちゃにきれいにしなくても、やっぱり若い人たちがあこがれるぐらいのリーダーにもなるべきです。

しかし、事故対策は別です。この間、穂高でも、残念ながら小さなお孫さんとお祖父ちゃん 2 人が落石で亡くなってしまったんです。全く違う形態の事故も増えてきました。安全に対して、今まで以上に我々はシビアに対応しなければならない。サービスと安全を使い分けながら、今のニーズに合わせていく時代です。

中村 山ガールのあとに山ボーイができています。森ガールがいて鳥ガールがいて、何でもガール付けたらいいだろうっていう話になっています。ところで、高橋さんがすごく面白い指摘をされました。これだけニーズがある、これだけ新しいムーブメントが起こっているじゃないか。なのに登山業界に受け皿がないんですね。いっぽうで、約 4,000 の自然学校があるんです。そこがどういう状況かと。みんな「お金がない、客が来ない、給料払えん」と言っているんですよ。どうしてですか、山田さん。

山田 どうしてって言われても困りますけど、やはり自然体験という名前で主に収入源になっているのは何かっていったら、学校の受け入れです。修学旅行シーズンのもの、あるいは林間学校の受け入れなど、単価が安くても数をこなすということでなんとか成り立っている。だから今、話題になったようなニーズとは違うところの対応で手いっぱいなんです。儲からないけども人手はかかる。それをこなしているから次の手が打てない、という状況なのかなと思います。

磯野 そうですね。山の世界では、今の言葉でいうと脇目もふらずに仲間を筋肉にしろ、という教育がなきにしもあらずでして、先輩の言うことを金科玉条のごとく守らなければならない。ただ、それはもちろん安全体験とか自然体験に豊富に裏打ちされ

たものですから、とても役に立っていることは間違いないんです。ただ、徒弟社会に近いものですから、今の若い方たちがそれに対応できるかというとそうではない。そうしますと、いわゆる何かスタンダードをきちっと作って、論理的に教育をしていくということが必要かと思います。ただ、逆に CONE の皆さんもそうなんですが、あるシステムが先に入ってきて、それに賛同しておやりになって、自然体験活動あるいは学校作りということになりますと、今度は限られたなかでの活動になってしまいます。欧米、特にアメリカ、カナダといえば、都市部からすぐに大自然があるわけですが、日本の場合は山と海に収斂してしまうんですね。そこで皆さんが、どういう体験活動を消費者のニーズに合わせて展開するかとなりますと、結局、舞台はだんだん山に近づいていってしまう。そうなりますと、単に自然体験活動だけではなく、かなり厳しい世界にまで踏み込んでいって、消費者のニーズに応えていくということが始まってしまいます。これから私どもの世界、山屋さんと自然体験の皆様とどういうコラボレーションをして、全体の底上げと安全管理をうまくもっていくかというのが、これからの大きな課題になってくるように思っております。

中村 10 年ぐらい前に文部省にそそのかされまして、研究会を作ったんです。自然学校を目指す人たちの出口を作ろうということで、アウトドア業界もなんと 24 社入ってくれたんです。しかし、3 回やったときに、「中村さん、マーケットないわ」って皆引いちゃったわけです。つまり、今の自然体験では売るものがない、ということみたいです。そこで高橋さん、カモシカスポーツさんにおける自然体験の需要ですが、具体的に、例えば山登りの用具やテントも含めて、そういう小物の需要、家族需要の出口はどういうふうになっていますか。

高橋 私どもでは専門店として、より深めるところを明確にしながら、遠くからいらしても手に入るような専門的なものを中心に売ってきました。ところが、このごろ穂高の山岳救助隊の若い人たちとの雑談のなかで、若い警察官とかいろんな人たちの悩みを聞いたんです。すると、今は非常に家族連れが多く、大体 30 代から 40 代のご夫婦、若い夫婦が小学生低学年ぐらいからのお子さんを連れてきて、涸沢までじゃなくて稜線に上がり始めたんです。お父さんやお母さんは山の知識はあるけど、子どもをどうやったら安全に登らせられるかということが非常におそろそかで、パトロールしていていつもひやひやしている。そこで僕に「何とかして欲しい」と言うんです。子どもたちの着ける簡単なハーネスですとか、それからお父さんとお母さんたちに安全登山の講習会を、来年から立ち上げようというふうに約束したんです。ウェアで売れるからとか、リュックサックで売ろうとか、そういうことよりも、何かやっぱり我々にも責任がありますから、これをブームで終わらせないためにも、我々が何をフォローしてあげられるか考えなくてはいけない。子どもですから、バランスを崩す前のテクニックを教えればいいわけですね。ロープもザイルじゃなくて、細引きに毛の生えたようなものでいいわけです。

中村 そうですね。今日あんまり時間がないので詳しくは議論できないんですけど、登山という世界があって、それがたまたま山ガールとか今のキャンプとか、自然体験業界と山との中間みたいなファジーなところが今あると思うんですね。しかし、このファジーの部分っていうのは、実は山の技術であるとか安全とか、そういった要素が非常に強い部分なんです。その方法は実は自然体験業界の一番弱いところなんですよ。この辺のスキルアップを強力に推進していかないと、せっかく自然体験業界という良いネットがあっても生かされない。

磯野 先週、福島の実吾妻山という所で登山しましたが、ガイドたちもそういう方向に自分も加わりたいと思っているふしがあります。ガイドたちも、世界中をガイドできるような超専門家たちの集団から脱皮して、自然ガイド系の人たちをたくさん養成するという方向で今、対応しております。その第1段階として、12月にCONEの皆様、指導者の皆様に、ガイド協会の自然ガイド系の資格を取っていただくというような研修会を開催する予定なんです。比較的頭が筋肉じゃないタイプの講師を用意しまして、皆様と話をしながら、安全管理という面を主とした研修会をやると思っています。

それと同時に、今後、正規にトレーニングされたガイドと呼ばれる職能者が日本中に5,000人必要であれば、その枠のなかに皆様がどんどん入ってきていただくということが、非常に重要な要素になってまいります。例えば今、高島トレイルの皆様が組織として、ガイド・トレーニングをしてガイド協会の資格を取っていただくということもやっております。そのなかでたぶん来年に、先ほどトムラウシ山遭難の報告をしていただいた節田さんを中心に、登山に関わる初心者教育のスタンダードというのを、いろんな方のご意見を聞きながら確立して、それを教科書にしてやっていこうという予定です。

中村 山田さん、こういう流れでできているんです。やっぱり僕は白川郷自然学校も、それを軸に取り組みないと駄目じゃないかなと思うんですが。

山田 実は白川郷自然学校でも白山登山のニーズがあり、ガイド協会の研修を受けている者もいます。通常の業務の合い間を縫って行くというので、なかなかうまく時間が取れないで2、3年ぐらいかかっても、まだ資格が取れない。ちなみに今度12月にある自然ガイド・ステージ1の講習会に私も参加しますので、よろしくお願いします。

中村 こういう言い方をしたら語弊があるかも分からないけど、自然体験活動は残念ながら日本のマーケットじゃ食べていけないということが分かってきた。これは実は、アメリカもヨーロッパも同じなんですよ。こういう世界ではなかなかやっぱり食べていけない。日本だけじゃない。ただし、そういうなかで12月の、日本山岳ガイド協会認定の自然ガイドの講習会には期待が持てる。

磯野 今までは、静岡大日倶楽部さんとか、あるいは昔で言うと尾瀬片品ですとか、そう

いう地域社会に根差したガイド組織というものを構築することをお手伝いしていたんですが、今度は自然体験活動をなさってる皆様とご一緒しようという方向に大転換します。これからもその研修を増やしていく予定です。

中村 これは自然体験や野外教育をやっている学生たちにとっては、すごくいいチャンスですね。出口が見えてくるということです。

高橋 私は元々東京の人間なんですけど、信州の山にあこがれて 20 年前に穂高町に会社を移して、私もそこに住まいを持っているんです。そこにお店も作ろうと思ってまして、5 年間やったんですけど、最初は地元知ってもらうために中高年の方を対象に自然教室を企画した。そうしたら、地元の信濃毎日新聞とかが結構取り上げてくれましたから、物見遊山で遊びに来てくれるわけですね。そうすると、ほとんどの人が子どものころに学校登山をやって、山が嫌いになったって言うのです。そこでまず説得して、できるだけ楽でいい山、例えば涸沢まで行き、そこでおでんを食べたり、いい雰囲気を作って、まずそういうところから始めていったんです。学校登山というのは、ほとんど集団で上がる。天気が悪くても行きますから、やっぱり辛い。お腹すいても勝手に食べては駄目だし、景色が良くても立ち止まれないとか、水が飲みたくても今は駄目とかね。もう規則、規則ですね。学校登山の弊害と良さと、これからはそういうバランスを考えながらやっていかなきゃならないのかな、と思いましたね。

磯野 皆様、本日は自然体験活動をひとつのターゲットとしてお集まりいただいていると思うんです。登山人口 1,200 万人といいますが、その中なかで旅行業に関わる方たちが多分 100 万人ぐらいいると思います。ツアー登山というのは、先ほどトムラウシ山の報告でもありましたけれども、そこに参加される方たちというのは、ほとんどその旅行業のなかで育っている。自然体験活動ではなく、山や自然というものを旅行の延長線上で捉えている方たちなんですね。したがって、私どもが公開登山をやっても、そういう方たちはほとんど関心を示さないんです。取り囲まれたマーケットのなかで収斂してしまっている方たちなんですね。もちろん用具という意味では購買層ですので、マーケットには貢献しているんですけども、必ずしもその先に広がるマーケットになっていない。ただ、そのなかに今、エコ・ツーリズムとか、新しいスポーツ・ツーリズムというものが出てきていますけども、今までとは別のノリになりそうな気がするんですね。

子供たちに関しては、私どもも山の修学旅行をやっておりますけれども、実践的に取り組まれる先生方がどのくらいいらっしゃるか、いないか、そこにかかなりの差が出てまいりまして、それを補うのが本来は皆様の役割であったはずなんですけれども、そこら辺がこれからどういうマーケットとしてアピールできるかどうかという課題でしょうね。

高橋 最初は山よりも一緒に信州に遊びに来てもらって、ワインを一緒に飲んで。周りは

全部山ですから、そういう環境になじんでもらって、じゃあ、今度はちょっと上高地まで散策しよう、となる。スキーでもそうですね。やっぱり遊びに来ているんだから、無理強いすると1回で「スキーなんか嫌いだ！」となってしまう。しかし、小さなゲレンデに行くとボーゲンを教えると、大体クルクル回れる。午後の遅めにはひとりで下りて来られる。と、もうすごくスキーが好きになる。山もそうですね。強引に高い山に連れて行くんじゃなくて、やっぱりある意味では安全を確保した上で、じっくりと伸ばす。我々はサービス業だし、自然の伝道師みたいな、非常に気品のある仕事なわけですよ。僕はやっぱりそういう人たちと一緒に行くときは、小さなバーナーとドリップ・コーヒーを持っていったりしたい。やっぱりサービスって大事ですね。山を歩いて休憩したときに、ドリップ・コーヒーの匂いを嗅ぎながら景色を見ると、皆さん感動しますよ。

ですから、涸沢に行くときでもだんだんレベルが上がってきたら、ちょっと違うパノラマ・コースに行くと、稜線に上がるまではものすごく時間をかけて、年数をかけながら山を本当に楽しんでもらう。非常に気の長い例では、雪遊びから始まった子どもたちを招待して、ジャガイモ畑でイモを採って来て、それをテーマに皆でジャガイモ料理を作ったり、少しは信州になじんできたなら一緒に涸沢に行ったり、穂高に登ったり。今ではそんな子どもたち2人が、信州大学山岳部に入りました。何かそういう非常に気が長いんですけど、もちろんプロとして皆さんに伝道していくのと同時に、やっぱり周りにどうやって浸透させるかということが大事だし、楽しい。

山田 私は今、子どもが小さいんですが、先日、山に連れて行ったんです。一番下は5歳なんですけど、雨のなか一緒に登って、顔の周りを虫がぶんぶん飛んで涙、涙で、「上に登れば展望が開けるから」って言いながら頂上に着いたら、ガスがかかって何も見えない。頂上で飴玉渡して、それで「じゃあ、帰ろう」って帰ってきたんですけれども。もう2度と登らないと思っているかどうか分かりませんが、そういう経験をやっぱり自分が親として自分の子どもに伝えていきたいなということを、もう少し本当の自然体験の場、自然学校の場でうまくリンクさせてやっていけたらな、という気持ちを持っています。

今、自然体験という、どちらかというと教育的な雰囲気です。それから観光、特に白川郷なんか観光客がたくさんいらっしゃるんですけど、その観光で来る延長として自然体験をするっていう方と両方います。それらを明確に分けること、意識的に分けて対応していくっていうことは、必要なかなと思っています。それに応えられる指導者の育成っていうのも、やっぱり全体でやっていかないと、ミスマッチが起きてくるだろうな、と思います。

中村 ありがとうございました。数字だけでいきますと、日本のアウトドアはリアルなものです。ミズノが作っているアウトドア・ウェアとか、あるいはノースフェイスと

か、モンベルが作っているものを入れると、だいたい1,450億円ぐらいなんです。このなかにはアパレル・メーカーは入ってない。ユニクロが作ったフリースも山で着ていますが、それは入っていません。アウトドアのメーカーが扱ったものが1,450億円ぐらいです。そういったものを着ているのが山ガール。それから富士登山、野外フェスタ。野外フェスタっていうのは、野外フェスティバルにアウトドアの格好をして聴きに行くんです。これだけなんです。バーベキューして帰ってくるんです。

もうひとつは観光立国です。僕が観光庁にいつも申し上げているのは、外国人観光客を誘致しても、秋葉原で50万円、ヨドバシやビックカメラで30万買ったというのは、あまりにも品格がない。それより日本にはこれだけ素晴らしい自然があるんだから、そこへ誘導していくような、そういう観光政策が必要だと申し上げているんです。この辺が確立して初めて、日本の自然体験とか、自然体験型観光というのが成立するんじゃないかなという、ほのかな期待を持っております。

そろそろ時間が迫ってまいりました。それでは、パネリストの方、何か言い残しがあつたらお願いします。

磯野 はい、一点お話をさせてください。日本の登山界っていうのは非常にコンサバっていますか、古い体質でして、ガイド協会なんか小童みたいなもんです。日本山岳会や日本山岳協会とか、勤労者山岳連盟とか、たくさん説得しなければいけない会つていうものがあります。私はその前に、今日は丸山さんもおいでなんですが、全日本スキー連盟、あるいは日本職業スキー教師協会の皆様とコラボをした方が早いかなと思って、その動きをしております。特に職業スキー教師業界の皆様は、CONEの会員でもある方がかなりいらっしゃると思うんですが、冬はスキーのインストラクターで、夏は登山のガイドというパターンがかなり定着してきています。それはそれで良かったとは思いますが、来年はその責任を感じて、大先輩たちを説得して、きちんとしたスタンダードを作っていくという、元年になるというふうに思っております。

中村 時間が参りましたので、このあたりで終了ということにしたいと思います。パネリストの皆さん、どうもありがとうございました。昨日、今日と2日間にわたりまして「アウトドア・フォーラム 2011」を開催したわけですが、これをもちましてすべて終了したいと思います。2日間、皆さんご参加いただきまして、ありがとうございました。

第2回環境思想シンポジウム

「ネイチャー・ライティングと環境思想」

2012年3月29日

開会挨拶

岡島 成行（大妻女子大学教授、安藤百福センター・センター長）



このシンポジウムは、毎年3月の終わりにやるのが恒例化し始めておりますけれども、昨年を第1回として、今年は第2回ということで、立教大学の野田先生に来ていただきました。皆さん、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、ネイチャー・ライティングといまして、元々はノンフィクションの世界だったのですが、アメリカでは自然を舞台

にした、ちょっと異質な感じの文学ジャンルがあります。このネイチャー・ライティングというジャンルは、アメリカではかなり確立されたジャンルです。皆さんもアメリカの本屋さんに行かれると分かりますが、「ネイチャー」という本棚のコーナーがあって、そこに行くときさまざまな作品が並んでおります。その分野の専門家でいらっしゃる野田先生にお話をいただいて、続いて昨年も講演して下さった東京大学の鬼頭先生に、環境倫理の立場から現代の文明についてのお話を伺いたいと思います。

それでは、講演に移りたいと思います。最初に、立教大学教授の野田研一先生にお越しいただいておりますので、野田先生、よろしくお願いいたします。

講演(1) 「アメリカのネイチャー・ライティングを語る」

野田 研一（立教大学教授）



立教大学の野田と申します。今日いただいているお題は、ネイチャー・ライティングと環境思想です。さらにタイトルを見せていただくと、環境問題に対して文学はどう貢献できるのか、というようなお題も出ておりました。アメリカのネイチャー・ライティングを語るということで、サブタイトルを付けてみました。それは「野生の観念を巡って」です。

私は元々アメリカ文学を専門でやっておりますけれども、どうしても野生の観念、ワイルドネスの観念っていうのが、違和感もちろんあるんですけど、非常に魅力的なものとして映るというあたりのことを、ネイチャー・ライティングとは何か、みたいなことと絡めてお話しできればと思っております。

それでは最初に、環境問題に対して文学はどう貢献できるのか。一般的に言うと、文学研究者は環境問題にほとんど関心がない、と私は思っております。私自身も実はそういう人間なので、これがまた厄介なんですけど、元々文学研究とか文学の方というのは、社会問題というものに危機感を持つというのが一般的にないと思います。初めに問題ありきのような発想はあまりしたくない。もっと自由でいたいということもあると思います。それが、例えば政治と文学というのは、1960年代くらいには話題になりました。その場合の文学と政治は、サルトルなんか問題にしたところでもありますけど、政治的な問題からできるだけ遠ざかりたいっていうのが、一方で文学研究者に結構あって、それが、社会的な問題に対して意識が希薄だとかっていうような傾向が出てくるというのはあると思います。とはいえ、この10年とか15年くらいの文学研究というのは、むしろ積極的に政治的な問題とか社会的な問題に関わろうという雰囲気もないわけではない、ということを指摘しておきます。

環境問題に対する文学からのアプローチというのは、1990年代の初めに動き始めたと考えてよろしいかと思います。80年代の終わりくらいから動き始めるんですけども、アカデミックな形で本格的に出てくるのは90年代です。1994年にASLE-Japan 文学・環境学会というのができます。私はそのときの創設メンバーの1人なんですけど、これは、アメリカに前の年、ASLEができた。「アズリー」と読みますが、これは、Association for the Study of Literature and Environment のことです。今ではイギリス、韓国、オーストラリア、ニュージーランド、ヨーロッパ、台湾、インドにできて、さらに東南アジアでも動きがあるといったところです。それなりに連携しながら国際大会を開いたり、というよう

なことをしております。

文学研究のなかで、自然環境の問題に焦点化した文学批評あるいは研究というのを、エコクリティシズムといいます。そういった研究が出てきて、今はおそらく文学研究方法論みたいな、入門の本もあります。日本の場合はないんですが。

それから、環境とか自然に焦点化した作品のことを「環境文学」という言い方をします。Environmental Literature の略語です。本日中心になるのは、ネイチャー・ライティングというカタカナ語ですけども、この2つ、環境文学とネイチャー・ライティングはどう違うかということをお話しさせていただきます。今日の僕のお話の項目としては、ネイチャー・ライティングという問題を最初にお話しして、それから2番目は現代のネイチャー・ライティング。それから3番目にネイチャー・ライティングに絡む日本文学の状況についてお話ができればと思っております。

最初に「ネイチャー・ライティングとは？」という形でお話しします。ネイチャー・ライティングは、英語としては、どうも19世紀の終わりぐらいから20世紀の初めごろ、アメリカで使われるようになった。アメリカの研究者に従うならば、20世紀の初め、アメリカで使用された。それ以前は、このジャンルのことは、どういう英語で言っていたかという、だいたい「ナチュラル・ヒストリー」という言葉でした。20世紀に入って、特に先ほど申し上げた1990年代以降、アメリカで環境、いわゆるエコクリティシズムというジャンルが確立して研究者が出てくると、ネイチャー・ライティングという言葉が明確な定義を持って出てくるようになる。

実際のところアメリカでは、もう90年代にアメリカのネイチャー・ライティングの歴史というものが、ほぼ整理されてしまいます。120人ぐらいの作家がいて、どんな作品があつて、どんな分野がある、というのがどっと整理されています。実は、ここは全く日本が手をつけていないところです。どんな作家がいて、どんな作品があつて、どんな歴史があつてということが、日本のネイチャー・ライティングに関しては全くなされていません。日本にそもそもネイチャー・ライティングはあるのか、という問題すらやらないわけですね。これは残念なことですけど、本当は日本文学研究者がやらなければいけないことなんですが、彼らははあんまり関心がないんです。

ネイチャー・ライティングの基本的定義は、自然に関するノンフィクション、エッセイですね。自然を主題としたノンフィクションのエッセイ。つまり、自然を主題としていることがひとつ。それからノンフィクションであるということですね。フィクションではないという。つまり小説ではないし、演劇でもないし、詩でもないんですね。エッセイになってしまいます。ノンフィクションの部分が大事です。そういう意味で、文学研究の中心にならなかった。文学っていうと、だいたい小説って我々は思うんですね。それをアメリカの場合は、1990年代前後にきっちり研究対象にしようとしたということです。残念ながら日本はまだです。

ネイチャー・ライティングとは何か、ノンフィクションの自然を主題にしたものという

ふうに申しあげましたけれども、3つの要素があります。1つ目は自然史的情報ですね。つまり自然についてのインフォメーションなんです。ハチについてでも、気候についてでもいいでしょうし、山の地形でもいいでしょう。自然についての情報があること。2番目は個人的反応です。パーソナル・リアクションといいます。自然について自分はどうかうふうにリアクトしたのか。書き手が、ですね。それが書かれていること。それから3番目に思想的解釈、あるいは哲学的解釈でもいいんですけど、自然とは何かということを、かなり整理した形で提示すること。自然について書かれていて、私の反応が書かれていて、なおかつそれを複合させた形で自然とは何かという、書き手なりのひとつの答えを出していく、というようなものだと考えられます。

つまり、1番と2番が複合しているということですね。自然史的情報だけだと、これは理科系の学問になっていくわけです。つまり、客観的な情報をきちっと伝える。しかし、それだけでは自然についての詳しいライターであったり、研究者が、啓蒙的な形で自然のできごとを語っている、サイエンス・ライティングというものがありますけれども、そういう形になるか、あるいはもっと厳密な学問的なものになっていくと思うんです。

2番目が、つまり、私はそれについてどう思うか。ここが文学になる理由だと思うんですね。大変面白い。ネイチャー・ライティングは、要するに理科系の文学だというふうな言い方もされますけど、理科系でありつつ、なおかつ文科系である。あるいは自然を、客観的なものと主観的なものとを折り合わせていく、そういうジャンルだと考えると面白いな、と思っております。

このネイチャー・ライティングというジャンルが出てくる背景を、2つだけお話しておきます。1つはロマン主義ですね。元々英米というか欧米の文学だけでなく、文化とか思想もそうですけど、自然への傾斜っていうのは、ごく最近の近代的なできごととして考えられます。文学における自然への傾斜、つまり、自然を詠うとか自然を語るとかいうことを夢中になって始めるっていうのは、大体18世紀から19世紀あたりがピークを迎えるわけで、これがロマン主義というものです。この時期というのは、だいたい18世紀から19世紀あたりをお考えいただきたい。ヨーロッパの場合は、風景画というジャンルが隆盛を極めるという時期でもあるんですね。そして自然詩、つまり自然を詠う詩が文学の世界に出てきます。中心的なジャンルとして出てきます。ワーズワースとか、シェリーとか、キーツとか、バイロンとかいわれるような、イギリスのロマン派の詩人たちなんですが、この人たちの詩が形作られていく時期と風景画の時代はほぼパラレルで、この2つは姉妹芸術であろうと思われます。風景画と自然詩は相互にも影響を与え合っています。風景画の描き方を言葉の芸術のなかに転用していくということは、しょっちゅう起こっています。

それから3つ目として、ロマン主義の背景にはキリスト教があり、ロマン主義はキリスト教の世俗化というふうにも言われる現象なんですね。つまり、風景画とか自然詩を描くというのは、キリスト教のひとつのパターン、バリエーションだと考えていいと思います。ロマン主義的自然への関心の持ち方というのは、自然に関心を持つことを通じて神に近づ

いていく、という回路を作っているわけです。自然が神へのアクセス・ポイントになっています。これを超越論、つまり自然という回路を通じて神の方へ行く。人間が神へ直接行くんじゃないくて、自然という回路を通じて行くという、ひとつの強力な構図が、この自然詩と風景画のなかで出てくるのです。

いずれにしても、自然詩と風景画というのは、同時にどちらも宗教的なもの、キリスト教的なものを内包しているわけですね。風景画で谷間の風景だとか、森の風景だとか、執拗に描くようになるのは、なぜ意味があるのか。それは、基本的には神へのアクセス・ポイントだからです。つまり、宗教として見ているんですね。逆に言うと、自然がそういう役割を果たすようになってきた。これがロマン主義的な自然というもののポイントかと思っています。

それから、このロマン主義的な自然への傾斜というのは、のちの環境思想の有力な原泉でもあると思います。つまり、意外に文学思想というものが、のちの環境思想と深い関わりを持っていて、あるいは新しい時代を切り拓いていくような役割をしてきた、というふうに言っていきたいと思います。

ところでアメリカの場合、ネイチャー・ライティングというジャンルが出てくる理由は、もっと特定化できます。これは、ヘンリー・デイヴィッド・ソローという作家がいるということです。ソローの『ウォールデン—森の生活』、これは1855年に出たものですが、日本でも確か15種類以上も翻訳があって、かなり早い時期から読まれている。世界中で読まれている、バイブル的な存在でもありますね。これが正しくネイチャー・ライティングであり、ひとつの祖型となったものだと言っていきたいと思います。

『ウォールデン』には、3つの要素があります。直接的な自然体験に基づく自然科学的事実の重視、つまり、そこに住み、暮らす、そこでの観察に基づいた **Facts** の重視ということがあげられるかと思っています。それから2番目には、語り手ですね。その書き手は一人称単数、要するに「私」っていうのが語る。I という人称代名詞を、自分は大事にするということを言ってるんです。つまり、自然科学的な方法で語るという、私のことと関係なく世の中のことが語られるというような、あるいは自然を語ることをしたくなかったのだと思います。私が語るんだ、ということを強調しているわけです。そして3番目に、自然を根拠とした文明批判と社会批判をしています。世の中の、社会の人たちが一般的にどんなバカなことをしているかっていうことを、自然を視点に置いたときに見えてくる、というようなことを書いているわけです。盛んに書いています。これは先ほどのネイチャー・ライティングの3要素と対応しています。

ソローの『ウォールデン』の時代に、ネイチャー・ライティングという英語はなかっただろうと思いますから、ソローはネイチャー・ライティングという言葉で書いていません。ナチュラル・ヒストリーという概念で書いている。そのナチュラル・ヒストリーを新しい形に変えていったというのが、『ウォールデン』という作品だろうと思いますが……。

ネイチャー・ライティングが継承しているものとして、ソローを原型とするアメリカ的

なジャンルとして成り立ってきた。20 世紀に入ると、至る所にソロー的な人が出てきます。で、そういう作品を書くということが起こります。ただし、文学研究の本流ではないし、文学研究者は関心を持たない。しかし、なぜかソローだけは文学の主流に残って、文学史のなかで必ず教えられるっていうふうになるんですね。

そのネイチャー・ライティングが継承しているもののなかに、Wilderness とかワイルドネスがあります。Wilderness はご承知のとおり「原生自然」とか、あるいは「荒野」とか、「大自然」と訳してもよろしいかと思います。いっぽう「野生」というワイルドネスの観念を中心とする考え方、これはペリー・ミラーというアメリカの研究者が随分早くに、アメリカは Nature's Nation である、ということを言っているわけです。つまり「自然の国家」、自然をベースにした国家なのだ、と。これを学生さんなんかに話すと、意外に思われるんですね。アメリカっていうのは、どうしてそんなふうに言えるのか。20 世紀、21 世紀のアメリカは、とてつもない文明を持ち、高度なテクノロジーを持ち、環境問題にもあまり積極的じゃないじゃないか、みたいなことも含めて、アメリカがそういうふうに括られることを奇妙に思う方もいるんです。アメリカのなかでの意識のひとつは、Nature's Nation ということですね。これは 19 世紀以来、あるいはもっと前から、アメリカがヨーロッパに対して対抗意識を持つ形で、自分たちの文化のあり方を考えてきたひとつの形だだと思います。それからもうひとつは、アメリカ的な自然風景の美学というのがあるということです。これらをベースとして、ネイチャー・ライティングというのが成り立つんだらうというふうに思われます。

次に、風景美学の話をさせていただきます。ハドソン・リバー・スクールというんですけど、「ハドソン・リバー派」というアメリカの風景画家の集団が 19 世紀に出てまいります。アメリカの風景画を見るっていう経験は、日本ではほとんどできないです。元々関心がないと思います。アメリカで風景画家というのは、そんな者がいたのかというふうに思われるほどマイナーですが、アメリカにとっては非常に重要な画家たちです。一種、ナショナル・トレジャーでもあるんですね。これもネイチャー・ライティングの大きな背景だと思います。

先ほど申し上げたように、絵と文学っていうのは姉妹関係にあると考えていいと思います。トマス・コールとアッシャー・B・デュランドという画家たちが、アメリカ・ロマン主義を体現する多様な風景画を生み出します。これをハドソン・リバー派、つまりニューヨークを流れているハドソン川をずっと北に上がっていくと、そこに画家たちが好んで描き、住み着いた場所があるんですね。だから、そこからハドソン・リバー派と言われるようになります。

この時代の代表的な人にトマス・コールがいます。画家集団のリーダーだったんですけども、彼が 1836 年に描いた絵をご紹介しますとおきたいと思います。とりわけ風景画のひとつのピークのような絵として、世界的に評価されているものです。山の上から見た風景、これは非常に単純で、ある面では縦に真ん中に 1 本、横に真ん中に 1 本、線を引いてしま

えば、上の空と空が左右で対称になりますよね。晴れた空と雨雲のある空と。右側は晴れて光が当たった黄金色の畑と、それから左側の Wilderness、野生の自然という構図で、アメリカそのものといえる。パノラマ的な風景をこの角度で描くのは、実は至難の業で、相当なテクニックがあるんだというふうにも言われています。それから、奥の方に山がありますけども、空の際の所に何か模様があるんですが、あれは森が空き地になっているような、カットされたような、そういうふうにも見えるんですけど、これは研究者によると、ヘブライ文字が書かれ、埋め込まれているのです。先ほども申し上げた、宗教的な問題が入り込んだりしています。キリスト教的な神の意思の表れとか、十字架とかいうものを暗に示す。こういった形で、風景を描きながら宗教的な問題、それから思想的な問題を考えるというのが、風景画というジャンルだと思います。自然と神という問題は、ヨーロッパやアメリカにとっては、非常に重要なものです。その密接な関係を抜きにして、自然観っているのではないというわけです。それを、自然を通じて神へという回路を作り出していくのが、自然を詠う文学であり、絵画であると言っているんです。

美術史の学者は、19世紀初期のアメリカでは、神が存在しなければ自然はあり得なかった、と言っています。どうやら神も自然を必要としていたらしいということです。自然を描くということは、超自然を描くということです。自然を超えたものを描く、自然の向こう側にあるものを描くということになっていて、今ご覧いただいた風景画も、自然を描いているんですけども、自然の向こう側を語ることになります。これを、文学や風景画を通して見ていると、この時代の人たちは、本当は自然を見ているのだろうか、それとも神の擬態から自然を手掛かりにしているのか、つまり、目的はどっちなんだという問いが立てられる。すなわち、この時代のロマン主義の作家とか画家たちは、いったい何を見ていたのかという問題が残るだろうと思います。そこを、次の 20 世紀のネイチャー・ライティングが問題にしていくんだと思いますが----

トマス・コールという風景画家は、アメリカ風景論を 1936 年、先ほどの絵と同じ時期に書いているんです。これと「アメリカの美術史」という、非常に重要なエッセイなんですけども、この中で、ヨーロッパの風景は、要するに自然を徹底的に改変してきた歴史なんだ、と。だから、ヨーロッパの風景画は、当時流行しているんですけども、あれはアメリカ的な観点から言うならば、全く自然のかけらもないものだ、っていう言い方をしています。それと対比してアメリカの風景が最も際立っているのは、この点、つまりワイルドネス、野性的であるということです。野生も自然であるというふうに言うわけです。これが、アメリカの自然とヨーロッパの自然が画然と違うところである、と。これは面白い問題で、つまり、自然がヨーロッパみたいに痛めつけられていませんので、新しいんです。新しく、かつ、実は古いんだってことですよね。太古からの歴史を秘めているわけで。新しくかつ古いっていう、アメリカ的なプライドみたいなものにも関わってくる問題になると思います。

次に、そういう意味で、アメリカ文化の基盤として、その自然と風景という問題を考え

ることができるでしょう。特に自然と風景は、Wilderness という概念に収斂していくところがあるだろうというふうに思います。ペリー・ミラーという歴史学者は、自然はアメリカでは Wilderness ということを意味する、と書いています。

2 番目にあげたのが Wilderness。American Heritage という辞書が出している基本的な定義のひとつはですね、人がいない、開発されていない、自然状態で残されている場所、これを Wilderness という。つまり人間が関わらない場所ということです。これを Wilderness といい、それがアメリカでは自然を意味する度合いが高い。なおかつ、自然の問題、風景の問題は、当然ナショナリズムの問題と結びつきます。先ほど言いましたように、ナショナル・プライドとしての風景という問題が出てきます。ナショナリズムの問題と絡んで、自然を巡る宗教が実質的に国家的宗教だなんていった時代、これがアメリカの 19 世紀であるということも言われています。現代のアメリカの環境保護姿勢にも、足跡を残すだろうというふうに思います。

今度は、現代のネイチャー・ライティングス。ここまで、歴史的な背景としてアメリカのなかで幾つかの要素があって、自然への関心が強いということを話したんですけども、エドワード・アビーという作家、あるいは現代の、20 世紀のネイチャー・ライティングはどんなことを考えているのかというお話をさせていただきます。特にエドワード・アビーに焦点を当てます。この人の作品は、日本では『砂の楽園』というタイトルで、東京書籍から翻訳が 1990 年代の初めに出版されました。ネイチャー・ライティング研究が盛んになる前後に、出版界でも動きがあったんですね。日本でエドワード・アビーの翻訳が出たことは画期的なことだ、と私は思いますが、売れませんでした。もう 1 冊、『モンキーレンチギャング』という作品ですけども、アメリカの人たちはとても喜んで読む。ドタバタめいた小説、環境テロリストの小説なんですけど、それが翻訳されています。これもたぶん、もう初版で終わっているだろうと思います。彼はアメリカ南西部のアーチズ国立公園のレンジャーをしているんですね。そこであったできごとを、もちろん人間とも、観光客とも出会いますし、それから自然のなかに入ってもいきますけども、そのできごとを書いたエッセイです。『ウォールデン』ふうの典型的なネイチャー・ライティングのエッセイなんですけども、それを書くにあたって、そのちょっと前に日記を書いて、こんなことを記しています。大変面白い文章で、僕は見事な彼の作品の要旨だと思います。「砂漠では人間は直接世界と出会う。それは、人間の意識の投影としての世界ではない。そうではなくて、それまで芸術や科学や神話による解釈を受けたことのない世界。その上に人間の足跡のない世界。あの自閉した人間の世界といかなる繋がりも持たない世界だ。砂漠では、人は直接向き合う。あの存在の骨格、あのむき出しの理解不能な絶対的な現存」というようなことを言っています。この文章のポイントは、砂漠というのは人間を裸にしまって、何もない存在として、直接出会う世界を創り出すということなんです。彼は、砂漠というのを選んでるわけですね。アメリカの desert は、必ずしも砂の砂漠ではないんです。サハラ砂漠ではないんです。それでも乾燥した、植物の稀薄な、生物も稀薄な、そういう場所、

人はとても住めない場所。そこをこの作家は選んだ。なぜならば、そこは人間が直接世界と向き合える場所だからです。逆に言うと、人間の意識の投影として自然を見る。芸術とか科学とか神話の解釈を受けて自然を見ることを、彼は回避しようとしているわけです。

芸術や科学や神話っていうのは、理解しようとしてきたものですけど、むしろ理解できない世界、それを絶対的な現存という言い方をします。「現存」は *isness* という英語なんですけど、要するに現在そこにあるということですね。つまり、それ以前に人間が知識を蓄えたものでもなんでもなく、そこで突然不意に出会う自然です。それを非常に重視していることは分かります。要するに自然っていうのは、今、ここにある。しかも人間の意識以前の世界、それを考えていくわけです。要約すれば、アメリカ的な *Wilderness* 思考をさらに推し進めて、人間とは全く関係のない世界としての自然っていうのを彼は頭のなかに描きながら、同時にロマン主義が保持していたキリスト教的な超越論とか、あるいは美意識、風景美意識も捨てる。捨てるを得ないわけです。砂漠に出会ったら、自然を徹底的な他者として捉えようとする思考を打ち出していく。これは彼特有ではないと思います。自然というのは、少なくともアビーにとっては、人間の意識の投影としての世界ではない。理解不能な絶対的な *isness* の世界なんだ、と考えているからだと思います。

アビーはもう亡くなりましたけども、アニー・ディラードとか、バリー・ロペスとか、リチャード・ネルソン、テリー・テンペスト・ウィリアムズといった、アメリカの現代の作家たちがたくさんおります。かなりは翻訳されているんですが、売れないまま絶版状態です。

ロマン主義というのは、言ってみれば、ひとつのコードを作ったんですね。つまり、規範を。美学とか、自然を見る態度とか、価値観とか。それが超越論、風景美学、それから人間中心主義というふうに括れるような自然観、この3つを合わせた自然観だと思いますが、それを脱却して本来の体験の場、今ここで私が自然と出会う、そのことについて知っているか知っていないか、つまり、知識としてあるかどうかはもはや問題ではない、と言わんばかりです。現体験の場に向けてのポストロマン主義へと、20世紀のネイチャー・ライティングは動いてきました。これを「認識論的野生」と言っています。

風景画の美術史の分野でも同じようなことが言われていて、「風景から土地へ」という言い方を *Malcolm Andrews* という美術史の専門家がし、5、6年前に出した本で、風景画の再検討をしております。そのなかで、*Landscape into Land* と言い出している。つまり、かつては *Land* が *Landscape* になったんです。ただの自然が、風景として眺められる美意識の対象になったんですけども、それがヨーロッパの風景画の歴史だったと思いますが、今20世紀から21世紀の風景画の問題というのは、風景を解体して、もういっぺん *Land* へ戻っていく思考に向かっている。これも、風景美学という形で確立されたものを壊していく動きとして、風景画の世界でも出てきているんだということが言われています。

3つ目ですが、日本文学を巡る状況をざっとお話しさせていただきます。ネイチャー・ライティングというのが概念として日本に入ってきて、そのことをどう考えればいいのか

ということが分からない、難しい状況にあります。

昨年の 7 月に、『環境という視座 日本文学とエコクリティシズム』という本を作りました。立教大学が主催して国際会議をやりました。日本文学をエコクリティシズムの観点から読もうということで、アメリカとかヨーロッパの方、日本文学研究者も含めて議論をしたんですが、そのときの記録がこの『環境という視座』という論文集なんです。けれども、そのブックカバーがなぜか花札なんですね。花札ですが、ちょっと図案を見ていただくと、花札の外に鳥がいたり、花びらがあったりします。というのは、日本文学の開催する座談会のなかで、花札というのは日本の自然表象というもののひとつの結晶体のようなものだ、大変面白いものだという議論があったんです。が、ただ花札を並べたのでは、ちょっとつまらないなというので私が考えあぐねていたら、ある学生さんが、鳥や花が外に飛び出したら面白いですね、って言うてくれたんです。この花札というフレームの外にちょっと出たり、あるいは入ろうとしたりっていう、そういう図案をデザイナーの人と相談して考えました。

つまり、花札っていうフレームは、ひとつの見事な美学、日本の美意識のひとつの形だと思うんですけど、そこから自然に飛び出していくぞという気持ち、あるいは、その自然表象では捕まえられないものが自然なんだ、というようなことが、この花札で表現できるなということがあります。

ハルオ・シラネというコロンビア大学の日本文学の先生がおります。この方は、それぞれ自然の観点から日本文学を読み直すという本を作っている。もうほぼでき上がっていて、刊行が遅れていますが、大変面白い仕事になると思います。アメリカで日本文学を研究しているこの方、日系ではあるんですけど、研究者が日本文学を、エコクリティシズムの観点から読んでいくという、画期的な本がアメリカから出てくる。これが若干厄介ですね。日本から出てくると面白いんですが、アメリカから出てきます。これは乞うご期待だというふうに思いますが、その冒頭部分でハルオ・シラネさんは、「自然との調和」という神話が日本にはある、ということをおっしゃっていて大変印象的です。日本は農業国であり、日本人は農耕民族であった。農業は季節や天候に支配される。その上、日本は気候が温暖で、四季が緩やかに推移するという特色を持つ。西洋人が自然と戦い、自然を克服しようとしたのに対し、日本人は自然と共存し、自然と一体になることを願ってきた。これが日本の文学というものを総括した言葉なんですね。つまり、日本文学は自然にとっても強い関心があって、その文化的な伝統を持っているんだということが、見事に表現されています。しかしこのところは、問わなければいけない。西洋人は自然と戦える、日本人は自然と共存する、という考え方は神話だと思うんですね。僕は本当かな？ とずっと思っています。じゃあ日本では、公害問題は起こらなかったかという、起こっています。さまざまな問題が、日本で起こってきているわけですね。これは自然との調和という神話が我々の自然観のなかにあって、それが逆に本当のところを見えなくするものを持っている、ということがシラネさんの指摘です。

つまり、今まで述べてきた言葉で言うと、風景から Land のほうへ向かう思考、あるいは現存、isness の世界を見ようとする思考、あるいはそれを野生、認識論的野生と私は申し上げましたけれども、Wilderness とかワイルドネスの方へ向かおうとする思考、つまりは花札のフレームの外側に出ようとする思考を持った作家たちの作品がないのか、ということですね。

ひとつあげますが、太宰治の『津軽』という 1944 年の作品です。これはなかなか素晴らしい文章なんです。津軽を彼は故郷としているわけですけども、そこを訪れて、乳母にも出会うという物語。紀行、旅行記であり物語なんですけども、このなかで、もう見事な風景論を展開しています。つまり、津軽で出会った風景というのは、それはもはや風景ではなかった、と彼は言うんですね。風景っていうのは、人間がさまざまに手を加えて、眺め、形容し、それから人間の目でなめられて、人間に飼い慣らされてしまった人くさい匂いのするもの、これが風景なのだ、と彼は考えていて。その意味で言うならば、津軽の風景というのは、てんで風景にもなんにもなっていない。絵にも歌にもなりやしない。そういう場所なのだってことですね。一種の衝撃を受けて、うつむいて歩いている、みたいなことを書いているんです。

つまり、風景を見ていないですね。すなわち、美意識があって風景というのは成り立つんですけど、そういう意味で言うならば、風景以前というものを彼はここで、津軽というものを介して発見した。絵にも歌にもならない世界ですね。それを認識論的野生の発見と言ってもいいかと私は思っております。風景という問題の急所を見事に衝いている文章だと思います。

それから、もうひとつは夏目漱石です。夏目漱石の『三四郎』のなかに、こんな一節があるんですね。これも衝撃的でした。アメリカの研究者でこの部分、自然を翻訳するという問題を、一冊の本にした人がいる。それくらい重要な文章なんですけど、こんなものあったつくと、あとで思うくらいですが、引用文を読みますね。

「君、不二山を翻訳してみたことがありますか」と意外な質問を放たれた。「翻訳とは.....」「自然を翻訳すると、みんな人間に化けてしまうからおもしろい。崇高だとか、偉大だとか、雄壮だとか」三四郎は翻訳の意味を了した。「みんな人格上の言葉になる。人格上の言葉に翻訳することのできないものには、自然が毫も人格上の感化を与えていない」

これも風景論なんですね。自然、富士山を翻訳する、つまり我々は富士山を見るときに、富士山を翻訳してるんだ、と。富士山とは偉大であるとか、ここで言えば崇高だ、だから富士山は素敵なんだというふうに。これは風景美学のなかに入って、富士山を見るということですね。富士山を、それこそ isness を見ているわけではないんですね。そうではなくて、人間の観点に入り込むことができないと、どうも影響を与えないんだということを、

もう『三四郎』の時点で漱石は鋭く見抜いています。これはやっぱり英文学をやった人だと思いますね。英文学は、その時代のイギリス文学をイギリスへ留学して勉強し、よく理解したということが分かります。

最後に、石牟礼道子の『苦海浄土 わが水俣病』という作品のなかで、度肝を抜かれた一節があります。ここを引用させていただきます。なにげないんですけども、『苦海浄土』のなかに、山中九平という水俣病を患っている少年の家を訪ねて行く場面があります。その少年は野球が好きなんですね。庭で野球の真似事をして、バットでボールを打とうとして、それからまた打ったボールを取りに行く、みたいなことを繰り返している。体が不自由なんですけど。その山中九平少年を見ている場面で、石牟礼道子さんはこんなふうに書いているわけです。

「地面から息を放っている草々や木々や石ころにまじって、私も呼吸を合わせていた。」

呼吸を合わせていたというのは、野球をしている、その少年との呼吸を合わせていくっていうふうにも読めますが、このときに「草々や木々や石ころにまじって」という表現を石牟礼さんはしてるんですね。つまり私はこのなかに入っているんだ、っていうこと。石牟礼道子という人は、「草々や木々や石ころにまじって」るっていうふうに書いてしまう人なんですね。そこに呼吸を合わせていた。これが『苦海浄土』という作品を成り立たせるスタンスなのかな、っていうふうに思いました。つまり、自然に対してこの作家はどこにいるかっていうと、人間とそれこそ対立的な自然っていうふうに考えてなくて、交じっていると感じているわけです。

現代日本のネイチャー・ライターという方々の名前をいろいろ見てみます。これが文学的に整理されたりして、もっと見えるようになるといいかな、というふうにも思っています。

以上です。ありがとうございました。

講演(2) 「現代の環境倫理」

鬼頭 秀一（東京大学教授）



私は環境倫理が専門なんですけど、今回は「ネイチャー・ライティングと環境思想」ということなので、その関係のことと、それから現代の問題ということで、原発の問題と3.11の災害をどう捉えるのか、ということをお話します。

昨年のこの研究会も実は3.11直後だったものですから、今回もちょっと似ている感じなんですけども、やっぱり1年たって、我々が考えなきゃいけないような問題というのも出てきている。今の野田先生のお話を伺って、ネイチャー・ライティングと環境思想は関わりが深いことを感じました。

一般的に環境思想を考えると、1970年代に、これは特にアメリカを中心として環境倫理としてある程度形になってきた。人間中心主義から非中心主義への転換というようなことですね。もうひとつは90年代に、これは特に1989年からの地球環境問題という国際的な動きのなかで、世界的にグローバルに環境思想が問われるようになった。人間がどう自然と関わるかということが、哲学的にも非常に重要だと言われ、多くの国際会議のなかで、アメリカの環境思想がグローバル・スタンダードとして語られた。しかし、その結実としての1992年のリオ・デ・ジャネイロのサミットは、ある意味でそれを裏切っているというか、違う展開になってくる。

つまり、途上国の問題が浮き彫りになり、あるいは先住民族の人たちの思想の問題が出てきた。権利の問題みたいなものが、実は90年代以降の環境の思想的な枠を形成してきている。

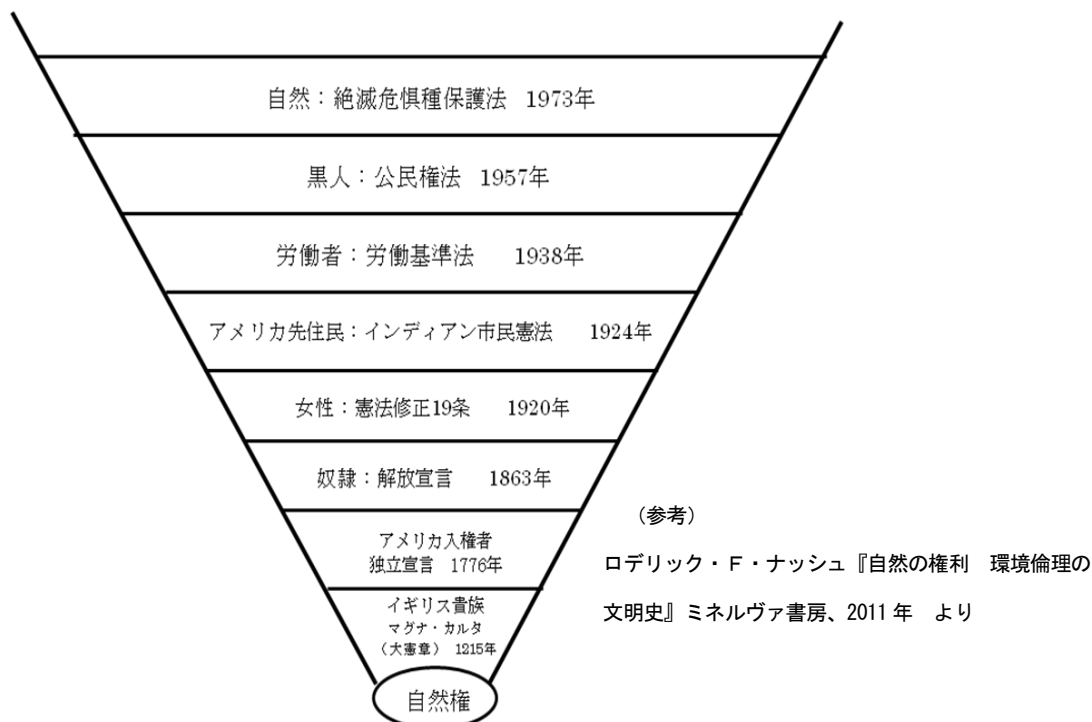
今年はリオ+20になりますけども、リオ+5、リオ+10、リオ+20というように、リオ・サミットを原点で固めるのは何かというと、まさにそういう問題が国際的な枠組みのなかで作られたということだと思うんですね。

70年代においては、基本的に動物の開放とか、ディープ・エコロジーとか、自然の権利もそうなんですけども、結構突き詰めると面白いテーマが出てきた。ディープ・エコロジーとは、ある意味ではヨーロッパのロマン主義ですね。17世紀、18世紀にロマン主義で語られてきた伝説みたいなものが、どんどんディープ・エコロジーのなかで語られていくわけです。

実は70年代というのは、ひとつは今までの人間中心主義的な枠組みみたいなものを変

えていこうという時代です。そして、80年代終わりから90年代のいろんな国際会議のなかで絶えず使われるのが、ナッシュの図式です。ナッシュに関しては、日本語でも『自然の権利』という形で翻訳されていますけども、要するに環境倫理の歴史なんです。

ちょうどこれが89年に出版されて、まさにグローバルに地球環境問題が語られたときに、ナッシュが書いた自然利権の拡大という考えが広まったが、これは非ヨーロッパ圏では受け入れにくい部分がある。



80年代の終わり、特に90年代の課題は、先ほど申し上げたように、やはり南北問題だと思うんですね。そこで、ウィルダネスというような問題が出てくると思います。

恐らく太宰が見た、津軽の荒涼とした風景のなかにもやっぱり人が住み、人の関わりがある。しかしアメリカの、非常に愛国的なアメリカの精神がヨーロッパのそれに対抗するものとして、ウィルダネスというようなものが捉えられていた。けれども、現実そこで捉えられる自然というものは、アメリカ社会におけるウィルダネスと、アジアでの感覚とは違う。これがアジア、特に日本の自然になると、自然に人が入り込んでいる。

白神山地でもそうですし、日本では多くの山が山岳信仰の対象です。そういうようなものをどう捉えるかといったときに、これをウィルダネスという形のアメリカの概念で捉えるのはどうか、という問題がどうしても出てきますね。この点はインドの思想家も批判を始めている。

もうひとつはたぶん里山です。92年のリオでは、ウィルダネスというまさに手付かずの自然が非常に大事だったんですが、今はむしろ、人間の手が入っている自然ってどうなのか、と問題提起されている。大したことはないと言われていた里山が、必ずしもそうではないと言われ始めてきた。

そうすると、そういうものをどう捉えるかというような問題が、やっぱりこの時代に提起されている。まさにそれがリオ+20 ですね。生物多様性条約のなかで日本が SATOYAMA イニシアティブっていうのを世界に提供している。あるいは国連のミレニアム生態的評価のなかで、サブグローバルな日本の評価をどうするかといったときに、日本の里山・里海というのが、評価されるようになっている。

実際に、これは別に日本だけじゃなくって、例えば熱帯雨林の破壊ってことが、そこに住んでいる人たちの生活の破壊につながるというようなことも同じだと思うんです。

しかし、同じアメリカにネイチャー・ライティングの懐古思想的なものもあるし、社会的公正として捉える発想も、実はアメリカのなかにある。そういう意味では、アメリカというのはいろんな意味で深いところがあるな、と思うわけです。

80 年代の終わりのころですね、アメリカで PCP がアフリカ系の人たちの所に廃棄されるということで、これはまさに環境的な人種差別主義だという形で捉えられたわけです。そして、そういうものはまさに環境に関するリスクの分配と不公正ということで、環境の正義の問題、環境正義運動、Environmental justice movement という形で捉えられているわけです。

これは実は、日本でも問題が関係してですね、例えば水俣の原田正純さんは 80 年代にノースカロライナに行っているわけです。

一方、生物多様性条約においては、ただ生物多様性をどう守るかという問題ではなくて、生物特許とか、資源の利用に関するいろんな規定で延々と議論がなされている。多くの方は、生物多様性条約の議論のなかで、そういうことが議論されているということにびっくりしたと思うんですが、先住民の人たちの権利であるとか、途上国の権利というような問題を、生物の利用、特に生物特許の問題に絡めて議論されたというのは、結構法律的な問題だったわけですね。

17 世紀、18 世紀に、ロマン主義的な運動があるわけです。産業革命の影響で自然がどんどん改変していくなかで、自然思想みたいなものが出てくるし、先ほどのアメリカの風景論とかそういったものも、みんなこのあたりの時代のものなんです。

アメリカでは、ナショナル・パークのような枠組みもできていくんです。そのなかでは、そのままを保存するのか、それを補填するという形なのか、人間中心主義的な形で捉えるのか、あるいは非中心主義的に捉えるのか、という論争もあるわけです。

歴史的にみると、1965 年のリン・ホワイトの、キリスト教神学が人間中心主義的である、という生態系危機の根源に触れるような議論があった。要は、人間中心主義かどうかというところから、70 年代の非常に大きな考え方の枠になっていたと思います。そして、90 年代になると、今の環境正義、Social Justice という議論が出てきた。

ところで、アフリカの社会においても、野生生物をどう捉えるかというのが、今かなり大きな転換期になってきている。今までは野生生物を保護すると捉えられたものが、その地域の人たちの生活とか、あるいは今までのハンティングの歴史であるとか、そういうも

のをどういうふうに考えるかというところが課題になっている。今、日本の若いアフリカ研究者が、これまで欧米の人たちが考えなかったような問題提起をしているんです。私の所にも2人ぐらいアフリカ研究者が来ているんですけど、たぶんそういうような問題がアフリカにおける野生生物の問題のなかでかなり重要な問題だということだと思います。

ひとつは人間中心主義というような問題をどういうふうに捉えるか。まさに70年代に人間中心にするかどうかという議論がされたけども、現代では、もう少し違う議論がされていいんじゃないかということです。

もうひとつは、今までは人間が、どちらかというと自然を支配していくという形で進んできた。これは、西洋か日本かというような問題ではなく、20世紀型の科学技術のプログラムそのものの課題です。つまり今は、自然に対して十分コントロールできないのは科学が進歩していないだけであって、科学が進歩すれば、必ずや自然をコントロールできるという考えで、20世紀は来たわけです。ですが、20世紀の終わりごろになって、必ずしもそうではないという状況がだんだん出てきて、現代では、自然の不確実性ということを前提にしてマネジメントしていくように考えなきゃいけない時代に来ている、ということだと思います。

野田先生の話をお聞きして、実はアルド・レオポルドの *A Sand County Almanac* という本（『野生のうたが聞こえる』という形で翻訳されている）を思い出しました。その本の中にある *Land Ethics* という考え方、まさに「土地の倫理」という考え方は、典型的なネイチャー・ライティングですね。

この本は、思想の本ではなくて、まさに砂の暦です。当時、まさにスタインベックの『怒りの葡萄』に出てくるように、アメリカで農業土壌の疲弊ということが非常に大きな問題でした。土壌の疲弊によってまさに砂が舞うような中でどういうふうに考えるかということだったと思うんです。実はレオポルドが、今の自然再生事業ということの原点をやっているわけです。だから、レオポルドといってもいろんな側面があって、我々環境倫理の方から言うと、哲学者であり、環境倫理の祖みたいな形で捉えられるわけですが、一方でワイルドライフ・マネジメントの祖でもあるわけですね。あるいは、プレーリーの自然再生というようなことも始めた人でもあり、非常に今、興味深いです。

それで最近、アメリカの環境倫理のなかで、アルド・レオポルドを解釈していたやり方はちょっと違うんじゃないか、というような議論が出てきています。私もちょっと違うんじゃないかな、というふうに思っているので、これをもう少し批判的に捉えていきたいと思うんです。

ただ、レオポルドはどういう人かということ、もう少しきちんと見てなきゃいけない。彼は基本的にエール大学の森林学部の大学院を出た。森林官としての役割は、ゲーム(狩猟)のマネジメントということが中心で、いわば有害動物、つまり天敵の除去になるわけです。彼は、最終的には、ゲーム・マネジメントを学問として確立し、ウィスコンシン大学の教授になるんです。33年に、ゲーム・マネジメントの本を書き、基本的には狩猟を制限する

のかとか、ゲームの天敵になるようなものをどうコントロールするのか、といったことが語られているわけです。

ところがこの時代、ゲーム・マネジメントは失敗しているわけです。ですから、捕食者とゲームという視点で森と鹿との関係を見るだけではなくて、もっとウィルダネスという形で捉えていかなくてはならない、と考えるんです。彼は、1930年代の半ばにスイスとドイツを旅行していたんです。彼はそこでドイツの森を見て、その土壤の疲弊ということに対して、非常に心を痛めたわけです。つまり、森林生産として優れていると言われているようなドイツの森でさえ、鹿の数がどう考えたって多い。土壤は非常に硬くて、疲弊している、と。ですから彼の講座は、ゲーム・マネジメントの講座からワイルドライフ・マネージメントの講座に変わるのです。そのひとつの結果として、この **Land Ethics** というものがあるわけです。

彼は、生態系の方で言えば土地はまさに地域生態系で、非常にホリスティックなものであり、これがどういうふうに安定するかっていうところで人間との関係がある、と言う。ただ、ここでは土地の利用の仕方がホリスティックであるのか、部分的なのかということが問題になる。部分的であれば、そこが疲弊して病んでくるという話になるわけです。それが倫理の話ってことになると、倫理は、土地ということではなくて、まさに人間を含めた共同体というような問題であって、そのなかで人間がどういう行動規範を持つかというような形で捉える。

アルド・レオポルドは、この土地、**Land** について、水とか植物とか動物を含んだ生命共同体というだけではなくて、人間の営みも含んだようなものと考えたのではないか。そうするとまた別の問題が生じます。理屈を言うと、倫理というのは基本的に人間が主体なわけですので、土地のなかには主体として人間が含まれないことになる。

ところが、人間たちが倫理的な範囲を土地まで拡張するということは、人間の営みも含まれるということを考えれば、人間が主体となって捉えるとなる。それは方法論的にいったん人間が外に出た上で土地を捉える、というようなことだと思うんですね。

ですから、そういう意味で、人間以外の存在まで拡大していくというナッシュの図式は、どうもちょっと違うんじゃないかと思う。自然そのものに権利を与えるというよりは、その自然でいること自体が実は人間と非常に深い関わりがあり、あるいはその関わりに対して、いろんな権利だとか倫理的配慮みたいなことなのではないか。

つまり、そこにおいては、明らかに人間がどう関わるかというような問題があった上で、それに対する倫理的な配慮みたいな形であって、それを関係論的な形で解釈することができるんじゃないか、ということですが、本当にそれでいいのかというのは、あとでちょっと議論してみるといいかもしれません。

アルド・レオポルドが言ったのは、環境倫理というようなものではないのかもしれない。彼が「環境」ではなくて「ランド」と言ったようなところを、もう一度やっぱり見極めるということが重要じゃないだろうか。

次に大震災 3.11 を踏まえて、環境思想が何を語れるかということをちょっと考えてみたいと思います。この問題は、先ほど野田先生が提起された問題のなかにもかなり入っているし、こういう自然教育もそうなんですけども、この環境教育という枠組みをどういうふうに考えていくか。この 3.11 を踏まえた上で考えるときに、そもそも自然をどう捉えるかという枠組みが大きく転換を迫られているといっているかもしれない。

それは何かというと、環境倫理といった場合、どっちかというと保護であるとか、自然の価値みたいなのところに、結構重点があったと思うんですね。それから自然像に関しても、有機体的なまとまりがあり、すぐ壊れてしまいそうな脆弱なものである、というような感じで捉えられているようなことが多かったと思います。

しかし、生態学的には必ずしもそうではなくて、非常に変動の激しい不均一な系なのです。実は今までの環境倫理とか環境思想の枠組みで考えなきゃいけないとを、ここ数年、議論してきたんですが、3.11 が起こってしまって、災害の問題を考えると、自然の圧倒的な強大さというか、そういうなかで人間は何をできるのか、というようなことが提起されるんですね。

今、復興だということで、すぐにでも復興しなくちゃいけないような議論が一方である。今まで、自然は保護しなきゃいけないというような、誰でも反対はしないような原則があったのが、こういう復興みたいな状況が来ると、どこかへ飛んでしまうような議論になってくるわけですね。

これは、野生動物との関係でよくある話なわけです。例えば、熊を保護するという話があって、私たちが普通に生活して、熊が出てこないような状況であれば、熊を保護するっていうわけですね。ところが、急に熊が出てきて、例えば幼稚園の近くに出ると、今まで保護すべきだという人が、撃ち殺せっていうふうに簡単に言うわけですね。対立することを平気で言うてしまう。

何もないときには皆が合意して、自然を守るって話なんだけど、これだけ自然の強大さを見せつけられて、私たちはそういうものに対してどう対応するかという話になると、「保護する」というようなものと全く違う枠組で問題が流れてくる。

荒ぶる自然に対してどうするかっていう話と、自然を守るっていうことが、同じレベルの問題として、考えなくてはならない。

ですから、確認しなくてはいけないのは、自然は恵み豊かな自然ではなくて、荒ぶる自然として、あるいは非常に不確実性が高いという面もあることを認識することです。自然の他者性って非常に重要だと思うんですね。人間にとって、どうにもしょうがない他者として、変えることもできないというような部分がある。これは教育の現場で、自然教育とか野外教育、自然体験の何が重要なかっていうときに、実は自然の他者性を知り、そのなかでどうやって人間がきちんと生きられるかということを見てあげることだと思うんです。

自然教育とか野外教育でやってきたことは、荒ぶる自然の非常に危険なものも含めて、

私たちは人間として、どうやって生きて対応していけるかということを学んできていると思うんですよ。

しかし、今、こういう震災のなかで、きちんとそういうものが十分に形として生かされていないと思います。それで、今まで環境教育で言われてきたことを今の災害に対してどうするかというようなことを含めて、野外教育、自然教育も合わせてもう少し再編していかうとすることが重要でしょう。それはたぶん環境倫理として自然をどういうふうに捉えるかというところの枠組みが変わってきたということを、私たちは考えなければいけないと思うわけです。

ところが、そういうものをほとんど忘れ去るような形で、20 世紀の科学の進歩みたいなものがあつたわけです。自然の不確実性みたいなものを、どっちかっていうと排除し、人間が自然を支配できるというひとつのプログラムがあつて、17 世紀、18 世紀のころから国家丸抱えでやってきている。国家丸抱えにしてそれを進めていくという枠ができたのは、第 2 次世界大戦後なんですね。

実は今回の原発事故で象徴的なのは、20 世紀の第二次世界大戦後の、新しい科学と国家との連携ができた結果です。一番のきっかけはマンハッタン計画だったのです。マンハッタン計画は、原発配置計画であり、そこで初めて、サイエンスの人とエンジニアリングの人が出会い、それで協働して、新しい枠組みの科学技術ができあがり、まさに国家が全面的に支援していくという枠組みができた。

それが 20 世紀の終わりの方になると、やっぱりいろんな疑問が出てきたわけです。、自然を相手にしたときには、設計図を前もって書いて対応することはできない。私たちは、あまりにも不確実にしか相手のことを知らない。私たちは、不確実性ということをもう少し考えるべきだ、というようなことになったと思うんです。

災害との関係を考えて、自然に対する畏敬の念とか、自然に適応するような形でやってきたものが、科学技術を信頼することによって、どんどん無能力になってしまった。先ほど他者性って言いましたけども、管理できない自然というようなものがあつて、その認識の上で、暮らしているという感覚が、かつてはあつたわけですね。

ところが、科学技術が発達することによって、そういうものがだんだん失われてきてしまう。だから、もう一度そういうものを、どういう形で回復させるかという論議が必要だと思う。

もっと簡単に言えば、100%安全性を前提としなければ存在しないような技術というのは、ちょっとそれは技術じゃないでしょ、というようなことだと思うんですね。今まで技術っていうのは、トラブルがあつて進歩してきた。これは事実です。でも、そのトラブルは、なるべく人が死なないように、そんなに問題が起これないようなところでトラブルを回避して進歩してきたと思うんです。ところが、いったんそれが外れると、今回のようなことになってしまいます。

サイエンスは基本的には普遍法則で、普遍法則さえ明らかにすればいい。ただ現実には、

これを物を作るというなかに導入してしまうと、不確実性というようなものの扱い方の、工学とサイエンスの違いみたいなものの狭間で、いろんな事故が起こってくるということではないか、と思うわけです。

ですから、原発が駄目だから再生可能エネルギーというふうな話になりますけども、もちろん再生可能エネルギーの方がずっとリスクは低いので、当然その方が良いことは当たり前なんですけども、だからといって、じゃあ再生可能エネルギーで巨大な、例えば風力発電のプラントを造るのがいいのか。里山を全部覆い尽くすような太陽光発電の発電所を造るのが本当にいいのかっていうのは、我々はもう少し別の観点できちんと考えなきゃいけないわけです。

つまり、リスクを集中させるわけじゃなくて、リスクを分散するような形の、むしろエネルギーの使い方であるとか、技術の社会におけるあり方みたいなものを、たぶん考えなきゃいけない。

最後にちょっと福島の話をして、今日の話を終えたいと思っているんですけども、私たちは、やっぱり福島を考えると、水俣の経験をどう考えるかということが重要だと思うんですね。

例えば、アメリカの先住民族の人が、核廃棄物の処分場を受け入れると決定するわけです。ところが、州政府は反対している。州政府ぐらいのレベルで、こんな物がうちの州に来られたら困るって反対している。しかし、現に先住民族の人たちはそれを受け入れている。受け入れるのは、本当に正しいんだろうか、そこに正義はあるんだろうか、というような問題がある。これは、もう少し歴史的なプロセスのなかで考えなきゃいけないんじゃないか。つまり、そもそも州政府は、先住民族の人たちがそういう形で核廃棄物を受け入れなきゃいけないくらい経済的に疲弊するまで、結局何も政策をとらなかった。そういう責任はあるんじゃないか。そういうなかで、彼らが核廃棄物を受け入れる気になっても、それはおかしいと反対する権利がどこにあるのか、ということです。

彼らがそういうふうを選択しなければいけないような、歴史的なプロセスみたいなものにもっと目を向けるべきじゃないかということが問われたわけですが、これはまさに、今の福島原発の問題について前衛的に言っているわけですね。

私は昨年5月ごろからずっと福島に入っているんですが、特に阿武隈山系の川俣から浪江、飯館とか、そのあたりなんですけれども、本当に日本の里山っていうのは、美しい風景です。

安全性ということを探るのか、やっぱりそういう地に足をつけて生きてくというような形を探るのかというようなことを考えると、それがまさに対立的にあるというのは、たぶん現状だと思います。

先ほどの市場経済の保証のことを言うと、実は市場経済的な保証には限界があると、水俣のときに十分に分かってきたことなんです。多くの患者さんたちが裁判をやって保証金をもらったが、結局それはちょっと違うんじゃないかってことを、皆やっぱり考えたわ

けです。つまり、お金をもらえればいいわけじゃない。お金もらうために裁判やってきたわけじゃない。

水俣の場合には、「もやい直し」っていうのがあったんですね。山の方でお茶とかをやっている方は、「水俣」という名前では売れないというんで、随分市民と対立した。まさに、海が汚染されたことによって海と山が断ち切られた。そういう水の循環が断ち切られたっていうことを、どういうふうに復活させるのか。その水の循環は、単なる水の循環じゃなくて、そこにやっぱり人が息づく、人の関係の再構築だということです。漁師町では舟の舳先を「もやい」と言うんですけど、その「もやい」をもう一度再構築しようというので、「もやい直し」というのを水俣で始めていった。今でも十分な解決ではないわけですけど、水俣病の動きをどういう形で捉えていくか、検討されています。

福島と水俣が違うのは、たぶん「もやい直し」がほとんどできないことです。もやい直しを、まさに放射性被曝という被害が阻んでいるということは、たぶん大きな問題じゃないかなと思います。

今、結構多くの方が、福島の農家を支えなきゃいけないというので福島応援キャンペーンをやって、それなりに売れることは売れるわけですね。いっぽうで小さいお子さんをお持ちの方々は、やっぱり福島産は食べたくないというふうに言っています。非常にまずいと思うのは、福島の会津地方と東京のたぶん江戸川区辺りは、だいたい同じぐらいですよ、汚染度は。でも風評で福島産は危ないとなる。

私の大学は今、千葉の柏にありますけども、いわき市と比べて線量は高いんです。いわき市のどっちかというと高い方と、今、柏が同じくらいです。同じようなことが栃木県の方でもありますし、那須の方でもあって、だいたい関東 8 都道府県に汚染は及んでいる。だから宮城あたりも結構高い所あるんです。

私たちが環境倫理で、世代間倫理、将来世代、未来世代に対する倫理を考えると、未来世代に一番近いのは子どもたちなんですね。こういう事故が起こったことは、反原発の人も、原発推進してきた人も、少なくとも 40 代以上の人は、結果的に原発を認めるという選択をした。反対はしてきたけれども、反対しきれなかったということにおいて、多くの方に責任はあるだろうと思うんですけども、それより若い人たち、そういう決定に全く何の関わりもないような人たちに対して、私たちはどういう責任を持っているのかということを考えるのは必要です。

こうした状況のなかで、大地の倫理っていうことをどう考えるかというのが非常に重要で、これはレオポルドの言った意味と若干違うんですけども、もう一度人間の営みが入った土地に対して、どういうふうに私たちは関わるのかということ、考えていくべきだろうと思います。

それでは終わります。どうも、ご清聴ありがとうございました。

パネル・ディスカッション



パネリスト：鬼頭秀一、野田研一、安藤昭一

コーディネーター：岡島成行

岡島 それでは午後はディスカッションということにしたいと思います。ここで安藤先生にも 10 分ぐらいお話いただこうと思います。安藤先生のご専門は分子生物学です。よろしくお願いいたします。

安藤 安藤でございます。普段は分子生体機能学という、英語に訳すと molecular cell biology をやっております。研究室で DNA を切ったり貼ったりして、大腸菌で発現させていると言えいいのかな、そんなところでございます。

2 つぐらいお話ししたいと思うんですけども、ひとつは先ほどの生物多様性について。カルタヘナ条約というのがございまして、生物多様性を守ることなんですけども、実は、あれはアメリカは批准しておりません。アメリカはですから遺伝子組み換え実験をどこでやってもいいんです。通りでやってもいいし、博物館でやってもいい。日本の場合はすべて所轄官庁に届け出をして、大学であれば大学の遺伝子組み換え実験安全委員会承認されなければやってはいけません。また、遺伝子組換え微生物を環境中に放出することはできないんです。オープンではできない。ところが、アメリカはそこら中でやっているわけです。だから今、農産物とかの関税障壁を取っ払ろうという話がありますね。あれはお分かりになりますか。あれはビジネスなんです。要するにそういう障壁を取っ払うってことは、日本は、例えば納豆なんか遺伝子組み換え大豆を使っていませんって表示ありますよね。あれができなくなる、分かんなくなっちゃうんです。アメリカはうちの農産物を買ってというわけです。種と農薬と一緒にセットで売るわけですね。そういうことをぜひ知っておいて下さい。

もうひとつ、この間ちょっと本を読んで驚いたのは、エイズ・ウイルスありますよ

ね。エイズが出たのは 1983 年なんですけれども、その前にあれはなかったんですよ。ああいうことが、人間のゲノムを読みますと過去ウイルスには汚染というか、かかったことのある履歴が DNA になりまして、DNA 全体の 4 割ぐらいですか。だから、そういうことが起こり続けているんですね。エイズも恐らく人間のゲノムに入って、そして生殖細胞にもし入ったらば、たぶんそこで安定化するであろうし、エイズは発症しなくなるであろうということなんです。

今、技術が非常に進歩しましたんで、ちょっとお金があれば俺のゲノム全部読んでくれて、30 万円ぐらいでできるらしいですね、1 カ月ぐらいで。

しかし、基本的には猿と人間との間ではほとんど差がない。そこであえて差があるとするのは、今の物質生物学でいうとその遺伝子の発現調節なんです。設計図はそんなに変わらないんです。調節のメカニズムがちょっとだけ違うんです。そういうところにもウイルスの破片が入って行って、どんどん変化している。大腸菌のゲノムなんかはもう決まっていますけども、あれもどんどん進化してるってことを忘れないでいただきたいです。だから O157 みたいな、あれは元々死ぬ毒素は違う菌の毒素ですね。ああいう遺伝子のやり取りが、微生物間で種を超えて土の中なんかでかなり頻繁に起こっているらしいんですよ。そうすると、種の概念って何かなと思っちゃうんですけども、そういうことが自然界では起こっているんだけど、一方ではちゃんとそこにある種は保存しなきゃいけない。IPS 細胞とかいろいろありますけども、実は裏にビジネスが隠れている。例えば、臓器の売買もアメリカなんかではちゃんとしたビジネスになっていますので、そういう裏をちゃんと読んでいただき、どっちを選ぶかっていうことは、考えがきちっとしてないとできない。僕ら研究者はウイルス・ゲノムなんかは常にいじれるわけですよ。バクテリアの DNA を全部化学合成で作れる時代です。そういうテクニックを化学者が持っているってことをぜひ忘れないで下さい。化学者には心がありません。化学者は金儲けと名誉だけです。ですから、そのためだったらなんでもやります。ですから、そこは一般の方々が「おかしいんじゃないの」ってちゃんと言わないと駄目です。以上です。

岡島 どうもありがとうございました。もうちょっと聞きたい感じですけどね。それでここで前半の締めくくりをちょっと申し上げておきたいんですけども、野田先生は文学の方から、鬼頭先生は環境倫理からお話されて、安藤先生は科学者として人間の在り方に言及された。今言った臓器売買だとか、IPS 細胞などの問題をお話された。それと原発の問題も、元はといえば同じことですよ。人間の欲望をどうやって満たして行って、どこで調節するのか。古くは宗教が全部それをやってきたわけですけども、その宗教も今はあまり力がなくなってきた。ところが現在、人間の欲望は野放しになっているわけです。それで生きていけるのかという課題が大きいかなと思います。

そういったようなことを全部ひっくるめて、昨日の夜も、環境思想について皆で勉

強しようじゃないかということになった。そして、環境思想研究所みたいなものを作ろうという話になりました。今日は1部の締めくくりとして、実は、私が環境研究所を作りましょうということを宣言する段取りになっておりました。そして、その視野には環境思想研究学会のようなものを作っていくことが入っている。これは非常に幅広いですね。文学の方、分子生物の方、皆さんが入ってこれからの人間の在り方について、基本的な在り方について考えていこうというのですから。これは実は、もう宗教も哲学もさまざまところでやってきたわけなんですけども、特に戦後のこの60年ぐらいの間に人間の在り方が大きく変わってしまいました。安藤先生がご指摘になった臓器売買とかゲノムが読めちゃうとか、原発を作ったあんな事故が起こっちゃうなど、全く予想もつかないようなことがどんどん進展していますので、ここら辺でもう一度気持ちを引き締めて、人間の在り方と自然との関係についてもう少し突っ込んで考えなきゃいけません。去年ですか、ここで長崎大学の佐久間先生が、今我々が正しいと思ってやっていることのなかに、間違いがあるかもしれない。間違いがあるからこそ地球環境問題のようなものが起こるんだ。そして、遅れているとか古いとかいって我々が捨ててきたもののなかに、正しいものがあるかもしれない。その両方を探す作業が必要ではないか、という話をここでされました。まさにそのとおりで、そういったことを探すために環境思想研究所というのを作ろうという話になりましたので、今日、ここで改めて宣言をさせていただきます。

そして2部のディスカッションとしては、いろいろ考えてみたんですけども、私の方から3人の先生方に少しずつ質問をして、そして地ならしができたあとでフロアの皆さんから、ご発言をいただきたい。そして、それを通してフロアとここでディスカッションをして、私がちょっと交通整理をさせていただこうと思います。

それではまず私の方から、野田先生のお話の中でちょっとお聞きしたエドワード・アビーの引用をされましたですね。人間は直接世界と出会うという話、これはちょっと考えてみると禅そのものですね。人間の存在そのまま、屁理屈を言わないで今あるものが我々の存在であるという、禅の基本的な考え方と全く同じではないかな、という感じがしました。しかし、もうちょっと考えてみると、禅は人間なんです。私が今ここにある。それが禅なんです。ところが、このアビーの場合は自然を見てるわけですね。私じゃなくて、自然がそこにあるんですね。その差が若干違う。それは自然を他者として見るってことなのかもしれませんけど、禅も同じことを言いながら、これは自然を見ているのじゃなくて、自分の存在を考えて、ただあるだけであって、そのほか何もないんだと、屁理屈も言うなという。その屁理屈を言うなっていうのは、むき出しの理解不能で絶対的な現存なんだということです。アビーと禅との間に若干の差があるのか、共通点であり違うのか、先生のお考えを聞かせていただきたいと思ったわけです。

野田 大変な質問をいただいて、考えてもいなかったことなんですけど……。つまり、アビーは禅的なものに近いような発想しているけれども、それは自分の側ではなくって、自然の側にそういう媚売っている現状のようなものを見出す。それじゃあ逆ではないか、という話なんで、そのことを全く考えたことはなかったので、大変お答えするのは難しいなと思っているんですけども。伺いながら思ったのは、ゲーリー・スナイダーという詩人がアメリカにはいまして、エドワード・アビーとゲーリー・スナイダーは往復書簡をちょっと書いたりもする。つまり、ゲーリー・スナイダーは禅の人なんです、まさしく。ただ、彼も自然の問題を当然扱ってるんですけど、エドワード・アビーという作家とゲーリー・スナイダーという詩人と、じゃあ自然がどう違うのかっていう問題に波及するようなお話のような気もしました。

エドワード・アビーは、スナイダーについてはちょっと懐疑的な雰囲気を書いていきます。つまり、東洋の禅なるわけの分からないものでくるんだ発想というのは、まずいのではないかみたいな、ちょっと怪しいぞっていうようなスタンスをスナイダーにも見せるところがあるんですね。だからそういう意味で言うと、自分が現存している現存性と対象の自然の現存性と、どっちに重きを置いているのかみたいなことかもしれませんけども、スナイダーという人にとって自然っていうのはどうだったか。特にエドワード・アビーにとっての私の問題というか、これはどこにあるかっていうのは、ちょっとなかなか言えない。ただし、やはりその外部の自然に対して現存性みたいなものを重視するという態度は、そのまんま見る側もそうなんだという、つまり、人間についての認識もそうなんだ、というふうに言えると思うんですね。人間もまず直接向き合うというスタンスであるべきであるし、自分自身に向かっても、つまり自然的存在としての、現存としての私っていうことも考えている。それは言えるかなあというふうに思います。これもエドワード・アビー自身が言っている言葉ですけども、自分の自然観っていうのはある種の神秘主義なんだ、ミスティシズムなんだ、と。ただし、その場合の神秘主義っていうのは、人間と自然とがやはり交じり合う、マージするそういう場を考えてはいると言っていると。だけれども、同時に私は切り離された存在でもあるのだ。べたっとくっついて対自然と一体となるというものではない。ただ一緒になりながら違うっていう、同一でありながら差異があるみたいな、そういう場を自分の一種の理想というふうに考えた。矛盾した言い方なんですけど、その辺も手掛かりになるかと思いました。

岡島 ありがとうございます。それでは次に鬼頭先生、レオポルドの話を読ませていただきました。そのときナッシュさんとかキャリコットさんのお話が出ましたが、実は私、ふたりとも友だちで、仲の良い人たちなんです。レオポルドは生態学者だから哲学的な詰めが足りないっていうのは、これは加藤尚武先生も一度言ってるわけですね。それは当たり前です。レオポルドは哲学者じゃないんですけど、哲学的な、私は何か人間としての直感みたいなところで話をしているんじゃないかと思うんですね。科

学者が人間としての直感のようなことでこうだと言ったことに対して「哲学的説明が足りない」と言っても、哲学者じゃないんだからそんなのしょうがないよ、と思うんですけど。だから、レオポルドの場合はそういう態度で接した方が分かりやすいんじゃないか、と思うんですよね。生態学者が生態学的にランドエシックス、私は「土地の倫理」っていうと不動産屋みたいだから、「大地の倫理」の方がいいんじゃないかと主張しているんですが、鬼頭先生が「大地の倫理」って書いていただいたので共感しているが、その「大地の倫理」を書いたときも、やっぱりそれは生態学的な考え方もあるけれども、その動機は直観的なことがあるんじゃないだろうかという感じがしたんですが、いかがでしょうか。

鬼頭 でもまあ、私が言ってもそれに近いかもしれませんよね。今先生がご紹介されたのは、なんていうか、かなり文学的な感じでもあるんです。何かそういうふうに見えるんだけど、でも、実際に私が今回強調したのは、レオポルドはあくまで森林管理官で、ある意味ではマネジメントを実際的にやられたわけですよ。実際的にやられた結果から、直感的に出してきたわけです。キャリコットはキャリコットで、自分なりの、それはいろいろ自分の理論のなかにも受けようと思って紹介した。レオポルドがそういう形でやってきたところから、もう一度レオポルドを評価してみるっていうことは非常に大事じゃないかという感じはします。これから私たちが、自然とかそういうのをどういうふうにしていくかといったときに、むしろ直観的に彼が思ったところを、彼がずっと実践でやってきたことの文脈で理解しつつ、我々がそれをどういうふうに受け止めていくか、それを我々がこれからいろんな倫理を構築していくために考えていくことが大事かと思います。私も先生がおっしゃるのはまあ全くそれはそのとおりだと思います。だから、むしろレオポルドが言ってることは間違いだとか、何かこういうことを言っているのも、レオポルドが直感的に思ったこと、彼がずっと実践をやってきてそういう直感的になぜ思ったのか、あるいは思ったことの意味を、どういうふうにすくい取るかっていうところが、我々にとって非常に重要なと思っています。

岡島 ありがとうございます。野田先生、鬼頭先生、お話足りないことがありましたらお願いします。その後にフロアの方からご意見を聞かせていただいて、そのあと自由討論にしたいと思います。

野田 鬼頭先生のお話を伺っていて、幾つか興味を抱いたことがあるんです。そのなかでも特に他者性の問題と震災の衝撃との絡みです。荒ぶる自然っていうか、コントロールできない自然というものに直面したということも含めて、自然というのは他者であるという認識を、もう少し詰めて考えるべきではないかというようなご発言がありました。それは私自身も今回の報告では他者ということはあんまり使わなかったんですけども、エドワード・アビーという人を見ても、要するに他者として見ようと言っているだけなんですね。理解不能な絶対的な現存として自然を見ろと言っ

ている言葉は、もちろんそれは禅的な問題も含めてなんですが、他者として自然っていうのは、まずこう置くことからすべてを始めるべきではないか、という発想がある。この問題は実は、賛否両論あるだろうというふうに思うんですね。つまり、それは他者というのは何であるかということも含めてなんですけども、他者として置くことは、あたかも人間の外側に排除するかのようにも聞こえるというような意味では、人間と関係のないよそよそしいものと見ることなのかとか、だったらどういうふうに扱ってもいいのだというふうに、逆に考えることもできる。他者というのは、非常に微妙な概念でもあるかと思うんですけども、その辺ちょっと鬼頭先生のお考えをいただければと思うんですが。

鬼頭 私は他者ということで非常に重要だと思うのは、他者性っていうことに対してはコントロールされてるような自然であるのか、ある意味じゃ他者も含めてコントロールされてる他者みたいなありますよね。それは実は自然だけじゃなくて、人と人との関係もたぶんそうだと思うんですよ。いろんなものが今、我々社会のなかでバーチャルになって、お金もそうですが、そういう状況で、確かな手ごたえのなかでいろんなものを考えていこうというところが、今非常に重要だと思うんですね。だから、ある意味では非常にバーチャルな形で世界が動いてるものに対して、やっぱり確固としたものを基礎に置きながら、この世界をどういうふうに見ていくか、構築していくか考えることが重要なんです。そのときに重要なのは、たぶん他者性ってことだと思うんですよ。それは非常に逆説的に見えるかもしれませんが、結局、所詮は分からないってことになるんだけど、科学者はそれを分かろうとするわけですね。そういうような試みは、私も決して否定しないし、自然に対しても、人間の他者に対しても私たちは分かろうとするわけですね。分かろう分かろうと思っても、どうしても最後のところで分からないところがある。あるいは、所詮は分からないところがある、ということを前提にして、我々は考えていくということだと思うんです。それを今までの 20 世紀の文化というのは、自然との関係もそうだし、社会の捉え方もそうだし、それはすべてどこかできちんとコントロールして、何かができると思った。それが全部破綻してきたということが今の状況で、リーマン・ショックもそうだったと思うんですよ。自然に関しては 3.11 というのがあって、まさにそういうなかで私たちはいろんなものに対する他者性に向かいつつも、でも、何かそこでやっぱりつなぎ止め、分かり合おうとしながら、何か確固とした基礎に立って私たちは対応しようとする。そういうことの極限のなかに、僕は他者性っていうのがあるんだというふうに考えたいんですよね。私たちはどこまでも分かろうとするし、そういうことをしながらいく。そのなかでなぜそれをするかっていうと、それは生きるっていうことだと思うんですよ。私たちが自然のなかで生きているってことは、どうしてもこうにも分からなくても、それは分からない他者である自然を相手にして生きなければいけない。生きなければいけないから、どうやってサバイ

バルするかっていうことを考えながら、いろんな手立てでやっている。

岡島 ありがとうございます。防災の方で言うと、自然は二面性があるとよく言われますよね。嵐とか大水とか津波とか地震とか噴火とか、怖い部分もある。しかし恵みもくれている。食べ物でも文化でも、いろんなものをくれている。その両面あるのが我々が接している自然だということを、防災協議では最初に教えることですね。強いていえば、そういう他者としての自然のようなところを、皆忘れていただけてすよね。しかし、昔の人は皆知ってたんですよ。自然の方が大きかったから。今はなんとなく、人間が自然を守るなんて話になったりするから勘違いする人が多いと思うんですけど、元々は人間なんかには手に負えないものなんですね。今でこそ台風が来ても家が倒れないけど、昔は毎年家がつぶされるような状況もあったわけですから、そういったようなところを、もう一度少し考え直したらどうだろうか。そして、もうちょっとそれを詰めていけば、鬼頭先生がおっしゃったように、当然この20世紀型の文明について少し考え直してみたらどうだ、ということになる。それでは、この辺でフロアからお話を聞きましょう。ソローの研究家がいらっしゃるっていうんで、ちょっと見解を聞かせて下さい。どんなことをやって、どんな興味があって今ソローについて研究しているのか、ちょっと教えていただけますか。

A氏 ありがとうございます。午前中から午後にかけて、貴重なお話を拝聴できてありがとうございます。野田先生のお話と鬼頭先生のお話を絡めて質問したいんですけれども、1854年の『ウォールデン』っていうのは、まさに南北戦争に向かうアメリカなんですね。その歴史化っていう部分が、ちょっと今回のご発表では欠けていたように思うんです。1863年の奴隷解放宣言で、黒人への権利が拡大されるというような時期にあたっていたと思います。そして、そのときに何もない自然を開拓していったというよりは、むしろ先住民を排除するというような暴力の歴史でもあったわけです。それに対して野田先生のご見解をお伺いしたいというのがひとつです。アルド・レオポルドについて鬼頭先生にお伺いしたいのは、やはりその歴史的なものというふうに考えると、レオポルドというのは戦間期から戦後にかけて、このランド・エシックスっていうような思想を作っていたんだと思うんですね。そのときに、特に第2次世界大戦についてどういったようなスタンスをとりながら、こういうような思想っていうのを作り出していったのかっていうようなことが、ちょっと知りたいなと思ってお伺いします。

野田 ありがとうございます。今回の報告というのは、美学だとかロマン主義だとかっていうようなところに特化しているので、『ウォールデン』とか、あるいはネイチャー・ライティングがアメリカで立ち上がってくる背景には深く触れませんでした。当然先住民に対する問題があるだろうというふうなご質問だと思ったんですが、1854年、つまり1850年代、60年代に南北戦争が始まってしまうわけです。南北戦争というのは、アメリカ人を深刻なまでの危機に陥れたできごとで、そのちょっと手前

ということがあります。逆に南北戦争が終わったあとのアメリカというのは、思想的にもかなり様相が変わってくるという面があると思いますのでなかなか難しい時期なんですけど、おっしゃったように、いわば南北戦争直前の数年ぐらいの時期に、ソローが『ウォールデン』を書いているということの意味合いはどうか、ということだと思います。

今思い浮かびますのは、ソローという人はインディアンに強い関心を持っていたということですね。『ウォールデン』という作品のなかには、それはほとんど出てこないし、ちょっと出てくるとしてもややネガティブな感じで書かれているかと思うんですね。ですが、『メインの森』という旅行記がありますが、これ翻訳が出ていますけれども、これを読みますとよく分かるのは、インディアンというものについてのかなり詳細な認識が見えてくるのです。そこが、ご質問されたことの手掛かりになるのではなかろうかという気がするんです。僕自身は、ソローという人は『ウォールデン』だけでは掴まえないというふうに思っておりまして、最低限『ウォールデン』と『メインの森』という作品と、両方照合してソローというのは見た方がいいと思います。つまり、一方の『ウォールデン』というのは、言ってみればそこに住みついて、できる限り自然に近い状態で定住して暮らすという実験をしたと思うんですね。『メインの森』というのはその逆で、いわばウィルダネスに向かった旅なんです。つまり、逆に言いますと『ウォールデン』は自然に向かっているんですけど、そこで暮らすという、ソローも使ってる言葉なんですけど、セカンド・ネイチャーへの思考というのが『ウォールデン』で、もうひとつのメインウツというのは、限りなくプライマリー・ネイチャーというか、ウィルダネスというものに向かって、出会って衝撃を受けるんですね。ですから、ソローという作家の場合は、この2つを最低見た方がいいかな、というふうに思っています。

鬼頭 なかなか難しい質問だと思うんですね。私もそんなにきちんと全部読み込んでるわけじゃないので、だから明確に分からないんですけども、レオポルドが第2次世界大戦に対してどういうふうに思っていたのかというのは、ちょっと分からないんです。ただ時期的にたぶん彼の大きな転機になったスイス・ドイツの旅行の期間で、ちょうどドイツでナチスが、要するにヒットラーが政権を取っていたころですね。ドイツにとって、実はナチス政権下において環境保護とかそういう政策が極度に進行するわけですよ。ですから、例えば環境保護とかそういうことも含めてそれだけを見ると、ナチズムっていうのはまさにエコトピアみたいな感じなんです。ある意味では非常に輝かしいドイツ林学の勝利みたいなものに対して、彼がやっぱりそういうところに抗議した。まさに彼がそういうところに、直感的にそこで何が起っていて、何が問題かということを見据えたところだったと思うんですね。

岡島 どうもありがとうございました。私もレオポルドが戦争中に何を考えていたかっていうのを、読んだことがないですね。あえて何も言わなかったのかもしれないです

ね、いろんな思いがあったんでしょう。さて、今日は環境教育学会から降旗さんがいらしてます。去年は学習院大の諏訪先生がいらして、環境教育学会についてちょっとお話いただいたんですけど、降旗さん、ちょっとひと言お願いします。降旗さんは東京農工大の准教授でいらっしゃいます。

降旗 機会をいただいてありがとうございます。環境教育ということではいいますと、2006年が結構大きな転機でした。それは簡単にいうと、教育基本法のなかに環境ということ、教育の目標として生命を尊び自然を大切に、環境保全に寄与する態度を養うこと、というこの一文が入ったんですね。今度は逆に中身を考えなきゃいけないという状況になって、今力を入れているのは先生ですよね、学校の先生。環境というのを独立した教科にしようという議論もあるんですけども、それやってしまうと今度はその先生だけが一生懸命やって、ほかの人がやんなくなっちゃうじゃないかっていう逆の議論もあって、なかなかそこはちょっと一本化しにくいところもあるんです。しかし、逆に言うと、すべての先生に環境のことをある程度学んでもらおうということで、先生を養成教職課程の教員養成段階で環境のことを勉強してもらうように、今年教科書を作りました。今はそんなことに取り組んでいます。

岡島 どうもありがとうございました。安藤先生、さっきすごく短かったんですけど、追加がありましたらどうぞ。

安藤 アメリカ大陸を白人たちが見つけたときに、彼らはどうして征服していたかっていうと、彼らは病気で亡くなった病人の衣類とか毛布を持ってって、それで攻撃してるんですね。ネイティブ・アメリカンは抵抗性がないから、ばたばた死んでいったんですよ。ミシシッピ川を遡っていくとネイティブの居留地があったんですけども、人がいなかったんです。皆死んでいたという。そういう状態にしてから上陸しているんですね。また、中米の遺跡を調査しますと、どうしてその文明が滅びたかっていうのを見ますと、最後はかなり悲惨なことになってて。ナスカなんかもそうなんですけど、最後には人間が人間を殺して食べているんですね。メキシコの巨大石器の遺跡なんか、偉い人はちゃんと葬られているんですが、ある建物の神殿のこっち側には骨がいっぱい捨ててある。それ皆切って捨ててあるんですね。つまり食材として使ったかすを捨ててるんです。そういうふうにならないように、ぜひ地球を維持していただきたいんです。

岡島 ありがとうございました。それでは時間になりましたので、これで今日のシンポジウムを終えたいと思います。どうも長時間ありがとうございました。

第1回ロングトレイル・フォーラム

7月8日（金）

主催 NPO 法人アウトドアライフデザイン機構

共催 安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

記念講演 「ロングトレイルに懸ける私の夢」

加藤 則芳（ネイチャー・ライター、日本トレッキング協会常務理事）



皆さんこんにちは。

まず最初にお話ししなければならないんですけど、ごらんとおり、自然をテーマにして世界中歩き回っていた私が、車椅子生活になってしまったということです。実は去年の6月16日、これほど筋肉を使う仕事をしていた私にもかかわらず、筋肉が破壊される病気にかかりました。筋肉に関する病気はいろいろありますが、そのなかで一番苦しい病気であることが発覚しました。すでにもう手の機能や足の機能ほとんどなくなっております。すべての人はこの病気で死んでいきます。まあどのくらいか分かりませんが、今日こうやって参加させていただいたのは、ありがたいことです。首から上はものすごく元気なんです。私とお会いした方は「全然違和感がない」と言われる。私のなかでは完全に痩せ細っているんですが、首から上が元気。しゃべれるうちに、とにかくひとりでも多くの方に想いを伝えたいという気持ちで、今、積極的に生きております。本来ならばすべての患者さんは精神的にまいってしまうんですが、私は沈んでしまう余裕がないほどに、やることがいっぱい。

今日はいろいろお話を伺ってまして、私、非常に感慨深いものがあります。というのは、ご存じないの方が多いと思うんですけども、日本の旅にロングトレイルというラインを取り入れさせたのは、私だと思っているんです。20年前から雑誌でいろいろ書いています。高さを登るだけではない楽しみ、丘陵を歩く楽しみ、丘陵を歩くことによって得る感動、その大きさ。しかも、ロングトレイルは長ければ長いほど魅力的なものです。長ければ長いほど歩く人間にとっては達成感が大きい。非常に感動する。実はトレイルを歩くってことは、冒険ではない。社会的には冒険としては認められてないんですけども、

一人一人の心のなかにはやはり冒険心が芽生え、それが満たされていく。距離が長ければ長いほどその達成感、感動というのは大きいんです。そういうトレイルは、とりわけアメリカ、カナダにたくさんあります。

私は 20 年前からヨットパリで、今日も水上温泉の方のロングレイル計画の話もありますけれども、もちろん皆さんもご存じのように、実は日本の山にも縦走路はたくさんあるんです。しかし、これは海外と違ってそこに幾つも山があつて、その山を越えて、その次の山を越えて……と、登頂が目的の縦走となります。それはそれでいいんです。そうではなくて、とにかく距離を歩くという魅力を考えてとき、日本にも実はいい縦走路があるんですね。しかもつなぐことができる縦走路があるということで、『outdoor』という、山と溪谷社が出していた雑誌に 1 年間連載していました。既存のいろんなトレイルをつないでいくと、これだけ長くなるんだというのはあります。

今日お話されたところの、八ヶ岳スーパー・トレイルもそうですが、ロングトレイルを歩こうという気運が高まってきたと、そういう思いで見えていました。歩くことが仕事、歩くことによって自然を見る。それによって本物の自然が見える。これが私の基本的な視線です。人間、本来自然人だ。今日いろいろな官庁や省庁の方、それから岡島先生にお話いただいたこと、すべて私が考えていたことなんですね。この協議会もまさにそうです。形になってきたっていう思いでいます。そして、したいと思ったことがひとつあるのは、先ほど省庁連携ってお話されてましたけども、あの中に環境省が入ってないんですね。日本の名だたる観光地のほとんどの顔であり、コア的な部分は国立公園なんですよ。なぜ環境省が入ってないのか、これが不思議でならない。私がずっと仕事をしてきたのは、国立公園の重要性に関連するものです。世界中の先進国のなかで、日本ほど国立公園の意識が低い国はありません。国立公園の重要性を国民が分かっていない。それ以上にメディアが分かっていないんですね。それから官庁が縦割りをなくすとお話したのに、フィールドとしては環境省管轄のフィールドがたくさん入ってるにもかかわらず、これが入っていない。

国立公園の良さは、自然を守ることと利用ですね。この両面から管理をすることだと思いますね。当然皆さんがご存じでそれをやっていらっしゃるわけですけども、自然を守るっていうことは、いかに共生していくか、上手に共生していくかということです。地球上から人間を排除するわけにはいかないわけですから、その共生ができなかったから自然を排除する。自然がなぜ破壊されてきたかという、100 年前まで人間すべて自然人だったんですね。自然を知らなかったら人間は生きていけません。今は自然を知らずに東京で生まれ育ち、全く自然を知らないままに東京で死んでいきますね。古代人に還れということではなくて、本来、人間は自然人だという意識を常に持ちたいものです。それを考えたとき、国立公園って非常に大きなテーマだと思いますね。それとロングトレイルはまさにそうです。人と自然をつなぐトレイル、人と自然と歴史と文化をつなぐトレイル。これを高めよう。ピークを登るトレイルとの決定的な違いはですね、それは人間と自然が

いかに共生すべきかってことを、ロングトレイルがあることによって知るということです。

私が書いた本がございます。『メインの森を目指して』。これは 2005 年にアパラチアン・トレイル 3,500 km を、6 カ月かけて歩いたときのドキュメンタリーです。私はいろいろな本を 10 数冊書いてきましたけれども、実はこの本は、先ほど言いましたように、自分の足で歩いてその視点で物を考えるという私の基本に則った最後の本になります。これを買ってくれという思いは全くないです。しかし、この本は皆さんがこれからやろうとしていることの参考書です。自分で言うのもおかしいですけども、まさに参考書だと思っています。

今、本を振り返ったときに、こういう本を作りたい。それはどういうものかっていうと、管理トレイルなんですね。例えば、幾つもの県にまたがるトレイルで、その横の連携を作ることの重要性等々、もろもろの理念を持っていました。それを具現化したのが信越トレイルなんですね。私は単に理念を提供しただけです。ディスプレイの理事ではありますがけれども、それを具現化したことの素晴らしさ。このアパラチアン・トレイルの本のなかにも信越トレイルのお話が入っております。

もう一冊は『ロングトレイルという冒険―「歩く旅」こそぼくの人生』です。これは今月中に技術評論社というところから出るんです。私がそれなりに経験した自然への想いを凝縮した本です。山ガールのお話も出ますが、とりわけそういう若い方々に読んで欲しい。岡島先生は子どもさんの話をされましたけれども、自然を知らなくなった子どもさんが多くなっているこの時代だから、そういう方々に自然を少しでも知ってもらい、自然を知らなければまともな地球を維持することはできない、というのがこの本の基本ですので、そういうことを多くの方に知っていただきたい。そのためのスタートであり、誘い書っていうんですか。しかもロングトレイルというものをひとつの起点にして書いておりますので、これも大きな参考書になると思います。この日本ロングトレイル協議会発足にあたって、ちょうどタイミング良く私の本が出版されたということは、私にとっても本当にありがたい、うれしいことだと思っています。

先ほど環境省のお話をしましたけれども、環境省もいろいろ動き始めております。岡島先生のお話にもありましたけれども、東日本大震災で大きな打撃を受けた陸中海岸国立公園。これを拡張し、新たな国立公園に再編しようと具体的に動き始めております。そのなかで 350 km にわたるコースト・トレイル、海岸沿いのトレイルを造ろうということも、環境省は具体的に発表しております。実はこのトレイル、私は 5 年前から環境省にずっと提言してきております。コースト・トレイルをなんとかできないかという構想を持っていたんですけど、それを具体的に採り上げましょうということになりまして、今、自然環境局長さんが中心になって会議をしておったんですけれども、私も協力させていただくことにしております。それから 10 年来、九州長距離自然歩道。これをなんとか再建しようということで、これも 10 年来環境省にずっと提言をしてきておりました。これも実は具体的に動き始めまして、来週 16 日に熊本でキックオフ、第 1 回の講演会があります。環境省

は私が考えている構想を理解して下さっていますけれども、一番重要なことは地元の方と自治体の方々に理解していただくということで、そのための第1回の講演会が来週行われます。皆さんにロングトレイルの素晴らしさを本当に理解していただくためのプレゼンを、信越トレイル・クラブ事務局長の木村宏と一緒にさせていただきます。このコンビネーションはベストだと私は考えています。私がお話ししているのは歩く者の視線、歩く人間をどうワクワクさせるようなものを造らなければならないかということです。距離が長ければ長いほどひとつの感動-----人と人との心の通い合いですね、そういうドキュメンタリーが、ドラマが生まれてくるんですね。このような理念的なお話をして、それを具体的にどうしたらできるんだっていうのが実際に分かると思います。常に考えていく、それをお話できるのは木村です。このコンビネーションでこれからもずっとやっていこうと思っています。

私が今まで考えてきたもろもろの新体制作りの段階に入っておりますので、残された人生、できる限りあらゆることを何でもやっていこうと思っています。そういう意味でロングトレイルの気運が高まってきたということは、私が生きる大きな糧にもなっています。ごめんなさい。悲しいお話になってしまいましたけれども、ご覧いただいていますように、首から上は元気です。張り切っております。何かいろいろお聞きしたいこと等々ございましたら、いくらでも私のところへご連絡いただければ、今回のこの協議会のアドバイザーという立場で、携わらせていただきます。

どうもありがとうございました。

講演(1) ロングトレイルと地域観光の活性化について

坪田 知広（国土交通省 観光庁スポーツ観光推進室長）



今日は関係省庁との揃い踏みでございますので、役所サイドのいろんな観点からトレイルについてお話できると思います。

資料を配っております。「ロングトレイルと地域観光の活性化について」ということで、まさにホットな話題として、この1年間やってきました。スポーツ・ツーリズムも基本方針をまとめようと

いう会議をやってまいりました。6月14日にほぼ終了しているんですが、間もなくこれが公表できることになります。

スポーツ・ツーリズムとは一体何かということについて、毎年このアウトドアの会議で考えてきました。ショッピングとか、文化財を見に行こうとか、温泉だけ入ろうとか、そのような観光はもう限界にきているのではないのでしょうか。新しいマーケットである中国人観光客などに対しては、当面そういう需要もあると思っているのですが、やはり2度3度来日される場合や、目の肥えた欧米の方となると、日本にもう一度行きたいというときは、別の楽しみ方を提供しないと難しいと考えています。そのようななかで、マラソンなどはアウトドア・ライフとして考えられているようです。アウトドア・スキーなどという言い方もされています。トレッキングやクライミング、自転車を使ったものなどを活用して、新たに需要を開拓できそうであることが調査で分かってきております。中国の観光客なども、ショッピングのために1回来たけれども、次に来日するときは日本でスポーツをしたり、アウトドアで楽しみたい、と感じていることが調査で分かってきています。

JTBなどの旅行会社でもスポーツ専門部門を立ち上げたり、地方でもスポーツ・ツーリズムの会を作って活性化していこうとする流れがあります。単に観光して下さい、というものよりも、走ったり歩いたり自転車に乗るなどの活動が含まれている方が、観光客の満足度が高いということです。

昨年度の終わりに、トレッキングに関するある実験をしました。ロングトレイルほどではないのですが、三原山（東京都・伊豆大島）で女子大生を対象にトレッキング体験を行いました。しかも、吉本興業の芸人と活動する企画です。「楽（たの）しんご」プロデュースでした。ジオパークを使ったりトレッキングをしたり、その間に専門家に火山学習をしてもらったり、椿油絞り体験なども入れることによって、吉本芸人がうまくガイドして非常に盛り上がりました。まさに地域の活性化につながるんだということです。今年はここ小諸や軽井沢などが活況を呈すと思いますが、節電の影響もあり長期的に高原で過ごそうというツアーが売れております。しかしそこで見ていると、あまりトレッキングの要

素が入ってないですね。温泉とかラフティング、ハイキングぐらいは入ってるんですけど、本格的なトレッキングを行いますよ、というふうにはどうもつながっていない。関係者が相互にもっと活動を活性化することができるんじゃないかな、と考えています。

お手元の資料の基本方針にありますように、スポーツとツーリズムを融合させることは、我々にとっていいことづくめであると考えております。スポーツそのものが振興にもなっていくこともありますし、健康増進、産業振興、国際交流促進ということで、厚労省、経産省、外務省の方の政策にも合致します。それから町づくりですね。今いろんな地域でどうやって地域を活性化するか、どんな町づくりをしていくか、ってことが課題になっていますが、スポーツを扱うと、イベント広報などの発信力によっていろんな方々を誘引でき、デジタルにもつながると思います。この基本方針の最終的なポイントは、お医者さんとスポーツ・ツーリズムの組織を作ろうということに集約されています。これならジャンルを問わない組織ですので、まさにこのロングトレイル協議会がやることを補完したり、それを支援するというようなことも、大きく作られる団体に対してはお願いしていこうかな、という期待も持っているところです。

得てしてこういう活動を今後続けていくときに、県を超えた動きでトレイルを整備される場合などの際には、我々の出先の地方運輸局とか、北信越運輸局とか東北運輸局、こういう所に相談に行かれるといいかなと思い、資料に相談窓口の一覧を入れました。ご活用いただくとありがたいなと思っております。

また、日本の特色として森林率が高いことがありますよね。急峻な山岳地帯や深い谷が続く険しい地形が多い。一方でその険しさがアウトドア・スポーツなどにとって利点にもなっている。日本でいろんな自然を楽しめるのは優位性であり、ほかの国と差別化できることであるということも指摘しておきます。

ロングトレイルを核とした地域づくりということで、おこがましいんですけども、私は自分の観点として8つのポイントにまとめました。

また、関係自治体のが主導でやるという明確なビジョンが必要です。住民の支持がないと役に立たなくなってしまうので、そういうところがやっぱりポイントでしょう。中央省庁は横断的な努力をすることをお約束します。これまで縦割り行政でうまくいかないという例がありましたが、この辺は役所内で横断的なチームとか組織とかそういうのができてくると、非常に良くなります。警察ともいい関係ができるかもしれませんけれど、いざというときの交通規制とか警備とか、いろんなことでお手伝いいただけるようになる。

あと実施するスポーツ種目をどんなものにするかという点です。各地域でそれぞれ、うちはトレイルを使ってランはしない、うちはランをするというように。トレイルを使ったなかでのスポーツの種目とか、イベントの規模とか、マーケティング戦略をいろいろ持っていくことで、全体がうまく網羅されて、なおかつすべてが日本中を回っているような、そういうふうになっていくのかな、と期待しています。

あと海外から人を呼んで、例えば留学生にトレッキングをしてもらって、日本人とは違

う観点で感動してくれるポイントを指摘してもらったり、海外からの受け入れ態勢を整備したらどうだろう。また、宿泊業者とか運輸関係など業種を超えた形で横断的に協力できれば非常にいいのかな、と思っています。

次に情報です。たまたま高原にエアコン使わないために来ましたという人たちに、いいトレイルが近くにあるんだよ、と伝える方法が必要です。用具の貸し出しを含めて、宿泊先で情報が整っていて欲しいですね。お金のかかる話じゃなくて、ちょっとチラシをコピーしてまいたり、インターネットで関係先につなげるだけでいいことだと思います。

ツーリズムは単に人がどんどん来て、自然を破壊するような感じに捉えられがちですが、大事だなと実感してもらって、そのために税金を使うんだったらいくらでも出すよ、というような世の中を作らないといけないと我々は思っているんです。また、観光によってお金を地域に落とし、そのお金で自然や景観を保護していくような好循環を生み出すことについても、ツーリズムの仕掛けが鍵となるのではないかと思います。従来の観光のイメージは良くないですが、新しいタイプの観光が、このロングトレイルというキーワードで生まれ変わっていくんだ、というイノベーションの感覚を持っておりますので、ぜひとも一緒に頑張りましょう。

どうもありがとうございました。

講演(2) 青少年教育とロングトレイル

藤原 一成 (文部科学省 スポーツ・青少年局 青少年教育官)



修学旅行、今観光庁も実は大変なはずです。観光客も誰も来ないんですね、日本に。今観光業界の方々が注目しているのが修学旅行。修学旅行は行き先を変えてもやめません。やめられません。3年に1回の本当に思い出に残る旅行をやめられません。

この間ニュースを見ていて、ああなるほどねと思ったのが東大阪に行く学校が増えている

ということでした。なんにもありませんよ、食べるものも、きれいな景色も。工場とおっちゃんが油まみれで格闘してる姿だけです、あそこにあるのは。しかし、日本の物づくりの原点があそこにはある。世界に誇れる技術を発信しているベースになるものがある。それを見てきた中学生、高校生の目を見て、彼らはやっぱり感動してるんです、感動。つまり本物じゃないと駄目だってこと。「最近の先生は」って言われるのは、本物の勉強の仕方を教えてないから駄目だってことです。自分の背中で教えてないから駄目だってことです。それよりも親の方も担任もダイレクトに教える。やるなら本物です。

さきほど坪田室長の話で、なるほどなと思ったのは、中国の方や韓国の方がスキー場に行ったときに、スピーディに何かしらうまくさせないといけない、っていう言葉がありました。つまり、人間の本来的なところに、何かを学び向上したいって気持ちが、幾つになっても絶対にあるということです。この原点は教育にあります。学びたい、自分を向上させたい、自分をこういう人間にしてみたい、という気持ちは何歳になってもあります。このトレイルで何ができるんですか。どういう自己実現、あるいは子供たちにどういうことをさせることができるんですか。考えてください。本物です。目指すものは本物です。それも楽しく。ここが難しい。本物を学べて楽しめて。文化ですね。スポーツ・ツーリズムの話聞いて、なるほどなあと思って、本当に今日来て良かったと思っているんですけど、こういうことじゃないと、役所の大げさな話なんか誰も聞きません。

私は40過ぎになって、仕事で1度だけイギリスのウィンブルドンに行かせてもらいました。私は今、スポーツ青少年局という所にいますけども、日本のスポーツは文化ですか。ただの勝った負けたの大騒ぎじゃないですか。ウィンブルドンと日本の有明にある、あのちっぽけなテニスコートを比べたら一目瞭然です。ウィンブルドン、皆行きたがってますよ。スポーツ・ツーリズムなんて言わなくたって行きたいですよ。テニス好きにとって、あそこへ1カ月行けたら最高でしょうね。さらにパリという町、ロンドンという町には、それなりの文化と気品と人を惹き付ける魅力があった。

私、トレイルのこういうパンフレットを拝見してひと言申し上げたいのは、大人の本物の文化を作りましょうよ、ということなんです。山に登られる方々、そこらのガキを寄せ付けないような、格調高い文化の香りがする本物を作られたらどうですか、という提案です。今まで随分目線を低くして、随分言葉を悪く言うと、迎合的な教育や迎合的な文化がここまでやってきて、どうですか。何か日本は良くなりましたか。なりましたよ。みんな豊かになりました。では、その先はなんでしょう、ということです。

最後にお話をします。私が今一番心配しているのは、青少年やトレイルのことでもないし、観光のことでもないし、当然森林のことでもありません。環境のことでもありません。環境は心配してます。本当に心配してます。

ひとつは10年連続3万人ですよ、自殺者が。ご存じない方も多いかと思いますが、自殺対策基本法ができました。昨年度は3万人を切ろうと思ってたんですね。頑張ってます。でも、切れなかった。今、震災の影響などもあってまた増えています。もうひとつ。企業の鬱病の患者が止まりません。これは、中央教育審議会のなかに我々の体験活動の部会があって、そこで東京エージェンシーの人事部長さんがおっしゃってくれたことです。自殺される前は、ほとんど鬱状態になってる方が多いということです。私も調べてみたらそのとおり。なぜこうなったんでしょう。

皆さん山を歩かれた方が多いと思いますが、裏を返すとそれはなぜでしょうか。成果主義で疲れ果てて、誰とも話もできなくて、会社にも行けない——こういった社会、これに対するひとつの暗示として、皆さんがやろうとしているトレイルの運動というのは大切に、私はきっと作り直せると 생각합니다。教育も健康も観光も全部作り直し。ひっくり返すということじゃなくて、作り直せる。もうちょっと丁寧に言うならば、つなぎ直しかもしれない。あるんです、まだまだこんないいものがあるじゃないですか。そこに目を向けられない人は、たくさんいるんです。どうぞ皆さんのお力で、そういう方にこういう自然に目を向けさせてあげてください。我々もできるだけ、一生懸命頑張りたいと思います。頑張ります。終わります。

講演(3) 国際森林年と森を歩く

岩佐 正行（農林水産省 林野庁国有林野部経営企画課企画官）



今日初めてここを訪れたわけですが、このフローリング、それから奥の通路に木材を使ったウォールがありますけども、林野庁としては大変うれしい建物だなあと、モデルハウスにしてもいいぐらいだなあというふうに感じます。本当に素晴らしい施設のなかで、今日は 20 分程度のお話になりますけども、最後まで聞いていただければ

ありがたいと思います。

今日は「国際森林年と森を歩く」というタイトルでお話ししたいと思います。この写真は今年の 2 月に小笠原に行ったときのものです。世界自然遺産への登録の方も担当してまして、現場に行ったときの写真です。父島の中央山から撮った写真でございます。この 6 月 23 日に、日本で 4 番目の世界自然遺産に登録されました。皆さんご存じだと思いますが、素晴らしい所でございますので、機会ありましたらぜひ訪ねていただきたいと思います。今日のお話ですけども、森林年の位置付け、それから人と森の関わり、3 番目に世界の森林面積の変化、4 番目に温室効果ガスの排出減、5 番目に気候変動と人への健康影響、最後に国有林が提供する森林との触れ合いの場、ということでご説明したいと思います。

国際森林年の位置付けの背景的な情報として、2 から 5 を少し説明したいと思います。これは世界遺産の 1 つであります、北海道の知床の写真でございます。今年は国際森林年になっております。実は 1985 年も国際森林年になっております。1980 年代につきましては、やはりそのときから日本だけではなくて、世界で森が急激に減少してきているということがあり、20 年後、30 年後の将来、森林がどうなっていくんだろうという危機感がありました。そのようなときに 1985 年、第 1 回の国際森林年がありました。それからそのあと皆さんご存じのように、1992 年にブラジルのリオで行われた国連人間開発会議。ここでまた大きく取り上げられまして、その後、森林の持続的な経営とか生物多様性の保全、地球温暖化の防止、砂漠化の防止といった大きな環境問題があげられ、2006 年に国連の総会で、今年も国際森林年にしようという決議がなされ、今いろんな役所、民間団体も全国各地でさまざまなイベントを行っております。森林の持続可能な経営保全、利用の大切さの認識を高めるというところでございます。ここにいらっしゃる皆さんはもう山好きの皆さんで、釈迦に説法みたいなことになりますけども、もう一度再認識をしていただければ大変ありがたいな、と思っています。

人と森の関わりでございますけども、これが国際森林年のロゴマークです。「鹿」は野生動物や狩猟を象徴しているんですけども、我々の生活のなかにそういった野生動物が食材になったり、あるいは今一番問題になってますが、増え過ぎて森を荒らしているというよ

うなことを象徴しています。それから「落葉」について。これは全世界の約半分ぐらいが広葉樹でございます。この広葉樹は、昔から我々のさまざまな生活のなかで生かされてきました。それから十字マークが入った「薬瓶」についてです。森林からいろんな生産物や森の恵みがありますが、そのなかのひとつとして、森を歩くことによって我々の心が穏やかになったり、あるいは病気が治せるといったことを含んでいます。「アヒル」、これは家畜を意味しているそうです。元々動物は森林から飛び出るものが多いんですけども、そういうものを改良して作ったということを意味しています。「トカゲ」は、森林内の種の多様性というところを意味します。それから上へいきまして「リンゴ」ですけども、森林のなかにはいろんな果物がある。それが地域住民の生活にさまざまな恵みを与えるということです。それから「森林」と「雨」ですね。雨雲のところですね。森林は気候に大きな影響を与えている。気候を緩和したり、空気をきれいにしたり、そのようなことです。それから木材ですね。「家」ですが、森林は木材を生産するということですね。それから木材、森林は二酸化炭素をパクパク吸ってくれると、アレルゲン蓄積をするというものです。それから「川」。川は水を象徴しているわけですけども、森を育て、森の循環を抑制するとも。森がない所には、雨が降ったあとに地上の土壌が一気に川に流れます。森林があると、そういった土砂の流れがかなり抑えられるというところですね。「針葉樹」、これも地球上の森林の半分ぐらいが針葉樹なんですけども、いろんなものに使われているということと、土砂の崩壊を止める機能になっているといえます。「木の幹」ですね、これは森林全体を意味するわけですけども、森林というのはいろんな機能を持っています。土砂崩壊の防御をしたり、空気を作りきれいにしてくれます。最後ですが「人間」が中心にいますけども、やはりこういう自然を大事に育てたり守ったりするのは、人間がしっかりしないといけないという、**Responsibility**（責任）と役割ですね。

世界では、熱帯地域を中心にして今でも年間約 520 万 ha の森林が減っています。ただ造林が含まれていますので、純粋な森林は約 1,300 万 ha ぐらい減っていることが分かっています。なぜオーストラリアの森が減っているかご存じでしょうか。2006 年ぐらい、今から 5、6 年ぐらい前の干ばつですね。乾燥害が起きて、その影響で山火事が多発しているということです。それから中国が最近どんどん木を植えていまして、年間 4、50 万 ha ぐらいの造林面積になっています。中国が今増えているんですね。

森林面積は地球全体で 40 億 ha ぐらいあるといわれています。陸地面積の約 3 割です。ご存じのように、地球の表面積の約 7 割が海洋です。それから 3 割が陸地です。その 3 割が森林ということで、かなり少ない面積になりますけども、地球環境の保全に大きな役割を果たしているといわれています。世界の森林面積は、90 年代、2000 年代を比べますと、減少の度合いは最近 10 カ年の方が減ってきています。南米は相変らず同じぐらい減っています。オセアニアについても先ほど申しましたように、オーストラリア中心なんですけども減ってきている。それから中・北米はほとんど変わらないですね。ヨーロッパでは若干増えています。アジアは 90 年代にすごく減少したのですが、最近の中国の造林で増大

しています。アフリカも熱帯地域を中心にかなり減っております。1990年から2010年の20年間でどれだけ森が減ったかといいますと、我が国の国土の約4倍。日本の面積は大体3,800万haです。この4倍がこの20年間になくなってしまった。まだ減り続けています。将来どうなるのか----

これ、皆さんなんだと思いますか。すぐ山火事というふうに思ったかもしれませんが、実は JICA、国際協力機構で専門家として現地に行ってみて、ラオスの焼き畑を撮った写真です。これも焼き畑の跡地なんですけども、こんなふうに森林を切って乾燥させて、そのあとに陸稲、イトウとかそういった野菜類を作ります。ラオスはこんなふうにして木を切って減少させています。

農民の方は木の大切さをよく知っているんですね。木がなくなると、もうそれこそ土壌は流されます。土壌にはA層、B層、C層ってだんだんと下にいくほど養分が少なくなるんですけども、ご存じのように熱帯の雨というのはものすごい雨です。みなさんもお経験あるかと思いますが、本当にバケツをひっくり返したような雨が降ります。そういったすごく強力な雨が降ると、もう1年ぐらいでA層の一番富んでいる栄養の多い所が流されてしまいます。そうすると1年しか野菜や陸稲（リクトウ）は作りません。農民に悲願するも、「こうやったら、自分たちの首絞めてるみたいなんですね」と言ったら、笑って「でもそうしなきゃ食っていけないんだ。ハントキは切って間違いないんだ」ということを言ってきます。そういうことを聞くと、どうしたらいいのかなぁと思います。いろんな対策で今はやっておりますけども、依然として熱帯地域ではこんなふうに森が減っています。

これも同じラオスなんですけども、皆さんルアンブラバンってご存じでしょうか。ラオスのだいたい300kmくらいの下の所にある町なんですけども、世界遺産都市でもあります。これは私が飛行機に乗ってるときに撮った写真なんですけども、これメコン川ですね。こんなふうに焼き畑をやるわけです。もうこれほとんど木がありません。そうすると土壌が流されてだんだんとやせていって、ゆくゆくはもう何も使いものにならないことになってしまいます。まあ、ここら辺が少し残っていますけども、こんな状態で今、東南アジアの森が減り続けています。

これも、先ほどCO₂の排出量の2割が森の減少から出てくるという話をしましたが、それに関連して起こる気候変動ですね。地球の温暖化です。温暖化が始まれば気候変動が起こる。現象としては気温上昇とか降水量、パパンの変化、海水温の変化、海面上昇、そういう現象が起こります。そうしますと環境影響要素ですけども、生活パターンが変化したり、洪水とか干ばつがどんどん起こる。これは温暖化の原因がその正体といわれています。それから気温が変わることによって作物の生態系も変わってくる。それからあと熱帯性の感染症が出てくる、と。そうすると我々人間の健康にどんな影響があるかという話ですけども、いろんな病気が、熱帯性の病気がだんだんと上に上がってきます。こういう影響がこのまま続けば、どんどんと発生してくるようになるんじゃないかなろうかと言われてい

ます。

ちょっと視点を変えまして、このロングトレイルとの関連でございますけども、国有林が提供する森林との触れ合いの場ということで、国有林は昭和 40 年代前半から国有林を総合的に活用しようという、自然休養林制度があるんです。昭和 43 年にできました。40 年ぐらいの歴史がございます。やはり高度経済成長のあとで、終わりの方ですけども、森を有効に活用しようということで、それで作ったわけですけども。こういう場所を活用していただければありがたいと思います。

そこに含まれている森のなかで遊びたいというテーマで、レクリエーションの森っていうのがございます。今 6 つ混入されています。自然休養林、それから自然観察教育林、風景林、森林スポーツ林、野外スポーツ地域、風致探勝林ということで、森のなかを歩くっていうのは、トレイル的なことですね。自然観察教育林は森のことをよく勉強したいということで、トレイルがあったり、いろんな動植物があったり、見たりというところで、バックアップのような教育に適している、環境教育に適している林です。風景林はこういった旧跡、名所などと森林が一体になった所ですね。どっちかって言うと、観光地みたいな所です。野外スポーツ林、これはこの森林のなかでキャンプとかサイクリングができるような所です。野外スポーツ地域は、森林のなかに直接入るっていうよりも、こういった国有林野を訪ねて、スキー場を造ったり、あるいはそれに関連して宿泊スペースを造ったり、そういった地域です。あと風致探勝林、四季がすごくきれいな所ということで、ロングトレイルには適している場所じゃないかなと思います。

レクリエーションの森の設置状況ですけども、約 1,000 カ所ございます。面積は 39 万 ha、利用規模は 1 億 1,000 万人。私は、少し多過ぎるんじゃないかなと思ったんですけども、県からの報告やあるいは各自然管理局からの数字をまとめて書いたらいいんですけども、1 億人ぐらいの人が、まあ延べですけど利用してるんじゃないかなと言われていきます。長野県にも軽井沢とかありますね。上高地もあります。それから穂高もございすね。

あとひとつ。全国に自然運営休養林があと 80 数カ所あるんですけど、こんなふうに全国に散らばっています。たくさんあります。長野県ですけども、この 6 カ所ですね。カヤの平、戸隠・大峰、湯の丸・高峰ですかね。北八ヶ岳、赤沢、その他ということで、長野県だけでも 6 カ所ございます。あとこれは木曽御岳の自然休養林の連携です。

最後になりますけども、これは青森県の奥入瀬川ですが、ちょうど「森を歩く」というタイトルですので、入れてみました。人の暮らしの礎に森の恵みがあり、森が人を育み、人が森を育む。森を歩いてそれを体感しよう。私の最後の締めでございます。

特別寄稿 広がるロングトレイルの可能性

中村 達

登山道やハイキング道、あるいは自然歩道などを総称してトレイルと呼んでいる。さらに、トレイルが距離で数十km以上あり、常にルートが保全が行われているものを、便宜的に「ロングトレイル」としている。

そんなロングトレイルが各地に続々と誕生し、新たな計画も進んでいる。国民の健康志向や自然への旅（アドベンチャー・トラベル）のニーズの高まりがその背景にある。また、地域観光の活性化も大きな課題であり、ロングトレイルを開設して歩く旅の誘客に力を入れようとする目的もある。

さらに、環境省は東日本大震災の復興支援のために、三陸海岸沿いに 300 km のロングトレイルの開設に着手する。また、国立の青少年教育施設を結んで、数百kmのロングトレイルの設定も検討されている。子どもたちの体験活動にこのトレイルを利用し、長期間にわたる歩く旅をプログラムにしようという構想である。

この国の森林面積は世界でもトップクラスを誇る。少なくなったとはいえ、そこにはまだまだ多様な動植物が息づき、亜熱帯から亜寒帯までの気候と、海拔ゼロ・メートルから 3,000m 級の高山まで類まれな地勢がある。観光立国が国の重要な施策のひとつであるが、従来型の観光だけでなく、「歩く」という行為を通してこの国の豊かな自然を体験し、「森の文化」の素晴らしさを、国内外の多くの人々に知ってもらうことができれば、品格のある国として評価されるのではと思う。

登山・ハイキングがブレイク

健康志向のニーズ、自然への関心の高まりなどから空前の登山がブームとなっている。レジャー白書による登山人口は 1,077 万人にのぼり、数字だけ見れば、質はともかく世界でも有数の登山王国である。それは「山ガール」や「女子登山」などがブームとなって、さらに「山ボーイ」を発生させ、中高年登山者とともに参加人口を増やしているのが主な要因である。また、「ピクニック、ハイキング、野外散歩」もここ数年で 1,000 万人もの参加者が増え、データがとられてから以降、最大の参加人口となっている。

また、スポーツ用品の国内市場規模でも健康志向を反映して、トレーニングやアウトドア市場が堅実に伸長している。ちなみに、2012 年の国内のアウトドア用品の出荷市場は、昨年対比で 5% 増加し、およそ 1,624 億円と推計されている。あらゆるスポーツが低迷するなかで、数少ない有力なマーケットとなっている。

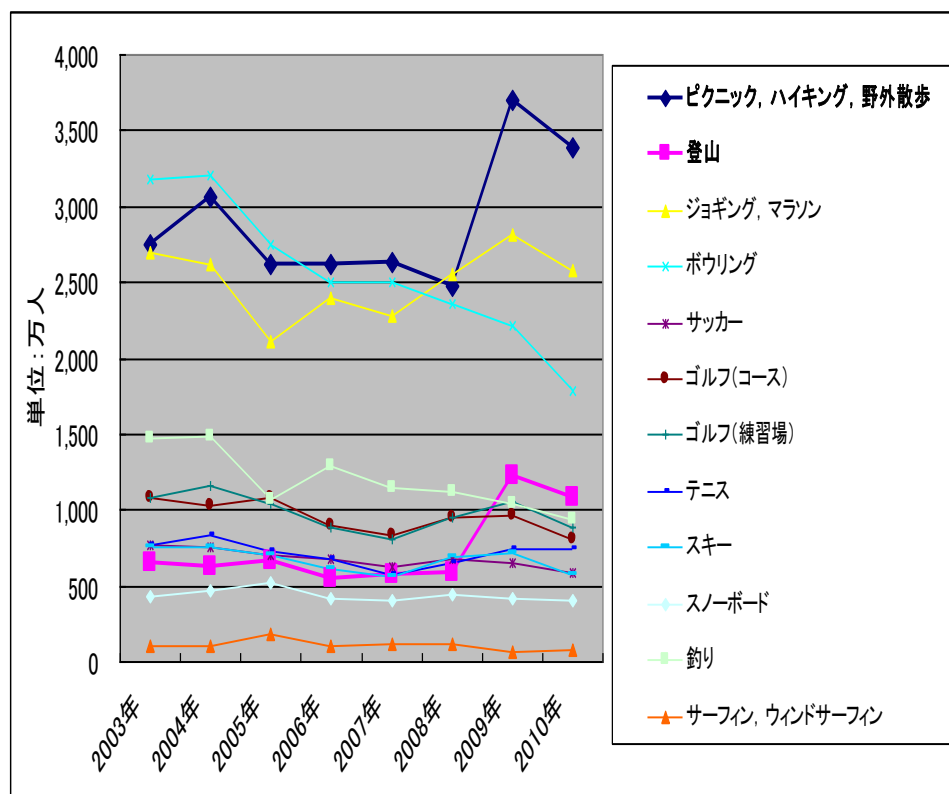
いっぽう球技系のスポーツやウィンター・アクティビティの市場は収縮していて、厳しい状況が続いている。

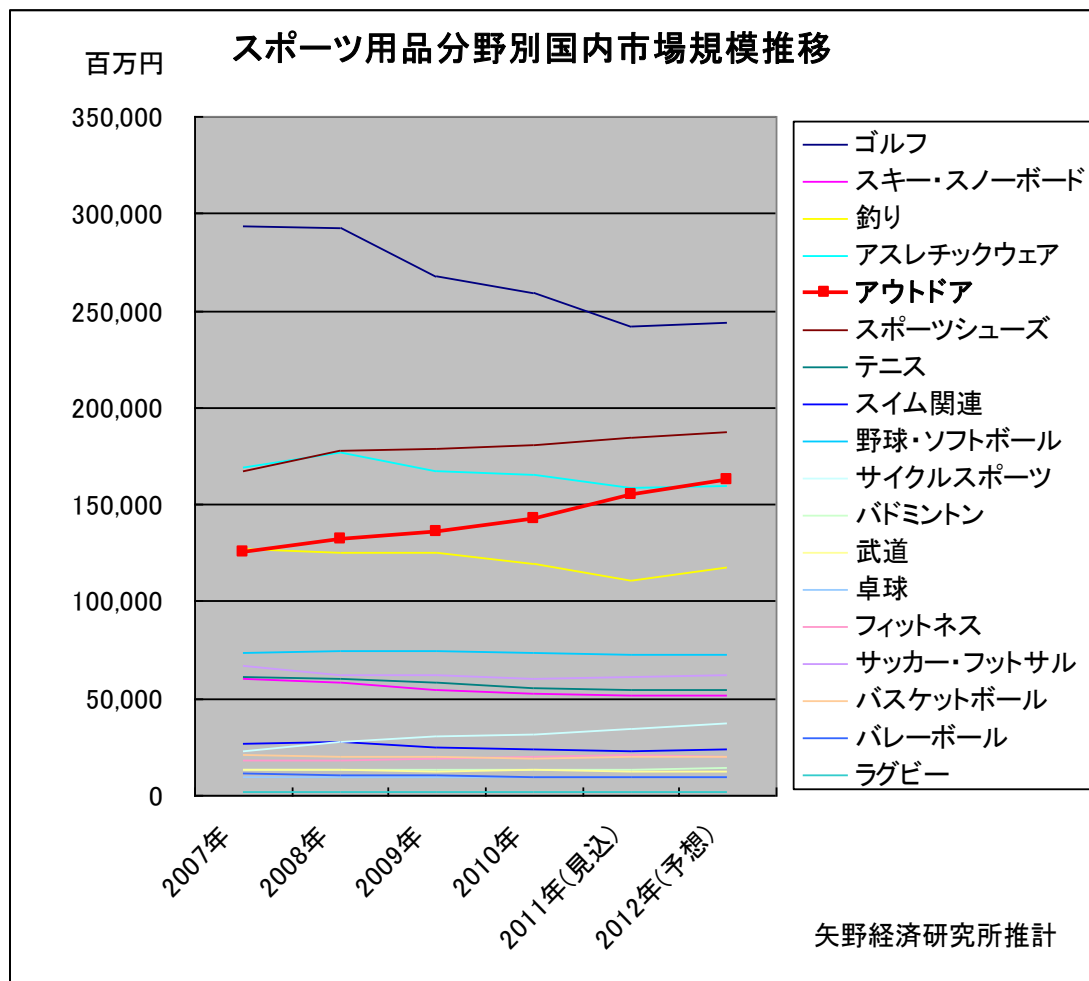
レジャー参加人口

(単位 万人)

	2003 年	2004 年	2005 年	2006 年	2007 年	2008 年	2009 年	2010 年
ピクニック, ハイキング, 野外散歩	2,754	3,057	2,622	2,615	2,629	2,476	3,694	3,386
登山	647	627	661	552	574	586	1,231	1,077
ジョギング, マラソン	2,699	2,617	2,115	2,394	2,276	2,553	2,811	2,575
ボウリング	3,182	3,200	2,755	2,505	2,508	2,354	2,216	1,785
サッカー	768	759	705	684	630	674	657	585
ゴルフ (コース)	1,075	1,034	1,080	894	829	950	964	811
ゴルフ (練習場)	1,075	1,155	1,036	883	806	950	1,057	882
テニス	768	836	727	673	574	652	749	749
スキー	757	759	705	607	563	685	718	575
スノーボード	428	473	518	419	398	442	421	400
釣り	1,470	1,484	1,069	1,291	1,149	1,116	1,047	944
サーフィン, ウィンドサーフィン	99	110	176	110	122	122	62	82

(資料 レジャー白書 2011)

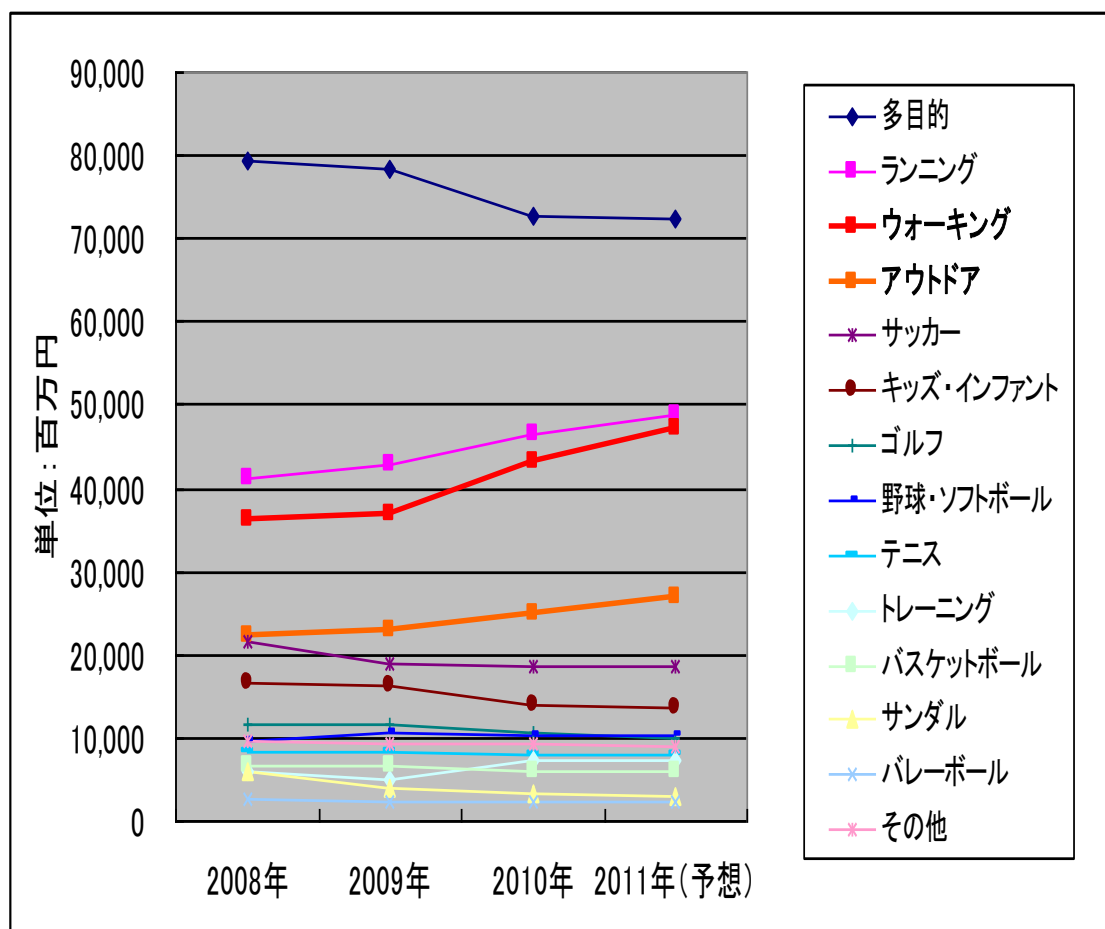




アウトドア、ウォーキング・シューズの売れ行きが好調

スポーツ・シューズ国内出荷額の推移では、球技スポーツ用は横ばいか、減少傾向を示しているが、アウトドアやウォーキング、ランニングなどは毎年5%程度の伸びを示している。健康づくりとアウトドア・ブームが、マーケットの拡大の大きな理由と思われる。

特に「歩く」ニーズは非常に顕著であり、2011年のウォーキング・シューズの出荷額は約470億円、アウトドアはおよそ270億円と推計されていて、かつてない好況が続いている。



「歩く」がブレイク

アウトドアズ・アクティビティの参加人口や、アウトドア用品の好調な売れ方によっても、「歩く」をコンセプトとしたアクティビティは、国民的な高いニーズに支えられているといえる。それが地域観光の活性化という、主として山岳観光地の新たな観光モデルと結びついて、各地でのロングトレイルの開設が急速に広がっていると思われる。

全国のロングトレイルの実態と動向

欧米には数多くのトレイルがある。代表的なものは、米国のアパラチアン・トレイル（3,500km）やジョンミュア・トレイル（340km）、英国のフットパス（22万5,000km）のほか、北欧から地中海、スペインへと至る長大な巡礼街道などがあげられる。それらのトレイルには歴史や宗教、さらには自然保護などの多様なコンテンツが存在し、世界各国から多くの人々が訪れている。

国内でも古くから四国のお遍路の道や熊野古道などがよく知られている。また、最近では信越トレイル（80 km、長野県飯山市）や高島トレイル（80 km、滋賀県高島市）が開通し、大勢のトレkkerやハイカーなどで賑わっている。

ちなみに、信越トレイルは昨年 3 万 2,000 人が、高島トレイルは 4 万 5,000 人以上の利用があった。また、八ヶ岳山麓を長野県と山梨県をまたいで周回する、八ヶ岳山麓スーパー・トレイル（200 km）は、現在のところ国内最長のルートの整備を終え、本格的な運用が始まっている。

■ 全国の動向

[稼動トレイル]

- ① 信越トレイル 80 km（長野県飯山市）
- ② 高島トレイル 80 km（滋賀県高島市）
- ③ 八ヶ岳スーパー・トレイル 200 km（長野県茅野市、山梨県北杜市ほか 10 市町村）
- ④ 浅間ロングトレイル 175 km（長野県小諸市、群馬県嬬恋村ほか 4 市町）
- ⑤ 十勝ロングトレイル 200 km（北海道帯広市ほか 5 市町村）
- ⑥ 霧ヶ峰・美ヶ原中央分水嶺トレイル 38 km（長野県長和町ほか）
- ⑦ 塩の道トレイル 120 km（長野県小谷村、新潟県糸魚川市）
- ⑧ 北根室ランチウェイ 71 km（北海道中標津町）
- ⑨ （仮）八ヶ岳・浅間ジョイント・トレイル 約 30km（長野県小諸市、東御市）

[計画トレイル]

- ① 比良比叡ロングトレイル 130 km（滋賀県大津市、京都市）
- ② 南房総トレイル 100 km（千葉県南房総市）
- ③ スノーカントリー・トレイル 300 km（群馬県みなかみ市ほか）
- ④ 岐阜県白川村（白山一周を検討中）

また、環境省は東日本大震災で被災した地域の復興という目的もこめて、「三陸トレイル」300 kmの計画を進めている。

安藤百福センターのトレイル

安藤百福センターでもトレイルの設定を行っている。ひとつはセンター周辺に全長 22.8 kmのトレイルを造り、研修生らの利用が始まっている。さらに、小諸市の懐古園からセンターを通り、御牧ヶ原、望月宿を経由して春日温泉に至るおよそ 30 kmのトレイルを設定し、HP 上で公開している。これは、八ヶ岳山麓スーパー・トレイルと浅間ロングトレイルのジョイント・トレイルとしても位置づけられ、近く運用が始まる予定である。

青少年の自然体験活動とロングトレイルの相関

ロングトレイルは、大人のアウトドア・アクティビティのためのものだけではない。高島トレイルや信越トレイルでも、学校や教育機関の自然体験活動や野外教育のフィールドとして積極的に利用されている。同時に、トレイルの保全やメンテナンスを、授業の一環

として位置づけている学校もある。

さらに、修学旅行や研修旅行にトレイルを歩く、というプログラムを組み入れている学校も出始めている。八ヶ岳山麓スーパー・トレイルなどはその典型的な例で、特に旅行代理店などが、修学旅行のスケジュールに組み込んだ提案を行い、好評を得始めている。

青少年が経験したこともない、長大なトレイルに少しでも挑戦するという新たな取り組みは、この先、自然体験学習のプログラムとして注目されていくと思われる。

安藤百福センターで日本ロングトレイル協議会の設立総会とフォーラムを開催

このようなロングトレイルの状況から、昨年7月8日、安藤百福センターで日本ロングトレイル協議会の設立総会と、第1回ロングトレイル・フォーラムを開催した（123 ページ参照）。設立総会には国土交通省観光庁、文部科学省、林野庁、環境省などの国の機関をはじめ、長野県や地元自治体の関係者も多数出席し、関心の高さを見せた。日本ロングトレイル協議会の設立については、観光庁のスポーツ・ツーリズム基本政策のなかでも紹介されているほか、マスメディアでも数多く紹介された。現在、日本ロングトレイル協議会には、全国8ロングトレイルの運営団体が加入し、各地で普及と振興のためのフォーラムを開催している。また、安藤百福センターを会場にして情報交換や交流などを積極的に行っている。



123 Wanderlog

『ワンダーフォーゲル』山と溪谷社



『BE-PAL』小学館

**塩の道、霧が峰美ヶ原が人会
加盟7団体に（第2回）**
日本ロングトレイル協議会

日本ロングトレイル協議会（総会）は、10月28日、長野県飯山市なべくら高原「森の家」で第2回総会を開催し、新たに塩の道トレイル（長野県小谷村）、霧が峰美ヶ原・中央分水嶺トレイル（長野県長野市）の運営管理団体への加入を承認した。これにより加盟トレイル管理団

境省の安田直人長野自然環境事務所長、林野庁の角秀敏国有林総合利と、バネルディスカッ

シオン「トレイルの未来を語る」が開かれ、信越トレイルクラブの木村宏事務局長、高島トレイル推進協議会の前川正彦会長、八ヶ岳トレイルクラブの米川正利理事長、ネイチャーライターの加藤則秀氏をパネリストに討論が行われた。コーディネーターは中村達氏。

翌29日は、信越トレイルでエクスカーションが開催され、約30人が関田峠からどん平までの約8キロの紅葉のトレッキングを楽しんだ。

基調講演する信越トレイルクラブの小山邦武代表理事

信濃毎日新聞

スポーツ産業新報
THE SPORTS INDUSTRY NEWS
2011年(平成23年) 8月10日(水曜日) 第1975号

「日本ロングトレイル協議会」設立
地域活性化で連携を
全国的整備や利用促進へ

日本ロングトレイル協議会（以下、協議会）は、10月28日、長野県飯山市なべくら高原「森の家」で第2回総会を開催し、新たに塩の道トレイル（長野県小谷村）、霧が峰美ヶ原・中央分水嶺トレイル（長野県長野市）の運営管理団体への加入を承認した。これにより加盟トレイル管理団

日本ロングトレイル協議会（以下、協議会）は、10月28日、長野県飯山市なべくら高原「森の家」で第2回総会を開催し、新たに塩の道トレイル（長野県小谷村）、霧が峰美ヶ原・中央分水嶺トレイル（長野県長野市）の運営管理団体への加入を承認した。これにより加盟トレイル管理団

スポーツ産業新報

中村 達（なかむら とおる）

アウトドアジャーナリスト・プロデューサー。安藤百福センター副センター長、特定非営利活動法人アウトドアライフデザイン開発機構代表理事など。

新しい自然体験活動の指導者養成制度について

久保田 康雄（国立青少年教育振興機構 オリンピックセンター運営部長）

はじめに

平成 24 年 6 月、新しい自然体験活動の指導者養成制度がスタートした。まだ、緒に就いたばかりであるが、自然体験活動や野外教育や環境教育の分野において、オールジャパンの指導者養成制度を確立しようという試みは、非常に画期的なことであり、歴史に残るできごとだといえる。この新しい制度の特色のひとつは、自然体験活動部分野では、日本で初めて民間と国の機関が連携して行われる指導者資格付与制度であること。もうひとつは、自然体験活動の指導者が共通に修得しておかなければならない知識や技術の初めてのナショナル・スタンダードとなる指導者養成カリキュラムとその認定制度を創設したことである。

1. 背景

近年、社会が豊かで便利になるなかで、子どもたちの自然体験、社会体験、生活体験などの体験が減少している。近年の調査研究においても、約 3～4 割の子どもが「海や川で泳いだこと」「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫を捕まえること」がほとんどないと答えるなど、自然体験を行う青少年の割合は著しく減少している。

このような状況を踏まえ、国立青少年教育振興機構が中心となり、民間の関連団体と連携し、子どもたちの健やかな成長にとって体験活動がいかに重要であるかを広く社会に伝え、社会全体で体験活動を推進しようと「体験の風をおこそう」運動を展開してきた。また、平成 12 年に設立した、NPO 法人自然体験活動推進協議会（CONE）が、自然体験活動憲章の精神に基づきながら、分野や地域を超え、自然体験活動指導者の登録活用事業を行ってきた。現在では約 15,000 人の指導者が登録されている。

さらに、平成 20 年度から文部科学省委託事業「体験活動推進プロジェクト」において共通カリキュラムの下「自然体験活動指導者養成事業」が行われ、約 2 万人の指導者が登録された。しかしながら、国の施策として実施されているこの指導者養成事業は、恒久的な制度とはならないこと。また、登録した指導者の活用が十分ではなかったという反省もある。

今後、さらなる安心・安全で良質な体験活動を展開するためには、日本各地において、自然体験活動に関わる民間団体だけではなく、国立や公立の青少年教育施設等に対しても、一定の知識・技術を具えた指導者を常時配置する必要がある。そこで、公立の青少年教育施設や学校を対象として指導者を養成してきた国立青少年教育振興機構と民間の指導者を養成してきた CONE とが連携し、ナショナル・スタンダードとなる新たな自然体験活動指導者養成カリキュラムと認定制度を創設することとなった。この新しい制度によって、より多くの質の高い指導者が育成され、青少年の体験活動がさらに充実するよう切に望んでいる。

2. 新制度の組織

図1のように、体験活動の資格の認定を行う「全国体験活動指導者養成認定委員会」を設置し、その下部組織として、自然体験活動の資格の審査を行う「自然体験活動部会」を設置した。また、自然体験活動部会の下には、自然学校や国公立の青少年教育施設や大学などの養成団体があり、同一のカリキュラムの下で、自然体験活動指導者養成講座が実施されることになる。また、点線で囲われたその他の体験活動部会については、今後設置されることとなる。

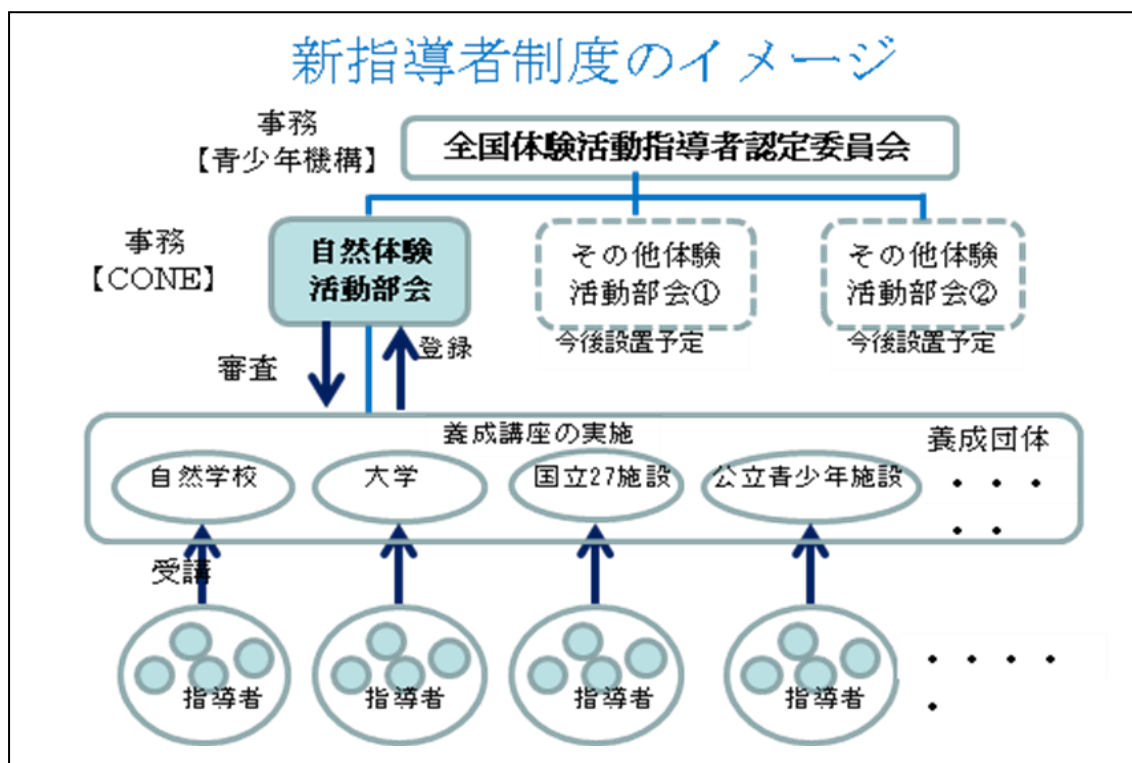


図1：新指導者養成制度のイメージ

3. 資格の種類と役割

自然体験活動指導者養成制度では、図2のように「自然体験活動リーダー」と「自然体験活動インストラクター」と「自然体験活動コーディネーター」の3種類の資格を設定した。リーダーの役割としては、自然体験活動の楽しさを広めるとともに、インストラクター、コーディネーターの指導の下に限定された自然体験活動プログラムの指導を行うことである。インストラクターの役割は、自然体験活動プログラムを企画・実施するとともに、自然体験活動リーダーに対して指導することであり、コーディネーターの役割は、自然体験活動の事業全体を企画・実施する責任者であるとともに、自然体験活動リーダーとインストラクターを指導することである。

特に自然体験活動リーダーの養成講座は、各地域のボランティアや子ども会の指導者など、子どもの体験活動を支えているサポーターの多くの方々に受講していただき、自然体験活動の楽しさや素晴らしさを、次代を担う青少年らに伝えていただくことを期待してい

る。

また、インストラクターには確かな指導力が養成される必要があり、コーディネーターはリーダーを支え、地域の人や自然や文化とのつながりを理解した上で、効果的な自然体験活動プログラムの企画や運営を行うことを役割としている。

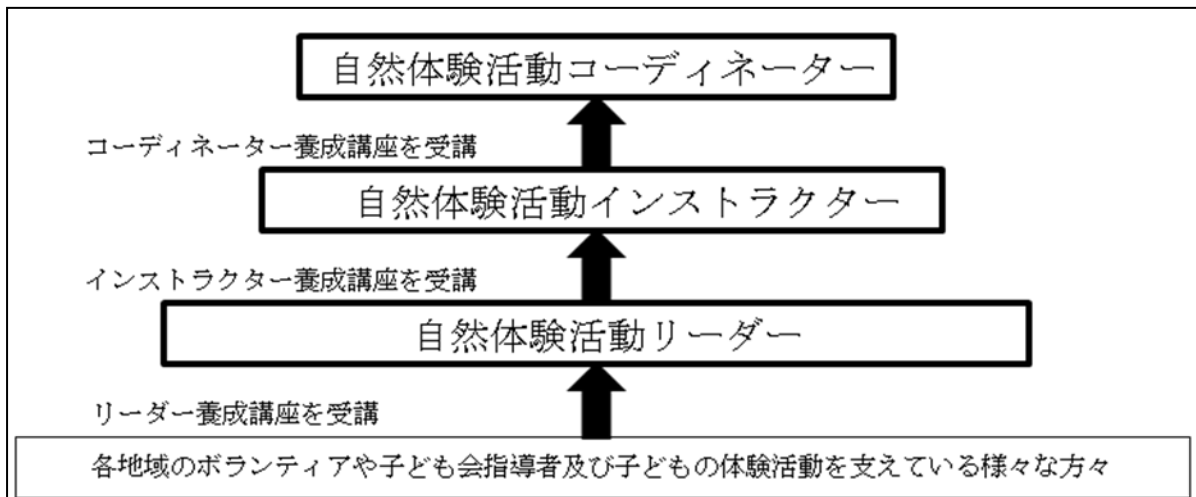


図2：自然体験活動指導者養成のイメージ

4. 養成カリキュラム

養成カリキュラムは、概論（22.5時間）および実習（22.5時間）で構成している。実習（OJT：on the job training）は、概論で学んだ事柄を養成団体等での現場・実務のなかで実地に体験することにより、より確実に身につけられるよう計画される。

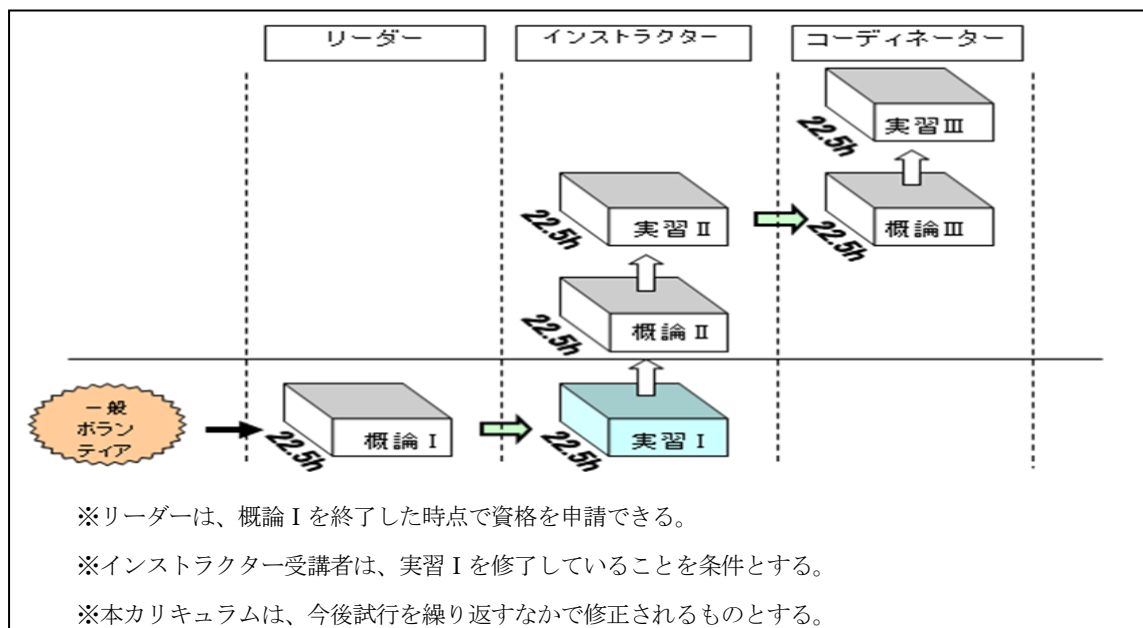


図3：養成カリキュラムの構造

リーダーは、図 3 のように、概論Ⅰの単位を取得することにより資格が認定される。インストラクターは、リーダーの資格を有している者で、(受講前に実習Ⅰを修了し) 概論Ⅱ実習Ⅱの単位を取得することにより資格が認定される。また、コーディネーターは、インストラクターの資格を有している者で、概論Ⅲ実習Ⅲの単位を取得することにより資格が認定される。

概論の単位は、修了試験に合格することで与えられる。また、実習の単位は、実習が行われた養成団体の長から実習修了証明を受けることで与えられる。

5. 自然体験活動指導者養成制度の展望

本制度を発展させ、青少年をはじめとする多くの国民に対して、良質で十分な量の自然体験活動を意図的かつ計画的に提供するためには、本制度で育成した指導者を積極的に活用することも重要な要素のひとつであると考えている。

各養成団体で育成した指導者を、それぞれの団体で活用するのは当然のことであるが、国立青少年教育施設や公立青少年教育施設、自然学校等の民間事業者や大学等の高等教育機関と連携し、指導者の需要等の情報を交換することにより、育成した指導者を効率よく活用できるようになる。そのためには、本制度の自然体験活動部会のリーダーシップの下で、国立青少年教育施設がコーディネート機能を持ち、それぞれの機関の調整役になる必要があると考える。

現在でも、全国を 6 ブロックに分けて実施している国公立青少年教育施設協議会と NPO 法人自然体験活動推進協議会である 280 の民間団体とがそれぞれのブロックのなかで有機的に連携することで、指導者の活用ニーズを創造することができると考える。

また、CONE の上級指導者であるトレーナー養成について、それぞれの養成団体で実施している指導者養成講座や自然体験活動事業の企画段階から関わるようにすることで、民間団体と国公立の青少年教育施設との連携が推進されるとともに、指導者養成講座や事業等の質と安全が担保されることにもなると考える。

最後に

今後のスケジュールについては、平成 24 年度は、養成カリキュラムを確かなものにするために、指導者養成講座の試行事業を行うとともに、新しい制度についての説明会を実施する。25 年度は、指導者の登録を始めるとともに、養成カリキュラムや制度の見直し検討を行い、26 年度に完全実施する予定である。

資料：養成カリキュラム（予定）

【リーダー】

内 容	概論Ⅰ	実習Ⅰ
青少年教育の理解 （青少年の現代的な課題、青少年教育における体験活動の意義）	1. 5	
学校教育における体験活動の理解 （学校教育における体験活動の意義、学習指導要領における体験活動の位置づけ）	1. 5	
自然体験活動の特質 （自然体験活動の意義、自然のつながり、自然と人の暮らしとの関わり）	6. 0	4. 5
対象者の理解（対象に応じた対応の理解）	1. 5	3. 0
自然体験活動の技術（自然体験活動の種類、自然への配慮）	3. 0	3. 0
自然体験活動の安全管理（安全対策、救急救命）	4. 5	4. 5
自然体験活動の指導法（自然体験活動の指導に求められる資質・能力）	3. 0	3. 0
自然体験活動の企画・運営（自然体験活動プログラムの構成要素）	1. 5	4. 5
合計時間	22. 5	22. 5

【インストラクター】

内 容	概論Ⅱ	実習Ⅱ
自然体験活動の特質（地域づくり、地域の自然、地域社会・文化との関わり）	6. 0	4. 5
対象者の理解（配慮を要する対象者の理解）	3. 0	3. 0
自然体験活動の技術（自然体験活動の技術の理解）	3. 0	3. 0
自然体験活動の安全管理（危険予知、安全管理の技術）	4. 5	4. 5
自然体験活動の指導法（プログラム指導と評価）	3. 0	3. 0
自然体験活動の企画・運営（プログラムの企画・立案）	3. 0	4. 5
合計時間	22. 5	22. 5

【コーディネーター】

内 容	概論Ⅲ	実習Ⅲ
自然体験活動の特質（環境教育、自然環境、地域との連携）	6. 0	4. 5
対象者の理解（個人・グループの理解）	3. 0	3. 0
自然体験活動の技術（フィールドに応じた技術、評価）	3. 0	3. 0
自然体験活動の安全管理（事故の救助・対応）	3. 0	4. 5
自然体験活動の指導法（効果的な指導技術）	3. 0	3. 0
自然体験活動の企画・運営（事業企画・運営）	4. 5	4. 5
合計時間	22. 5	22. 5

※ 各科目のさらに詳しいシラバスは、現在作成中

体験活動プログラムの調査研究

関 智子（国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター主任研究員）

当研究センターは、平成 23 年度文部科学省委託事業として行った標記調査研究を、ウェブサイトにて公開している。ご参考いただき、皆さまの実践にお役立ていただけたら幸いである（参照 http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/68/）。

「7つの提案」とプログラム事例を掲載

この調査研究は、防災教育のうち特に青少年の自然体験活動プログラムに焦点を絞り、1) その動向について整理するとともに、2) 「生きる力」の育成を目指す従来の自然体験活動プログラムとの接点を探りつつ、防災教育としての新たなプログラム展開について検討し、3) 過去に防災教育の観点から取り組まれてきた青少年活動プログラムの収集を通してその有用性や課題を整理すること、を目的として行ったものである。

そのため、災害、防災教育、被災地ボランティア団体の責任者および自然体験活動の専門家等から構成される研究会を設置し、知見の整理や検討を重ねた結果、7つの観点から提案を行った。

1. 災害に関する教育の原則（加藤尚武氏／京都大学名誉教授）

災害と人間との関係を幅広く捉え、防災教育の基盤となる部分を整理した結果、「危険の安全予防は不可能」「逃げる、避けるが原則。防ぐ、闘う、助けるではなくて」「『常に当面の最悪事態を回避』が原則」「全員を救えるか、一部を選ぶかが最も困難な決定」「法律적으로는緊急事態の違法性阻却で処理されるが、倫理的には解決不可能な事態が発生する」を基本事項として抽出した。

2. Survivor と Supporter の育成（諏訪清二氏／兵庫県舞子高等学校環境防災科教諭）

従来の防災教育である「避難訓練」「理科教育での防災教育」「備え中心の防災教育」、被災地における心のケアや助け合いや思いやりの価値への理解などを包含する「新たな防災教育」、好きなこと、楽しいこと、得意なことを範疇とする「防災+αの防災教育」の流れを概観し、今後は「想定を信じない防災教育」が必要であることを指摘した。さらに、相手（自然）を知って備える気持ちや態度を身に付けた人材（Survivor）とともに、被災地の自立を促す支援や町づくりへの参画等ができる人材（Supporter）の育成が重要であることを指摘した。

3. 自然体験を利用した防災教育（佐々木豊志氏／くりこま高原自然学校代表）

自らの2度にわたる被災体験と自然学校における指導経験を論理的な裏付けから考察することにより、冒険体験は被災体験を乗り越える“生きる力”を育む貴重な教育手法と指摘した。冒険体験とは「Comfortable（快適）ゾーン」から主体的に飛び出すことと定義。

さらに現行の自然体験プログラムは、自然災害を意識できる教材の提供、フィールド活動を通じての防災意識の喚起および非常時の行動について考える場面の設定、防災意識と日常生活における実践事項の確認を導入することにより、防災教育として活用できると提案した。

4. 自然体験活動指導者と防災教育（佐藤初雄氏／NPO 法人自然体験活動推進協議会代表理事）

自然体験分野の指導者の現状として、防災教育としての意識はまだ低いことを指摘した。このことを踏まえ、これらの指導者を再教育することにより、現在のプログラムが防災教育にも役立つようにアレンジされるだろうという視点に立ち、現行の指導者養成プログラムを提示し、改良を促した。

5. 青少年教育施設における防災教育の展開（小林真一氏／国立中央青少年交流の家次長）

国立の青少年教育施設での実例を基に自然体験活動の改良事例を提示した。防災教育としての自然体験活動を教育手法として、子どもが自ら考え、答えを発見していく「問題解決学習」による指導とその過程の繰り返しの必要性、さらに体験と知識を結びつけることを意識した指導プロセスの重要性を指摘した。我が国の国公立の青少年教育施設は国立 28、公立は 500 を超える。こういった施設で防災教育に役立つ自然体験活動が行われれば、防災教育の大きな飛躍になると思われる。

6. 自然体験と結びつけた効果的な防災教育（藤岡達也氏／上越教育大学大学院学校教育研究科教授）

自然のも持つ二面性、災害と美しさや恵みについて考察した。科学的な視点を通じて教えることから防災教育が始まると指摘し、自然体験活動と防災教育との接点について、国立妙高青少年自然の家および世界ジオパークに登録された糸魚川地域（糸魚川－静岡構造線西側）を利用した事例から説明した。さらに学校が行う自然災害に関する防災・減災教育は、地域社会との連携やパートナー・シップが不可欠であることを指摘した。

7. 防災教育の新たな展開－防災教育から災害教育へ（広瀬敏通氏／一般社団法人 RQ 災害教育センター代表理事）

災害大国・日本の姿を示しながら、災害を体験し、災害の中なかから協力して立ち上がることが大きな教育になると指摘し、防災教育をさらに進展させ、災害後の教育力を重視した「災害教育」という概念を新たに提示した。

本調査研究ではプログラム事例を紹介している。我が国ではすでにたくさんの優れた防災教育が行われているが、当研究センターが情報入手することができた 42 事例について具体的に掲載した。各プログラムに関する基本情報とともに、特徴、指導体制、参加者、手応え、効果、問題と課題、今後のプログラム展開、防災教育を始めようとしている人へのメッセージ等が掲載されており、また質問に対する実践者の方々からの生の情報とご意見が集められている。限られた条件下においても工夫次第で教育現場を整えられることを視野に入れた情報であるため、ぜひさまざまな角度からご一読下さい。

基礎調査雲南省に関する調査報告

楊 帆（安藤百福センター 職員）

目的

近代の急速な経済発展や観光ビザの緩和などを背景に、中国から日本への観光客が年々増加している。また、団体旅行からさまざまな形態の個人旅行へとシフトし、さらにはこれまで主な観光スタイルだった「買い物指向」から、アウトドア・アクティビティやエコツアーなどの多様な自然体験活動を求める「体験指向」へと急速に変化する可能性があると予測する人もいる。今後は、こういった中国人の多種多様な観光ニーズに応えられる人材が、数多く必要となってくることが予想できる。

しかしながら、日本の自然体験活動指導者は、対象となる中国観光客の求める体験活動や文化・風習を掴めていない傾向にあり、要求に対し満足に応えられるか不安が残る。このような状況は、安藤百福センターが指導者養成を行う際にも押さえておきたい項目であり、知識や技術だけではなく、国際性を身に付けた人材を育て上げる必要がある。そのために、まずは中国人の自然環境に対する考え方や体験活動の取り組みについての情報を整理することから始めたい。今回はその基礎調査として、中国における自然体験活動の中心地である雲南省に行き、現地でのヒアリングとフィールド調査を行った（調査予定は雲南省と四川省の2カ所だったが、四川省は悪天候の影響で調査できず）。

調査地

中国雲南省昆明市、梅里雪山

インタビュー団体

- 1) 雲南省環境保護宣伝教育センター（王副主任、歴課長）
- 2) 野風文化伝播工作室（汪静波）
- 3) 昆明市金実小学校（孟校長）
- 4) 随遇戶外（益銘）〈アウトドアショップ〉

フィールド調査地

- 5) 昆明市郊外自然体験施設
- 6) 梅里雪山

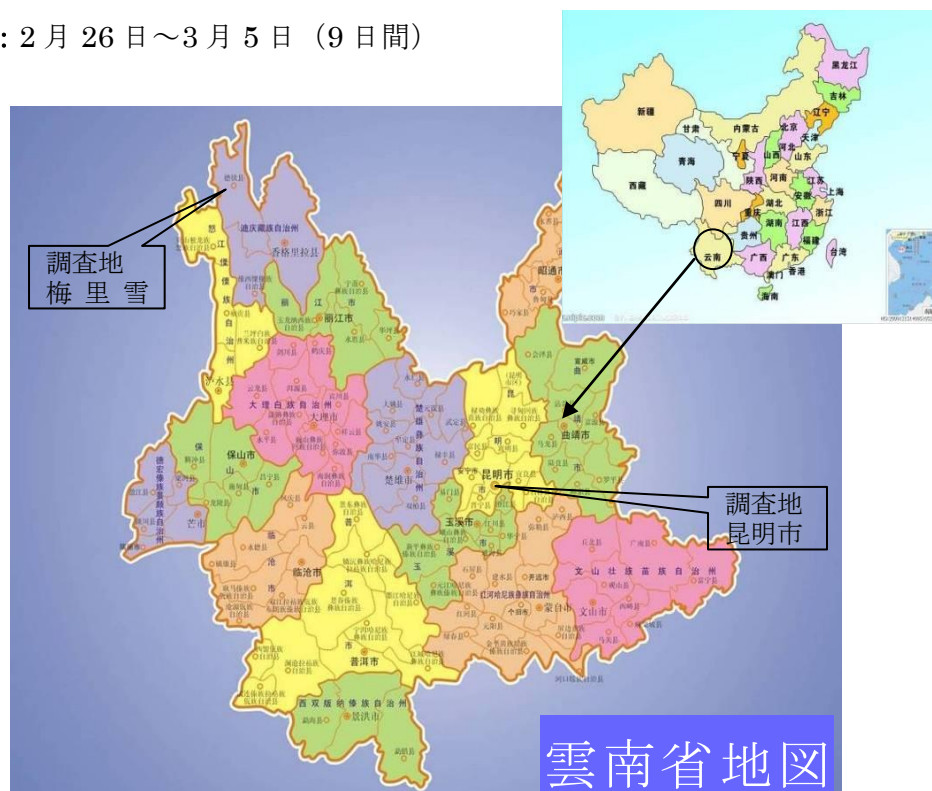
今回の調査におけるコーディネーター

程偉平(国家公務員)

雲南省環境保護宣伝教育センター主任

中国環境新聞雲南記者所所長

日時：2月26日～3月5日（9日間）



調査スケジュール

2月25日	東京	前泊
2月26日	東京～北京～昆明 コンメイ	移動、中国国内航空券予約、 コーディネーターと打合せ
2月27日	昆明	➤ 野風工作室責任者の汪静波氏にインタビュー ➤ 雲南省環境保護教育宣伝センターの王副主任、 歴課長にインタビュー ➤ 自然体験活動施設見回り ➤ 金実小学校の孟校長にインタビュー ➤ アウトドアショップ経営者および登山指導者の 益銘氏にインタビュー

2月28日	昆明 ^{シャン グ リ ラ} ～香格里拉 ^{ダーチン} ～徳欽	移動
2月29日	梅里雪山 ^{メイリーシュエシヤン}	移動、エコツアーが盛んな梅里雪山と明永氷川コースのフィールド調査 行きは単独行動、帰りは現地ガイドの案内付き
3月1日	徳欽～香格里拉	移動
3月2日	香格里拉	現地住民にアウトドアの現状についてヒアリング
3月3日	香格里拉～昆明～成都	移動
3月4日	成都	文献調査、図書購入、資料整理等
3月5日	成都～北京～東京～自宅	移動

概要

永年の環境保護活動によって、ようやく近年は中国人の自然環境意識が高まってきた。また、中国は急速な経済発展によって人々の生活自体も豊かになってきている。そのため、現在は自然のことを理解し楽しみ、大切にしながらレジャー活動を行うようなライフスタイルや消費ライフスタイルが、人々の生活に溶け込んできている風潮にある。こういった状況から、これからますます自然体験やアウトドア、エコ・ツアーなどに参加する人が増えていく傾向にあると推測される。

今回は中国のなかでもエコツアー発祥の場所として知られる、自然豊かな雲南省の調査を行った。雲南省は複雑な地形をしており、南部は亜熱帯性気候により熱帯雨林が有名である。いっぽう北部は亜寒帯性気候の高山地帯で、標高 5,000m以上の綺麗な山がたくさんある。多様な気候に恵まれたおかげで動植物も豊富で、国内外の旅行者やアウトドア愛好者に人気のある名勝地となった。

インタビュー先は雲南省環境保護宣伝教育センター（行政）および野風文化伝播工作室(民間)などの自然体験活動を行っている団体である。また、人気のある自然体験コースの梅里雪山を訪ね、雲南省全体における自然環境、自然体験、アウトドアおよびエコツアーの現状を調査した。そして、日本の指導者が中国の子どもや親子を対象として、必要な研修を受けるための適切な地域・施設の可能性を検討した。

インタビューおよび調査結果

1. 雲南省環境保護宣伝教育センター



左より 厩課長、程主任、調査者



左より 王副主任、調査者、厩課長

質問 1 雲南省環境保護宣伝教育センターでは、どのような環境教育活動を行っているか？

回答 このセンターは 1986 年に設置された雲南省環境保護庁の施設で、雲南省の環境保護や環境教育にとって重要な役割を果たしている。主に環境保護、生物多様性、森林保護、植物保護などの自然環境を守るための数多くの事業を展開している。また一方では、学校、環境 NPO や NGO、企業、市民などに対しての環境保護意識を高める環境教育活動も行っている。

さらに、環境教育指導者の養成については、学校の先生や環境 NPO・NGO 職員を対象として欧米との環境教育国際交流事業を行っている。例年、参加国のなかの 1 カ国を訪れ、現地の環境教育活動を体験し、意見交換などの交流会を行うことで、各国の良い事例を学んでいる。この養成事業はこれまで 5 年間実施してきた。また、「千名青年環境友好使者」という環境教育ボランティア養成活動にも力を入れている。これは、講座や体験プログラムを通して毎年募集した、1,000 名のボランティアに環境問題や環境教育を学んでもらい、環境保護に対する意識とボランティア活動の質を高めることを目的として行っている。受講者たちは「種まき役」として、学んだ知識を学校、企業、市民などに対して普及していくことを期待されている。

質問 2 小・中学校ではどのような環境教育を行っているか？

回答 小・中学校での環境教育について、政府はその重要性を認識している。そのひとつの手段として「緑色学校」という制度がある。これは、通常の学校教育に加えて、環境教育プログラムを行っている学校として政府から認められる制度である。学校活動において、生徒や先生の環境意識を高めるための活動が認められる。生徒たち

は1日の1/3の時間を学校で過ごすので、学校は環境に対する価値観や取り組みを学ぶ重要な場所と考え、中国では緑色学校こそ21世紀の学校教育の新たな方法であると考えている。雲南省環境保護宣伝センターは、行政機関として教育機関とともに認定のための審査を行っている。

質問3 雲南省における自然体験や環境教育の現状はどうなっているか？

回答 現在、雲南省では環境NPO・NGOが毎年増加する傾向にあり、国や政府も環境保護、環境教育および青少年の自然体験を重視している。今後の環境教育活動は良い方向に発展すると期待している。

質問4 雲南省には自然体験活動の指導者養成施設があるか？

回答 安藤百福センターのような研修施設はまだない。安藤百福センターが行っている活動や指導者制度については大変興味があり、青少年の健全な成長に非常に重要だ。今後、自然体験活動および環境教育の日中交流が増進することを希望する。

2. 野風文化伝播工作室

責任者：汪静波（大学での専攻はエコ・ツーリズム。昆明環境科学普及協会を経て、2011年、野風文化伝播工作室を設立した）

質問1 昆明市に、自然学校のような団体はあるか？

回答 自然体験活動を行っている団体について知っている範囲では、野風文化伝播工作室だけ。

質問2 野風文化伝播工作室はどういう活動を行っているのか？ また、どのようなプログラムがあるか？

回答 野風文化伝播工作室は昆明市の自然体験活動団体であり、活動の内容を3つに分けている。1つ目は学生向けに国立公園や植物園、動物園、地震体験センターなどを利用して自然に関連する科学的な知識を教える。2つ目は熱帯雨林などを利用して子供と大人向けの自然探検プログラムを行う（実行のために現在準備中）。3つ目は自然体験活動の初心者向けにネイチャー・ゲームなどの自然を利用した簡単なプログラムを行う。3つ目のプログラムは、とりあえず自然のなかへ行ってみましょう、ということが主な目的である。綺麗な山や珍しい植物を見つけるだけでなく、身近な野原でも緑を見たり、自然な風を感じたり、虫に触ったり、とにかく自然のことを楽しもう、五感を使って自然の楽しさや自分の新しい一面を発見しよう、という主旨のプログラムである。

質問3 自然体験を専門に行っている指導者はたくさんいるか？ 指導者を養成する団体はあるか？

回答 「自然体験」はまだ新しい言葉であり、一般的には認識されていない。そういった意味で専門的な指導者は少ないのが現状である。ただし、探検などの危険性が

高いアウトドア活動を行っているクラブには、専門の指導者がいることはよく見られるケースだ。例えば、登山に関する専門的な指導者を養成するための制度も存在している。

質問 4 学校ではどのような環境教育を行っているか？

回答 学校については、緑色学校制度に基づく環境教育プログラムの活動を中心にを行っている。

質問 5 日本の指導者養成や自然体験に関心があるか？

回答 初めて「自然体験」という言葉と出会ったのは広瀬敏通氏の本だった。日本語が分からなかったが、なかの絵を見たらこれは面白いと思い、それからさらに自然体験や野外教育の重要性を知り、野風文化伝播工作室を設立した。日本の自然学校はたくさんの成功事例があり、20 年以上運営経験がある自然学校もたくさんある。まずは日本の自然学校のことを学ぶことが非常に重要だと思う。

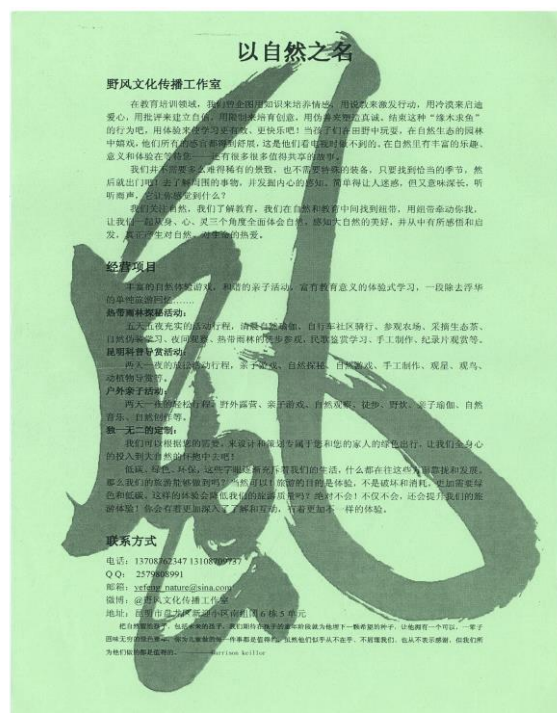
化伝播工作室の紹介チラシ

昆明市では、まだ自然体験自体が新しい言葉なので、指導者制度は整備されていない。

しかし、自然体験活動を展開していくとさまざまな課題が見えてきた。自然体験という言葉や理念はまだ一般的に認識されていないので、参加者からの不信感や安全に対する不安もあり、なかなかうまく進められていない。運営面での課題は、指導者の不足、資金調達の方法、リスク・マネジメントの経験不足などがある。野風文化伝播工作室だけではなく、多くの環境 NPO・NGO 団体はこういった課題を抱えており、この面でも日本の自然学校について学ぶ必要があると思っている。安藤百福センターの上級指導者制度の構想は魅力的であり、機会があればセンターで学びたい。

3. 昆明市金実小学校（校長：孟氏）

金実小学校は雲南省緑色学校のモデル校であり、具体的な環境教育の方法について紹介していただいた。一番意識しているのは、生徒の自主的な取り組みを支えること。例えば、音楽や歌に合わせて踊る植物に興味を持った生徒たちがいた。そこで学校の先生は生徒たちを連れて専門家の所へ向かった。専門家に話を聞いた生徒たちはさら



野風文

に植物に対して強い興味を持ち、ほかにも同じような植物を作り出せないかと研究を始めた。結果的に、日光が当たると踊り出す植物の開発に成功した。こういった、生徒が興味を持ったことに先生が協力し、生徒たち自身が自主的に自然のものと触れ合うことで、子どもの思考能力や問題解決能力が高くなり、人格の形成や心身の健康にも有意義に働くことが分かった。今では温度や湿度、日当たりなどを自動コントロールできる 96 m²のビニール・ハウスを作り、このビニール・ハウスのなかで先生のサポートの下、生徒たちが自主的に研究を行えるようになっている。研究の取り組みが評価され、国や省からの表彰を受賞することも多い。

4. 随遇戸外（アウトドア・ショップ・オーナー：益銘氏）

益銘氏は子どものころから自然が好きで、大学時代から本格的なアウトドア活動を始めた。その後、会社勤めを経て自分でアウトドア・ショップの経営を始めた。

質問 1 中国のアウトドアはどのような現況か？

回答 近年は、登山、トレイル、マウンテン・バイク、スキー、キャンプ、カヤックなどが人気のアウトドア活動である。これ以外にも釣り、野外撮影、エコ・ツアーなども人気がある。アウトドア活動を行う人口は毎年増加している。中国の「cnoutdoor.com」によるとアウトドア活動を行う人の男女比は、男性が約 57%、女性が約 43%。また、アウトドアを行う人口は若年化しており、主に 20 代から 40 代が目立つ。さらに約 7 割は大学を卒業しており(短大を含む)、1 割が修士以上の学歴を持っている、と述べた。

中国アウトドア商業連盟の統計データによると、アウトドア用品の 2008 年出荷総額は 21.8 億元(約 270 億円)、売上総額 36.5 億元(460 億円)。2009 年出荷総額は 26.8 億元(340 億円)、売上総額は 48.5 億元(615 億円)。2010 年出荷総額は 32.1 億元(405 億円)、売上総額は 71.3 億元(905 億円)。2011 年の売上総額は 107.6 億元(1360 億円)まで膨れ上がった。特にここ 2 年間の売上総額の伸び率は約 50%と、驚くべき数字が発表されていた。

質問 2 アウトドアに従事する指導者の現状はどうなっているか？

回答 雲南省では日本の自然学校のように、仕事としてアウトドア活動を行っている団体はそれほど多くない。主に旅行会社がその中心である。一方で、個人や小グループで自分たちが楽しむために自主的にアウトドア活動を行っている。また、数十人、数百人規模の「クラブ」という形で活動を行っている団体も存在する。私自身も指導者として、クラブでさまざまなアウトドア・プログラムを作り、参加者を募集して、活動を行ってきた。クラブには、初級のレジャー娯楽クラブや、さらに上級クラブと呼ばれる厳しい自然に挑戦するクラブもある。レジャー娯楽クラブの指導者は、専門知識を持っている人は少ない。一方で、登山や探検に関わっている上級クラブは、専門知識や指導者資格を持っている人が多く所属している。



気軽に楽しめるキャンプ体験（提供＝益銘氏）



5,936mの山頂を目指して進む（提供＝益銘氏）

5. 昆明市郊外

昆明市内から車で 40 分ほど離れた場所に、日帰り客向けの広い敷地を持つ体験施設がある。釣り、植物観察などができ、貸し農園もある。また、会議や宿泊もできるが、指導者はいない。



斜面に広がる野菜畑での農業体験は人気がある



日帰り利用が中心だが宿泊希望にも対応できる



雨天時でもスライド上映や食事ができる
多機能スペースが



桜や桃の奥には釣りもできる

6. 梅里雪山(メイリーシュエシャン)

梅里雪山とは

梅里雪山は連山の総称である。南部は碧羅雪山(ビールオシュエシャン)と接しており、

北部はチベット自治州内にある阿冬格尼山(アドングーニシャン)に連なっている。6,000mを超える山は13峰あり、「太子13峰」と呼ばれている。梅里雪山はチベット仏教の「神山」として崇められており、主峰の卡瓦格博(カワゲボ)は標高6,740m。卡瓦格博から連なる美しい山並みが神秘的なので、多くの写真家、観光客、登山家を惹き付けている。文化的に登頂が禁止されていた歴史もあって未踏峰が多いことと、登頂が難しい山なので、世界中の登山家に注目されており、挑戦する人が跡を絶たない。しかしながら、1991年には日中合同学術登山隊17名(日本人11名、中国人6名)が全滅する遭難事故が発生し、中国の登山史上最悪の犠牲者数を出した。現在、梅里雪山に登る場合は必ず許可を取らなければならない。

梅里雪山現地の状況

梅里雪山景区の人気コースは、梅里雪山の朝日、明永氷河、西当温泉、雨崩村の風景、神瀑(滝)などがある。梅里雪山の風景を見たくて訪れる人が1年中いる。5月からは梅里雪山のシーズンに入り、7、8月は高山植物が最も多く咲く時期になる。また、秋になると雲が高くなるので、山の全風景を見るのに一番良い時期となる。調査を行った日は曇りで、残念ながら梅里雪山は見えなかった。明永氷河は徳欽から37km離れた場所にあり、全長約8km、世界でも珍しい氷河と言われている。5,500mから2,800mまで緩やかに延びた懸垂氷河である。西当温泉、雨崩村、神瀑(滝)には交通手段がないので、徒歩で行くしかない。

驚いたことに、この地域は観光と自然体験で有名な所だが、自然体験やアウトドアを紹介しているパンフレットやマップなどを入手することが困難である。旅行会社に行けば、多少写真で紹介している旅行コースはあるが、アウトドアについては全くない。



晴れたら展望台から梅里雪山が一望できる



朝日と満月が照らす梅里雪山は神秘的だ

(インターネットより転載)

明永氷河へ行く登山口の所に、日中合同学術登山隊の記念牌がある。この入り口から馬を利用することができ、氷河までの往復金額は約 2,000 円から 3,000 円。もちろん自分で登山することも可能である。山道は綺麗に整備されているが、雨や雪の日は道が泥状になり、大雨の日は川になる可能性も高いので、天気が悪い日は登山ができないと思われる。また、登山道にはゴミがよく落ちている。ガイドに聞いたところ、昔は入場券収入の 20%を現地住民に還元し、山の管理を依頼していたが、近年こういう制度がなくなり、管理者がいない状態になったため、とのこと。ガイドによると、大型連休のときは外国からの観光客や登山者が多く見られるが、それ以外はまだ少ない。日中合同登山隊の影響かもしれないが、日本人観光客はたびたび見られる、とのこと。



シーズンには多くの観光客が群がる



この先に人気観光地の明永氷河がある



縁石が敷かれている登山道は、雨が溜まって歩にくい



登り始めて 1 時間もすれば、森の切れ目から雄大な山々が眺められる



氷河までの登山道では馬も活躍していた



若者にアウトドア活動が浸透してきたようだ



まとめ

今回行った現地業界関係者へのインタビューおよび現地自然調査を通して、雲南省の自然体験活動やアウトドアの現状などを以下にまとめてみた。

- ①アウトドア人口は近年急増しており、自然体験活動の種類もさまざまである。
- ②小・中学生に対する環境教育は学校が中心であり、特に「緑色学校」での活動が極立っている。
- ③指導者体制はまだ初段階であり、自然体験やアウトドア活動の指導者は少ない。
- ④現地名勝地の管理体制が不十分である。
- ⑤自然体験やアウトドアおよびエコ・ツーリズムの広報手段が不足している。

自然体験やアウトドアおよびエコ・ツーリズムはまだ探求の初段階であり、一部の人が認識しているだけである。各団体へのインタビューと現地調査や訪問によると、指導者制度や組織はまだ整備されておらず、指導者が少ないと考えられる。自然体験やアウトドアは指導者なしで活動することが多いようで、安全に対する意識が低いと思われる。雲南省には日本のように本格的な自然学校事業は見当たらず、自然体験およびアウトドアを組織的に推進する団体も少ない。いっぽう、インターネットで調べたところ、アウトドアに関するサイトはたくさんある。現段階では、自然体験やアウトドアおよびエコ・ツーリズムが一般化されるのには、まだ時間がかかると思われる。現地の団体および指導者たちは、自然体験やアウトドア関連事業について、日本および欧米に学ぶことが非常に重要だと思っている。

以上のことから、日本の指導者が雲南省において自然体験やアウトドア、エコ・ツアーの研修を受ける適切な施設はないと考えられる。しかし、調査した雲南省環境保護宣传教育センターおよび自然体験関連団体は、日本の自然体験活動に大変興味があり、今後、日中間における自然体験活動やアウトドア、エコ・ツアー推進のための国際交流を希望している。このような交流は今後、現地の組織体制作りや自然体験活動の推進につながり、日本の指導者が研修を受ける施設作りにもつながっていくと考えられる。

コラム

小鳥とあなたのための、小さなツリーハウス

佐藤オオキ



豊かな自然をひとりでも多くの人に楽しんでもらいたいと同時に、ここに生息している動物たちにとっても価値のあるものにしたい、という思いから「人と鳥の距離が近づく」ようなツリーハウスをデザインすることにしました。

物理的にも心理的にも「距離が近づく」方法を試行錯誤した結果、小さなバードハウスが78個くっついてできた、一軒の大きなバードハウスになりました。遠くから見るとひとつの小屋のように見えるものの、目を凝らすとたくさんの小さな小屋の存在に気付く、さながら「鳥の集合住宅」です。反対側にはバードハウスと同様に円形にくり貫かれた大きな入り口があり、

そこから人がなかに入って鳥の様子を裏から観察できるようになっています。このとき、窓をどのようなものすれば鳥を驚かさずに観察できるのか少々頭を悩ませましたが、最終的には一般的な玄関の扉に付いている「ドアスコープ」を使うという、単純明快な解決策を見つけることができました。

鳥の様子を、しかもひとつではなく同時にたくさんを眺めるのは、これまでにない体験であり、より一層、鳥たちの魅力を感じてもらえる場所になることと思います。そんな「たくさんの鳥たち」と「ひとりの人間」が、ひとつ屋根の下でともに過ごすための小さなツリーハウスなのです。



佐藤オオキ／nendo 代表

1977年カナダ生まれ。2000年早稲田大学理工学部建築学科主席卒業。02年同大学院修士課程修了、同時にデザインオフィス nendo を設立。12年 Wallpaper 誌（英）および Elle Deco International Design Award にて Designer of the year を受賞。作品は MoMA（米）、ポンピドゥー・センター（仏）、ビクトリア・アルバート博物館（英）など世界の主要美術館に収蔵されている。

事業報告

第 12 期自然学校指導者養成講座

2011 年 10 月 3 日～12 月 6 日

安藤百福センター共催事業

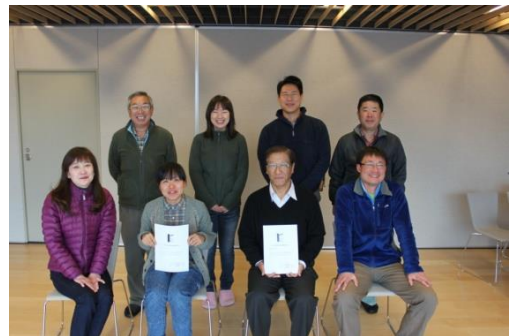
公益社団法人日本環境教育フォーラム主催、安藤百福センター共催で、自然学校でプロとして活躍するための人材を養成する講座「自然学校指導者養成講座」を開催した。この講座は、自然学校で働きたいという人達を、自然学校側が欲しいと思う人材に育成する日本で唯一の講座だ。今期で 12 期を迎え、修了生は 108 名にのぼっている。今年の受講生は 2 名。2 名とも自分の地元で活躍したいという志を持っていた。

自然学校指導者養成講座は 9 ヶ月間に渡るトレーニングを受ける。4 月から 9 月は、全国の自然学校で現場実習を行う。どの自然学校も繁忙期に当たるため、濃密な実地訓練を受けることができる。現場実習後の 10 月から 12 月は安藤百福センターに泊り込み、座学の講義を受ける。現場で体験したことを理論的に整理し、技術だけでなく豊富な知識を持つインストラクターに育て上げるという狙いがある。



今期の座学はカリキュラムの再編を行い、著名な講師陣による環境教育や野外教育などの基礎科目から、インタープリテーションやアウトドアマーケティング、登山技術などの専門科目を用意した。また、すでに現場で活躍している自然学校職員に対しても、普段の現場業務に役立てていただくため、部分参加できるようにオープン講座とした。近隣の浅間山麓国際自然学校やキープ協会、やまぼうし自然学校のインタープリターなど、のべ 100 名以上の方々にご参加いただき、中には林野庁職員の参加があった。受講生たちにとって、各地で活躍している方々との交流が強い刺激になったようだ。

修了後は、大半の受講生が自然学校業界へと進路を決める。特に地元で活動したいという希望が多いので、受講生達が地元で活躍し、地域での活動が全国に波及していく日が来るのを期待したい。



植物観察実習 10月4日(火) 10時～18時

講師：小林 政明（安藤百福センター職員／環境省自然公園指導員）

テーマ：火山帯に生息する高山植物の特徴・生態を知る

上信越高原国立公園内にある池の平湿原を歩きながら、高山植物の見分け方や特徴などを指導する。池の平湿原は低山から高山までの様々な植物が存在している。10月は植物の開花も終盤に差し掛かっているが、それでも20種類程度は確認できる。また、すでに来年の開花に向けて準備をしている植物も観察することができる。高山植物の宝庫と呼ばれる池の平湿原で、植物から発信しているメッセージを読み取る。

感想

上信越高原国立公園内に位置する「高山植物の宝庫」池の平湿原で、高山植物の観察実習を行った。時期的にはほとんどの植物が枯れていたが、花の開花時期だけでなく1年をとおした植物の生い立ちを知ることや、動物や鳥などの生態系とのつながりについて知ることができた。今日が講義初日だったが、冗談交じりで解説をする講師のおかげで、受講生の距離も縮まった。



日本の火山 10月5日(水) 10時～18時

講師：荒牧 重雄（東京大学名誉教授／火山学者、安藤百福センター顧問）

テーマ：日本の火山活動について学ぶ

1. 浅間山関連の噴出物、地層、構造などを野外で観察・討論 2. 火山現象一般の議論 3. 噴火作用の各論 4. 噴出物、火山体などの各論 5. 火山災害の種類と防災・減災の手段 6. 火山の恩恵、社会への影響など

感想

あいにくの雨模様だったが、講義を挟んで浅間山噴火の痕跡をたどるフィールドワークに出かけた。小諸から佐久市まで移動しながら数箇所では堆積物を確認。中でも佐久市の離れた場所に巨大な火山岩があったので、受講生は噴火の威力をイメージすることができた。噴火は恐ろしいが、現在は防災・減災の手段も整ってきており、それ以上に火山から受ける恩恵の方がはるかに大きいということが意外な発見だった。



環境学総論 10月6日(木) 10時～18時

講師：阿部 治（立教大学社会学部、大学院異文化コミュニケーション研究科教授／
日本環境教育学会会長／立教大学 ESD 研究センター長）

テーマ：自然環境、社会環境、都市環境と人間を考える

1. 環境問題とは何か
2. なぜ環境問題について学ぶのか
3. 日本の公害史
4. 現在の世界を取り巻く状況
5. 環境問題への日本の動きと国際的な取り組み
6. 環境保護のための活動
7. 環境に配慮した新しい社会システム

感想

講義の導入として「あなたの暮らしが地球を変える」という本から作成したカードゲームを行った。地球規模の環境問題となるとなかなか実感が湧きにくいものだが、ゲームを通じて現在地球で起こっていることや、解決のためにみんなができることが、自然に自分の中に入ってくる印象を受けた。こういった手法も環境教育に生かせるというヒントをもらった。



環境教育論 10月7日(金) 10時～18時

講師：阿部 治（立教大学社会学部、大学院異文化コミュニケーション研究科教授／
日本環境教育学会会長／立教大学 ESD 研究センター長）

テーマ：環境問題解決のために、どのような教育が必要か考える

1. 環境教育とは
2. 世界と日本の環境教育の歩み
3. 持続可能な開発のための教育
4. ESD と環境教育との関係
5. 日本の ESD の特徴と課題
6. 地域をベースとした ESD の手法
7. 総合的な環境教育の視点

感想

自然を守るという狭義の環境教育から、人・自然・社会を再構築していく広義の環境教育として、ESD の考え方が重要であることを学んだ。総合的な環境教育の視点から、地域をベースとした ESD の手法と、現在各地で行われている具体的な取り組み事例を紹介していただいた。受講生たちにとって、自分の活動している地域でどのような取り組みができるのかを、あらためて考え直す機会になった。



生態学概論 10月8日(土) 10時～18時

講師：北野 日出男（東京学芸大学名誉教授／公益社団法人日本環境教育フォーラム理事）

テーマ：生態学という学問内容の理解

- 1.私の研究の紹介（ヤドリバチの生物学）
- 2.生態学とはどのような学問か
- 3.生態学的環境観（「環境」概念の考察）
- 4.生態学の研究分野の概説
- 5.野外観察実習 など

感想

野外での昆虫観察実習では自分たちで昆虫を捕まえることから始まり、意外にも安藤百福センターには様々な昆虫がいることを実感。目に見える自然だけでなく小さい虫や、顕微鏡で見るようなミクロの世界を紹介することで、自然や生物に対して様々な見方が養われるとのことだ。近年、人間から虫の細胞が見つかったようで、人間だけでなく元々生物は全て同じだったことを考える講義となった。



環境思想・環境倫理（総論） 10月9日(日) 10時～12時

講師：加藤 尚武（京都大学名誉教授／東京大学特任教授／鳥取環境大学初代学長）

テーマ：環境問題の全体像

経済成長の結果、生態系の不可逆的な変化、廃棄物の累積、資源の枯渇が発生して、持続可能性をおびやかしている。気候変動による生物多様性の喪失は最大の問題である。フクシマ原子力発電所の事故の影響で、世界的に「原子力エネルギーから自然エネルギーへの転換」が行われるという期待が高まっているが、業界筋では、在来型化石燃料から非在来型化石燃料への転換がすすむと観測されている。

感想

普段、あまりなじみの無い環境思想という分野だったため、理解するのにかなり苦戦した。しかし、環境教育を行い、未来の世代へ地球資源を残していく上で、しっかりとした環境の対する考え方を持つことは非常に大切なことであり、自然環境の価値をあらためて見直すきっかけとなった。



環境思想・環境倫理（基礎論）

10月9日（日）13時～18時

講師：関 智子（独立行政法人国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター
主任研究員／安藤百福センター主任研究員）

テーマ：環境教育のベースとなる「人間と自然の関係」について考える

①環境思想とは何か、②環境思想といわれる著作はこれまでにどのような主張をしてきたのか、③自然学校での指導と環境思想がどのように関係するのか、について解説、考察する。④受講者のみなさんの「現在の」人間と自然の関係のイメージについての意見交換を行いながらディスカッションを深める。

感想

環境教育のバイブルとも呼ばれるレイチェルカーソンの書籍から、根本的な環境問題に対する考え方についてディスカッションを行った。また、講師の研究から、昔の日本でも環境思想的な要素があって、循環型社会のヒントが江戸時代にあるという話も以外な学びだった。歴史に学ぶことの必要性も感じ取れる講義だった。



インタープリテーション①

10月10日（月）10時～18時

講師：川嶋 直（公益財団法人キープ協会環境教育事業部シニアアドバイザー／
公益社団法人日本環境教育フォーラム理事／安藤百福センター専門
委員）

テーマ：伝えることの工夫を知る 自分を知る コミュニケーションを知る

講義と実習を通して「伝えることの工夫」「自分自身」「コミュニケーション」について学ぶ。

感想

今日は現役で活躍しているインタープリターの参加が目立った。前半はキープ協会で行われている数々のアクティビティを体験し、「伝える」ということに重点を置いた講義となった。後半は好きなもの・興味を持ってもらいたいものをテーマとして2分間スピーチを行った。伝えるためには工夫が必要であり、基本は自分を客観的に知ること。そのためにも出稽古はたくさんした方がいいというアドバイスがあった。



インタープリテーション② 10月12日(水) 10時～18時

講師：安西 英明（公益財団法人日本野鳥の会普及室主席研究員／公益社団法人日環境教育フォーラム理事／ NPO 法人自然体験活動推進協議会理事）

テーマ：自然の楽しみ方と伝え方、その意義

哲学と知識の基礎を講義するとともに、野外体験後にインタープリテーションの企画を作成して発表、評価しあう。

感想

インタープリターとしての基本は、あるがままの自然がどれだけ素晴らしいか、美しいか、楽しいかを知ることから始まるといった講義となり、指導者としての根本的な意識を見直すことにつながった。今日の講義は地球が危ないという環境教育ではなく、自然や生き物の命の素晴らしさを学ぶといった内容だった。日本トップクラスのインタープリテーションは、今後目指すべき一つの目標となった。



プログラムデザイン① 10月13日(木) 10時～18時

講師：山田 俊行（安藤百福センター事務局長／トヨタ白川郷自然学校事務局長／ NPO 法人白川郷自然共生フォーラム理事）

テーマ：プログラムの構造を学ぶ

1.プログラムとは何か 2.プログラムの構造を考える 3. 良いプログラムと悪いプログラムを分けるものは何か 4.教育プログラムとレジャープログラムの違い 5. プログラム実施までのステップ 6.プログラムの評価① 7.プログラムの料金設定

感想

キーワードは「意識化」。プログラムの考え方や、つかみからオチまでの流れなどを意識的にやるかやらないかで、プログラムに大きな差が出ることを学んだ。詰まった時は「参加者の心に何を残したいのか？」という問いを自分自身に投げかけることが大切。日々の現場ではなかなか整理できないプログラムデザインを体系的に学べたことで、それぞれの現場で活用されることが期待できる。



プログラムデザイン② 10月14日（金）10時～18時

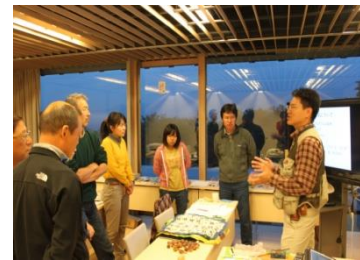
講師：山田 俊行（安藤百福センター事務局長／トヨタ白川郷自然学校事務局長／
NPO 法人白川郷自然共生フォーラム理事）

テーマ：プログラムの作り方を学ぶ

1. 15分プログラムを作る 2. 15分プログラムの体験とフィードバック
3. プログラムの評価② 4. ネタの探し方 5. 小道具について 6. プログラムの質を高めるものは何か 7. まとめ

感想

始まり・本体・まとめを意識して、一人ずつプログラムを作った。模造紙で説明する方法と、野外で説明する方法に分かれ、作ったプログラムを1人あたり5分から10分程度で披露し合った。練りに練ったプログラムの発表後は「愛情をこめて、でも正直に」という合言葉で、発表者に向けてフィードバックを行い、それぞれのプログラムにさらに磨きをかける場となった。



自然と遊ぶ 10月15日（土）10時～12時

講師：平川 仁彦（株式会社アクシス八海山スキースクール校長／財団法人全日本スキー連盟教育本部顧問／財団法人新潟県スキー連盟常務理事／安藤百福センター専門委員）

テーマ：スキーの学び方、遊び方

日本のスキー環境と活動の現状を話し、そこからいくつかの課題点を抽出して、これからのスキー活動のあり方を提案する。講演の内容は、日本のスキー活動の特殊性とその歴史的背景、自然体験活動の視点からの新しい取り組み方、手段としての技術学習、スキー運動の特性、自然の理解、まとめ、という流れで構成している。

感想

環境公開講座その①として、市民のみなさま方も参加できる講義内容とした。現在のスキー業界が抱える悩みから始まり、これまでの競技スキーに力を入れるやり方から、楽しむスキーをみんなで作っていくことが必要だということについてお話いただいた。今年はスキー日本発祥 100 周年。参加された方々からは、離れていたスキーを再開したくなったという声もあった。



地域学概論 10月18日(火) 10時～18時

講師：吉兼 秀夫（阪南大学国際観光学部国際観光学科教授／日本エコミュージアム研究会理事）

テーマ：地域観光の考え方とエコミュージアムの内容を知る

近年の観光動向を「観光における「図と地」論」として理解し、「地」の振興（快適で楽しい地域環境づくり）のための手法の一つとしてエコミュージアムを事例をもとに解説する。

感想

地域観光を活性化させる一つの方法として、地域をまるごと博物館にする「エコミュージアム」という考え方と、世界と日本の事例を紹介していただいた。観光まちづくりのためには、観光客目線のまちづくりではなく、地域住民にとって良いまちづくりが必要。地元を元気にしたいという参加者もいたので、グローバルに考えてローカルに行動するという考え方も参考になった。



キャンプカウンセリング論 10月19日(水) 9時～16時30分

講師：森園 忠勝（国立室戸青少年自然の家所長／大阪府キャンプ協会理事）

テーマ：キャンプにおいて小グループ（8～10人）をいかに運営するか
グループワーカーには、小グループの特性に関する知識や援助技術が必要である。これらの基本を学び、実践に活用できる力をつけることを本講義の目標とする。

1. キャンプカウンセリングとは ①カウンセリングとの違い ②リーダーの役割
2. グループワークの理解 ①グループの発達段階とリーダーの関わり方 ②グループを観察するポイント
3. 自己を知る...実習 4. リーダーに求められるもの

感想

初のグループ実習として、参加者同士で一緒に考えるアクティビティを行った。コミュニケーション力は訓練一つという言葉どおり、学ぶだけでなく経験し、失敗したことをチェックすることが必要。リーダーとグループメンバーとの関係性を学ぶことで、キャンプだけでなく社会組織の中でも役立つ内容と感じた。



日本の山はなぜ美しいか 10月20日(木) 10時～18時

講師：小泉 武栄（東京学芸大学教育学部教授／財団法人国立公園協会理事）

テーマ：日本の山はなぜ美しい

日本の山は世界的にも例がないほど美しいが、その背景には日本の山の自然がきわめて多彩で繊細であるということがあげられる。このことを説明するために、以下のような視点から、山の自然をみていくことにしたい。

- 1.世界的な視野からみた日本の高山
- 2.植生の多様性を支える基盤地質と地形
- 3.地生態学の考え方
- 4.火山植生と火山の噴火史
- 5.各地の事例の紹介

感想

地質が変わると植生も変わり、景観も変わってくる。普段何気なく目にしている自然だが、細かい地質のメカニズムが美しい景観を作っているということだ。植生が生育している地形・地質・気候条件に注目したインタープリテーションを行うヒントになる話題が、たくさん盛り込まれた講義だった。また、講師が持参した書籍が完売するほど、受講生たちの自然景観への興味が深まった。



体験教育論 10月21日(金) 10時～18時

講師：西田 真哉（トヨタ白川郷自然学校校長／聖マーガレット生涯教育研究所長）

テーマ：体験教育における体験学習法の活用について

環境教育活動、野外教育活動における、参加機会と参加者相互の学習の深まりについて、「受講型（受身型）」「参加型（体験型）」「参加者主体型」「参画型」の区分を、体験的に解説して、活動プログラムに「体験学習法」を導入する効果を体得する。

感想

個人では学べない、グループだからこそ意味がある学びについて、参加体験型のグループ実習を行った。徐々にグループの人数を増やしたアクティビティを行い、グループで体験してから、気づいたことを共有し、次の体験に生かすといったプロセスを実践。アクティビティを体験してみて、集団での自然解説や環境教育に応用できるような手ごたえを感じた。



登山技術 11月1日(火)10時～11月3日(木)17時	
講師：山口 章(NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構常務理事事務局長／ NPO 法人浅間山麓国際自然学校顧問／安藤百福センター主任教官)	
テーマ：山を安全に登るための基礎養成 第1日目 山の概要、基礎知識の講義(安藤百福センター) 第2日目 黒斑山登山実習及び天狗温泉のキャンプでのテント生活の実践 第3日目 火山館までの実習 キャンプで昼食後、安藤百福センター帰着 まとめ	
感想 秋晴れの黒斑山登山。日本アルプスから富士山まで、周囲の山がはっきりと見渡せた。ただ登るだけでなく、火山独特のインタープリテーション、コンパスの使い方、地図の読み方など、初日に受けた講義内容を実践しながら、指導者に必要な基礎スキルを学ぶことができた。下山後のキャンプでは各自ソロキャンプとし、テント設営、食事(豚汁など)を調理。暗くなってからは受講生たちがテントの中に集まり、夜更けまで話し合った。	



森林セラピー論 11月6日(日)9時～17時30分	
講師：今井 通子(株式会社ル・ベルソー代表取締役／NPO 法人森林セラピー ソサエティ理事長／社団法人日本山岳ガイド協会副会長)	
テーマ：森林から与えられる地球環境と健康 森林セラピーとは、実地検証された良い森が、その空間に入った人のストレスを下げ、免疫機能を上げる等、研究者によって証明された癒し能力だけを利用し、森林空間内で行動し、健康維持、増進等に役立てようとする方法である。今回は群馬県上野村の森林セラピーロードで森林セラピーを体験していただき、人の生存に対する森林の大切さを感じていただいた上で、地球環境はじめ森林の多様な役割と現状、保全の試み等について講義する。	
感想 紅葉が見事な群馬県上野村で、森林セラピー体験を行った。天気は小雨だったが、滝でマイナスイオンを浴びて、森林の中では寝転がりながら睡眠。食事は地元の食材を使った日本一豪華な森林セラピー弁当をいただいた。体験前後に全員のストレス値を計ったが、下がっている方が多くいた。	



野外教育論 11月7日(月) 10時～18時

講師：星野 敏男（明治大学経営学部教授／日本野外教育学会副理事長
／社団法人日本キャンプ協会専務理事）

テーマ：野外教育の考え方について学ぶ

「野外教育」とは何かについてさまざまな視点からアプローチすることで野外教育の考え方や見方、関わり方、実践方法について学ぶ。1. 青少年と自然体験活動について（野外教育の意義、現状と課題など） 2. 自然体験活動をめぐるさまざまな用語について（野外教育の歴史と背景） 3. 自然体験の効果 指導者の役割について（野外教育とその指導） 4. 野外教育指導者としてのアウトドア・リスクマネジメントについて

感想

野外教育についての見方・考え方を中心に学び、それを現場で役立たせることを目的とした講義を行った。指導を行う上で、自分の好きなことや得意なこと、苦手なことなど、指導者としてのポジションを確認しておくことが大切。このような時代の中で、自分は何を提供したいのかを考える機会となった。また、リスクマネジメントとして事故の事例がいくつも挙げたが、これらは全て講師の実体験だったことが判明した。



環境政策論 11月8日(火) 10時～18時

講師：田邊 仁（環境省自然環境局自然ふれあい推進室長補佐）

テーマ：日本の環境政策について、特に自然環境保全を中心に学ぶ
日本の環境政策の概要をお話しした上で、特に自然環境保全に関する法制度・各種施策について、下記の分野ごとに説明する。

1. 生物多様性の保全
2. 野生生物保護（外来生物対策含む）
3. 自然公園の保護と利用
4. 自然とのふれあい
5. 自然再生

感想

10月からの座学開始以来、初めて官庁の方が講義を行い、地球環境問題に対して環境省としてどのような政策を行っているのかという具体的な話題が中心となった。地域における自然環境保全については、資金不足が活動を妨げているという現実的な問題があるので、受講者は補助金や助成金など、資金面に関する疑問を講師に尋ねる場面が見られた。



アウトドアマーケティング論 11月9日(水) 10時～18時

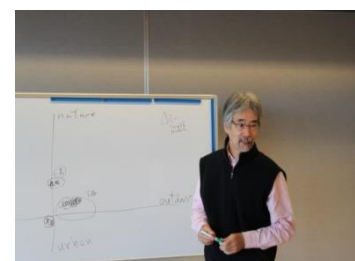
講師：中村 達（株式会社ネーチャーインテリジェンス代表取締役／アウトドアジャーナリスト／安藤百福センター・副センター長）

テーマ：日本のアウトドア市場を考察する

1. アウトドアマーケティング概論
2. アウトドアライフデザイン論 ①アウトドアズとCSR ②ロングトレイルと地域観光活性化
3. アウトドア産業論
4. アウトドア史
5. アウトドアマーケットの課題

感想

日本のアウトドアトレンドの現状を海外の事例と比較していき、マーケットの課題とこれからは観光や中国などの、アジア戦略を視野に入れた考え方を明確化していった。新しいマーケットを生み出すためには、作りたいという思い、自分なりの哲学や思想を持つこと、また、人間関係を構築するのが最良の方法というお話もあり、受講生にとっては、自分の手で未来を切り開くための参考になる話が多かったように感じ取れた。



社会構造論 11月10日(木) 10時～17時

講師：萩原 なつ子（立教大学社会学部、大学院 21 世紀社会デザイン研究科教授
／日本 NPO センター常務理事）

テーマ：人権、環境に配慮した社会の構築に向けて、市民がどのような関わりを持つのかについて理解する

1. 被差別者の生活と環境 2. 環境に配慮した経済システム 3. 環境問題と経済、政策との関わりについて 4. 基本的人権としての環境権の保護の理念 5. 環境破壊がどのように社会的問題と関わっているか 6. 環境問題をフェミニズム/ジェンダーの視点で分析 7. 第三世界と第一世界との関係

感想

地域を幸せにするために多種多様な市民の関わり方を、実例を交えながらご説明いただいた。今の自分の関わり方や、これからの関わり方についての見直しをはかる内容でもあり、地域住民一人ひとりが専門性を持つためには、各自の調査・研究が必要。また、導入の千円札模写実験では、環境や生命などの大事なものは見直す・見続ける必要があることを気づかせてくれた。



自然学校運営の基礎（実地研修） 11月15日(火)～18日(金)

指導：国際自然大学校職員

テーマ：自然学校のプロ指導者として組織運営の基礎を学ぶ

自然学校を取り巻く状況、自然学校の役割、予算管理、リスク管理、報告書等の自然学校組織運営に関する基礎を学び、プロ指導者としての自分の方向性、仕事、組織についてのイメージと、その実現のための具体的な始動を考える。また、PA（プロジェクトアドベンチャー）を行い、体験学習法に基づく人間関係トレーニングについて理解する。

生き方暮らし方（実地研修） 11月22日（火）～26日（土）

指導：ホールアース自然学校職員

テーマ：社会の中での自然学校の可能性を探り、自らの進路について考える

1. ホールアース自然学校の紹介 2. 家畜動物学 3. 実習「プログラム体験～樹海洞窟探検～」 4. 実習&講義「命を食べる」 5. 実習「里山散策&里山整備」 6. 講義「里山の魅力や課題」@興徳寺 7. ワークショップ「生き方・暮らし方」

NPO／NGO論 11月28日（月）10時～18時

講師：新田 英理子（日本NPOセンター企画部門主任）

テーマ：継続的に自立的に活動を推進するための、NPO/NGOのマネジメントと法制度について学ぶ

NPO/NGO と言っても、目的や活動内容の違いによって大きく運営方法も違う。ここでは、NPO/NGOのマネジメントやガバナンスのエッセンスを学んでいただき、皆さんの自然体験活動にどう生かされるのか、議論する。

感想

NPO や NGO についての基本的な説明から入ったが、これまで多くの誤解を持っていたことが分った。ワークでは、参加者がそれぞれ所属している組織のポジションを明らかにし、方向性を考えるための方法も体験した。特に「食べていけるか？」ということに強い興味があったので、生計を立てていくために必要なことについて、積極的に質問が飛び交う講義となった。



エコツーリズム論 11月29日(火) 10時～18時

講師：広瀬 敏通 (NPO 法人日本エコツーリズムセンター代表／ホールアース自然学校設立者／公益社団法人日本環境教育フォーラム理事)

テーマ：地域を元気にするエコツーリズム

主に『自然観光』を指す諸外国のエコツーリズムに対して、わが国で独自に発展してきた『日本型のエコツーリズム』はときに観光とも呼ばない、あるいはこれまでの産業とも異なる新しい地域の価値を創出する試みとして、各地で地域を元気にするアクションを総称して広がっている。『地域の小さな産業』であるエコツーリズムの担い手としての『自然学校』の役割も、最新のデータを紹介して明らかにする。さらに本講義では一般教養として受講してもらうのではなく、受講生自らがエコツーリズムという手法を手にして地域の担い手に巣立つための実践的講義である。

感想

田舎には人が少ないだけで仕事はあるということから、昔の日本で行われていた「ひとり多業」の働き方を知った。参加者がそれぞれの地域を元にした事例発表(事前課題)では、講師からそれぞれの発表に対してご提案をいただき、エコツーリズムは観光も含め、地域を元気にする交流活動という考え方を深めることができた。



自然学校原論 11月30日(水) 10時～18時

講師：岡島 成行 (大妻女子大学教授／公益社団法人日本環境教育フォーラム理事長／安藤百福センター・センター長)

テーマ：日本型環境教育と自然学校の役割について学ぶ

1. 人間と欧米の自然観の違いと、それぞれから学ぶべきこと 2. 日本固有の文化と環境教育 3. 日本型環境教育とは 4. 21世紀における社会と環境問題 5. 自然学校とは何か。なぜ自然学校なのか。 6. 日本の自然学校の今後の展開

感想

環境教育、ESD、地域再生、エコツーリズム、環境思想など、自然学校指導者として意識することや身につけておくべきことを総括した内容となった。自然体験活動は知恵の鍛錬になる、感性が豊かになる、また環境教育の基礎になるという根本的な考え方について、頭の中を整理する機会となった。



アジアの自然学校の可能性 12月1日(木) 10時～17時

講師：山口 久臣（有限会社野外教育研究所 IOE 所長／NPO 法人コミネット協会
副会長／NPO 法人阿蘇ミュージアム理事長）

テーマ：「アジア自然学校」と環境教育と社会的企業

1.世界の南北問題と地球環境問題 2.ディスカッション① 3.タイとミャンマーでの事業と活動 4.ディスカッション② 5.日本の地域づくりとアジアの地域づくり 6.ディスカッション③ 7.地域づくりの拠点としての自然学校とアジア自然学校 8.ディスカッション④ まとめ

感想

キーワードはアジアと欧州に学ぶ。ミャンマーにある自然学校やデンマークの取り組みを事例に挙げ、時代が変わっていく中で自然学校の役割としてどのような可能性があるのかを考えた。地域作りの目線を世界に広げる「グローバル」な視点が、地域活性化にとって大きな意味を持つことが理解できた。



アニマルセラピー論 12月2日(金) 10時～17時30分

講師：林 良博（山階鳥類研究所長／兵庫県森林動物研究センター所長／財団法人農学会理事）

テーマ：望ましい人と動物の関係について学ぶ

人類は、その生存のために、野生動植物を食料、衣類、燃料などの「生物資源」として利用してきた。しかし、人類が狩猟・採集生活から、農耕・牧畜生活を主体とする生活に移行して以降、栽培植物・飼育動植物についての個別知識を「体系化された伝統知」として集積し、各地域の人びとの生存に役立ててきた。19世紀以降は、飼育動物や栽培植物に関するこのような伝統知が、新たな誕生した近代科学・技術に置き換わり、農学（園芸学、作物学、農芸化学、畜産学、林学、林産学、水産学、獣医学）として現在に至っている。20世紀後半に誕生したアニマルセラピー学は、従来の「人類の生存のための農学」ではなく、その農学の中に芽生えた「人類の生活の質を向上させる農学」を体系化しようとするものである。

感想

日本人の動物に対する態度や関係を科学的に学び、どういった付き合い方をするのがいいかを考えた。以外にも、犬が鼻をなめる、あくびをするなどの発しているサインは、人間が勘違いしている役割があることが分かった。何気なく接している、ペットや家畜のココロの中を知る機会だった一方、悲しい現実もあることを知った。



修了講習 12月5日(月) 10時～18時

講師：若林 千賀子（若林環境教育事務所主宰・NPO 法人自然体験活動推進協議会理事）

テーマ：プロ養成講座全体のまとめとふりかえり、今後の進路についての考察を深める
OJT（半年）、座学（42日）での体験と学習について、テキストやノートをもとにふりかえり、自らが何を学び、体得したのかを洗い出す。今後、プロ指導者になるために、必要な課題やスキルについて、考察する。今後のアクションプランを作成する。

感想

講義の締めくくりとして、講義全体を通して学んだことの整理、3年後までのアクションプラン作りを行った。初めて一人の世界に入る個人ワークを行ったあと、講師から叱咤激励含めたアドバイスをいただいた。研修後の行動計画が明確になり、今後自分が活動するにあたっての指針が明確になった。



第2回環境公開講座その①「自然と遊ぶ」 10月15日(土)

昨年度同様、第12期自然学校指導者養成講座の一部分を公開講座にし、市民の皆様を対象とした第2回環境公開講座を開催した。初日は、日本スキー界の重鎮である平川仁彦氏(財団法人・新潟県スキー連盟常務理事)をお招きし、「自然と遊ぶ——スキーの学び方・遊び方」というテーマで講演を行っていただいた。



日本スキー界の現状

平成3年のスキー人気のピーク以降、スキー人口は激減してしまった。スキーを楽しむことを忘れ、「手段」であるべき技能を「目的」として捉えてしまったからだ。結果として、日本人の価値観の変容に対応せず、競技者ではない一般スキーヤーの意欲を欠いてしまった。また、大型リゾート建設によるスキーのコンビニ化、スタジアム化がパッケージ化を生み、利用者のニーズの幅を狭め、主体的なスキーが行われにくい環境になってしまった。さらに、現代の経済事情において、高価なスキー用品を買えない、スキー場にも行けないスキーヤーが増えてしまったことも追い打ちとなってしまった。

自然なスキー

まず行うべきことは、一般スキーヤーに対するスキーの価値観リサーチ。なぜスキーをやらないか？ではなく、なぜスキーをやるのか？という根本的な価値観を調査する。また、これからは「自然なスキー」の提案が重要となってくる。それは、スポーツとしての競技スキーだけでなく、習慣的に行っている「歩く」「登る」といった雪上運動すべてを含んだスキーのこと。例えば、スノーシューやクロスカントリー・スキー、テレマーク・スキーなど。シンプルな装備でどれだけ多様な活動が行えるかといった視点に立つことが必要となる。

スキー指導者の再編

これからのスキー指導者に求められるものは、テクニックではなく、スキーヤーを楽しませるファシリテート・スキル。スキー技術よりも習慣的な運動のなかで自然の全体像を伝えられる指導技術を身につけた、人柄の優れたリーダーが必要である。リーダーが楽しむスキーを行うことで、スキーの活性化が期待できる。

環境公開講座その②「森林セラピー論」 11月6日(日)

2 日目は、今井通子氏（NPO 法人・森林セラピーソサエティ理事長）をお招きし、「森林セラピー論——森林から与えられる地球環境と健康——」というテーマで講演を行っていただいた。



森林と健康

ストレスが原因で起こる病気は、高血圧や心筋症などたくさんある。また、パニック障害やアルコール依存症などの心の病もストレスを減らすことで防ぐことができる。ストレスを減らす手段としては、森林浴が非常に効果的である。これまであまり科学的な根拠が整っていなかったが、ここ数年で科学的に森林の持つ効果というものが検証されてきた。

森林と地球環境

一方で森林は地球の環境にも役立っている。例えば、地球温暖化の一因と言われている二酸化炭素を木の葉が吸収して、気候を緩和してくれる。温暖化を防止するなら木を植えるのが効果的だろう。また、大地に張った木の根が大雨や洪水から生じる土砂災害を防いでくれる、雨をたくわえて生き物の飲み水を保持してくれるなど、森林は地球環境にとってもさまざまな役割を果たしている。

森林のある生活

森林はストレスから生じる病気予防や健康維持・活性化だけでなく、環境にとっても重要な存在である。木はやっぱり偉い。現代文明と文化の融合を捨てましようとは言わないが、これまであまりにも無視してきてしまった。今一度、森林の役割や効果を見直した生活を営んでいく必要がある。私の話を聞いても健康にはなれないので、ぜひ皆さん自身に森へ行って欲しい。



(参考) 森林セラピー

講演前に群馬県上野村で森林セラピー体験を行った。紅葉が素晴らしくきれいな森の中をゆっくりと散策したり、寝そべったりすることで、木が持つ力を少しでも実感することができたようだ。

CONEトレーナー養成会・認定会

6月11日(土)～12日(日)・10月29日(土)～30日(日)

今年度も、CONE トレーナー養成会を2回、認定会を1回開催した。

トレーナー養成会

第1回養成会（6月11～12日）は5名、第2回養成会（10月29～30日）は14名の参加者を得て、トレーナー認定会までに必要な資質とスキルを理解するための研修を1泊2日で行った（昨年度は2泊3日で実施したが、3日間日程を確保するのが難しいとの指摘があり、同じ時間で2日間に変更した）。

研修は、定められたカリキュラムに従って実施された。本養成会の趣旨やCONEの制度などについて説明したのち、安全管理、自然の理解、指導法、企画・運営などトレーナーとして習得しておくべき事柄について講義・演習を行った。そして最後に、認定会までに修得すべきこと（事前課題を含む）などを説明し、研修を締めくくった。



トレーナー認定会

トレーナー認定会（2月4～5日）は8名の参加者を得て、事前課題の習熟度をグループ・ワークで確認しながら実施した。例えば「自然体験活動憲章」の5項目については、伝えたいこと、思い、考えなどを自分の言葉で説明し、それについて参加者同士で質疑応答を行った。また、指導者養成事業のカリキュラムについて、実経験を基に活動内容や課題・成果などを各自説明し、実施における問題点や対策などについて議論を行った。そして最後に、これまでの内容を踏まえた試験を実施し、トレーナーとしてふさわしい能力を身に付けているかを確認し、可否の判定を行った（最終的には理事会で承認される）。

今年度より、トレーナー1種・2種が一本化されたことに伴い、養成会から認定会までに修得すべき内容やカリキュラムが増加したため、養成会の参加者に比べて認定会の参加者が大幅に少なくなったが、その分質の高いトレーナーの養成ができた。来年度以降、質を落とさずに参加者が増えるよう、トレーナー制度の魅力を高めていきたい。

JEEF ディレクター養成研修会(自然学校プロ養成中級ディレクター研修会)

2011 年 10 月～2012 年 3 月

主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム 共催：安藤百福センター

全国の自然学校において求められている中堅職員の人材育成を、2011 年度はトライアルとして実施することとなった。

自然学校へ着任後 5～10 年（概ね 30 歳前～30 代後半）のレベルのスタッフは、現場での指導経験を積み、参加者への質の高い直接指導や事業企画・運営などができるようになっている。

その一方で、現状に安住せず、「若手スタッフ」という立ち位置から自然学校経営の中核を担う、あるいは地域や社会との関係で新たな社会的価値を創出する担い手などにシフト・チェンジしていく大きな分岐点であるといえる。そこでこの研修では、こうしたシフト・チェンジを促し、「変化をつくる」をキーワードとして合宿（OffJT）研修と自己学習（OJT）を組み合わせた、自ら学習して自己評価をするという実践研究型の研修を行った。

研修内容概要

研修のステップ	時期	内容
自己学習Ⅰ	2011 年 10 月～ 11 月	自分の仕事の棚卸し（職務内容、役割や責任の洗い出し） 自らの仕事観の形成について Significant Life Experience（SLE:重要な人生体験）を自己記述
研修会Ⅰ	2011 年 11 月 30 日～12 月 2 日 （2 泊 3 日）	自己学習の発表、相互検討 先達、先輩による講演、成長や変化の目安づくり 専門技術系（マネジメント論等）講義 「変化を起こす試み」の共同研究 「自己成長と成果貢献を両立できるプロジェクト」 「自己学習Ⅱ」の案内
自己学習Ⅱ	2011 年 11 月～ 2012 年 2 月	「自己成長と成果貢献を両立できるプロジェクト」の実施 上司へのインタビューの実施、中間フォロー 「研修会Ⅱ」への準備
研修会Ⅱ	2012 年 2 月 28 日～3 月 1 日 （2 泊 3 日）	「自己学習Ⅱ」の発表 実践の相互評価、先達、先輩による講演 専門技術系（マネジメント論等）の講義 新たな変化への実践 研修のまとめ作成
研究成果集の 作成	2012 年 3 月	「仕事の知恵・自分語録」作成 編集制作・配布

対象者：自然学校スタッフで着任後 5～10 年（26 歳～38 歳）

自薦および経営者推薦・指名で選考

参加者数：研修会Ⅰ 16 名

研修会Ⅱ 13 名（3 名不参加）

終了後、安藤百福センターより修了証を授与

研修会Ⅰの様子

はじめに今回の研修の狙い「次世代型自然学校の担い手になる」を確認。そして、その狙いを達成するために、この研修を通して以下の項目に取り組むよう指示されました。

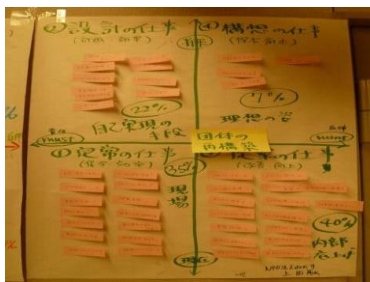
- （１）自分と仕事の革新に取り組むこと
- （２）この研修を中核スタッフとしての成長の節目にすること
- （３）変化を起こす試みに挑戦すること

続けて先達の講演が行われた。



先達の講演

野外教育研究所代表の山口久臣氏と日本環境教育フォーラム理事長の岡島成行氏の講演が行われた。



仕事の洗い出し

事前課題をもとに各自の仕事の現状を整理。定常の仕事、設計の仕事、提案の仕事、構想の仕事、それぞれの現状と理想のギャップを改めて確認した。



ASE に挑戦

各自の課題整理と今後の取り組みを整理する個人作業だけでなく、共同作業も体験。



自己成長と成果貢献を両立できるプロジェクトの発表

研修会Ⅱ参加までに各自で取り組むプロジェクトを発表し、決意を固めて解散。

研修会Ⅰから研修会Ⅱの間で、それぞれの団体において各自のプロジェクトを実施することが最も大きな宿題ですが、その際に、必ず直属の上司と相談し、取り組み事項を決定することも条件として提示された。

研修会Ⅱの様子



先達の講演

ガイア自然学校代表の成田裕氏より自然学校設立の苦労話などを講演していただいた。



各自のプロジェクト実施の結果発表

研修会Ⅰから研修会Ⅱまでの3か月で実施できたことと、その自己評価などが発表された。



グループディスカッション

自分たちが起こした組織内の「変化」はなんだったのか、お互いに意見交換を行いながらまとめ上げる作業を行った。



「仕事の知恵」の発表

最後は各自でまとめた仕事の知恵・自分語録を発表した。



参加者および講師の集合写真

参加者が作成した「仕事の知恵・自分語録」はすべてデジタル化し、講師のコメントを添えた小冊子に編集し、PDFで全参加者に配布した。今回の研修を振り返るツールとして活用してもらうことが目的である。

すべての研修終了後、研修会Ⅰおよび研修会Ⅱを受講した参加者13名に対して安藤百福センターより修了証を発行した。

山岳ガイド協会自然ガイドⅠ認定研修会

12月15日(木)～16日(金)

安藤百福センター後援事業

1. 実施報告と結果

日 程	12月15日～16日 1泊2日
会場名	安藤百福記念 自然体験活指導者養成センター
参加者	30名
参加費	20,000円
担当講師	計9名
飯田 肇	富山県立立山カルデラ博物館学芸課長
上野真一郎	(有) タスマニアントラック代表
長内 覚	(株) 会津高原ネイチャースクール代表
菅野由起子	元山岳雑誌編集者
白田 剛	埼玉山岳ガイド協会会長
武川俊二	NPO 法人かながわ山岳ガイド協会理事長
畠山浩一	杉山野外塾チーフインストラクター
平木 順	ネイチャー・スピリット・カンパニー代表
山本正嘉	鹿屋体育大学教授 (以上、五十音順)
結 果	自然ガイドステージⅠについて受講者全員30名を認定する。

2. 講義内容

- ① エコツアーリズムと自然ガイドの役割 上野真一郎
内容 エコツアーリズムの理解とガイドの役目について
- ② 安全管理面からの自然ガイドの役割 上野真一郎
内容 自然ガイドとしての安全管理の必要性について
- ③ 自然活動における気象と地形のリスク 飯田 肇
内容 自然災害の実例とリスクについて
- ④ ガイド業務での観天望気と読図の知識 畠山 浩一
内容 自然ガイドに必要な技術・読図・観天望気など
- ⑤ 安全管理ケーススタディQアンドA 長内 覚
内容 実例での対処法や参加者からの質問と回答
- ⑥ 自然ガイドに求められるリスク評価 武川 俊二
内容 ガイドが知っておかなければならないリスクと評価方
- ⑦ 運動生理学の基礎 山本 正嘉
内容 ガイドに必要な登山の運動生理学

3. 実技内容

①危険を回避する実践テクニック

□装備の説明 □ツエルトの張り方 □パッキング □出発前の注意事項 □クライアートの観察 □疲れない歩き方 □安全なガイディング方法 □休憩の取り方
□危険の認識について □緊急時の対応について □クライアートのケア
□基本ロープワーク（結び方・やり方・必要性） □フィックスロープ（固定・通行・アシスト・安全確保・回収） □その他の実践テクニック

②自然ガイドの役立つフィールドワーク

□安全管理のために必要な知識の伝達 □ガイドが伝達しなければならない技術の解説 □装備を活用した基本テク □ストックの活用 □カラビナの基本知識と活用 □必要なフィールドワークについて □スワミベルトの活用 □実践的なフィックスロープ術 □登山でのサポート術 □初歩のショートローピング □ザック搬送 □ザックタンカー □その他必要な事

上記実技内容を、それぞれ講師が担当し6班に分かれ実施した。実施場所は、安藤百福センター敷地内の里山で行った。



研修時間割表

		担当講師	研修 単位
第1日目 09:40 10:00 ～ 10:30	集合・受付 09:30 オリエンテーション 1.エコツアーリズムと自然ガイドの役割 (社) 日本山岳ガイド協会概要と自然ガイドの位置づけ ガイドに求められるものは、何か?	上野真一郎	0.5 時間
10:30 ～ 12:00 12:45 12:45 ～	2.安全管理側面から見るエコツアーリズムと自然ガイドの役割 昼食 (各自) 3.危険を回避する実践テクニック (フィールドワーク) 参加者の安全を守るための歩き方、 自然体験活動における危険回避方法他	上野真一郎	1.5 時間
15:15 15:15 15:45	休憩	畠山 浩一 長内 覚 平木 順 菅野由起子 上野真一郎 白田 剛	2.5 時間 (実技)
15:45 ～ 17:15	4.自然活動における気象と地形のリスク	飯田 肇	1.5 時間
17:20 ～ 18:50 18:50 19:50	休憩 (5分) 5.リスク回避 ガイド業務からの観天望気と読図の知識 夕食	畠山浩一	1.5 時間
19:50 21:00	6.ケーススタディから学ぶ自然ガイドの安全管理 Q & A	長内 覚	1.5 時間
第2日目 08:30 ～ 12:00 12:00 12:45 12:45 ～ 14:15 14:25 ～ 15:45 15:50 16:30	朝食 (7時～) 7.自然ガイドに役立つ危機脱出の技術 (フィールドワーク) 自然歩道、登山道におけるロープ活用技術 体調を崩した参加者を安全に搬送する方法など 昼食 8.自然ガイドにおける運動生理学の基礎 休憩 (10分) 9.自然ガイドの安全管理 自然ガイドに求められるリスクの評価 休憩 (5分) 10.まとめ 研修確認テスト 終了	畠山 浩一 長内 覚 平木 順 上野真一郎 武川俊二 菅野由起子 山本正嘉 武川俊二 長内 覚 平木 順	3.5 時間 (実技) 1.5 時間 1.5 時間 1 時間
2 日間の 研修時間	机上講習 実技講習 ペーパーテスト 研修時間合計		8 時間 6 時間 1 時間

4. 実技講師担当者の感想

全般を通じて、時間が不足していると感じた。参加者の的が絞られていず、意識や知識・技術レベルに差がありすぎるため、講習内容の幅が広がり、さらに時間が不足してしまいもったいない。事前準備の段階で、混乱が見られたので、今後は、既成団体の取り込みマニュアルに従ってのような標準化したシステム構築が必要と感じた。（上野 真一郎）

参加者は、いずれも東北でガイド業務を行なっているとのこと。一人を除き、年齢的にも中高年の域に達しているため、熟練さを感じた。研修への取り組みは、真剣そのものであり、現場での活動に期待が持てる。ガイド業務を行なっていない一人は、自分自身への試しという動機で参加した。本研修は、ガイド現場にいる方が参加資格ありの筈でしたが、CONE 資格を持つという要件はかなっていた。今後の研修への課題となりそうだ。

（武川 俊二）

受講された皆さんは、大変熱心に研修を受けていたと感じる。やらなければならないことからすると、スケジュールがタイトで、かなり駆け足だったうえ、浅い感じになってしまったと感じている。

（畠山 浩一）

今回の研修への関心度は高かったように思う。受講者は皆 JMGA の資格取得が目的という感じだった。

（平木 順）

半数以上の方が実際にガイドをやっているとみられ、そういった方は当然熱心な態度だった。2割ぐらいの方は再講習必要と感じた。

（白田 剛）

私が担当した班は、それぞれにフィールドでガイド的な役割を担っている方達で、歩行技術についてはほぼ問題なく、自然解説についても、それぞれの得意とするところで力を発揮している様子が見られた。ロープワーク及び搬送については、ロープワークが「初めて」という方が半数、搬送についてはほぼ全員が初めての経験であり、普段、足もとがよく整備されたエリアで活動している受講生達にとっては、発生する可能性の高い搬送に強い興味を抱いているようだった。

（菅野由起子）

モチベーションも高く、講習態度はまじめだった。かなり、満足度も高く喜ばれた企画だった。

（長内）

第4回自然体験入門講座 安全に楽しく山歩きをするために 4月16日(土)

2011年4月16日(土)、「安全に楽しく山歩きをするために」をテーマとして、今年度最初の入門講座を開催した。今回は、準備編と実際編の2つのパートに分け、安全管理や正しい山の歩き方、山のマナーなど、山登りの基本的な知識や技術について2時間ほどの講義を行い、小諸市内外からおおよそ100名近くの方々にご参加いただいた。

準備編

まず、きちんとした登山計画を立てること。どこへ行くか、いつ行くか、どんなコースを歩くか、日帰りか宿泊か、単独行なのかメンバーがいるのかを考える。様々な状況によって、装備や持ち物、技術、必要な情報などが変わってくるからだ。

標高の高い山に登るとすると、100mでおおよそ0.6℃気温が下がり、風も強く、酸素が薄くなる。

そのため低体温症や凍傷、滑落のリスクが生じてくる。また、体調にもよるが、標高が2,000mを越えると高山病にかかってもおかしくはない。山のリスクは自分自身で管理しなくてはならないため、安全に山に登るためには、登山計画は欠かせない。

重い荷物をたくさん持っていくと、体への負担が大きくなり、疲れやバランスを崩した時に事故につながりやすい。装備は、軽量かつコンパクト、高機能、多機能のを選び、なるべく体への負担を減らすことも大切。装備は大きく分けて、①ウェア、②登山ブーツやザック、水筒などの一般用具、③保険証や救急セットなどの非常用具がある。

例えば、ウェアについては、山では気温や天候の変化が激しいため、機能性が高いものを選ぶ。また、夏でも冬でもレイヤリングは3層重ね着が基本。汗を吸収、発散してくれるアンダーウェア。マイクロフリースのように、熱をためこみ保温してくれる、中間着のミッドレイヤー。そして、外からの雨風を防いでくれるアウターレイヤー。他にも、テーピング機能により、腰やひざをサポートしてくれる高機能タイツや、ストレッチ性や保温性に優れたパンツがあるので、足腰に不安がある方は、そういったものも揃えると、より安全性が高くなる。

山の情報は、ガイドブック、雑誌、新聞から集める。また、地図はいろいろなものがあるが、それぞれ一長一短があるので、登る山に応じて使い分けることも必要。そして、忘れてはならないのが、登山の前には心と体の調子を整えること。余計なことを考えながら山に登っていると、何も無いところで転んだり、思わぬ事故につながる可能性があるため、まずは精神状態を山モードにする。そして、常日頃から体調の管理をして、日常でも歩くことを意識する。疲れている時は無理をして山に登らず、引き返すことも登山では重要なこと。準備編のまとめとして、①いかに軽くいくか(軽い装備)、②いかに早くいくか(危険箇所の滞在時間を短く)、③いかに楽にいくか(登るテクニック)、④いかに楽しんでい



くか（山についての知識向上）、⑤いかに無事に帰るか（非常用具の点検）といった五箇条を目安にするとよい。

実際編

準備が終わったら、登山の前にいくつか確認することがある。余計なものは持っていないように装備を確認し、防水を考えたパッキングができているか。当日の天気はどうなっているか。気象情報は、テレビ、ラジオの他、インターネットで登山気象が見られるので、これも参考にするとよい。また、靴の紐を踏みつけないように、まとめてあるか。ザックは、体にフィットするように調整できているかを確認すること。山に着いたらすぐに歩き始めず、必ずストレッチをして体をほぐす。ウォーミングアップができれば、最初の30分間はゆっくり登って、徐々に体を慣らしていく。基本的な山の歩き方は、登りも下りも「小またでゆっくり」歩くこと。軸足から腰、背筋をまっすぐ伸ばした姿勢から、靴のソール全体が地面に接地するように、狭い歩幅で足を踏み出す。悪い例として、歩幅が大きくなると、後ろ足のかかとが上がってしまい、滑って転んでしまうことがある。常に、靴のソール全体に自分の体重をのせるように歩くことを心がける。特に、事故の大半は下山中に生じているので、焦らずゆっくり下ること。山は、地形や地質によって、岩場、急な登り、階段など、様々な山道があるが、足場をよく見て、小またでゆっくり歩くことで安全性が高まる。

みんなが楽しく安全に登るために、山ではマナーを守ることも大切。挨拶はもちろん、山の環境を守るために、ゴミは持ち帰る、タバコは携帯灰皿を使用する、植物を採らない、動物に餌を与えないことが挙げられる。また、遭難防止のために、道を外れて歩かないことや、人とすれ違う時は登りが優先で、待つ時は山側に立って待つことも意識しなくてはならない。谷側で待っていると、すれ違いざまにぶつかり、転落してしまう可能性もあるからだ。実際編のまとめとして、①早立ち・早着きを徹底（明るいうちに行動）、②いつでも現在位置の確認（遭難防止）、③天候の急変に気をつける（雨で体を濡らさない）、④パーティをバラバラにしない（安心安全）、⑤山のマナーを守ろう（自分のため、みんなのため）、といった五箇条を頭に入れておく。

最後に

山登りは、2本の足で歩ければ誰でも行ける。そこには大きな自然がある。自然は時として脅威でもあるが、自然というものはとても綺麗で、大きな景色や、おいしい空気を与えてくれて、自分自身への癒しにもつながる。癒しは現代の生活にとって、とても大切なこと。また、普段は使わない筋肉を使い、汗をかくことで新陳代謝も高まり、さらに心肺機能の促進になるので、山登りはそのまま健康にもつながる。自然を楽しみ、癒され、健康になるという活動として、山登りは最適なアクティビティと言えるだろう。



第5回自然体験入門講座 夏の自然体験入門～夏山登山に挑戦してみよう～ 7月30日(土)

7月30日(土)に高峰山で第5回自然体験入門講座を開催した。4月に行った第4回の入門講座では室内で山の歩き方や持ち物などの登山における基本講座を行ったが、今回、初めての野外実践講座である。

高峰山を登りながら、歩き方、注意点、高山植物の見分け方などテーマに開催した。

当日の行程

8:45		高峰高原ビジターセンター集合
8:50	～ 9:00	挨拶、講師紹介
9:00	～ 9:10	オリエンテーション
9:10	～ 9:20	準備体操
9:20	～ 9:25	班分け、装備確認
9:25	～ 9:45	登山開始
9:45	～ 9:55	休憩
9:55	～ 10:20	班の交替、登山
10:20	～ 10:40	休憩
10:40	～ 11:15	班交替、登山
11:15	～ 11:50	班交替、登山
11:50		山頂到着
11:50	～ 12:30	昼食
12:30	～ 13:00	班交替、下山
13:00	～ 13:50	班交替、下山
13:50		高峰高原ビジターセンター到着
14:05	～ 14:10	挨拶、解散、アンケート記入



山口講師の話に夢中



オオカメの芽はこんな形です！

登山案内板の前に移動し、体操を行った。安全な登山のためには、必ずストレッチをして体をほぐすことが大切だ。その後、班分けを行った。その場で講師の先生は現地の地形を説明。「参加者の皆さんが立っている場所は群馬県と長野県の県境です。道路を挟んで、日本の中央分水嶺になっています。片側の流れは日本海で、片側は太平洋に流れています。」それから浅間、烏帽子火山群の話も紹介した。

山口講師は登山時の歩き方、装備、天気の話、火山帯の変化などを中心に解説。高い山に登ると100mで気温がおおよそ0.6度下がり、気圧も低くなり、酸素も薄くなる。個人差もありますが、標高2000mの山でも高山病にかかることもあるとのこと。それから、最初の30分間はゆっくり登り、徐々に体を慣らしていくことも重要だ。基本的には登りも下りも「小またでゆっくり」歩くこと、軸足から腰、背筋をまっすぐ伸ばした姿勢で、靴の

ソール全体が地面に接地するように、狭い歩幅で足を踏み出す。悪い例は、後ろ足のかかとが上がってしまうほど、歩幅が大きくなる歩き方だ。この場合は滑って転んでしまうことがある。常に靴のソール全体に自分の体重をのせるように歩くこと。特に、事故の大半は下山中に生じているので、焦らずゆっくり下ることがとても大切だ。それから、急変する山の天気や、雷について解説し、火山の変遷についても解説した。

小林講師は歩きながら花の紹介、高山植物の見分け方、名前の由来などについて楽しく解説。約 50 種類のお花を紹介した。例えば、イチヤクソウ、シャクナゲ、オオカメノキ、シュウロソウ、クルマユリなどの植物について。「シャクナゲではアズマシャクナゲとハクサンシャクナゲ、非常に似ているが、開花時期と葉っぱから見分がつく」「クルマユリは茎に輪生する葉が車輪状になっているので、クルマユリという名前になった」などを説明した。また倒木下でヒカリゴケを発見。参加者の方々がみんな声を上げて喜んだ。ヒカリゴケは貴重なコケ植物で、洞窟のような暗い場所に成長している。大部分のヒカリゴケは国立公園内にあり、地域によっては天然記念物に指定されている。

山登りの基本装備とその保管方法

山口講師がウェア、靴、ザックの選び方について説明しました。山では気温や天候の変化が激しいため、機能性が高いものを選ぶことが大事だ。アンダーウェアは汗を吸収、発散する機能が優れたものがおすすめ。厚着より薄着が何枚に重ねて着た方が良く、脱ぎ着く易いものがよいだろう。靴は登山専用靴が安全性が高い。

小林講師の長年の経験から、高峰高原の天気を判断する方法を解説。①根子岳方面に夕立が見えると、30 から 40 分ぐらいで高峰山にやってくる。②浅間方面の夕立雲はやってきて雷、雨とも激しい。③立科山の裾野の雲が西に行けば雨が降る。④立科山、富士山、八ヶ岳などにかさ雲がかかると、一兩日中に雨になる⑤烏帽子岳と美ヶ原の雲が一緒になると、はげしい雨、または雷雨。⑥山で気温が急上昇、または急に下がると雨になることが多い。雷を避ける方法は大石の穴、洞窟、くぼ地、斜面の低い所等に避難、身体を折り曲げ、両足をかかえ小さくなる。木の下に避難しないこと。もしする場合、樹幹から 2m 以上に離れ、木の頂点を仰んで見ると 45℃角度の場所にいることが大切だ。

雨に濡れることも身を守る一つの方法だ。雨に濡れた状態だと電流が体の表面から地表に抜け、心臓を通らない。

山頂に着く頃には、天気が晴れ、小諸の全景、八ヶ岳連峰もはっきり見ることができた。食事しながら、山頂の風景をゆっくり楽しんだ。



山頂で皆さんの笑顔を記録しました

第6回自然体験入門講座 秋の登山入門～紅葉の黒斑山～ 10月1日(土)

登山入門講座として標高 2404mの黒斑山に登る、第6回自然体験入門講座を開催した。黒斑山は 1973mの車坂峠から高低差約 400mの登山コースで、初心者でも楽しめる山だ。黒斑山の山頂から眺める浅間山の風景は素晴らしく、魅力の一つでもある。当日は、20代から 70代まで幅広い年齢層の方々にご参加頂き、初心者からベテランの方、中には山ガールの姿も見られた。

当日の行程 (行き/表コース、帰り/中コース) -----

- | | |
|-------------|-------------------|
| 08:45 | 高峰高原ビジターセンター集合 |
| 09:00～09:05 | 挨拶、講師紹介、オリエンテーション |
| 09:05～09:20 | 準備体操、移動 |
| 09:20～ | 登山開始 |
| 09:40～09:45 | 車坂峠到着、休憩 |
| 10:15～10:25 | ガレ場到着、休憩 |
| 10:45 | 広場到着 |
| 11:05 | 槍ヶ岳到着 |
| 11:40～11:50 | トーマの頭到着、休憩 |
| 12:20～ | 黒斑山山頂到着 |
| 12:20～13:00 | 昼食 |
| 13:00～13:20 | 地形図の読み方解説 |
| 13:20～ | 下山 |
| 13:45～14:00 | 小広場到着、休憩 |
| 14:25～14:35 | ガレ場到着、休憩 |
| 15:00 | 高峰高原ビジターセンター到着 |
| 15:10～15:20 | 人数確認、アンケート記入、解散 |



所々カラマツの紅葉が



ゴゼンタチバナの実

高峰高原ビジターセンターの駐車場で、安藤百福センター・山田事務局長が、開催の挨拶と講師の紹介を行った。その後、山口講師の指導で、参加者の方々はストレッチ体操を行った。

黒斑山登山口看板の前で、山口講師は火山と普通の山の違いについて質問した。参加者の一人は溶岩と言い始め、山口講師の答えも火山が溶岩でできていることだと話した。溶岩の元であるマグマは、地下深い岩石が融けて出来ている。ここでは大きな圧力がかかり、火山ガスが融けこんでいる。それが噴火し、地表や地表近くまで上昇してくると、内部の圧力が下がり、ガスがあわとなって出ていく。地表や地表近くまで上昇した溶岩の表面は

冷えやすく、ガスを含んだまま固まることがある。この場合、溶岩の内部は気泡を持ったままになる。これが軽石である。表面はボツボツしていて、穴がたくさん残っているのが気泡を含んだ溶岩。表面に穴がないのは、冷えて固まる前に、ガスが出てしまったからだ。

浅間・烏帽子火山群の歴史も説明。黒斑山は火山群の中では、比較的新しい火山で、約2万5千年前まで活動が活発だった。最盛期の高さは2800～2900mと予想されている。浅間山が一番若い火山であり、大体1万5千年前から活発して、有名なのは天明3年(1783年)に起きた大規模噴火だ。つい最近では2009年には小規模噴火が起こった。



成層火山

この写真はトーミの頭から撮影したものである。一番手前は黒斑山、遠く白く見えるのは仙人岳だ。成層火山は数回の噴火によって形成された。噴火の繰り返しによる、周りの溶岩、火砕流火山碎屑物等の積み重なり、層を形成している。黒く見える部分は溶岩、白く見える部分は溶岩の破片である。



何種類見つけられました？

左の写真。この手前の小さな場所だけで天然カラマツ、ダケカンバ、クロマメノキ、コケモモ、ガンコラン、シラタマノキ、ミツバオウレン、イワカガミ、ナナカマド、ツガザクラ、コキンレイカなどがある。3平方メートルの場所でこんなに多くの植物が生きていることに参加者は驚き、生命力の強さを感じていた。



登山って楽しい～～～

第7回自然体験入門講座 雪と友達になろう～スノーシューの魅力～

2012年2月11日

2012年2月11日（土）スノーシューを履いて雪上散策を行う、第7回自然体験入門講座を開催した。雪上での講座は今回が初めてだったが、経験豊富な講師と共に約40名の参加者が高峰山と車坂山といった初心者向けのコースを部分的に歩いた。

当日の行程

- 8:45 ASAMA2000 集合
- 9:00 開会の挨拶とスケジュール説明
- 9:10 ストレッチ体操
- 9:20 スノーシュー装着
- 9:30 出発
- 10:00 高峰山登山口
- 10:30 高峰山尾根
- 11:00 高峰山登山口
- 11:10 車坂山へ向け出発
- 11:40 車坂山山頂
- 12:00 昼食
- 13:00 出発
- 14:30 ASAMA2000 到着
- 15:00 解散



講師：山口 章
(安藤百福センター主任教官)



講師：小林 政明
(安藤百福センター職員)



厳しい冬の環境を物語っている

開講の挨拶とおなじみとなったストレッチ体操から始まり、いよいよスノーシューを装着。スノーシューを直に見るのも触るのも始めてという方がほとんどだったが、左右を間違えずにうまく履けていた。スノーシューの一番の魅力は雪の上を自由に歩けること。スキーやスノーボードのように特別な技術を必要とせず、雪があれば初心者の方でも好きな所を歩くことができる。

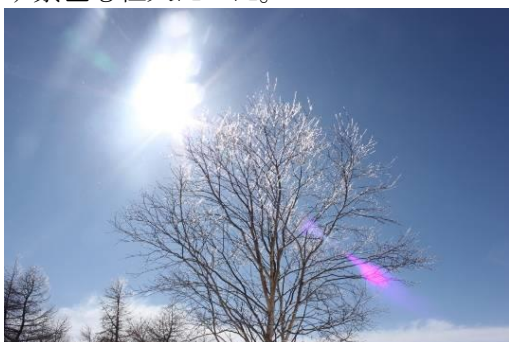
全員の準備が整ったら、集合場所の ASAMA2000 スキー場から出発。二つのグループに分かれ、普段は歩けない山道を登っていく。所々にカモシカやウサギなどが木の皮や枝を食べた痕（食痕）を発見。その近くには雪の上に残った足跡も見つかり、動物達がどこから来て、食事をして、どこへ向かったのかをイメージすることができた。雪上に残った痕跡から動物の生活がイメージできるのも、雪山ならではの楽しみ方だ。



雪があるから歩ける道

むと滑落の危険がある。また、ここで目立った高山植物はハクサンシャクナゲとアズマシャクナゲ。高山植物の冬芽を見ると、春の開花をじっと待っているように感じ取れる。

高峰山の尾根をしばらく進むと、枝に付いた水分が凍って光り輝く木があった。目線と同じ高さに雲が浮き、町全体を見下ろす景色も壮大だった。



木と氷と太陽が生み出す自然の芸術

から眺めると怖がる方もいましたが、滑り降りてみると反響が大きく、何回も上って滑る方が大勢いた。昼食後はゴール地点に向かって、一斉に新雪の上を跳ねるように駆け抜けた。スノーシューが雪に埋まって転んでも、新雪なのでフカフカしている。

2011 年度最後の自然体験入門講座だったが、この時期にしては珍しく風が弱い好天に恵まれ、快晴の雪山を歩くことができた。雪があるからこそ自由に歩きまわれるスノーシュー体験をとおして、冬の自楽しみながら学ぶことができたようだ。

車坂峠まで上り切ったところが高峰山の登山口。積雪は1メートル程度あるが、登山道に残っているトレース(足跡)を頼りに登る。歩く際に注意しなくてはならないのが雪庇(せっぴ)。これは、雪の固まりが崖側へ向かってひさしのようにせり出している自然現象のこと。下は地面ではないので、うっかり踏



木の間から雪化粧の水の塔山

登山口まで下り、次は黒斑山へ向かう途中にある車坂山へ向かう。ここも一面の銀世界だ。秋に開催した第6回自然体験入門講座(黒斑山登山)に参加された方は、当時と全く景色が違うことに驚きの声を上げていた。30分ほど歩いたところで車坂山山頂に到着。ここで本日一番のお楽しみとして、雪の斜面を利用した天然すべり台を体験した。角度も距離もあるので上



「雪山の楽しさ」を伝えてもらいたい

“あやしいオヤジを、正しいオヤジに変える！”プロジェクト研修会

2011年5月15日～5月17日および10月10日～10月12日

日清食品ホールディングス株式会社



日清食品グループは、創業100周年となる2058年までに100の社会貢献事業を行う「^{ひゃくふくし}百福士プロジェクト」を2008年から実施している。これは、社会貢献活動への取り組みに熱心だった創業者・安藤百福の志を受け継いだグループ社員たちが、100の社会貢献活動を行なうものである。

百福士第2弾は、“あやしいオヤジを、正しいオヤジに変える！”というタイトルのプロジェクトで、日清食品グループの50歳以上の社員を対象に、自然体験活動の初級指導者を養成する活動だ。企業に長年勤め、定年を間近に控えた社員の中に、無趣味のため、休日は自宅で1日中ゴロゴロしたり、近くのショッピングセンターに出掛けて、ぶらぶらする人が増えていると聞き、そんな“あやしいオヤジ”予備軍を変身させて、自然体験が少ない子どもたちに、自然のすばらしさや楽しさを教え広く社会に貢献してもらうのがこのプロジェクトの趣旨である。



2011年度は、安藤百福センターで、春と秋に2回の研修会を計25名のグループ社員が参加し実施した。参加者は、「CONE 自然体験活動リーダー」、「CONE 学校支援指導者」資格取得のために、講義や浅間山登山をはじめ野外実習、救急救命講習など、2泊3日のべ23時間にわたるカリキュラムを受講した。これまでに計6回の研修会を行い、101名が参加した。

資格取得者の中には、実際に子どもたちを指導するボランティア活動に活躍している社員や、社内に呼びかけ、「あやオヤ探検隊」と名付けた同好会を結成し、定期的に山登りを楽しむ仲間がいる。



卷 末 資 料

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター 運営組織

顧問

荒牧 重雄	東京大学名誉教授、火山学者
林 貞行	元外務事務次官、元駐英特命全権大使
丸山 庄司	元全日本スキー連盟 専務理事

運営委員会

委員長	安藤 宏基	公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団 理事長 日清食品ホールディングス株式会社 代表取締役社長・CEO
副委員長	安藤 徳隆	公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団 副理事長 日清食品ホールディングス株式会社 専務取締役・CSO
委員	岡島 成行	大妻女子大学 教授、安藤百福センター センター長
	飯田 稔	びわこ成蹊スポーツ大学 学長
	柳田 剛彦	小諸市長
	水野 正人	公益財団法人日本オリンピック委員会 副会長

専門委員会

委員長	節田 重節	NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構 会長
委員	磯野 剛太	公益社団法人日本山岳ガイド協会 理事長
	川嶋 直	公益財団法人キープ協会 環境教育事業部 シニアアドバイザー
	河原塚達樹	公益財団法人日本レクリエーション協会 スポーツ振興政策関連事業チームマネージャー
	小林孝之助	公益財団法人ボーイスカウト日本連盟 事務局次長
	佐藤 初雄	NPO 法人自然体験活動推進協議会 代表理事
	佐藤 博康	松本大学総合経営学部 教授
	下村 善量	独立行政法人国立青少年教育振興機構 教育事業部長
	中村 達	アウトドアジャーナリスト・プロデューサー 安藤百福センター 副センター長
	橋谷 晃	木風舎 代表
	平川 仁彦	財団法人新潟県スキー連盟 常務理事
	平野 吉直	信州大学教育学部 学部長

(2012 年 4 月現在)

2011 年度主催等事業・講座

■安藤百福センター主催事業	
4/16	第 4 回自然体験入門講座 テーマ：「安全に楽しく山歩きをするために」
7/1～3	浅間学生セミナー
7/30	第 5 回自然体験入門講座 テーマ：「夏山登山に挑戦してみよう」
10/1	第 6 回自然体験入門講座 テーマ：「秋の登山入門」
10/15	第 2 回環境公開講座(1) テーマ：「自然と遊ぶ～スキーの学び方・遊び方～」
11/6	第 2 回環境公開講座(2) テーマ：「森林から与えられる地球環境と健康」
2/11	第 7 回自然体験入門講座 テーマ：「冬の登山入門」
3/28	第 2 回環境思想シンポジウム テーマ：「ネイチャーライティングと環境思想」
■共催事業	
7/7～8	第 1 回ロングトレイルフォーラム
10/3～12/6	JEEF 自然学校指導者養成講座
11/12～13	アウトドアフォーラム テーマ：「変貌するアウトドアマーケットと自然体験活動を考える」
11/30～12/2	JEEF ディレクター養成研修会（前期）
2/28～3/1	JEEF ディレクター養成研修会（後期）
■後援事業	
12/15～16	日本山岳ガイド協会 「自然ガイドステージⅠ 認定研修会」

2011 年度利用状況

日期	利用団体	研修会
4/9～10	カラコルム教育支援会議	会議
4/16	安藤百福センター	第4回自然体験入門講座
4/29～30	長野県レクリエーション協会	グループワーク・トレーニング(GWT) 資格取得講座
5/4	里山クラブ	森林整備研修
5/13	NPO 法人 浅間山麓国際自然学校	インタープリターミーティング
5/15～17	日清食品ホールディングス 株式会社	「CONE 自然体験活動リーダー・学校支援指導者」資格取得研修会 (百福士事業「あやしいオヤジを正しいオヤジに変える」プロジェクト)
5/22	小諸市職労組合	アースデイ in 小諸
5/24～27	日清食品ホールディングス 株式会社	新入社員研修 (森林整備研修含む)
5/28～29	アサマ 2000 スキースクール	職員研修会
5/29	NPO 法人浅間山麓国際自然学校	インタープリターミーティング
6/8～9	安藤百福センター	専門委員会
6/11～12	NPO 法人自然体験活動推進協議会	第1回トレーナー養成会
6/23～26	社団法人日本山岳ガイド協会	レスキュー・ファーストエイド講習会
7/1～3	安藤百福センター	浅間学生セミナー
7/8～9	日本ロングトレイル協議会	第1回ロングトレイルフォーラム
7/11～12	日清食品ホールディングス 株式会社	内定者研修 (ASE 実習含む)
7/16～17	長野県レクリエーション協会	レクリエーションインストラクター資格 取得講座
7/23～25	立教大学大学院	集中講義
7/25	サイエンス倶楽部	棚田へ「水と土と生物の環境をさぐる」
7/30	安藤百福センター	第5回自然体験入門講座
7/30	小諸市教育委員会	明治学院小諸大学
7/31～8/2	駒澤大学グローバル・メディア・スタ ディーズ学部	御牧ヶ原の自然と観光資源研修
8/6～7	風と土の自然学校	目指せ！植物の達人 (夏編)
8/7	「信州橋の日」推進協議会	川と橋の自然環境研修会

8/11～12	里山クラブ	子どもたちに野外活動の楽しさを教える指導者養成
8/13～14	とよたネイチャーゲームの会	自然体験及びネイチャーゲームの研修
8/21	小諸市役所	まちづくり推進連携企画会議
8/21～22	明治学院大学	森林の有効利用方法を学ぶ
9/2～4	長野県ネイチャーゲーム協会	ネイチャーゲームリーダー養成講座
9/7～9	松本大学／森環境教育事務所	自然体験活動論Ⅱ
9/10	小諸ミズオオバコ保全会議	第5回シンポジウム 「小諸から身近な自然を考える」
9/10～11	埼玉県ネイチャーゲーム協会	ネイチャーゲーム指導者研修
9/23～24	日本山岳会学生部 OB 三六会	初秋の高峰高原登山
9/26～27	東洋大学人間環境デザイン学科	環境デザインに関するワークショップ
9/28～30	東京農工大学朝岡ゼミ	環境教育ゼミ合宿
10/1	安藤百福センター	第6回自然体験入門講座
10/～12/6	公益社団法人 日本環境教育フォーラム／安藤百福センター	自然学校指導者養成講座
10/8～10	風と土の自然学校	伝える技術スキルアップ研修会
10/10～12	日清食品ホールディングス株式会社	「CONE 自然体験活動リーダー・学校支援指導者」資格取得研修会 (百福士事業「あやしいオヤジを正しいオヤジに変える」プロジェクト)
10/20～21	NPO 法人浅間山麓国際自然学校／日本アウトドアネットワーク	日本アウトドアネットワークミーティング
10/22	東信レクリエーション協会	インストラクター資格取得講座
10/22～23	沖電気工業株式会社	森林整備研修
10/27～28	日本ロングトレイル協議会	会議
10/28～29	NPO 法人 川に学ぶ体験活動推進協議会	RAC トレーナー養成会
10/29～30	NPO 法人 自然体験活動推進協議会	第2回 トレーナー養成会
11/12～13	NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構／安藤百福センター	第2回 アウトドアフォーラム
11/16	長野県環境部自然保護課	自然観察インストラクター研修会
11/18～20	日清食品ホールディングス	インターンシップ研修

	株式会社	
11/22～23	株式会社 ON-WIPPS	指導者フォーラム
11/23	長野県レクリエーション協会	グループワーク・トレーニング（GWT） 資格取得講座
11/28～29	ホールアース自然学校	浅間山火山研修
11/30 ～ 12/2	公益社団法人日本環境教育フォー ラム／安藤百福センター	ディレクター養成研修会（前期）
12/3～4	大妻女子大学大学院	大学院集中講義
12/9～10	NPO 法人やまぼうし自然学校	職員研修会
12/11～12	安藤百福センター	2012 年度浅間学生セミナー企画会議
12/15～16	社団法人日本山岳ガイド協会 ／安藤百福センター	自然ガイドステージⅠ 安全管理技術研修会
12/15～18	NPO 法人 国際自然大学校	スキー指導者研修
12/17～18	NPO 法人 自然体験活動推進協議 会	専門研修会
12/25	長野県レクリエーション協会	平成 23 年度東信ブロック会議
1/7～8	千葉県ネイチャーゲーム協会	会員のフォローアップ研修会
1/14～15	NPO 法人 自然体験活動推進協議 会	専門研修会
1/25	上信越ドリームエリア推進協議会	会議
2/4～5	NPO 法人 自然体験活動推進協議 会	トレーナー認定会
2/11	安藤百福センター	第 7 回自然体験入門講座
2/26	長野県レクリエーション協会	24 年度レクイントラ東信ブロック会議
2/28～3/1	公益社団法人日本環境教育フォー ラム／安藤百福センター	ディレクター養成研修会（後期）
3/23～24	小諸市商工観光課	職員研修
3/24～25	NPO 法人 自然体験活動推進協議 会	専門研修会
3/28	安藤百福センター	専門委員会
3/29	安藤百福センター	第 2 回環境思想シンポジウム

CONE 利用者内訳

期間	研修会名	受講生	講師	スタッフ	備考
6/11～12	トレーナー養成会	5	3	1	
10/29～30	トレーナー養成会	14	4	1	
12/17～18	専門研修会	19	3	2	
1/14～15	専門研修会	17	3	2	
2/4～5	トレーナー認定会	8	4	2	
3/24～25	専門研修会	18	3	1	

81 名

CONE 以外の利用者内訳(上級)

期間	研修会名	受講生	講師	スタッフ	備考
6/23～24	日本山岳ガイド協会研修	16	1	1	
6/24～26	日本山岳ガイド協会研修	35	7	3	
7/1～3	浅間学生セミナー	17	12	4	
10/4～12/6	自然学校指導者養成 (JEEF/安藤百福センター)	2	28	1	正規受講生
		141			一般聴講生
10/28～29	RAC トレーナー養成会	4	1	1	
11/28～29	ホールアース自然学校職員研修	16	1	0	
11/30～12/2	ディレクター養成研修会 (JEEF/安藤百福センター)	16	2	2	
12/9～10	やまぼうし自然学校職員研修	28	1	8	
12/15～16	日本山岳ガイド協会研修	30	9	0	
12/15～18	国際自然大学校指導者研修	38	8	1	
2/28～3/1	ディレクター養成研修会 (JEEF/安藤百福センター)	13	3	2	

356 名

「人と自然」第3号への投稿論文を募集します！

「人と自然 投稿規定」

1. 投稿の内容

- 1) 「人と自然（以下、本誌）」に掲載する内容は、人と自然の考察に関わる原著論文、研究報告、総説、評論、実践報告、資料、として完結していること。なお、原著論文に対しては審査を行う。
- 2) 本誌への投稿について、ファーストオーサーは特に資格を問わないが、投稿できる論文数は、原著論文その他全てを含み、各号につき一人二編以内に限る。
- 3) 本誌の発行回数は原則として年1回とする。投稿は、年間を通じて随時受け付け、12月末日までに投稿されたものを編集、審査（原著論文のみ）、製本、発送する。

2. 編集委員会

- 1) 本誌の編集その他の責任は、「人と自然編集委員会」がおこなう。当委員会は事務局員を含む編集委員若干名によって構成される。
- 2) 当委員会での活動は、①本誌の編集、製本、発送などに関すること②原著論文の審査員の選考、依頼などに関すること③投稿規定などに関すること④その他本誌に関すること、を行う。

3. 論文の形式

- 1) 原著論文は、タイトル、執筆者名とその所属、キーワード、欧文要約、本文の全てがそろっていることとし、原著論文以外のものは、欧文要約を省略することができる。
- 2) 製本は、A4版、1頁1段とし、各段は42字×36行、日本語フォントはMS明朝、欧文フォントはCenturyでともにフォントサイズを11ポイントとし、1論文につき刷り上がり10頁（図表、写真その他全てを含む）以内を原則とする。ただし、1頁目は、タイトル、及び執筆者名、所属、キーワードで約5行のスペースをとるものとする。

4. 投稿の方法

- 1) 投稿は、ひらがな現代づかいでのワープロ原稿とする。提出部数は、原著論文3部（2部は複写可）、その他は2部（1部は複写可）とし、ワープロ原稿の場合には作成に要したソフト名を添付したデジタルデータも提出すること。
- 2) 原稿は、3.の2)と同様のフォーマットにて図表、写真その他を含み提出すること。
- 3) 図表、写真などは、刷り上がり1頁以内に納まるものとし、それぞれに必ず通し番号とタイトルを付け、原稿の挿入希望部分に配置しておくこと。

- 4) 引用箇所右肩に、1)、2)のように該当する文献番号をつけること。原稿の最後に引用及び参考文献リストをつけ、文献番号順に記載すること。記載の順序は、単行本の場合、著者、書名、頁、発行所、西暦発行年月日の順とし、雑誌及び研究誌の場合、著者、題目、雑誌名、巻号、頁、西暦発行年月日の順とする。

5. その他

- 1) 本誌の目的に著しく添わない投稿論文の場合は、掲載を断る場合がある。
- 2) 本稿に掲載された論文は、各執筆者の責任で別刷りを作成することができる。
- 3) 原稿の提出先、およびデジタルデータの送付先は次の通り。

原稿送付先：

〒384-0071 長野県小諸市大久保 1100

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター 「人と自然」編集委員会 宛

デジタルデータ送付先：

E-Mail : info@momofukucenter.jp 「人と自然」編集委員会 宛

あとがき

安藤百福センターは2年目を終え、新たな展開に挑む時期に入りました。自然体験活動の上級指導者養成を目的としてスタートしたセンターですが、上級指導者の養成だけでなく、一般市民向け講座や学生セミナー、山岳ガイド協会やスキー連盟との連携事業など活動の幅は大きく広がってきました◆「人と自然」第2号の内容もこうした流れを反映し、第1号に比べ内容は多彩なものとなりました。巻頭言の代わりに公益財団安藤スポーツ食文化振興財団の安藤宏基理事長と岡島成行センター長との対談を掲載しました。今後の自然体験活動をどのように展開すべきか、また、ビジネスとしての自然体験活動の可能性など貴重な内容となっています◆新企画として特別インタビューを設置し、第1回は4度にわたりオリンピックに出場したスキーヤーの木村公宣氏をお招きし、競技スキーだけでなく雪山遊びとしてのスキーの魅力を語っていただきました◆特集Aでは、環境を研究テーマとする大学院生のセミナー、アウトドア・フォーラム、環境思想シンポジウム、特集Bではロングトレイル・フォーラム、新たな指導者制度、防災教育、中国調査報告を掲載しました。いずれも高度なディスカッションが行われ、それぞれの関係者から注目を集めています◆表紙は第1号で書いた通りヒマラヤの8,000m峰から抽出する計画で、今回は世界第2の高峰であるK2を採用しました。写真は <http://www.wallpaperlink.com/bin/0704/03310.html> より、無料壁紙を使わせていただきました。◆内容が豊かになった半面、ページが大幅に増えました。今後、大きく発展することが望まれる自然体験活動だけに、第3号からはさらに新企画を練ったうえで、楽しく編集していきたいと思います。(S)

人と自然

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター紀要
第2号

発行日：2012年8月1日

発行人：安藤 宏基

編集人：岡島 成行

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
〒384-0071 長野県小諸市大久保 1100

Tel：0267-24-0825

Fax：0267-24-0918

URL：<http://momofukucenter.jp>

E-Mail：info@momofukucenter.jp